

みんなくりポジトリ

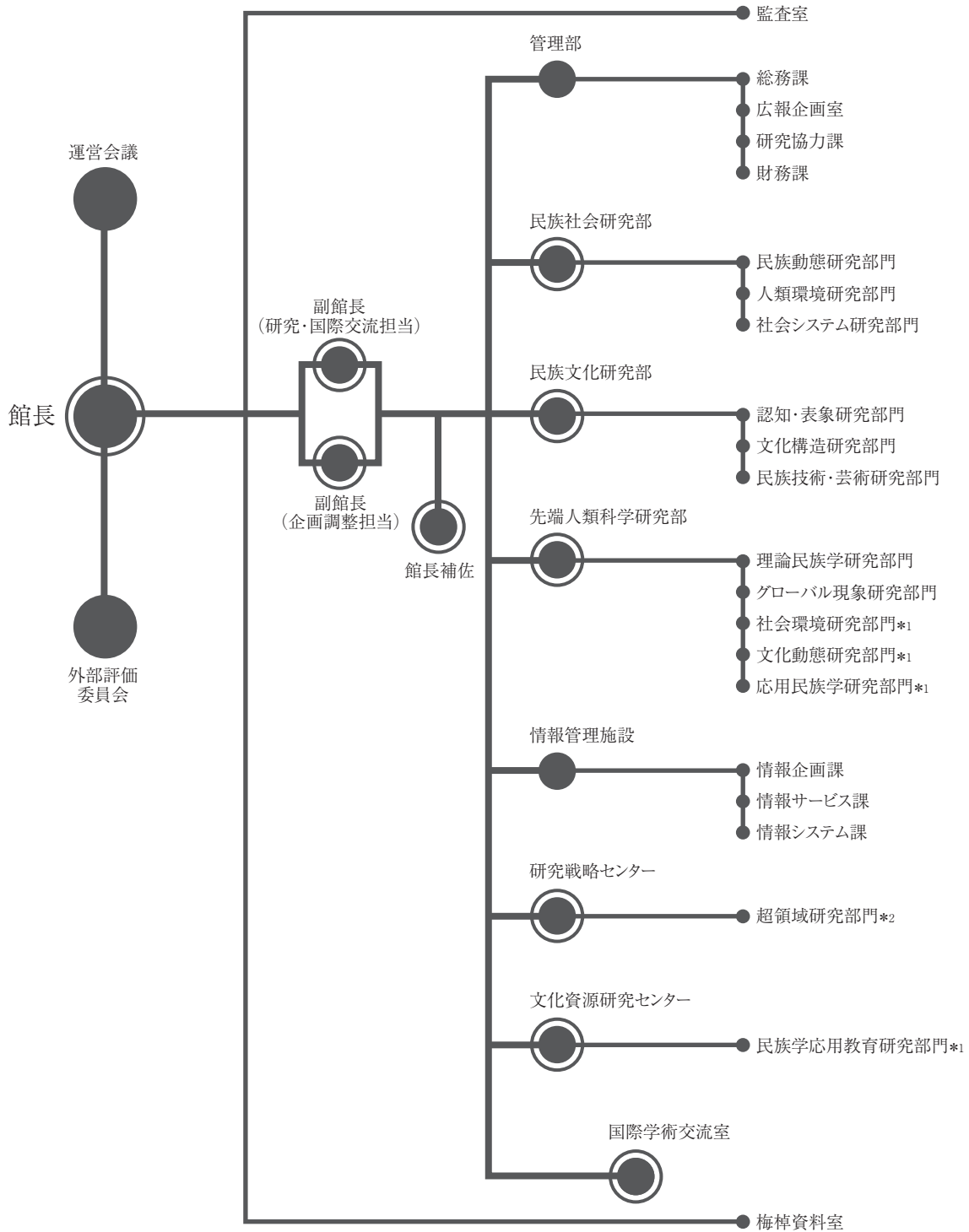
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

1.組織

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/5475 |

1 組織

組織構成図 (2014年3月31日現在)



注) *1 客員研究部門
*2 外国人客員研究部門

運営組織 (2014年3月31日現在)

●運営会議

植野弘子 東洋大学社会学部教授*1
 栗田博之 東京外国語大学総合情報
 コラボレーションセンター長*2
 栗本英世 大阪大学大学院人間科学研究科教授*1
 建島 哲 京都市立芸術大学長
 富沢寿勇 静岡県立大学国際関係学部教授*3
 松田 凡 京都文教大学総合社会学部長*3
 松田素二 京都大学大学院文学研究科教授*2
 吉岡政徳 神戸大学大学院国際文化学研究科教授*1
 渡邊欣雄 國學院大學文学部教授

(館内)

朝倉敏夫 文化資源研究センター長*1*2*3
 韓 敏 民族社会研究部長*1*2*3
 岸上伸啓 副館長(研究・国際交流担当)*1*2
 久保正敏 副館長(企画調整担当)*1*2
 鈴木七美 総合研究大学院大学文化科学研究科
 比較文化学専攻長
 先端人類科学研究部教授*1
 塚田誠之 研究戦略センター長*1*2*3
 寺田吉孝 先端人類科学研究部長*1*2*3
 八杉佳穂 民族文化研究部長*1*2*3
 注) *1 人事委員会委員
 *2 共同利用委員会委員
 *3 研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

安達 淳 国立情報学研究所副所長
 黒柳俊之 独立行政法人国際協力機構理事
 小泉潤二 大阪大学未来戦略機構
 第一部門特任教授
 野村正朗 新日本理化株式会社取締役会長
 八村廣三郎 立命館大学情報理工学部長
 堀井良殷 公益財団法人大阪21世紀協会理事長
 宮田亮平 東京藝術大学長
 三輪嘉六 国立文化財機構九州国立博物館長
 山本真鳥 法政大学経済学部教授

館内運営組織 (2014年3月31日現在)

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会
 福利厚生委員会
 安全衛生委員会
 ハラスメント防止委員会
 広報企画会議
 機関研究運営会議
 刊行物審査委員会
 研究出版委員会
 知的財産委員会
 科学研究費補助金管理体制検討委員会
 「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点運営
 委員会

大学院委員会
 図書委員会
 学術情報リポジトリ委員会
 情報システム委員会(休止)
 情報システム整備委員会
 文化資源運営会議
 集団研修博物館学コース運営委員会
 施設マネジメント委員会
 危機管理委員会
 創設40周年記念事業推進委員会
 大規模災害復興支援委員会

現員 (2014年3月31日現在)

| 区 分 | 館長 | 教授 | 准教授 | 助教 | 事務職員・技術職員 | 計 |
|------------|----|----|-----|----|-----------|-----|
| 館長 | 1 | | | | | 1 |
| 管理部 | | | | | 27 | 27 |
| 情報管理施設 | | | | | 19 | 19 |
| 梅棹資料室 | | | | | 1 | 1 |
| 研究部 | | 17 | 14 | 2 | | 33 |
| 研究戦略センター | | 5 | 3 | 3 | | 11 |
| 文化資源研究センター | | 5 | 7 | 1 | | 13 |
| 客員 (国内) | | 16 | 5 | | | 21 |
| 客員 (国外)* | | 5 | 7 | | | 12 |
| 計 | 1 | 48 | 36 | 8 | 47 | 138 |

注) 客員 (国外)*は、のべ人数

歴代館長・名誉教授 (2014年3月31日現在)

●歴代館長

- 初 代／梅棹忠夫 (故人) 1974年 6月～1993年 3月
 第2代／佐々木高明 (故人) 1993年 4月～1997年 3月
 第3代／石毛直道 1997年 4月～2003年 3月
 第4代／松園萬亀雄 2003年 4月～2009年 3月
 第5代／須藤健一 2009年 4月～

●名誉教授

- | | | | |
|-----------|-------------|-----------|-------------|
| 祖父江孝男(故人) | 1984年 4月 1日 | 端 信行 | 2001年 4月 1日 |
| 岩田慶治 (故人) | 1985年 4月 1日 | 小山修三 | 2002年 4月 1日 |
| 加藤九祚 | 1986年 4月 1日 | 森田恒之 | 2002年 4月 1日 |
| 伊藤幹治 | 1988年 4月 1日 | 石毛直道 | 2003年 4月 1日 |
| 中村俊亀智(故人) | 1988年 4月 1日 | 栗田靖之 | 2003年 4月 1日 |
| 君島久子 | 1989年 4月 1日 | 杉田繁治 | 2003年 4月 1日 |
| 和田祐一 (故人) | 1990年 4月 1日 | 熊倉功夫 | 2004年 4月 1日 |
| 垂水 稔 (故人) | 1991年 4月 1日 | 立川武藏 | 2004年 4月 1日 |
| 杉本尚次 | 1992年 4月 1日 | 田邊繁治 | 2004年 4月 1日 |
| 梅棹忠夫 (故人) | 1993年 4月 1日 | 藤井龍彦 | 2004年 4月 1日 |
| 大給近達 (故人) | 1993年 4月 1日 | 山田陸男 (故人) | 2004年 4月 1日 |
| 片倉素子 (故人) | 1993年 4月 1日 | 江口一久 (故人) | 2005年 4月 1日 |
| 竹村卓二 (故人) | 1994年 4月 1日 | 大塚和義 | 2005年 4月 1日 |
| 周 達生 | 1995年 4月 1日 | 松原正毅 | 2005年 4月 1日 |
| 松澤員子 | 1995年 4月 1日 | 石森秀三 | 2006年 4月 1日 |
| 大丸 弘 | 1996年 4月 1日 | 野村雅一 | 2006年 4月 1日 |
| 友枝啓泰 (故人) | 1996年 4月 1日 | 大森康宏 | 2007年 4月 1日 |
| 藤井知昭 | 1996年 4月 1日 | 山本紀夫 | 2007年 4月 1日 |
| 佐々木高明(故人) | 1997年 4月 1日 | 松園萬亀雄 | 2009年 4月 1日 |
| 杉村 棟 | 1997年 4月 1日 | 松山利夫 | 2010年 4月 1日 |
| 和田正平 | 1998年 4月 1日 | 長野泰彦 | 2011年 4月 1日 |
| 清水昭俊 | 2000年 4月 1日 | 秋道智彌 | 2012年 4月 1日 |
| 黒田悦子 | 2001年 4月 1日 | 中牧弘允 | 2012年 4月 1日 |
| 崎山 理 | 2001年 4月 1日 | | |

研究部教員の紹介 (2014年3月31日現在)

組織図に基づく現員一覧

| 館長 | | 須藤健一 | | |
|-----------------|---------------|------------------------|--------------------|------|
| 副館長 (企画調整担当) | | 久保正敏 | | |
| 副館長 (研究・国際交流担当) | | 岸上伸啓 | | |
| 館長補佐 | | 園田直子 | | |
| 研究部 | 職名・研究部門 | 教授 | 准教授 | 助教 |
| 民族社会研究部 | 研究部長 | 韓 敏 | | |
| | 民族動態 | 小長谷有紀 | 三島禎子 | |
| | | 庄司博史 | 横山廣子 | |
| | 人類環境 | 池谷和信 | MATTHEWS, Peter J. | |
| 印東道子 | | | | |
| 社会システム | 田村克己 | 宇田川妙子 | | |
| | 西尾哲夫 | 太田心平 佐藤浩司 | | |
| 民族文化研究部 | 研究部長 | 八杉佳穂 | | |
| | 認知・表象 | 竹沢尚一郎 | 山中由里子 | 齋藤玲子 |
| | | 森 明子 | | |
| | 文化構造 | 笹原亮二 | 新免光比呂 | 藤本透子 |
| 杉本良男 | | 廣瀬浩二郎 | | |
| 民族技術・芸術 | 近藤雅樹 (故人) | 鈴木 紀 | | |
| | 出口正之 | | | |
| | 吉本 忍 | | | |
| 先端人類科学研究部 | 研究部長 | 寺田吉孝 | | |
| | 理論民族学 | 佐々木史郎 | 飯田 卓 | |
| | | 鈴木七美 | 菊澤律子 齋藤 晃 | |
| グローバル現象 | 丸川雄三 | | | |
| 研究戦略センター | 塚田誠之 (センター長) | 檜永真佐夫 | 伊藤敦規 | |
| | 岸上伸啓 | 丹羽典生 | 河合洋尚 | |
| | 關 雄二 | 三尾 稔 | 菅瀬晶子 | |
| | 野林厚志 | | | |
| | 平井京之介 | | | |
| 文化資源研究センター | 朝倉敏夫 (センター長) | 上羽陽子 | 川瀬 慈 | |
| | 久保正敏 | 信田敏宏 | | |
| | 小林繁樹 | 林 勲男 | | |
| | 園田直子 | 日高真吾 | | |
| | 吉田憲司 | 福岡正太 | | |
| | | 南 真木人 | | |
| | | 山本泰則 | | |
| 国際学術交流室 | 岸上伸啓 (室長) (併) | 菊澤律子 (兼) | | |
| | 印東道子 (兼) | 齋藤 晃 (兼) | | |
| | | MATTHEWS, Peter J. (兼) | | |
| | | 山中由里子 (兼) | | |
| | | 横山廣子 (兼) | | |

1946年生。【学歴】埼玉大学教養学部卒（1969）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）修士課程修了（1972）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）博士課程単位取得満期退学（1975）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1975）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1986）、神戸大学国際文化学部教授（1993）、神戸大学国際文化学部長（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科長（2002）、神戸大学附属図書館長（2005）、神戸大学大学院国際文化学研究科教授（2007）、国立民族学博物館館長（2009）【学位】文学博士（東京都立大学 1986）、文学修士（東京都立大学 1972）【専攻・専門】社会人類学、オセアニアの社会と文化、海外移住、伝統政治と民主主義【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、南島史学会、生態人類学会、ニュージーランド学会

【主要業績】

[単著]

須藤健一

2008 『オセアニアの人類学——海外移住、民主化、伝統の政治』東京：風響社。

1989 『母系社会の構造——サンゴ礁の島々の民族誌』東京：紀伊国屋書店。

[編著]

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第2回石川榮吉賞

1985 第16回澁澤賞

【2013年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

オセアニアの海面利用と資源保護の慣行に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

オセアニアの島をとりまく海の環境は、陸島、火山島、環礁島、隆起サンゴ礁などの島の形成史や地形などにより多様である。それらの島々の住人は、土地や海洋資源の利用と保護に関する独自の慣習をつくりだしている。この慣習に関しては、植民地時代の宗主国の統治政策により土地所有などは改革を余儀なくされたが、海面所有や海洋資源の利用と保護に関するしきたりは比較的固有の方式が保持されてきている。本年度は、ミクロネシア地域を中心に島社会における海面利用慣行の比較研究を行い、その差異と共通性を明らかにすると同時に今日の問題についても考察する。

・成果

ミクロネシア地域の火山島、環礁島、隆起サンゴ礁島における海面の保有、漁労活動と漁業資源の管理・保護等に関する慣行の比較研究を行った。とりあげた社会は、火山島3、環礁島7、隆起サンゴ礁島1の計11社会である。本研究の資料は、1974年から2006年のあいだに行った5社会の調査と文献資料に基づいている。

海面の保有は、土地所有と比べ、個人や家族の排他的な占有といった性格は弱く、海面の特定区域の首長集団の占有、ないしは一部区域の禁漁区の指定などはあるが、多くの海面はコモンス的な性格が強い。隆起サンゴ礁島や小さな環礁島においては、大きな火山島や環礁島に比して海面利用に関する慣行を遵守して、禁漁期、禁漁区域、使用漁具の規制などによって、漁業資源の枯渇を防ぐための管理を強めている。本研究の成果は、2014年度中に『国立民族学博物館研究報告』にて公開する。

◎出版物による業績

[雑誌など]

須藤健一

2013 「世界のトリックスター、大集合！ネズミ」『月刊みんぱく』37(4): 8。

2013 「追悼 佐々木高明元館長を偲ぶ」『月刊みんぱく』37(7): 21。

2013 Obituary: Remembering Komei Sasaki. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 36: 14.

2013 「刊行にあたって」佐々木高明著『日本文化の源流を探る』pp. 1-2, 滋賀：海青社。

[新聞記事]

須藤健一

2013 「アジアを俯瞰する農耕文化論——佐々木高明さんを悼む」『京都新聞』4月26日朝刊。

2014 「冬を楽しむ⑧小正月の火祭り」『毎日新聞』2月6日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年11月5日 基調講演 ‘The Role of the Museum in Recovery from Disaster: The Great East Japan Earthquake and TSUNAMI.’ “Other Mountains: Critical Heritage in Cross-Cultural Perspectives” 浙江大学（中国）

2013年11月10日 「洪沢敬三と民族学博物館」東京文化財ウィーク2013企画事業・シンポジウム『幻の民族学博物館——洪沢敬三・高橋文太郎・今和次郎・宮本馨太郎の夢の軌跡』西東京市教育委員会、コール田無

2014年3月23日 パネルディスカッション、金沢大学文化資源学シンポジウム『文化資源学がめざすもの——研究・教育・国際貢献』学術総合センター

・研究講演

2013年6月26日 「民博の現状と将来の青写真」国立台湾歴史博物館

2013年6月28日 「オセアニアの伝統政治と公共圏」台湾国立博物館

・広報・社会連携活動

2013年4月6日 「民博の研究と展示——オセアニアのフィールドワーク」佐渡高校関西地区同窓会、国立民族学博物館

2013年4月19日 「太平洋の偉大な航海者たち」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2013年9月29日 「星と風と波と——オセアニアの航海術」佐渡高校関東支部同窓会記念講演、東天紅上野店

2013年10月1日 「博物館を知る——1000万人の入館者を迎えたみんなく」神戸市シルバーカレッジ、国立民族学博物館

2014年2月16日 「重宝されるタバ（樹皮布）と織物」第332回みんなくウィークエンド・サロン

2014年3月9日 「国立新美術館での『イメージの力』展開催にあたって」第108回国立民族学博物館友の会東京講演会、国立新美術館

◎調査活動

・海外調査

2013年6月26日～6月30日—台湾（国立台湾歴史博物館での視察および国立台北芸術大学において情報収集）

2013年9月21日～9月28日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）

2013年11月4日～11月7日—中華人民共和国（浙江大学にて開催される国際会議「他山の石——グローバルな視点から見る文化遺産」参加）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

大阪府第24回山片蟠桃賞審査委員、金沢大学大学院人間社会環境研究科文化資源マネージャー養成プログラムアドバイザー、関西サイエンス・フォーラム理事、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員、公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、公益財団法人日本博物館協会参与、公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団助成事業選考委員長、太平洋諸島学会理事、独立行政法人国際協力機構エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト国内支援委員、独立行政法人国立美術館 国際美術館評議員、独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター理事、日本ニュージールランドセンター理事、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員

岸上伸啓 [きしがみ のぶひろ]——副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

1958年生。【学歴】早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マッギル大学人類学部博士課程中退（1989）【職歴】早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学助教授（1992）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1）カナダ・イヌイットの社会変化、2）都市在住のイヌイットの民族誌的研究、3）先住民による海洋資源の利用と管理、4）アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨【所属学会】日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族藝術学会

【主要業績】

[単著]

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

[編著]

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

2007 第18回カナダ首相出版賞

1998 第9回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北方先住民の捕鯨と先住権に関する文化人類学研究

・研究の目的、内容

本研究の目的、内容は、北方先住民の捕鯨の現状を把握し、先住権との関連で分析することである。本年度は、カナダ国バンクーバー島のヌーチャヌルス（旧称ヌートカ）、米国ワシントン州のマカーおよびグリーンランドのイヌイットの捕鯨と先住権について現地調査を行うとともに、これまで調査を実施してきた米国アラスカ州バロー村のイヌピアットおよびカナダ国ヌナヴト準州のイヌイットの捕鯨と先住権に関するデータを分析する。なお、本研究は、2013年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（代表：岸上伸啓）の一部として実施される。

・成果

本年度は、カナダ国とグリーンランドの先住民による捕鯨の現状に関して、カナダ国バンクーバー島およびオタワ、モンリオールおよびグリーンランド中西部において現地調査を実施し、最新の情報を収集し、分析した。カナダ国は国際捕鯨委員会に加盟していないので、「先住民生存捕鯨」の枠外で実施されている。イヌイットの捕鯨は権利としてカナダ国憲法で保障されている一方、ヌーチャヌルスの捕鯨は先住権の一部とされており、その復活は難しいことが判明した。グリーンランドの捕鯨はこれまで国際捕鯨委員会の先住民生存捕鯨のひとつとして実施されてきたが、2013年の同総会においてグリーンランドによる捕鯨の拡大提案が否決された。このためグリーンランドは捕鯨継続のための方策を模索中である。世界的な傾向として、先住民の捕鯨

もその実施が困難になりつつある。

本年度はこれまでの研究成果を、以下のとおり口頭発表し、出版した。1) 2013年6月8日に開催された日本文化人類学会第47回研究大会において米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによる鯨肉の流通と分配について口頭発表を行った。2) 世界の捕鯨の現状について *Anthropology of Whaling* を本館の *Senri Ethnological Studies* (No. 84) として編集出版するとともに、捕鯨文化に関する研究動向とアラスカ・イヌピアットの先住民生存捕鯨に関する論文を出版した。3) カナダ・イヌイットの捕鯨の再開と先住権に関する論文を『カナダ研究年報』から出版した。4) カナダ国バンクーバー島のヌーチャルスおよび米国ワシントン州のマカーの捕鯨と先住権に関する論文を『北海道立北方民族博物館研究紀要』から出版した。これらは、2013年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」(代表:岸上伸啓)の成果の一部である。

◎出版物による業績

[編著]

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

岸上伸啓

2013 「カナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟と先住権」『カナダ研究年報』33:1-16。

2014 「カナダにおける北西海岸先住民ヌーチャルスの捕鯨と先住権」『北海道立北方民族博物館研究紀要』23:23-34。

2014 「アラスカ北西地域におけるイヌピアットの食料の安全保障問題」『人文論究』83:75-83。

Kishigami, N.

2013 Aboriginal Subsistence Whaling in Barrow, Alaska. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 101-120. Osaka: National Museum of Ethnology.

Kishigami, N. and J. M. Savelle

2013 Anthropological Research on Whaling: Prehistoric, Historic and Current Contexts. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 1-48. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

岸上伸啓

2013 「ワタリガラス」『月刊みんぱく』37(4):9。

2013 「極北先住民イヌイットの衣類」上羽陽子監修『世界のかわいい民族衣装』pp. 138-141, 東京:誠文堂新光社。

2013 「極北の生食」一色賢司監修『生食のおいしさとリスク』pp. 73-80, 東京:株式会社エヌ・ティー・エス。

2013 「アラスカ先住民イヌピアットの鯨肉の分配と流通について」日本文化人類学会第47回研究大会準備委員会編『日本文化人類学会第47回研究大会発表要旨集』pp. 135, 東京:日本文化人類学会第47回研究大会準備委員会。

2013 「解説 5月、イエロー・シダー・マン」国立民族学博物館監修『国立民族学博物館2014年オリジナルカレンダー』大阪:千里文化財団。

2013 「旅・いろいろ地球人 よそ者?③ 極北の踏み絵」『毎日新聞』10月31日夕刊。

2013 「日だまりカフェ(上) 極北 魅力あふれる人々」『読売新聞』11月7日夕刊。

2013 「日だまりカフェ(中) 獲物の分配 当たり前」『読売新聞』11月14日夕刊。

2013 「日だまりカフェ(下) 1000年の捕鯨民族 未来は…」『読売新聞』11月21日夕刊。

2013 「出版物 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies no. 84)」『民博通信』143:29。

2013 「Project 北アメリカ先住民の事例からモースの『贈与論』を再考する」『民博通信』143:12-13。

2013 「みんぱく世界の旅 イヌイット① 極北地域の生活」『毎日小学生新聞』12月28日。

2014 「旅・いろいろ地球人 冬を楽しむ④ 2年に1度の『使者祭』」『毎日新聞』1月9日夕刊。

- 2014 「みんぱく世界の旅 イヌイット② 極北の子どもたち」『毎日小学生新聞』1月4日。
- 2014 「みんぱく世界の旅 イヌイット③ 極北地域の芸術家」『毎日小学生新聞』1月11日。
- 2014 「みんぱく世界の旅 イヌイット④ 極北の鯨祭り」『毎日小学生新聞』1月18日。
- 2014 「アラスカ・イヌピアットの捕鯨活動 機能的な鯨肉分配システム」『産経新聞』2月3日夕刊。
- 2014 「トゥピラク」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 235, 大阪：国立民族学博物館。
- 2014 「人間学のキーワード 贈与」『月刊みんぱく』38(3): 20。
- 2014 「書評：大村敬一著『カナダ・イヌイトの民族誌 日常の実践のダイナミックス』」『カナダ学会ニューズレター』97: 5-7。

Kishigami, N.

- 2014 The History and Present Situation of Comparative Studies of Indigenous Cultures around the North Pacific Rim. In D. Koester and N. Kishigami (eds.) *Program and Abstract of the International Symposium “Comparative Studies of Indigenous Cultures around the North Pacific Rim: Focusing on Indigenous Rights and Marine Resources”* (held at the National Museum of Ethnology, Osaka, Japan on January 11-13, 2014). Osaka: Kishigami’s Research Office, National Museum of Ethnology.

Kishigami, N., J. M. Savelle and H. Hamaguchi

- 2013 Preface. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. i-ii. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2013 Concluding Remarks. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 355-357. Osaka: National Museum of Ethnology.

Kishigami, N. and D. Koester

- 2014 *Program and Abstract of the International Symposium “Comparative Studies of Indigenous Cultures around the North Pacific Rim: Focusing on Indigenous Rights and Marine Resources”* (held at the National Museum of Ethnology, Osaka, Japan on January 11-13, 2014). Osaka: Kishigami’s Research Office, National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年6月8日 「アラスカ先住民イヌピアットの鯨肉の分配と流通について」日本文化人類学会第47回研究大会、慶応大学三田キャンパス
- 2013年6月18日 「Future Earth の必要性——文化人類学からの問題提起」日本学術会議主催学術フォーラム「Future Earth ——持続可能な未来の社会へ向けて」日本学術会議講堂
- 2013年12月19日 「Food Security Problems of the Inupiat in Northwest Alaska」国際シンポジウム『食料の安全保障の人類学的研究』大阪大学大学会館
- 2014年1月11日 ‘The History and Present Situation of Comparative Studies of Indigenous Cultures around the North Pacific Rim’ The International Symposium “Comparative Studies of Indigenous Cultures around the North Pacific Rim: Focusing on Indigenous Rights and Marine Resources,” National Museum of Ethnology
- 2014年1月29日 「国立民族学博物館におけるフォーラム型情報ミュージアム構想について」国際ワークショップ『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』国立民族学博物館

・研究講演

- 2013年9月16日 「北極海の捕鯨民イヌピアットの1年の暮らし」北方博特別展関連講座・道民カレッジ連携講座、北海道立北方民族博物館講堂
- 2014年2月21日 「アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨文化」人間文化研究機構連携研究「人間文化資源の保存環境研究」（代表者：園田直子）関連講座、園田学園女子大学
- 2014年2月22日 「北アメリカ先住民社会における捕鯨——現状と歴史」2013年度芦屋市立公民館講座『民族学への招待——世界の国々の文化探訪』、芦屋市市民センター
- 2014年3月14日 ‘Low-income and Homeless Inuit in Montreal.’ Public Lecture “Tokyo and Montreal: The

Urban Lives of the Japanese Ainu and the Canadian Inuit Groups” (Organized by the Japan Foundation, Canada), Thomson House, McGill University

◎調査活動

・海外調査

2013年4月29日～5月5日—デンマーク（デンマーク国立博物館において、2014年度秋季開催予定の企画展「未知なる大地グリーンランド——その自然と文化」に関する協議）

2013年8月8日～8月24日—カナダ（北アメリカ北西海岸先住民ヌチャールスとマカーの伝統捕鯨と復興運動に関する調査）

2013年10月9日～10月20日—デンマーク、グリーンランド（グリーンランドにおける先住民生存捕鯨の歴史と現状に関する調査）

2014年3月6日～3月17日—カナダ（カナダ・イヌイットの捕鯨と先住権に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

・総研大の開講科目

比較社会研究特論Ⅱ（前期）、比較社会演習Ⅱ（後期）

・論文審査

予備審査委員（1件）、論文審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

第22期日本学術会議連携会員（地域研究）、第25期日本文化人類学会理事、日本カナダ学会理事、地域研究コンソーシアム理事、民族芸術学会理事、北海道立北方民族博物館研究協力員、大阪大学 GLOCOL 外部評価委員、東北大学東北アジア研究センタープロジェクト外部評価委員

・非常勤講師

北海道大学文学研究科・文学部「北方文化論——イヌイット民族誌」（集中講義）

久保正敏 [くほ まさとし] ————— 副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

1949年生。【学歴】京都大学工学部電気工学科卒（1972）、京都大学大学院工学研究科修士課程電気工学第二専攻修了（1974）【職歴】京都大学工学部情報工学科助手（1974）、国立民族学博物館第5研究部助手（1983）、京都大学大型計算機センター助教授（1990）、京都大学学術情報ネットワーク機構兼務学術資料情報担当（1990）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（1998）、国立民族学博物館情報管理施設長（2000～2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）【学位】工学博士（京都大学 1986）、工学修士（京都大学大学院工学研究科 1974）【専攻・専門】コンピュータ民族学（情報組織化論、博物館情報論）、民族情報学（先住民とメディア文化論）【所属学会】情報処理学会、日本文化人類学会、民族芸術学会、日本産業技術史学会、アートドキュメンテーション学会

【主要業績】

[単著]

久保正敏

1996 『マルチメディア時代の起点——イメージからみるメディア』（NHK ブックス779）東京：日本放送出版協会。

[論文]

久保正敏

2003 「模倣と創造——エスニック・アートとファイン・アート」山田奨治編『模倣と創造のダイナミズム』pp. 215-239, 東京：勉誠出版。

久保正敏・堀江保範

2006 「オーストラリア交通事情——アウトバックの距離を克服する」『季刊民族学』118：3-41。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

映像アーカイブズ構築のための諸課題の検討と指針策定——倫理・知的財産権・保存と利用の両立を目指して

・研究の目的、内容

国立民族学博物館所蔵の映像資料は、国内外共有の文化資源として極めて貴重である。しかし、その長期保存と利用の両立を図るためには、媒体変換など技術問題の背後にある、知的財産権保護と共同利用性の両立をいかに解決するかが重要となる。本研究では、素材の世代管理を含む映像アーカイブズの構造設計とともに、知的財産権保護と利用の両立を実現できる媒体管理手法を図る手法を検討する。映像アーカイブズを運用する諸機関の実態調査を行いながら、本館にとって現実的・具体的な指針を設計する。

・成果

2014年5月、せりか書房から刊行予定の『映像人類学——人類学の新たな実践へ』（民博共同研究「映像の共有人類学——映像をわかちあうことの方法と理論」の成果）pp. 195-217において、「映像アーカイブズから映像の共有を考える」として論考をまとめた。

2013年9月26日に、ミャンマー国ヤンゴンの国立博物館で開催された International Research Meeting on Museology において ‘Problems in Managing Cultural Resources: Resource Sharing, Protecting Intellectual Properties and Ethical Consideration’ と題する口頭発表を行った。

◎出版物による業績

[その他]

久保正敏

2013 「似たモノさがし だましの道具」『月刊みんぱく』37(4): 10-11。

2013 「学生達には、こんな総研大院生になってほしい」2012年前期学生セミナー実行委員会編『総研大基盤機関訪問記 「総研大生という生き物」を探る旅』p. 26, 神奈川：総合研究大学院大学。

2013 「国立民族学博物館 2012年春の特別展『今和次郎 採集講義 考現学の今』を終えて」『工学院大学図書館 今和次郎コレクションレター』16: 2-3。

2013 「分断された人と水源（特集 水を考える）」『季刊民族学』144: 76-79。

2013 コメント「みんぱく1000万人突破へ 世界の宝箱 見て触れて」『読売新聞』9月14日夕刊。

2013 「モノの背景に思いを馳せる」国立民族学博物館監修『国立民族学博物館2014年オリジナルカレンダー 植物と暮らす』大阪：千里文化財団。

2013 「8月 樹皮画 解説」『国立民族学博物館2014年オリジナルカレンダー 植物と暮らす』大阪：千里文化財団。

2013 「似たモノさがし 屋根から天空へ」『月刊みんぱく』37(11): 10-11。

2014 「墓標 プカマニ・ポール」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 251, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年9月26日 ‘Problems in Managing Cultural Resources: Resource Sharing, Protecting Intellectual Properties and Ethical Consideration.’ International Research Meeting on Museology, Myanmar, National Museum (Yangon)

2013年10月8日 “‘The Unexpected Journey of a Researcher’ in ‘Your Journey.’” SOKENDAI Student Seminar, Sokendai Hayama Campus

2013年11月7日 特別講義「科学から見るオーストラリア——時空の広さを知ろう 気候・進化・天体・先住民文化」『SPP事業 洛北サイエンス3年 オーストラリアの自然事象を探索する』京都府立洛北高等学校附属中学校

2013年11月10日 「国立民族学博物館の展示理念」『全日本博物館学会 2013年度第4回研究会』国立民族学博物館

2014年1月13日 「聞き取り調査のまとめ方・報告書の作成について」『阪神間モダニズム調査隊ボランティア養成講座』芦屋市立美術博物館

2014年3月1日 「科学から見るオーストラリアと先住民」芦屋公民館講座『民族学への招待——世界の国々の文化探訪』芦屋市立公民館

・研究講演

- 2013年8月19日 ‘Problems in Managing Cultural Resources: Resource Sharing, Protecting Intellectual Properties and Ethical Consideration.’ Training Course for Researcher in Charge of Cultural Heritage Protection in Asia and Pacific 2013, National Museum of Ethnology
- 2013年10月13日 趣旨説明およびディスカッション司会『公開シンポジウム 渋沢敬三を語る——偉大なる学問の庇護者』国立民族学博物館
- 2013年11月9日 総合司会『佐々木高明先生追悼シンポジウム 日本文化のしくみ——その多様性を考える』国立民族学博物館
- 2014年3月4日 「国立民族学博物館の情報化史」『機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」第2回国際ワークショップ コンピュータとドキュメンテーション——民族学資料のデジタル化とその利用』国立民族学博物館

◎調査活動

2013年9月21日～9月29日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授、京都大学地域研究統合情報センター共同研究員

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

大阪教育大学「博物館情報・メディア論」

民族社会研究部

韓 敏 [ハン ミン]————— 部長（併）教授

【**学歴**】中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）【**職歴**】武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）【**学位**】学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科 1986）【**専攻・専門**】文化人類学、現代中国の漢族研究【**所属学会**】日本文化人類学会

【**主要業績**】

[単著]

Han, M.

- 2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology (『回應革命与改革——皖北李村的社会変遷与延続』南京：江蘇人民出版社、2007)。

[編著]

韓 敏編

- 2009 『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』東京：風響社。

[共編著]

Han, M. and N. Graburn

- 2010 *Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies* (Senri Ethnological Studies 76). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

革命、改革とグローバル化の中国に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は近代中国の革命、改革とグローバル化の過程における社会と文化の連続性と非連続性を究明することにある。

- 1) 具体的に文献調査や聞き取り調査を通して、社会主義革命理念の制度化、近代的シンボルの形成と人びとの生活実践を考察する。
- 2) 近代中国の革命、改革とグローバル化の過程における社会と文化の連続性と非連続性について、機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース（代表：韓 敏 2012年4月～2015年3月）」を通して明らかにする。

・成果

本研究は科学研究費補助金（基盤研究（C））（一般）（2011～2013）「現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフストーリー・アプローチ」（代表者：韓 敏）のプロジェクトと連動して実施された。その成果は以下のようにまとめることができる。

韓 敏

2014 「毛沢東バッジの語りと活用」武内房司・塚田誠之編『中国の民族文化資源——南部地域の分析から』pp. 25-62, 東京：風響社。

2013 「悠久の中国、ビジネスの中国」吉原和男編者代表『人の移動辞典——日本からアジアへ・アジアから日本へ』pp. 386-387, 東京：丸善出版。

近代中国の社会と文化の連続性と非連続性について、2012年度機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース（代表：韓 敏 2012年4月～2015年3月）」で実施された国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」の成果を『中国社会与民族的话语分析——人类学的理论框架及个案研究』（中国語）という論文集にまとめ、2013年12月に研究出版委員会に提出し、Senri Ethnological Studies の一冊として出版することが認められた。また、2008年10月から2011年3月まで主宰した共同研究「中国における社会と文化の再構築——グローカリゼーションの視点から」（代表：韓 敏）の成果を、『中国社会における文化変容の諸相——グローカル化の視点から』にまとめ、審査を受けて外部出版が認められた。

◎出版物による業績

[論文]

韓 敏

2014 「毛沢東バッジの語りと活用」武内房司・塚田誠之編『中国の民族文化資源——南部地域の分析から』pp. 25-62, 東京：風響社。

[その他]

韓 敏

2014 「中国における社会と民族のパラダイム——人類学的枠組みと事例研究」『民博通信』141：8-9。

2014 Chinese Society and Ethnicity: Anthropological Frameworks and Case Studies. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 36：10-11.

2014 「悠久の中国、ビジネスの中国」吉原和男編者代表『人の移動辞典——日本からアジアへ・アジアから日本へ』pp. 386-387, 東京：丸善出版。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[長編]

韓 敏監修

2014 『漢族の祖先祭祀——福建省南部における一事例』日本語, 50分。

[短編]

韓 敏監修

2014 『漢族の祖廟——中国福建省南部』日本語, 14分。

2014 『福建省安溪県の烏龍茶 鉄観音』日本語, 20分。

2014 『客家のふるさと 福建土楼』日本語, 15分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年11月18日～19日 「日本の中国人類学研究的課題と方法論——国立民族学博物館を事例に」機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」第2回国際シンポジウム『中日の人類学・民族学の理論的刷新とフィールドワークの展開』中国北京・中国社会科学院民族学・人類学研究所

・展示

中国地域の常設展示の新構築

・広報・社会連携活動

2013年8月4日 「家系図でつながる人びと」第309回みんなばくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2013年11月17日～11月20日—中華人民共和国（機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」第2回国際シンポジウム参加）

2014年3月21日～3月26日—中華人民共和国（現代中国の人々の生活実践に関する人類学的調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）、特別共同利用研究員研究指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ テーマシリーズ：人類学のライフヒストリー・アプローチ

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリー・アプローチ（2011-2013）」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

2014年1月10日 「中国人の家族とお正月」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

池谷和信 [いけや かずのぶ]————— 教授

1958年生。【学歴】東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）【職歴】北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科併任助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009～2010）【学位】理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）【専攻・専門】環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学 1）世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、2）植民地時代における民族社会の変容に関する研究、3）地球環境問題および地球環境史に関する研究【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合（IUAES）、アメリカ人類学会（American Anthropological Association）、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会

【主要業績】

[単著]

池谷和信

2003 『山菜採りの社会誌——資源利用とテリトリー』宮城：東北大学出版会。

2002 『国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書4）大阪：国立民族学博物館。

[編著]

池谷和信編

2009 『地球環境史からの問い——ヒトと自然の共生とは何か』 東京：岩波書店。

【受賞歴】

2007 日本地理学会優秀賞

1998 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

熱帯の狩猟採集民と農耕民との関係に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、3大陸の熱帯における狩猟採集民を対象にして彼らの資源利用や民族間関係を環境史の視点から構築することを目的とする。筆者は、彼らの歴史を、1) 狩猟採集民の時代、2) 狩猟民と農耕民との共生関係や農耕民化の時代、3) 前近代・近代の国家形成の時代、4) グローバル化の時代という4時代に便宜的に区分できるものとする。この研究では、これらの時代状況をふまえて、アジア、アフリカ、南アメリカという3大陸に暮らす「狩猟採集民」の視点から農耕民との関係を紹介して、世界史を環境史として新たに構築することを試みる。

・成果

本研究に関する研究報告は、第10回国際狩猟採集社会会議（2013年6月、英国のリバプール大学で開催）にて行った。そこでは、アフリカ南部のサンを事例にして、とくに植民地時代の資料と聞き取り調査との併用によって、当時の社会を復元することができた。また、南アメリカのアマゾン狩猟民や焼畑農耕民のなりわいに関する研究成果は、民博・企画展示『アマゾンの生き物文化』のなかで示すことができた。アマゾンでは、アフリカの事例とは異なり、狩猟採集民と農耕民とのあいだが曖昧であって、明確に区別することができない。2つの大陸でのこのような違いについて、その要因を分析することは今後の課題として残された。

〈論文〉

Ikeya, K.

2014 Biodiversity, Native Domestic Animals, and Livelihood in Monsoon Asia: Pig Pastoralism in the Bengal Delta of Bangladesh. In K. Okamoto and Y. Ishikawa (eds.) *Traditional Wisdom and Modern Knowledge for the Earth's Future* (International Perspectives in Geography 1) pp. 51-77. Tokyo: Springer Japan.

池谷和信

2014 「野鶏をいかに飼い慣らすか? ——2012年8月ベトナム農村調査」『家畜資源研究会報』13: 8-12。

Ikeya, K. and M. O. Faruque

2013 「Food of Nomadic Pigs in the Bengal delta of Bangladesh.」『在来家畜研究会報告 (Report of the Society for Researches on Native Livestock)』26: 99-103。

◎出版物による業績

[編著]

池谷和信編

2013 『生き物文化の地理学』（ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第2巻）滋賀：海青社。

[論文]

池谷和信

2013 「熱帯地域における狩猟採集民の移動の特徴」印東道子編『人類の移動誌』pp. 69-85, 京都：臨川書店。

2013 「現代の地球と生き物文化の諸相」池谷和信編『生き物文化の地理学』（ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第2巻）pp. 11-24, 滋賀：海青社。

2013 「生き物文化の地理学の誕生——生き物資源利用と管理の思想」池谷和信編『生き物文化の地理学』（ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 2）pp. 349-367, 滋賀：海青社。

2014 「野鶏をいかに飼い慣らすか? ——2012年8月ベトナム農村調査」『家畜資源研究会報』13: 8-12。

Ikeya, K.

2013 Whaling Hunting and Use among the Chukchi in Northeastern Siberia. In Kishigami N, H. Hamaguchi, and J. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84) pp. 121-136. Osaka: National Museum of Ethnology.

2014 Biodiversity, Native Domestic Animals, and Livelihood in Monsoon Asia: Pig Pastoralism in the Bengal Delta of Bangladesh. In K. Okamoto and Y. Ishikawa (eds.) *Traditional Wisdom and Modern Knowledge for the Earth's Future* (International Perspectives in Geography 1), pp. 51-77, Tokyo: Springer Japan.

Ikeya, K. and M. O. Faruque

2013 「Food of Nomadic Pigs in the Bengal delta of Bangladesh.」『在来家畜研究会報告 (Report of the Society for Researches on Native Livestock)』26: 99-103.

[その他]

池谷和信

2013 「人と家畜のエピソード13 キンシャサの豚」『獣医畜産新報』66(4): 245。

2013 「アフリカのビーズの装身具」上羽陽子監修、矢崎順子編『世界のかわいい民族衣装』pp. 182-185, 東京: 誠文堂新光社。

2013 「人はなぜ装うのか?—さまざまな装いからみた私たちの暮らし」『小原流 插花』63(5): 10-13。

2013 「今に生きる山のくらし」『月刊みんぱく』37(5): 8。

2013 「人と家畜のエピソード14 ウガンダの豚と人」『JVM 獣医畜産新報』66(5): 325。

2013 「人と家畜のエピソード15 アマゾンの豚」『JVM 獣医畜産新報』66(6): 405。

2013 「人と家畜のエピソード16 アマゾンでサルを飼う」『JVM 獣医畜産新報』66(7): 485。

2013 「特集 共生の雨林アマゾン 生き物と人とのあらたな関係を求めて—世界最大の森アマゾンの魅力」『月刊みんぱく』37(7): 3-4。

2013 「みんぱく世界の旅 アマゾン① 村人と動物のほどよい関係」『毎日小学生新聞』7月6日。

2013 「みんぱく世界の旅 アマゾン② 収入と環境のバランス」『毎日小学生新聞』7月13日。

2013 「みんぱく世界の旅 アフリカ① ソマリのラクダ飼いの苦悩」『毎日小学生新聞』7月20日。

2013 「みんぱく世界の旅 アフリカ② 砂漠の水がめはスイカ」『毎日小学生新聞』7月27日。

2013 「人と家畜のエピソード17 アマゾンの森とペッカー」『JVM 獣医畜産新報』66(8): 565。

2013 「山菜」新谷尚紀・関沢まゆみ編『民俗小辞典 食』pp. 178-180, 東京: 吉川弘文館。

2013 「ワラビ」新谷尚紀・関沢まゆみ編『民俗小辞典 食』p. 180, 東京: 吉川弘文館。

2013 「ぜんまい」新谷尚紀・関沢まゆみ編『民俗小辞典 食』pp. 180-181, 東京: 吉川弘文館。

2013 「フキ」新谷尚紀・関沢まゆみ編『民俗小辞典 食』pp. 181-182, 東京: 吉川弘文館。

2013 「旅いろいろ地球人 映画① 疲れさせたけれど」『毎日新聞』8月22日夕刊。

2013 「人と家畜のエピソード18 ベトナムの森と野鶏」『JVM 獣医畜産新報』66(9): 645。

2013 「人と家畜のエピソード19 タイの森とイノシシ」『JVM 獣医畜産新報』66(10): 725。

2013 「狩猟採集文化のデパート—インド、アンダマン島の人類学博物館」『月刊みんぱく』37(11): 14-15。

2013 「人と家畜のエピソード20 アンデスのアルパカ」『JVM 獣医畜産新報』66(11): 805。

2013 「紛争の地理学」人文地理学会編『人文地理学事典』pp. 274-275, 東京: 丸善出版。

2013 「日本の森とミツバチと人」(新日本の文化展示関連 友の会講演会要旨)『国立民族学博物館・友の会ニュース』217: 4。

2013 「文明の『はじまり』—世界における家畜飼養の起源」『総研大創立25周年記念事業「はじまり」シンポジウム予稿集』p. 11, 神奈川: 総合研究大学院大学。

2013 「人と家畜のエピソード21 アンデスのリヤマ」『JVM 獣医畜産新報』66(12): 885。

2013 「狩猟採集民研究の新たな可能性を問う—第10回国際狩猟採集社会会議に参加して」『民博通信』143: 10-11。

2014 「旅・いろいろ地球人 冬を楽しむ③ 掘っ立て小屋のぬくもり」『毎日新聞』12月26日夕刊。

2014 「人と家畜のエピソード22 アンデスのクイ」『JVM 獣医畜産新報』67(1): 5。

2014 「人類社会の鏡としての馬」『月刊みんぱく』38(1): 2-3。

2014 「人と家畜のエピソード23 タイの闘鶏」『JVM 獣医畜産新報』67(2): 85。

- 2014 「羽根製頭飾り」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 24, 大阪：国立民族学博物館。
- 2014 「ビーズ製人像」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 246, 大阪：国立民族学博物館。
- 2014 「羽根製仮面」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 247, 大阪：国立民族学博物館。
- 2014 「人と家畜のエピソード24 消えつつある遊牧の伝統」『JVM 獣医畜産新報』67(3): 165。
- 2014 「様々な気候帯における人間活動と微地形利用」(シンポジウム 微地形と地理学——その応用と展開)『日本地理学会発表要旨集』85: 34。

池谷和信・金山 晶

- 2013 「アマゾン先住民における首飾りについて」『第67回日本人類学会大会プログラム・抄録集』p. 60, 茨城：国立科学博物館人類研究部。

福岡伸一・柏原精一・池谷和信・宇根 豊・陽 捷行

- 2013 「生き物文化誌『学』とは何か——パネルディスカッション」『ビオストーリー』19: 56-59。

Ikeya, K.

- 2013 Resource Use among Nomadic Pig Herders in Bangladesh. *Abstracts of the 14th Global Conference of the International Association for the Study of the Commons*, p. 7. The International Association for the Study of the Commons (IASC).
- 2013 Historical Changes of the Relationship between Hunter-gatherers and Farmers in Botswana. *Conference Handbook CHAGS10*, p. 110. Liverpool: University of Liverpool.
- 2013 Hunter-Gatherers and their Neighbors. *Conference Handbook CHAGS10*, p. 99. Liverpool: University of Liverpool.

Oka, K. and K. Ikeya

- 2013 Commons and Transhumance among Cattle Keepers in Northeastern Japan. *Abstracts of the 14th Global Conference of the International Association for the Study of the Commons*, p. 47. The International Association for the Study of the Commons (IASC).

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

[日本の文化展示]

池谷和信監修

- 2013 『移牧』日本語, 英語, 韓国語, 中国語。
- 2013 『養蜂』日本語, 英語, 韓国語, 中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

- 2013年4月27日 「趣旨説明」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』
- 2013年6月21日 「趣旨説明」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』
- 2013年7月21日 「ムラブリ研究の現状」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』(中井信介と連名)
「狩猟採集民研究の最近の動向——国際狩猟採集社会会議に参加して」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』
- 2014年2月2日 「スマトラ島の狩猟採集民クブの事例」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年4月13日 「コメント」動物殺しの研究会、桜美林大学
- 2013年5月25日 「コメント」日本アフリカ学会・フォーラム『アフリカ半乾燥地における降雨変動リスクと生業の対応戦略』東京大学
- 2013年6月4日 'Commons and Transhumance among Cattle Keepers in Northeastern Japan.' (K. Oka and K. Ikeya) the 14th Global Conference of the International Association for the Study

- of the Commons.
- 2013年6月4日 'Resource Use among Nomadic Pig Herders in Bangladesh.' the 14th Global Conference of the International Association for the Study of the Commons.
- 2013年6月8日 「コメント」日本文化人類学会・分科会『動物殺しの論理と倫理——種間／種内の検討』慶応大学文学部
- 2013年6月15日 「ペルーアマゾンにおけるペッカーリーの皮取引人とその流通について」日本熱帯生態学会 九州大学農学部
- 2013年6月16日 「アマゾンの生き物文化」比較文明学会・関西支部例会 国立民族学博物館
- 2013年6月27日 'Hunter-Gatherers and their Neighbors.' CHAGS10 Liverpool, UK.
- 2013年6月28日 'Historical Changes of the Relationship between Hunter-gatherers and Farmers in Botswana.' CHAGS10 Liverpool, UK
- 2013年7月15日 「アフロ・ユーラシアにおける乾燥地文明の地域構造——ソマリの牧畜と交易の視点」名古屋大学文学部
- 2013年7月27日 「世界の羽根と人——アマゾン、アフリカ」企画展「アマゾンの生き物文化」トークイベント『鳥の羽根 いろとりどり』国立民族学博物館。
- 2013年8月7日 'Biodiversity, Native Domestic Animals, and Livelihood in Monsoon Asia: Pig Pastoralism in the Bengal Delta of Bangladesh.' IGU (International Geographical Congress) Kyoto.
- 2013年9月29日 「東日本大震災と民俗芸能——岩手県大槌町の事例」日本地理学会秋季学術大会、福島大学教育学部
- 2013年10月26日 「世界の狩猟採集民文化と岩絵——動物画・狩猟画の比較研究の試み」『岩絵文化と人類文明の形成——新疆、中央アジア、北欧、アフリカ』名古屋大学文学部
- 2013年11月1日 「3大陸の湿潤熱帯における自然資源の利用——野生動物・家畜資源に注目して」『熱帯農業三大陸比較』（代表：舟川晋也）総合地球環境学研究所
- 2013年11月2日 「アマゾン先住民における首飾りについて」（金山 晶と共同発表）日本人類学会、国立科学博物館
- 2013年11月5日 「ユーラシアにおける豚の道を求めて——民族学と遺伝学の対話」総合研究大学院大学学融合推進センター・第4回企画会議、国立民族学博物館
- 2013年11月26日 「文明の『はじまり』——世界における家畜飼養の起源」総研大シンポジウム『文明の「はじまり」』総合研究大学院大学・葉山キャンパス
- 2013年12月18日 「牛車（ぎゅうしゃ）の形と役割——みんぱくをフィールドワークする」第3回牛車研究会、東京大学生産技術研究所
- 2014年2月5日 「アフリカの魅力を語る——自然・村・都市」福岡県高校地理研究会、福岡県修猷館高校
- 2014年3月1日 「野鶏から家鶏への道を求めて——熱帯アジアの森から世界の台所」生き物文化誌学会・例会、沖縄県子供の国
- 2014年3月23日 「狩猟採集民の生計活動と消費について——熱帯アジアの事例（オランリンバに関する初期的報告）」総研大・学融合推進センター公開セミナー（代表：野林厚志）、国立民族学博物館
- 2014年3月28日 「様々な気候帯における人間活動と微地形利用」日本地理学会シンポジウム『微地形の地理学』国士舘大学
- ・研究講演
- 2013年6月18日 「ブタの文化誌」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター
- 2013年7月5日 「ブタの文化誌」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター
- 2013年7月11日 「アマゾンの生き物文化」『民博夜話』、浜屋敷（吹田市歴史文化まちづくり協会）
- 2013年8月3日 「日本の森とミツバチと人」みんぱく友の会講演会、国立民族学博物館
- 2013年11月4日 「トークイベント——行って！わかった！これがびっくりリアル世界だ」MBSアナウンサー（河田直也）との対談、国立民族学博物館
- 2013年11月9日 「コメント——佐々木高明先生の研究を受け継ぎ、そして超えることは可能か？」佐々木高明先生追悼シンポジウム『日本の文化のしくみ——その多様性を考える』国立民族学博物館
- 2014年3月16日 「討論（山口吉彦、大橋麻里子、池谷和信）アマゾン先生ありがとう——さよならアマゾン民族館」山形県鶴岡市・出羽庄内国際村ホール

・展示

本館企画展示「アマゾンの生き物文化」

2013年7月14日、8月10日、8月11日 「アマゾンの生き物文化」ギャラリートーク

2013年7月26日 夏休みこどもワークショップ「夏のアマゾン探検隊」

2014年3月31日 春のワークショップ「世界一周ビーズの旅 フィールドワークに挑戦！」

・広報・社会連携活動

2013年4月14日 「マダガスカルにおける狩猟採集民の暮らし——もう一つの森の世界」第295回みんなばくウイークエンド・サロン

2013年7月14日 「アマゾンの生き物文化」第306回みんなばくウイークエンド・サロン

2013年11月7日 協力：NHK 総合「地球イチバン 世界一野生生物を保護する国——ナミビア」

2014年2月24日 協力：日本テレビ「世界まる見え！テレビ特捜部」

◎調査活動

・海外調査

2013年6月23日～6月30日—イギリス（第10回国際狩猟採集社会会議参加）

2013年8月23日～8月27日—タイ（在来家畜の利用に関する資料収集）

2013年10月2日～10月25日—ペルー、ボリビア、エクアドル（熱帯高地における自然資源利用に関する研究、熱帯の家畜利用に関する現地調査）

2013年10月26日～10月30日—タイ（闘鶏に関する資料収集）

2013年11月21日～11月25日—タイ（闘鶏に関する資料収集）

2013年12月19日～12月26日—バングラディッシュ（デルタにおける自然資源利用と家畜市に関する調査）

2014年1月6日～1月16日—ケニア（ラクダ飼育に関する資料収集）

2014年1月20日～1月26日—インドネシア（狩猟採集民の自然資源利用に関する研究）

2014年2月19日～2月27日—ラオス（狩猟採集民の自然資源利用に関する研究）

2014年3月6日～3月15日—コンゴ民主共和国、ボツワナ（熱帯林におけるタンパク質獲得に関する研究）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人） 副指導教員（2人）

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ テーマシリーズ：環境人類学

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「熱帯地域における農民の家畜利用に関する環境史的研究」研究代表者、（基盤研究（S））「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究」（研究代表者：嶋田義仁）研究分担者、（基盤研究（A））「アフリカ・モラル・エコノミーを基調とした農村発展に関する比較研究」（研究代表者：杉村和彦）研究分担者、（基盤研究（A））「アフリカ熱帯林におけるタンパク質獲得の現状と将来」（研究代表者：木村大治）研究分担者、（基盤研究（A））「熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——『高地文明』の発見に向けて」（研究代表者：山本紀夫）研究分担者、（基盤研究（B））「多起源的家畜化モデルの構築と学融合型資料収蔵システムの確立」（研究代表者：遠藤秀紀）研究分担者、環境省・地球環境研究総合推進費「地域住民のREDDへのインセンティブと森林生態資源のセミドメスティケーション化」（代表者：小林繁男）研究分担者、総合研究大学院大学学融合推進センター研究事業「戦略的共同研究Ⅰ」（代表者：野林厚志）研究分担者、総合地球環境学研究所研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性——歴史生態学からのアプローチ」（代表者：羽生淳子）研究分担者、家畜資源研究会（HCMR）研究分担者、牛車研究会（代表者：池内克史）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

Before Farming: the Archaeology and Anthropology of Hunter-gatherers、Quarterly Online Journal (UK) 編集委員、Nomadic Peoples、Berghahn Journal (UK) 編集委員、Museum Anthropology (USA) 編集委員、Tribes and Tribals (India) 編集委員、人文地理学会評議員、生き物文化誌学会常任理事、ヒトと動物の関係学会評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、国際コンゴ会議（The Congress of

International Association of Commons) 準備委員、第10回国際狩猟採集社会会議 (10th Conference on Hunting and Gathering Societies) 準備委員

・非常勤講師

広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」(集中講義)

印東道子 [いんとう みちこ] ————— 教授

【学歴】 東京女子大学文理学部史学科卒 (1976)、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部修士課程修了 (1982)、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部大学院博士課程修了 (1988) **【職歴】** 東京女子大学文理学部史学科研究助手 (1976)、北海道東海大学国際文化学部助教授 (1988)、北海道東海大学国際文化学部教授 (1996)、国立民族学博物館民族社会研究部教授 (2000)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授 (2001)、放送大学客員教授 (2006) **【学位】** Ph. D. (オタゴ大学人類学部大学院博士課程 1989)、M. A. (オタゴ大学人類学部大学院修士課程 1982) **【専攻・専門】** オセアニア先史学・民族学 1) オセアニアの土器文化、2) 島嶼環境における人間居住 **【所属学会】** 日本オセアニア学会、日本人類学会、日本考古学協会、New Zealand Archaeological Society、Indo-Pacific Prehistory Association

【主要業績】

[単著]

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き』(フィールドワーク選書4) 京都: 臨川書店。

2002 『オセアニア 暮らしの考古学』(朝日選書715) 東京: 朝日新聞社。

[編著]

印東道子編著

2013 『人類の移動誌』 京都: 臨川書店。

【受賞歴】

2006 大同生命地域研究奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島嶼環境への人類の移動と適応

・研究の目的、内容

- 1) オセアニアの島嶼環境への人類の移動の歴史や移動後の居住に関する研究を、科学研究費補助金(基盤研究(A))「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」(研究代表者: 松村博文)の研究分担者として、引き続き行う。
- 2) オセアニアへ拡散した人類文化の多様性に関して、総合研究大学院大学の戦略的研究プロジェクト「現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究」(代表: 斉藤成也)の総括チームの一員として最終年度に向けて研究を展開する。
- 3) 共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究——資源利用と物質文化の時空間比較」(研究代表: 小野林太郎)において、海域世界を特徴とするオセアニアへ拡散した初期の人々の物質文化がどのように変化したかを海洋適応との関連で明らかにする。

・成果

- 1) 2014年1月にカンボジアで行われたIPPA(インド・太平洋先史学連盟)研究大会において、上記科学研究費補助金(基盤研究(A))が主催したセッションにおいて、フェイス島の発掘調査に基づいた人類の移動史について発表を行った。この成果は来年、単行本としてオーストラリアから出版される予定である。
- 2) 総合研究大学院大学の戦略的研究プロジェクトの成果として、2014年2月に開催された国際シンポジウムにおいて、ミクロネシア内の人類移動と文化の多様性に関する発表を行った(葉山、2014年2月3日~4日)。また、成果の一般への還元として行われた一般講演会(東京、2014年2月8日)において人類の海洋世界への移動と暮らしについての講演を行った。

- 3) 2010～2011年度に行った科学研究費補助金（新学術公募研究、領域代表：青山和夫）の成果報告として『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究』第2集（高宮広土・新里貴之編、六一書房、2014年3月刊行）に研究成果を発表した。
- 4) 過去20年にわたって行ってきたフェイス島での考古学調査の様子を、自身が編集に加わっているフィールドワーク選書シリーズ（臨川書店）の一冊として執筆した（『南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き』2014年2月刊行）。

◎出版物による業績

[単著]

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る——女性考古学者の謎解き』（フィールドワーク選書4）京都：臨川書店。

[編著]

印東道子編

2013 『人類の移動誌』京都：臨川書店。

[論文]

印東道子

2013 「海域世界への移動戦略」印東道子編『人類の移動誌』pp. 232-245, 京都：臨川書店。

2014 「ミクロネシアの古環境研究と人間居住」高宮広土・新里貴之編『琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷』（琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集 第2集）pp. 211-224, 東京：六一書房。

Gakuhari, T., M. Intoh, T. Nakano and M. Yoneda

2013 Strontium Isotope Analysis of Prehistoric Faunal Remains Excavated from Fais Island in Micronesia. *People and Culture in Oceania* 29: 69-81.

[その他]

印東道子

2013 「はじめに」印東道子編『人類の移動誌』pp. 5-8, 京都：臨川書店。

2013 「おわりに」印東道子編『人類の移動誌』pp. 361-362, 京都：臨川書店。

2013 「オセアニアの衣装とアクセサリー」上羽陽子監修『世界のかわいい民族衣装』pp. 152-155, 東京：誠文堂新光社。

2013 「ホモ・モビリティクス」『月刊みんぱく』37(11): 20。

2014 「トコベイ人形」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 239, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年9月6日 「ミクロネシアへの人類の拡散を追う——フェイス島の調査紹介」総合研究大学院大学 戦略的研究プロジェクト（現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究）研究会（葉山）

2014年1月12日～18日 ‘Can We Distinguish “Human Migration” from “Cultural Contacts”?: A Discussion on the Western Micronesian Case.’ The 20th Indo Pacific Prehistory Association Congress, Siem Reap, Cambodia.

2014年2月3日～4日 ‘Human Migrations and/or Cultural Contacts in Oceania.’ SOKENDAI International Symposium “Modern Human Diversity on Genes and Culture: With special reference to Asia and Oceania,” The Graduate University for Advanced Studies (SOKENDAI), Hayama.

2014年2月8日 「海洋地域へ移動した人々——島で暮らす工夫の数々」総研大公開講演会『人類 地球を うごく』ゆうぼうと（東京）

・広報・社会連携活動

2013年7月27日 「歴史のなかの羽根——オセアニア」『鳥の羽 いろとりどり』企画展『アマゾンの生き物文化』関連トークイベント、国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2014年1月10日～1月20日—カンボジア（インド・太平洋先史学会において研究大会参加および共同研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（2人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

総合研究大学院大学学融合推進センター戦略的研究プロジェクト「現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究」（代表者：斉藤成也）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本人類学会評議員、日本オセアニア学会会長、日本学術会議連携会員、*Journal of Island and Coastal Archaeology* (Routledge) 編集委員、*Journal of Pacific Archaeology* (New Zealand Archaeological Association) 編集委員

小長谷有紀 [こながや ゆき] ————— 教授

1957年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第1研究部助手（1987）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009-2011）【学位】文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】人文学【所属学会】日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

小長谷有紀

2005 『世界の食文化③ モンゴル』東京：社団法人農山漁村文化協会。

[編著]

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』京都：昭和堂。

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀——社会主義をきたた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。

【受賞歴】

2013 紫綬褒章

2013 教育に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009 大同生命地域研究奨励賞

2007 モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

1993 第29回翻訳出版文化賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

モンゴルにおける社会主義的近代化

・研究の目的、内容

これまで、「モンゴルにとって20世紀とはなんであったか？」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化とはなんであったか？」という問いへと問題を鋭角に転換して、各個研究ではモンゴルおよび中国内モンゴル自治区についての事例研究を目的とする。社会主義的近代化を体現した当事者たちによるナラティブ（語り）を収集し、それらを多声的に構成して近代化という時空間に関するモノグラフ（民族誌的歴史）を描くことによって、正統な歴史記述とは異なるテキストをナラティブから構成する。

・成果

モンゴルについては、ハラホリンで実施した農業および宗教に関連するインタビューを、モンゴル語に加えて、日本語と英語の翻訳をつけ、3か国語版として、国立民族学博物館調査報告（SER）を刊行した。さらに、すでに刊行したもののうち、現役の政治家たちについて、モンゴル語から英語に翻訳して、SERとして刊行する準備をした。また、2012年2月に本館で実施した、鉱業開発に関するシンポジウムの際に来日した関係者からのインタビューについては、モンゴル語と英語で作成し、上述の現役政治家の口述資料に加えた。内モンゴル自治区については、プリアートの移動について焦点をあてて、外国人客員教員のサランゲレル氏と共同でインタビューを実施し、モンゴル語と日本語で作成し、SERとして刊行する準備をした。

◎出版物による業績

[共編著]

小長谷有紀・永花編

2013 『伪満时期蒙古族文学研究』呼和浩特：内蒙古人民出版社。

小長谷有紀・斯琴編

2013 『モンゴル口頭伝承の一資料——モンゴル国ホブド県トルグードのノースタイ氏の語り』（国立民族学博物館調査報告 114）大阪：国立民族学博物館。

小長谷有紀・J. ルハグワテムチグ・Ma. ロッサビ・Mo. ロッサビ編

2013 『モンゴルにおける20世紀（3）』（国立民族学博物館調査報告115）大阪：国立民族学博物館。

Lkhagvasuren, I. and Y. Konagaya (eds.)

2014 *Oirat People: Cultural Uniformity and Diversification* (Senri Ethnological Studies 86) Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

小長谷有紀

2013 「農業開発と環境保全」藤田 昇・加藤聡史・草野栄一・幸田良介編著『モンゴル——草原生態系ネットワークの崩壊と再生』（環境人間学と地域）pp. 393-414, 京都：京都大学学術出版会。

2013 「移行期モンゴルに首都近郊へ移住した遊牧民たち」『社会人類学年報』39：109-129。

2013 「解説 ハラホリンにおける社会主義的近代化」小長谷有紀・J. ルハグワテムチグ・Ma. ロッサビ・Mo. ロッサビ編『モンゴルにおける20世紀（3）』（国立民族学博物館調査報告115）pp. 5-15, 大阪：国立民族学博物館。

2013 「文化人類学の輝きをもとめて」『民博通信』143：2-7。

2014 「梅棹忠夫のモンゴル調査の記録と整理——フィールドノートからローマ字カードへ」ヨーゼフ・クライナー編『日本とはなにか——日本民族学の二〇世紀』pp. 271-288, 東京：東京堂出版。

2014 「ローマ字カード集の底本をつくる」『民博通信』144：26-27。

Konagaya, Y.

2013 The History of Agricultural Development in Mongolia: Srrking the Tradeoff between Development and Cinservation. In S. Sakai, R. Ishii and N. Yamamura (eds.) *Collapse and Restoration of Ecosystem Networks with Human Activity*, pp.74-78, Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.

Kodama, K. and Y. Konagaya

2014 Oirat Oral Histories of Natural and Social Changes in Ejene Banner, Inner Mongolia. In I. Lkhagvasuren, and Y. Konagaya (eds.) *Oirat People: Cultural Uniformity and Diversification* (Senri Ethnological Studies 86) pp. 259-275. Osaka: National Museum of Ethnology.

Ю. Коная, И. Лхагвасузн

2014 К вопросу о предметах материальной культуры. С. Чулуун (ред.) *Культурное наследие монголов: рукописные и архивные собрания Санкт-Петербурга и Улан-Батора*, pp.76-102, Санкт-Петербург:

Институт восточных рукописей РАН.

[書評]

小長谷有紀

- 2013 「野本寛一著『自然と共に生きる作法——水窪からの発信』『信濃毎日新聞』7月28日朝刊。
- 2013 「池内 紀著『消えた国——追われた人々』『信濃毎日新聞』8月4日朝刊。
- 2013 「田中克彦著『シベリアに独立を！』『信濃毎日新聞』8月18日朝刊。
- 2013 「菅 豊著『「新しい野の学問」の時代へ』『信濃毎日新聞』9月1日朝刊。
- 2013 「山口昌男著、今福龍太編『山口昌男コレクション』『信濃毎日新聞』9月22日朝刊。
- 2013 「碧野 圭著『書店ガール2——最強のふたり』『信濃毎日新聞』10月13日朝刊。
- 2014 「エドゥアルド・スエンソン著『江戸幕末滞在記』『信濃毎日新聞』1月5日朝刊。
- 2014 「木下直之著『戦争という見世物』『信濃毎日新聞』2月2日朝刊。

[その他]

小長谷有紀

- 2013 「世界のトリックスター大集合！バダルチン」『月刊みんぱく』37(4)：8。
- 2013 「歴史的転換点」『テレビの未来と可能性——関西からの発信』pp. 116-117, 大阪：大阪公立大学共同出版会。
- 2013 「みんぱくこぼれ話①『やっぱり』の不思議」『TOYRO BUSINESS』160：30。
- 2013 「旅立つ勝者——モンゴル遊牧民の現代的移動」印東道子編『人類の移動誌』pp. 122-127, 京都：臨川書店。
- 2013 追悼記事『「移動文化」尊さ説く』『毎日新聞』5月20日朝刊。
- 2013 「みんぱくこぼれ話② 褒められるまでの道」『TOYRO BUSINESS』161：30。
- 2013 「みんぱくこぼれ話③ 日本人が見あたらない！」『TOYRO BUSINESS』162：30。
- 2013 「みんぱく世界の旅 モンゴル① 家畜とともに生きる」『毎日小学生新聞』11月16日。
- 2013 「みんぱく世界の旅 モンゴル② 21世紀の大移動」『毎日小学生新聞』11月23日。
- 2013 「みんぱく世界の旅 モンゴル③ 鉱産開発の光と影」『毎日小学生新聞』11月30日。
- 2013 「みんぱく世界の旅 モンゴル④ モンゴルの子どもたち」『毎日小学生新聞』12月7日。
- 2013 「『明かりを灯す人』貧しくも美しい“鄙の品格”を感じました」中村千晶著『“ツウ”が語る映画この一本 2』pp.184-187, 東京：近代映画社。
- 2013 「『モンゴルの白いご馳走』のレシピは『こごね法』」記念冊子『石毛直道さんとわたし』出版をすすめる会編『石毛直道さんとわたし——石毛直道自選著作集出版記念』p.43, 東京：ドメス出版内 記念冊子『石毛直道さんとわたし』出版をすすめる会。
- 2014 「モンゴル競馬の醍醐味」『月刊みんぱく』38(1)：6-7。
- 2014 「みんぱくこぼれ話④ 梅棹忠夫の調査ルートをたどる」『TOYRO BUSINESS』163：30。
- 2014 「情報災害」ヘザース・ワンソン、ライアン・セイヤー、高橋五月、内藤大輔編『星が降るとき三。——後の世界に生きる』pp.131-132, Nampa, Canada: New Pacific Press。

Konagaya, Y.

- 2014 INFORMATION DISASTER. In D. Naito, R. Sayre, H. Swanson and S. Takahashi (eds.) *To See Once More the Stars, Living in a Post-Fukushima World*. pp.133-134, Nampa, Canada: New Pacific Press.

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[短編]

小長谷有紀監修

- 2013 『トゥバの人々 トゥバ共和国編』日本語, 20分。
- 2013 『トゥバの人々 中国編』日本語, 29分。
- 2013 『トゥバの人々 モンゴル編』日本語, 28分。
- 2013 『トゥバの人々 ロシア 中国 モンゴル』日本語, 30分。
- 2014 『Тувинцы из Тувинской республики』ロシア語, 20分。
- 2014 『图瓦人 图瓦共和国』中国語, 20分。
- 2014 『Тувачууд. Бүгд Найрамдах Тува Улс』モンゴル語, 20分。

- 2014 『Тувинцы из Китайской Народной Республики』 ロシア語, 29分。
- 2014 『图瓦人 中国篇』 中国語, 29分。
- 2014 『Тувачууд, БНХАУ』 モンゴル語, 29分。
- 2014 『Тувинцы, проживающие на территории Монголии』 ロシア語, 28分。
- 2014 『图瓦人 蒙古篇』 中国語, 28分。
- 2014 『Тувачууд, Монгол улс』 モンゴル語, 28分。
- 2014 『Тувинцы в РФ, КНР, Монголии』 ロシア語, 30分。
- 2014 『图瓦人 俄罗斯、中国、蒙古国』 中国語, 30分。
- 2014 『ОХУ, БНХАУ, Монгол улсад амьдарч буй тувачууд』 モンゴル語, 30分。
- 2014 『Tuvan People in Russia, China, and Mongolia』 英語, 30分。

[マルチメディア]

小長谷有紀監修

- 2014 『のど歌のふるさと』 日本語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2013年1月8日 ‘The Origins and Evolution of “Strategic Partnerships” in Indigenous Societies: Strategy in the Past and Tactics in the Present.’ International Conference “The Russian-Chinese Border: a ‘Strategic Partnership’ in a Mosaic of Indigenous Societies,” National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年4月20日 ‘Survey on Mongolian Heritage Overseas supported by Japan Foundation in 2000-2002,’ The International Conference “Cultural Heritage of the Mongols: Manuscript and Archival Collections in St. Petersburg and Ulaanbaatar,” The Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Science, St. Petersburg
- 2013年6月1日 ‘Mongolian Women’s Life Trajectories influenced by Perestroika’ (with Maqsooda Shiotani), International Conference “The History of Perestroika in Central Asia,” Park Hotel Conference Hall, Bishkek
- 2013年6月7日 ‘Legal Codification of Ethics in Mongolia,’ IASC (The International Association for Study of the Commons) the 14th Annual Meeting, Fuji-yoshida, Japan
- 2013年8月5日 ‘Daily Herding and Seasonal Migration in the Mongolian Nomadic Pastoral Livestock’ (with Nachin), “The Emerging World of Pastoralists and Nomads (IUAES Commission on Nomadic Peoples),” IUAES the 17th world conference, Manchester, UK.
- 2013年10月16日 「梅棹アーカイブズの利用とリモートセンシングに基づくモンゴル高原における土地利用変遷」(エリデニ氏と共著) モンゴル学会秋季大会、大阪国際大学
- 2013年10月19日 「梅棹忠夫のフィールド・ワーク——ノートからカードへの整理に焦点をあてて」『日本とはなにか 日本民族学の20世紀——鳥居・澁澤・梅棹・佐々木』法政大学

・共同研究会での報告

- 2013年11月17日 「2013年夏および秋の現地調査報告」『梅棹忠夫のモンゴル研究資料の学術的利用』

・民博研究懇談会

- 2013年12月11日 「研究の展開マネジメント——小長谷有紀の場合」第253回民博研究懇談会

・研究講演

- 2013年6月30日 「トゥバ人たちの住むところ——21世紀の『探検』談」第106回国立民族学博物館友の会東京講演会、モンベル渋谷店
- 2013年7月10日 「モンゴル草原における遊牧生活の変容——軍事産業から平和産業へ」環日本海研究所、新潟
- 2013年9月3日 「モンゴル草原における自然——人と家畜の共生関係」NPO 法人大阪府高齢者大学、国立民族学博物館
- 2013年11月14日 「モンゴル草原の暮らしとその変化」清泉女子大学、東京
- 2013年12月6日 「モンゴル遊牧民の暮らし」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- 2014年1月23日 「モンゴル草原の持続性」ゾエティスジャパン、東京

- 2014年1月24日 「変わりゆくモンゴル草原の暮らし」 園田学園女子大学総合生涯学習センター
- 2014年2月8日 「遊牧民の移動精神——モンゴルの場合」 総合研究大学院大学、五反田ゆうほうと
- 2014年3月1日 「梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる」 第429回国立民族学博物館友の会講演会
- 2014年3月29日 「梅棹忠夫資料とモンゴル研究」 芦屋市民講座、芦屋市立公民館

- ・研究公演

- 2013年9月8日 『のど歌のふるさと』 国立民族学博物館主催、国立民族学博物館講堂
- 2013年10月26日 『モンゴル秋祭』 在大阪モンゴル総領事館主催、国立民族学博物館講堂

- ・展示

- 2014年3月完成 「中国展示の新構築」 民族楽器コーナー担当（協力：伊藤 悟）

- ・広報・社会連携活動

- 2013年5月12日 みんなくワールドシネマ『私の中のあなた』 企画
- 2013年7月13日 みんなくワールドシネマ『さあ、ペダルをこいで』 企画
- 2013年9月15日 みんなくワールドシネマ『再会の食卓』 企画・司会
- 2013年11月10日 みんなくワールドシネマ『人生ブラボー』 企画・司会
- 2014年1月25日 みんなくワールドシネマ『ラビットホール』 企画
- 2014年3月15日 みんなくワールドシネマ『人生はビギナーズ』 企画

- ◎調査活動

- ・海外調査

- 2013年4月18日～4月23日—ロシア（国際会議「モンゴルの文化遺産——サンクトペテルブルグおよびウランバートルにおける史料とアーカイブズ・コレクション」参加）
- 2013年5月29日～6月5日—キルギス共和国（学会「中央アジアにおけるバレストロイカの歴史」参加およびイシククル湖において現地調査）
- 2013年6月17日～6月24日—ロシア（日本関連の在外資料調査）
- 2013年7月14日～7月28日—中華人民共和国（中国東部乾燥地域における水環境に関する現地調査）
- 2013年8月4日～8月8日—イギリス（第17回国際人類学民族学連合大会参加および調査研究）
- 2013年9月21日～9月29日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）
- 2013年10月3日～10月10日—中華人民共和国（梅棹忠夫の内モンゴル調査に関する研究）
- 2013年11月24日～12月5日—デンマーク（日本関連在外資料の調査）

- ◎大学院教育

- ・指導教員

- 主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

- ・大学院ゼミでの活動

- 1年生ほか対象とする「研究運営について基礎編」を講義

- ・論文審査

- 博士論文予備審査委員（1件）

- ◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

総合地球環境学研究所「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」研究分担者

- ◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

環境省中央環境審議会 自然環境部会委員、環境省委託事業「乾燥地における住民参加による持続可能な牧草地利用等」検討委員、環境省環境研究総合推進費「北東アジアの乾燥地生態系における生物多様性と遊牧の持続性についての研究」アドバイザーボード、奈良女子大学博士論文審査委員、立命館大学博士論文審査委員、総合地球環境学研究所運営員ならびに外部評価委員、東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター運営委員、大同生命地域研究賞選考委員

【学歴】 ヘルシンキ大学人文学部卒（1977）、関西外国語大学大学院外国語研究科修士課程修了（1980）【職歴】 国立民族学博物館第3研究部助手（1980）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1990）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部部长（2000-2002）、総合研究大学院大学文化科学科比較文化専攻長（2003-2004）【学位】 文学修士（関西外国語大学 1980）【専攻・専門】 言語学、ウラル語学、言語政策論【所属学会】 日本ウラル学会、日本言語学会、日本社会言語科学会、日本移民学会、多言語化現象研究会、International Sociological Association

【主要業績】

[編著]

庄司博史編

1999 『ことばの二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容6）東京：ドメス出版。

[共編]

庄司博史・P. バックハウス・F. クルマス編

2009 『日本の言語景観』東京：三元社。

真田信治・庄司博史編

2005 『事典——日本の多言語社会』東京：岩波書店。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の多民族化・多言語化の実態についての研究

・研究の目的、内容

本研究では近年の外国人増加にともなう地域の多民族化の実態をふまえ、多民族化がいかに社会の多言語化に影響するか、また多言語化はいかに日本社会の言語間の関係、日本人の言語意識にかかわるかに焦点をあて研究を進めてきた。今年度は、特に多言語化の実態を移民言語政策、移民母語教育とのかかわりに注目しつつ調査研究をすすめる。また非識字者の社会参加に関する研究も国際比較の観点から進める予定である。本研究は、共同研究「日本の移民コミュニティと移民言語」（代表者：庄司博史）との連携のもとすすめている。

・成果

今年度は、以下の出版、および学会での口頭による発表、講演をおこなった。

◎出版物による業績

[編著書]

多言語化現象研究会（庄司ほか）編

2013 『多言語社会日本——その現状と課題』東京：三元社。

[論文]

庄司博史

2013 「多言語社会のとらえかた——いくつかの視点」多言語化現象研究会編（庄司ほか）『多言語社会日本——その現状と課題』pp. 11-28, 東京：三元社。

2013 「多言語政策——複数言語の共存は可能か」多言語化現象研究会編（庄司ほか）『多言語社会日本——その現状と課題』pp. 58-71, 東京：三元社。

[その他]

庄司博史

2013 「展示場の食べもの」『月刊みんぱく』37(6)：10-11。

2013 「移民言語の生かし方——移民コミュニティにとって」（日本移民学会第23回ラウンドテーブル要旨）『移民学会 Newsletter』64：12-13。

2013 「移民のミックス文化——インスタントラーメン」『月刊みんぱく』37(8)：21。

2013 「多言語景観」多言語化現象研究会編『多言語社会日本——その現状と課題』pp. 285-288, 東京：三元社。

- 2013 「移民による多言語化のゆくえ」吉原和男他編『人の移動事典』pp. 322-323, 東京：丸善出版。
- 2013 「旅いろいろ地球人 冬を楽しむ① 究極の入浴法」『毎日新聞』12月12日夕刊。
- ◎映像音響メディアによる業績
- ・DVD・CDなどの制作・監修
[みんなく映像民族誌]
庄司博史監修
2014 みんなく映像民族誌第13集『中国青海省のトゥー(土)族』日本語, 88分。
- ◎口頭発表・展示・その他の業績
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
2013年6月30日 (ラウンドテーブル企画責任者)「移民言語の生かし方——移民コミュニティにとって」(発表者：拝野寿美子・高畑 幸・窪田 暁) 第23回日本移民学会、武蔵大学
 - ・研究講演
2014年3月20日 「『勤勉は身を助く』——フィンランド的処世術からの検証」みんなく公開講演会『働き者と、ナマケモノ!?——「はたらきかた」文化論』国立民族学博物館・毎日新聞社主催、オーバルホール
 - ・展示
本館展示新構築(日本文化展示「多みんぞくニホン」コーナー展示企画実行委員)
- ◎大学院教育
- ・指導教員
主任指導教員(1人)
- ◎社会活動・館外活動
- ・他の機関から委嘱された委員など
NPO法人多言語センターFacil 理事、貝塚市人権擁護審議会委員・副委員長
 - ・非常勤講師
関西外国語大学「フィンランド語」、京都外国語大学「言語と文化」

田村克己 [たむら かつみ] ————— 教授

1949年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒業(1972)、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了(1975)【職歴】鹿児島大学教養部助手(歴史学科)(1975)、鹿児島大学教養部講師(文化人類学科)(1976)、鹿児島大学教養部助教授(文化人類学科)(1980)、金沢大学文学部助教授(行動科学科文化人類学講座)(1982)、国立民族学博物館研究部助教授(1989)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1989)、国立民族学博物館研究部教授(1999)、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長(2000)、総合研究大学院大学文化科学研究科長(2001)、国立民族学博物館民族社会研究部長(2003)、国立民族学博物館副館長(2005)、国立民族学博物館情報管理施設長(2005、2010)【学位】社会学修士(東京大学 1975)【専攻・専門】東南アジア文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会

【主要業績】

[編著]

田村克己編

1999 『文化の生産』(二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容4) 東京：ドメス出版。

[共編]

田村克己・根本 敬編

1997 『暮らしがわかるアジア読本 ビルマ』東京：河出書房新社。

[論文]

田村克己

1996 「ビルマの建国神話について」『国立民族学博物館研究報告』20(4): 607-645。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジアにおける国家と文化に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

東南アジアは今、大きな転換点にある。ここ十数年の経済のグローバル化、周辺の新興国の経済成長にともなう域内の経済発展により、この地域内外の関係は一層緊密化し、このことは文化の面においても現れている。ミャンマーを中心として、国家と文化の関わり方の動態を改めて調査・研究し、比較・分析することによって、この課題について新たな学問的展開を図りたい。2011年度から始まったアジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCT）のミャンマーを対象とする調査プロジェクトを引き続き行うとともに、本年度からの日本学術振興会研究拠点形成事業「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」（代表：園田直子）において、ミャンマーでのセミナーを実施し、研究課題について、博物館を通しての研究も進める。さらに、現在の変動するミャンマーを対象とする科研費の申請も準備している。

・成果

日本学術振興会研究拠点形成事業「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」（代表：園田直子）において、ミャンマーにおいて、現地および日本・タイ・モンゴルの博物館関係者による国際共同研究並びに公開フォーラムを中心になって開催した。その結果は、現在、英文報告書として準備中である。また、本館共同研究『『統制』と公共性の人類学——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ』（代表：土佐桂子・東京外国語大学）においては、研究会の運営に当たるとともに、問題の議論を深め、同研究会のメンバーによって、10月に東京でみんぱく公開講演会『ミャンマー——刻んだ歴史未来へのまなざし』を企画、実施した。さらに、70名近くのミャンマー研究者や実務家などを結集して、変動するミャンマーを多面的に分析し描く概説書『ミャンマーを知るための60章』（明石書店）を編集し刊行した。そして、40年近くに及ぶこれまでの研究の1つのまとめとして、現代におけるミャンマーの政治と伝統王権について論じた著書『レッスンなきシナリオ——ビルマの王権、ミャンマーの政治』を上梓した。

◎出版物による業績

[単著]

田村克己

2014 『レッスンなきシナリオ——ビルマの王権、ミャンマーの政治』東京：風響社。

[共編著]

田村克己・松田正彦編

2013 『ミャンマーを知るための60章（エリア・スタディーズ125）』東京：明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2013年10月25日 「社会の底流から民主化を考える」みんぱく公開講演会『ミャンマー 刻んだ歴史 未来へのまなざし』日経ホール（東京）

2014年3月23日 「民博25年、ミャンマー35年、そして、タイガース55年」第337回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2013年9月21日～9月29日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）

◎大学院教育

・論文審査

論文審査委員（2件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化機構連携研究「『人間文化研究資源』の総合的研究」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

京都大学東南アジア研究センター研究協力者、豊中市情報収集専門家会議専門委員

西尾哲夫 [にしお てつお] 教授

1958年生。【学歴】大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了（1984）、京都大学大学院文学研究科博士後期課程言語学専攻満期退学（1987）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2011）、国立民族学博物館副館長（2012）【学位】文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）【専攻・専門】言語学・アラブ研究 1）アラブ遊牧民の言語人類学的研究、2）アラビアン・ナイトをめぐる比較文明的的研究【所属学会】日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

【主要業績】

[単著]

西尾哲夫

- 2013 『ヴェニス商人の異人論——人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。
- 2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHKブックス）東京：NHK出版。
- 2007 『アラビアンナイト——文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

【受賞歴】

- 2011 第28回田邊尚雄賞（東洋音楽学会）
- 1992 オリエント学会奨励賞
- 1992 新村出記念財団研究助成賞
- 1992 流沙海西奨学会賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アラブ世界の言語社会的位相と文学伝統の変容

・研究の目的、内容

2010年、エジプト検察当局は、イスラーム系弁護士団体による「アラビアンナイト発禁処分申し立て」を「古くから読まれており芸術家にも影響を与えてきた」という理由で却下した。近世エジプトでは、都市部中流層の台頭などによる中間アラビア語の誕生にともない、中世シリアの伝承物語集に民間説話が付加されて現在のアラビアンナイトが成立した。この過程ではキリスト教徒も関与しており、挿絵入りエジプト系写本が新たに発見された。近世エジプト系写本の物語および言語分析を通し、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また、中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられるアラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

・成果

- 1) 単行本として、『100分de名著 アラビアンナイト』（NHK出版）ならびに『ヴェニス商人の異人論』（みすず書房）を刊行した。論文として、The Takarazuka Revue and the Fantasy of “Arabia” in Japan. In Marina Warner and Philip F. Kennedy (eds.) *Scheherazade’s Children: Global Encounters with the Arabian Nights*, pp. 347-361, New York University Press. が刊行された。
- 2) 研究発表として、「イスラームの世界観——アラビアンナイトから考える」公開シンポジウム『片倉もところ先生をフィールドワークする』（国立民族学博物館・国際日本文化研究センター・比較文明学会関西支部主催、於・国立民族学博物館、2014年3月29日）をおこなった。
- 3) 一般向けの研究広報として、NHK Eテレ「100分de名著 アラビアンナイト」に出演して講義した。また「砂漠の暮らし——シナイ半島とアラビア半島とアラブ遊牧民（ベドウィン）」（大阪府高齢者大学校、於・大阪市教育会館、2013年9月20日）ならびに「アラブとイスラーム——日本から中東をとらえる視点」（宝塚国際理解ゼミナール、於・宝塚南口会館、2014年3月20日）の講演をおこなった。
- 4) 科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝

承形成の謎を解く」(代表：西尾哲夫)による国内調査ならびに文献調査をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

西尾哲夫

2013 『ヴェニスの商人の異人論——人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。

2013 『100分 de 名著 アラビアンナイト』(NHK テレビテキスト) 東京：NHK 出版。

[エッセイ・その他]

西尾哲夫

2013 「解説文」『バートン版アラビアンナイト——千夜一夜物語拾遺』(大場正史訳・角川ソフィア文庫) pp. 357-363, 東京：角川学芸出版。

Nishio, T.

2013 The Takarazuka Revue and the Fantasy of “Arabia” in Japan. In M. Warner and P. F. Kennedy (eds.) *Scheherazade’s Children: Global Encounters with the Arabian Nights*, pp. 347-361. New York: New York University Press.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年3月29日 「イスラームの世界観——アラビアンナイトから考える」公開シンポジウム『片倉もとこ先生をフィールドワークする』国立民族学博物館・国際日本文化研究センター・比較文明学会関西支部主催、国立民族学博物館

・研究講演

2013年9月20日 「砂漠の暮らし——シナイ半島とアラビア半島のアラブ遊牧民(ベドウィン)」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年3月20日 「アラブとイスラーム——日本から中東をとらえる視点」宝塚国際理解ゼミナール、宝塚南口会館

・広報・社会連携活動

[出演・講義]

NHK Eテレ「100分 de 名著 アラビアンナイト」(2013年11月毎週水曜日午後11:00~11:25、再放送：翌週水曜日午前05:30~05:55、午後00:25~00:50)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館)センター員、科学研究費補助金(基盤研究(A))「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く」研究代表者、科学研究費補助金(基盤研究(B))「中東・北アフリカ地域における音文化の越境と変容に関する民族音楽学的研究」(研究代表者：水野信男)研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本オリエント学会編集委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員

・非常勤講師

京都大学文学部「アラブ語」

宇田川妙子 [うだがわ たえこ] ————— 准教授

1960年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒(1982)、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了(1984)、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退(1990)【職歴】東京大学教養学部助手(1990)、中部大学国際関係学部講師(1992)、中部大学国際関係学部助教授(1995)、国立民族学博物館第3研究部併任助教(1997)、金沢大学文学部助教授(1998)、国立民族学博物館先端民族学研究部併任助教(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(2002)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2002)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授(2004)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授(2010)【学位】社会学修士(東京大学大学院社会学研究科1984)【専攻・専門】文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究・ジェンダーとセクシャリティ研

究・ヨーロッパ近代をめぐる問題群【所属学会】日本文化人類学会、日本女性学会

【主要業績】

[共編]

宇田川妙子・中谷文美編

2007 『ジェンダー人類学を読む——地域別・テーマ別基本文献レビュー』京都：世界思想社。

[論文]

宇田川妙子

2004 「広場は政治に代われるか——イタリアの戸外生活再考」『国立民族学博物館研究報告』28(3)：329-375。

1999 「イタリアの家族論と家族概念」『日伊文化研究』37：11-22。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性（私性）という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。

・成果

本年度は主に親密性と公共性が交わる社会空間に着目して、以下の論文という形で成果を公表した。

◎出版物による業績

[論文]

宇田川妙子

2014 「ひとりから見るイタリアの町——町への帰属意識の再考に向けて」椎野若菜編『境界を生きるシングルたち——シングルの人類学1』pp. 23-44, 京都：人文書院。

[その他]

宇田川妙子

2013 「旅・いろいろ地球人 緑薫る⑧ 美し国の神髓」『毎日新聞』6月20日夕刊。

2014 「信じてはいないけど……——身近なお守りたち」『月刊みんぱく』38(1)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年3月2日 イタリア近現代史研究会2013年度全国大会「70年代改革」シンポジウム・コメンテーター、京都産業大学

・広報・社会連携活動

2014年3月1日 園田・みんぱく講座「イタリアのもう一つの顔——家族と地域社会」園田学園女子大学

2014年3月16日 みんぱく映画会『人生はビギナーズ』司会

◎調査活動

・海外調査

2013年9月23日～10月13日—イタリア（イタリアのローカル・コミュニティの現状と変容に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究「画中画の世界」代表

1975年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士後期課程修了（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、アメリカ自然史博物館上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2013）【学位】博士（人間科学）（大阪大学 2007）、修士（人間科学）（大阪大学 2000）【専攻・専門】社会文化人類学、北東アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、朝鮮学会、韓国・朝鮮文化研究会

【主要業績】

[論文]

太田心平

2012 「国家と民族に背いて——アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学——21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp. 304-336, 京都：昭和堂。

2008 「センセーションリズムへの冷笑——移行の言説としての韓国『民主化』と元労働運動家たちの懐古」石塚道子・田沼幸子・富山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』pp. 161-186, 京都：人文書院。

Ota, S.

2006 Ryohan: Anthropology of Knowledge and the Japanese Representation of Korean Yangban under Colonialization. *Korean Cultural Anthropology* 39(2): 85-128 (韓国語)。

【2013年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

韓国・朝鮮における文化の統合性と多様性

・研究の目的、内容

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

・成果

2013年度には、この研究に3つの柱を立て、それらを中心として研究を推進した。

第1の柱は、近代から現代にいたる時代を対象としたもので、韓国・朝鮮の社会文化が、諸外国の視線との関係において、どのような「ゆらぎ」を経てきたかを明らかにするものである。物質文化の側面においては、伝統民芸の海外流出、精神文化の側面においては、それらと関わりあう在外コリアンの自己表象が研究対象となった。

第2の柱は、1980年代以降という時代を対象としたもので、韓国・朝鮮の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ-ミクロ双対性をもっていたのかを明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとした。援用したのは、イデオロギーへの着目の反面で軽視されてきたユートピアという概念であり、対象化したのは、民衆に寄り添うあまり蔑ろにされてきた知識人社会である。研究者はアメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業しているが、この兼業の研究課題はこの分野とした。

第3の柱は、現在進行形の事象を研究対象とするものであり、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。日米韓の3か国においてフィールドワークをはじめ、並行して文献研究を進めて、欧州諸国における比較調査にも着手することで、研究の効率化をはかった。

第1の柱、韓国・朝鮮の社会文化の近現代の「ゆらぎ」に関する研究では、これまでの研究成果をとりまとめ、中間発表を国際的におこなっていくことで、最終成果を準備した。まず、米国と韓国で意見交換会をおこ

なうことにより、これまで研究者が構築してきた知見のピア・レビューおよび研究成果の現地還元の一部とした。それらの結果をふまえて、英文で公刊するため学術論文を準備中である。この分野を遂行するため、科学研究費補助金（若手研究（B））（課題番号：22720337、2010～2013年度）を研究代表者として受諾した。

第2の柱、韓国・朝鮮の社会文化の「民主化」前後のマクロミクロ双対性の研究においては、本館でおこなわれた国際シンポジウム「Social Movements and the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia」で学術発表した。また、来年度に米国で開かれる研究会の学術発表公募に応募し、採択された。これらをふまえ、来年度に英文論文を作成、寄稿し、研究成果を公刊するための準備をした。

第3の柱、韓国・朝鮮の社会文化の現在進行形の編成メカニズムに関しては、日本と米国での現地調査を開始した。ロシアでも、補助的な調査に着手した。また、本館の館長リーダーシップ経費を受けて、国際ワークショップ「Possibility of New Asian Exhibitions as a Practice of Inter-disciplinary Liberal Arts」を企画運営した。これらによる調査研究の第一次報告は、ロシア民族学博物館でおこなわれた国際シンポジウム「Documentation and Recording of the Ethnographical Objects in the Museums」において発表した。この内容は、近年中にロシア語で公刊される予定である。また、追って第二次調査研究報告を『民博通信』誌にて公刊した。この分野を遂行するため、科学研究費補助金（若手研究（B））（課題番号：25871066、2013～2016年度）を研究代表者として受諾している。さらに、本館の機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」からも、ロシアでの発表のさいに旅費の補助を受けた。

◎出版物による業績

[論文]

太田心平

2014 「民博の舞台裏で——展示にまつわる人びととその業務上の裁量」『民博通信』144：2-7。

[その他]

太田心平

2013 「『人種のるつぼ』ふたたび」『月刊みんぱく』37(5)：21。

2013 「朝鮮半島」国立民族学博物館編『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館——ATTIC MUSEUM』p. 170, 大阪：国立民族学博物館。

2013 「死者を弔うかたち」『月刊みんぱく』37(9)：10-11。

2013 「みんぱくのオタカラ 頭上運搬用輪」『みんぱく e-news』148 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/148otakara>)。

2013 「渋沢敬三④——韓国の暮らしを調べた学生たち」『毎日小学生新聞』2013年11月9日。

2013 「World Watching from New York ラーメン・ブームの舞台裏」『みんぱく e-news』149 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/149>)。

2014 「旅・いろいろ地球人 悪人、悪玉②平和な『反抗』」『毎日新聞』2月20日夕刊。

2014 「一九八二——民主化にゆれた韓国の学生服」『月刊みんぱく』38(3)：22-23。

◎映像音響メディアによる業績

[解説映像]

太田心平

2014 常設展示「朝鮮半島の文化」解説映像（日本語7本、計12分）（韓国語7本、計12分）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年2月22日 ‘Sweet Memories: Counter Narratives of South Korea’s Democracy Movement’ International Symposium “Social Movements and the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia,” National Museum of Ethnology

・共同研究会

2013年7月6日 「韓国における一般教養科目『日本文化論』とその動向」『海外における人類学的日本研究の総合的分析』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年9月25日 ‘Identities and Regulation in Museum Backyards.’ International Workshop “Documentation and Recording of the Ethnographical Objects in the Museums,” Russian Museum of Ethnography, St. Petersburg

2013年11月23日 「消費されるガラス乾板写真——植民地朝鮮と現代韓国の一関係性」神奈川大学国際常民文化

研究機構第4回公開発表会『人・モノ・情報の交換におけるダイナミズム——東アジアの物質文化からみた普遍性と独自性』神奈川大学

・展示

常設展示「朝鮮半島の文化」

・広報・社会連携活動

2013年12月22日 「急増する生涯独身者、そこから読み解く韓国現代事情」第325回 みんなくウィークエンド・サロン

2014年2月7日 「似て非なる国、韓国の人びとの歩みといま」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年3月20日 「急増する生涯独身者、そこから読み解く現代韓国事情」国立民族学博物館プレス懇談会

◎調査活動

・海外調査

2013年6月9日～6月14日一大韓民国（植民地期朝鮮における日本人知識人の活動に関する調査）

2013年7月22日～9月30日一アメリカ合衆国、ロシア（植民地期朝鮮の日本人知識人に関する資料調査、博物館の組織行動に関する現地調査、国際ワークショップ「民族学資料の記録化、情報化の諸問題」参加）

2013年10月3日～2013年11月12日一アメリカ合衆国（標本管理者のエージェンシーに関する調査研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（B））「博物館展示の再編過程の国際比較による『真正な文化』の生成メカニズムの解明」研究代表者、機関研究「ケアと育みの人類学」（研究代表者：鈴木七美）研究分担者、機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（研究代表者：飯田 卓）研究分担者、機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」（研究代表者：佐々木史郎）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

宮崎公立大学「韓国文化論」（集中講義）

・他機関から委嘱された委員など

アメリカ自然史博物館人類学部門（アメリカ合衆国）上級研究員、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究者

佐藤浩司 [さとう こうじ]————— 准教授

【学歴】 東京大学工学部卒（1977）、東京大学大学院修士課程修了（1983）、東京大学大学院博士課程単位取得（1989）

【職歴】 国立民族学博物館助手（1989）、国立民族学博物館助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）

【学位】 工学修士（東京大学工学部 1989）【専攻・専門】 建築史学、民族建築学【所属学会】 建築史学会、民俗建築学会、家具道具室内史学会

【主要業績】

[編著]

佐藤浩司編

1998～1999 『シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》1～4』京都：学芸出版社。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジア木造建築史の再構築

・研究の目的、内容

東南アジアの木造建築史を概観するための資料の作成、東南アジア史の再構築。

・成果

東南アジアの木造建築を読み解くための資料を作成中。ホームページにて逐次公開している。http://www.sumai.org

◎調査活動

・海外調査

2013年6月29日～8月26日—インドネシア（インドネシアの木造建造物保存に関する調査研究）

2013年10月27日～11月4日—インドネシア（「インドネシアの歴史的地区の地域復興のための拠点交流事業」における研修）

2014年3月4日～3月13日—インドネシア（ニアス島とその周辺地域の建築文化に関する調査研究）

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]——— 准教授

1959年生。【学歴】オークランド大学卒（1981）、オークランド大学大学院修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（1990）【職歴】科学技術庁特別研究員（農水省野菜茶業試験場）（1990）、日本学術振興会特別研究員（京都大学理学部）（1993）、国立民族学博物館第4研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）【学位】Ph.D.（オーストラリア国立大学 1990）、M.Sc.（オークランド大学 1984）【専攻・専門】先史学、民族植物学【所属学会】Society for Economic Botany、Indo-Pacific Prehistory Association、Society of Writers, Editors and Translators (SWET)

【主要業績】

[単著]

Matthews, P. J.

2012 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

[編著]

Spriggs, M., D. Addison and P. J. Matthews (eds.)

2012 *Irrigated Taro (Colocasia esculenta) in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives* (Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Matthews, P. J.

2010 An Introduction to The History of Taro as a Food. In V. R. Rao, P. J. Matthews, P. B. Eyzaguirre, and D. Huntetr (eds.) *The Global Diversity of Taro: Ethnobotany and Conservation*, pp. 6-29, Rome: Bioversity International.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究
- 2) 食用に適するサトイモ科植物の進化と生物系統地理
- 3) オセアニア・東南アジア・アフリカにおけるサトイモの起源と進化
- 4) 辺境少数民族地帯での植物利用および伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価

・研究の目的、内容

2011年度から継続中の研究プロジェクト（科学研究費補助金・基盤研究（B））（農学；資源保全）による研究を推進するために、2011年から2012年に日本・フィリピン・ベトナムで植物サンプルを収集し、アジア・太平洋地域の200種の野生種・栽培種のサトイモの全般的な調査の一環としてほとんどを分析した。共同研究者であり、博士課程学生（指導教官を務めている）である Ibrar Ahmed の博士論文（2013-2014に受理された）にそのデータが紹介された。

Ibrar Ahmed

2013 *Evolutionary Dynamics in Taro* (*Colocasia esculenta* L.) Unpublished Ph.D. thesis, Massey University, Palmerston North, New Zealand.

フィリピンの中部から南部にかけて収集した *Colocasia esculenta* (29サンプル) の葉緑体の5つの遺伝子座と *Alocasia macrorrhizos* (15サンプル) の葉緑体の3つの遺伝子座の配列に関する新しいデータを得ることができた。このデータの分析は進捗中である。

2013年度から開始した研究プロジェクト(科学研究費補助金(基盤研究(A))研究代表者:渡邊和男(筑波大学))の研究分担者として、2013年11月にインドのアッサムで、2014年2月にミャンマーで野外調査を行った。野外調査の報告書は現在執筆中である。現地では、それぞれ、ガウハチ大学(インド)のMedhi博士と、イェズイン農業大学(ミャンマー)学長のHtut博士とともに調査を行った。Medhi博士からアッサム、とりわけカルビ・アンロン(人々はそこでチベット・ビルマ語を話し、焼き畑農業をしている)での野外調査の継続の提案があった。

・成果

2013年度は分析を進めることと執筆、そして学会での発表に集中した。主要な成果として『第11回国際サトイモ科植物学会』を主催したことがあげられる。また、出版した *On the Trail of Taro* では、1982年から近年に至る32年間の研究を紹介することができた。国際サトイモ科植物学会(The International Aroid Society)では、理事に選出された。この学会はアメリカに拠点を置いているが構成する研究者は世界中から集まっている。

◎出版物による業績

[単著]

Matthews, P. J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History* (Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Matthews, P. J. and D. V. Nguyen

2014 Origins and Development of Taro. In C. Smith (ed.) *Encyclopedia of Global Archaeology* 9: 7237-7240.

Ahmed, I., P. J. Matthews, P. J. Biggs, M. Naeem, P. A. McLenachan, and P. J. Lockhart

2013 Identification of Chloroplast Genome Loci Suitable for High-resolution Phylogeographic Studies of *Colocasia esculenta* (L.) Schott (Araceae) and Closely Related Taxa. *Molecular Ecology Resources* 13(5): 929-937.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年3月20日~21日 'New Evidence for the Genetic and Geographical Origins of Cultivated taro, and Names for Wild and Cultivated Taro in Southeast Asia and Oceania.' Symposium "Dispersion of People, Crops, and Language." National Institute of the Humanities (NIHU), National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL), and Research Institute for Humanity and Nature (RIHN)

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年12月11日~13日 1) 共催・講演: 'Ethnobotany and Natural History of Wild Taro: *Colocasia esculenta* and *C. formosana*.' 2) 論文共著: J. Castillo, P. J. Matthews, and M. Medecilo, 'Ethnobotany of *Alocasia macrorrhizos* in the Philippines.' 3) ポスター発表・共著: Masuno, T., N. A. Luu Dam, V. D. Nguyen and P. J. Matthews, 'Use of Aroids as Fodder Plants in a Yao Community, Northern Vietnam.' All presented at the 11th International Aroid Conference, Hanoi (International Aroid Society in association with the Institute for Ecological and Biological Research, Hanoi)

2014年2月25日 'Recent Research on the Origins and Dispersal of Taro.' Yezin Agricultural University, Nay Pyi Taw City, Myanmar. Host: Dr. Tin Htut, Rector, Yezin Agricultural University

2014年3月27日 'Exploring the Genetic and Geographic Origins of Taro.' Presented at the Department of Agriculture, Kagoshima University, hosted by Dr. Riichiro Yoshida,

Laboratory of Horticultural Science, Faculty of Agriculture, Kagoshima University

・研究講演

- 2013年5月23日～25日 ‘Ethnobiology, Plant Trails, and the Human Niche.’ Presented at the symposium “Systematics in Ethnobiology: Partnership of Biology with Culture and Economy,” Saint Louis University, Baguio City (organised by the Association of Systematic Biologists of the Philippines in cooperation with the Departments of Biology of Saint Louis University, University of the Philippines Baguio, and Benguet State University)
- 2013年8月23日 ‘Ethnobiology, Systematics, and the Trail of Taro (Toran).’ Presented International Symposium for the 10th Anniversary of KoLRI, Seoul, Korea; jointly organized by Korean Lichen Research Institute (KoLRI, Sunchon National University) and Korean National Arboretum
- 2013年9月12日 ‘On the Trail of Taro: Recent Research on the Genetic and Geographical Origins of Cultivated taro, *Colocasia esculenta* (Araceae).’ Hosted by Dr. Jenn-Che Wang, Department of Life Science, Taiwan National Normal University, Taipei
- 2013年12月7日 ‘Kumara: A Revolutionary Crop.’ Presented at the 76th Meeting of the New Zealand Studies Society of Japan, Host: Dr. Yukino Bedford
- 2014年2月3日～4日 ‘Natural Habitats, Human Habitats, and the Spread of Edible Aroids.’ SOKENDAI International Symposium: “Modern Human Diversity on Genes and Culture—with special reference to Asia and Oceania.” The Graduate University for Advanced Studies (SOKENDAI)

◎調査活動

・海外調査

- 2013年5月19日～5月27日—フィリピン（フィリピン国立博物館、デラサル大学にて調査研究およびセントルイス大学にて2013年フィリピン生物分類学会年次科学学会参加）
- 2013年8月21日～8月25日—大韓民国（韓国地衣類研究所10周年シンポジウム参加）
- 2013年9月10日～9月14日—台湾（国立台湾師範大学にて研究セミナー参加およびサトイモの野外調査）
- 2013年11月9日～11月19日—インド（アッサム地方におけるサトイモ科植物に関する野外調査）
- 2013年12月9日～12月16日—ベトナム（「第11回国際サトイモ科植物学会」参加およびバビにおけるサトイモ科植物に関する野外調査）
- 2014年2月17日～2月27日—ミャンマー（ミャンマーにおけるサトイモ科植物に関する野外調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
科学研究費補助金（基盤研究（B））「南日本・東南アジアの野生サトイモの民族植物学的・遺伝子学的緊急研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「辺境少数民族地帯での植物利用および伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価」（研究代表者 渡邊和男）研究分担者
- ・他機関から委嘱された委員など
Ph. D. Supervision (Massey University, New Zealand)、Ph. D. Adviser (Oxford University, UK)
- ・非常勤講師
名古屋大学農学部「食文化論」（集中講義）
- ・ウェブサイトの維持管理
Project website for wild taro research: (<http://wildtaro.ning.com>). Analyses, and work on publications arising from the 2011–2013 project will continue in the coming year, in collaboration with counterparts in the New Zealand, Pakistan, Philippines, and Vietnam.
Conference website (<http://aroids.ning.com>), on behalf of the International Aroid Society, and participants in the 11th International Aroid Conference, Hanoi, Dec. 11–13, 2013.
The Research Cooperative (<http://researchcooperative.org>), an international NPO social network for researchers, editors, translators, illustrators, and publishers.

1963年生。【学歴】セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第2課程修了（1992）、パリ第5大学大学院社会科学研究科第3課程修了（1993）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）【学位】D. E. A. Sci. Soc（パリ第5大学大学院社会科学研究科 1993）、M. Soc.（パリ第5大学大学院社会科学研究科 1992）、国際関係学修士（津田塾大学大学院国際関係学研究科 1992）【専攻・専門】文化人類学（西アフリカ研究）【所属学会】アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[論文]

三島禎子

- 2011 「民族の離散と回帰——ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井 洋監修、小倉充夫・駒井 洋編著『叢書 グローバル・ディアスポラ 5 ブラックディアスポラ』pp. 105-130, 東京：明石書店。
- 2007 「ソニンケ商人の歴史——砂漠を越え海を渡る人びと」池谷和信・佐藤康也・武内進一編『アフリカ I』（朝倉世界地理講座11）pp. 286-300, 東京：朝倉書店。
- 2001 「セネガル・モーリタニア紛争をめぐる民族間関係」和田正平編著『現代アフリカの民族関係』pp. 68-91, 東京：明石書店。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アフリカ商業民の国際移動に関する人類学的考察——民族文化と経済システム

・研究の目的、内容

今日、人の国際移動はますます活発化している。地域間の経済格差はその大きな要因とみなされ、アフリカは移民を送出する貧しい地域として位置づけられている。本研究の目的、内容は、移動する人びとの主体性に注目することによって、アフリカと世界との関係性を再構築することにある。「主体性」と示す指標としてアフリカ商業民の経済活動をとりあげ、これまでほとんど解明されてこなかったその移動と経済の動態について、地球規模における広がりや歴史的な視点からとらえなおす。具体的には、西アフリカに故地をもつソニンケ民族を対象とし、アジアとアフリカ間貿易の展開についての詳細な調査から、その経済倫理を宗教と民族文化から理解し、従来の移民研究における方法論とアフリカの経済史についてあらたな分析軸の構築を目指す。

・成果

フランス国立パリ・デカルト大学との学術協定にもとづき、2014年3月1日～2日『個人・家族・国家のゆくえ——文化人類学と人口学からの学際的アプローチ』と題する国際シンポジウムを同大学人口開発研究所と共同で開催し、企画および報告をおこなった。成果発表はフランスでの商業出版を具体的に進めている。

◎出版物による業績

[その他]

三島禎子

2013 「旅・いろいろ地球人 よそ者？② カボチャナス外国人」『毎日新聞』10月24日夕刊。

2014 「旅・いろいろ地球人 冬を楽しむ⑥ 香をたきしめて」『毎日新聞』1月23日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年3月1日～3月2日 国際シンポジウム『個人・家族・国家のゆくえ——文化人類学と人類学からの学際的アプローチ』開催、国立民族学博物館

2014年3月1日 「財の形成と継承に関する文化人類学的考察へ向けて——ソニンケ民族の移動と経済活動から」国際シンポジウム『個人・家族・国家のゆくえ——文化人類学と人類学からの学際的アプローチ』国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

2013年7月19日 「アフリカの布からみる世界の経済」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、

大阪市教育会館

◎調査活動

・海外調査

2013年7月21日～7月27日—タイ（バンコクにおけるアフリカ系商人街調査）

2014年3月6日～3月20日—フランス、セネガル（中国からセネガルへの物流と商人のネットワークについての調査およびパリとダカールにおけるソニンケ商人の財の形成に関する調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究——近年の変遷に注目して」（研究代表者：栗田和明）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「在日・在沖アフリカ人の生活戦略と日中アフリカ関係の都市人類学的研究」（研究代表者：和崎春日）研究分担者

横山廣子 [よこやま ひろこ] ————— 准教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科文化人類学専攻卒（1977）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1981）

【職歴】 東京大学教養学部助手（1981）、東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師（1986）、東洋英和女学院大学人文学部社会科学科助教授（1989）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）【学位】 社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1981）【専攻・専門】 文化人類学 1）雲南省大理ペー族社会の研究、2）中国における国家とエスニシティに関する研究、3）中国西南部から東南アジア大陸部における民族集団の移動と包摂に関する研究【所属学会】 日本文化人類学会、東南アジア学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[編著]

横山廣子編

2004 『少数民族の文化と社会の動態——東アジアからの視点』（国立民族学博物館調査報告50）大阪：国立民族学博物館。

2001 『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告20）大阪：国立民族学博物館。

[共編]

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

2001 『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国雲南省とその隣接地域における文化・社会とアイデンティティ

・研究の目的、内容

政治や経済の情勢、あるいは人々をとりまく社会状況の変化とともに、地域の人々の生活や文化・社会がどのように変化し、それとともに自身やその属する集団、社会的カテゴリー、あるいは文化に対する人々の認識や意識がどのように変化するかを現地調査データならびに民族誌などの調査資料、地方志などの歴史的資料に基づいて実証的に明らかにする。

・成果

数年間にわたって検討を重ね、準備を進めてきた展示場のリニューアルの完成の年度にあたり（2013年3月20日リニューアル・オープン）、自身が担当する展示セクションに、各個研究の成果を十分に反映し、最新の動態まで含めて展示で伝えられるよう、変化を軸に、近年の現地調査のデータを整理し、分析をおこなった。

大理のペー族のたいまつ祭りに関して地方志の記述に基づいて歴史的に分析する研究を、新たに別の角度から地方志の記述に関する比較検討をすることで進展させ、その成果を2013年11月に本館の機関研究の一環として中国北京で行われたシンポジウムにて報告した。さらに大理における社会と文化の変化に関する研究成果として、民博ビデオテーク長編番組「雲南省大理ペー族自治州大理市周城村」(92分03秒)、「雲南省ペー族の楽士」(16分39秒)、「雲南省周城村の春節」(19分39秒)の3本の番組を編集し、完成させた。

◎出版物による業績

[論文]

横山廣子

2013 「従大理看湖南白族」大理白族自治州白族学会・張家界市白族学会・張家界市桑植県白族学会編『白族文化学術討論会論文集』pp.36-45, 中国雲南省昆明市:雲南民族出版社(中国語)。

[その他]

横山廣子

2013 「旅いろいろ地球人 冬を楽しむ② 蜂蜜売りが来るころ」『毎日新聞』12月19日夕刊。

2013 「みんなく世界の旅 中国③ 中国紙幣に『歴史』あり」『毎日小学生新聞』3月8日。

2013 「みんなく世界の旅 中国④ 出稼ぎで潤う回族の村」『毎日小学生新聞』3月15日。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[長編]

横山廣子監修

2014 「雲南省周城村の春節」(20分, 2012年撮影, 2014年制作)。

2014 「雲南省ペー族の楽士」(17分, 2007年, 2010年, 2012年撮影, 2014年制作)。

2014 「中国雲南省大理ペー族自治州大理市周城村」(92分, 2007年, 2010年, 2012年撮影, 2014年制作)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

2013年11月19日 「中国特色的人類学研究——利用歴史資料的雲南白族研究」国際シンポジウム「中日の人類学・民族学の理論的刷新とフィールド・ワークの展開」中国北京、中国社会科学院民族学・人類学研究所(中国語)

・みんなくゼミナール

2013年3月15日 「装いのセンスと伝承——中国のフィールドから」第430回みんなくゼミナール

・展示

中国地域の文化展示場(常設展示模様替え)担当セクション:装い、宗教と文字

◎調査活動

・海外調査

2013年11月17日～11月20日—中華人民共和国(機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」第2回国際シンポジウム参加)

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員(2人)

民族文化研究部

八杉佳穂 [やすぎ よしほ]——— 部長(併)教授

1950年生。【学歴】京都大学文学部卒(1975)【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手(1980)、国立民族学博物館第4研究部助教授(1990)、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任(1991)、国立民族学博物館第2研究部教授(1997)、国立民族学博物館民族文化研究部教授(1998)、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長(2001)【学位】文学博士(総合研究大学院大学1994)【専攻・専門】言語人類学、マヤ学【所属学会】日本言語学会、古代アメリカ学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[単著]

八杉佳穂

2004 『チョコレートの文化誌』京都：世界思想社。

2003 『マヤ文字を解く』東京：中央公論新社。

Yasugi, Y.

1995 *Native Middle American Languages: An Areal-Typological Perspective* (Senri Ethnological Studies 39). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カクチケル語の歴史的研究

・研究の目的、内容

古典カクチケル語の代表的文献である『カクチケル年代記』を主資料にして、これまで利用してきた辞書や文法書に加え、新しく入手した1555年のドミンゴ・デ・ピコの辞書、1604年頃のフランシスコ・デ・バレアの辞書を副次資料にして、カクチケル語の歴史の変遷を分析する。

カクチケル年代記の翻訳はすでに終了しているが、不明な点が多々残っている。それを初期の辞書やキチェ語の辞書、文法書を利用しながら、解明していく。

・成果

古典カクチケル語の理解に役立てるため、カクチケル語のバツンとパツイシアの方言を利用して、節の連結の5つ段階の違いについて記述した。その一部として Tasaku Tsunoda (ed.) *Five Levels in Clause Linkage* に “Five Levels in Kaqchikel” を発表した。

『カクチケル年代記』を分析し、逐語訳をおこなってきたが、まだ不明な点が多々あり、それらを歴史言語学的な研究や関連諸語の語彙的な研究から解明を続けてきた。

◎出版物による業績

[論文]

八杉佳穂

2013 「メソアメリカの水」『季刊民族学』145：14-19。

Yasugi, Y.

2013 Five levels in Kaqchikel. In T. Tsunoda (ed.) *Five Levels in Clause Linkage, volume 1*, pp. 127-191, Tsukuba: Tasaku Tsunoda.

[その他]

2014 「愛の表現」『月刊みんぱく』38(2)：10-11。

2014 「ユダ人形」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 240, 大阪：国立民族学博物館。

2014 「生命の樹」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 244, 大阪：国立民族学博物館。

2014 「聖母カルメン」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 257, 大阪：国立民族学博物館。

2014 「平石白メタテと捏ね棒メタテ」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 261, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2013年4月12日 「常識の非常識——日本語とマヤ語」大阪自由大学

2013年6月21日 「マヤ4000年の旅」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2013年8月10日 「数字のお話」天母里子供会（名古屋）

2013年11月1日 「鉄器なしで生まれた偉大なるマヤ文明」JFE スチール中国鋼管会（広島）

2014年1月25日 「マヤ文字を書いてみよう」銀河学園（福山）

◎調査活動

・海外調査

2014年3月7日～3月25日—グアテマラ（「OS型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的研究」にかかる調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

近藤雅樹 [こんどう まさき] ————— 教授

1951年生。【学歴】武蔵野美術大学造形学部美術学科卒（1977）【職歴】修徳高等学校（東京都葛飾区）美術科講師（1977）、財団法人日本常民文化研究所委託研究員（1977）、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課県立博物館設立準備室技術職員（1980）、兵庫県立歴史博物館技術職員・学芸員（1982）、兵庫県立歴史博物館主任・学芸員（1989）、国立民族学博物館第1研究部助手（1990）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1996）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（1999）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2003）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2007）【専攻・専門】日本物質文化論（民具研究）、民俗学【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、日本民具学会、道具学会

【主要業績】

[単著]

近藤雅樹

1997 『くうたらテクノロジー——熱烈！明治・大正「特許」事情』東京：河出書房新社。

1995 『おんな紋——血縁のフォークロア』東京：河出書房新社。

[編著]

近藤雅樹編

2001 『図説 大正昭和くらしの博物誌——民族学の父・渋沢敬三とアチック・ミュージアム』東京：河出書房新社。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

渋沢敬三研究

・研究の目的、内容

渋沢敬三の学術上の功績を、彼が主導的な役割をはたして推進し、形成した民具標本コレクションを中心に解明する。

・成果

渋沢敬三の人物像とその研究手法に焦点をあてた特別展「屋根裏部屋の博物館」を企画、開催した。また、展示図録を淡交社より一般書籍としても刊行した。

◎出版物による業績

[その他]

近藤雅樹

2013 「日本の民俗学コレクションとみんぱく」『月刊みんぱく』37(5): 9。

2013 「渋沢敬三とアチックミュージアム」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』pp. 7-22, 大阪：国立民族学博物館。

2013 「イントロダクション」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』pp. 23-25, 大阪：国立民族学博物館。

2013 「トピック1 カメラと蓄音機」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 26, 大阪：国立民族学博物館。

2013 「トピック2 風呂敷」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 73, 大

- 阪：国立民族学博物館。
- 2013 「アシナカの研究」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 80, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「ウケの調査」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 86, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「トピック3 箱枕」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 104, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「トピック4 繭杵」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 105, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「トピック5 さまざまな灯火具」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 106, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「トピック7 わら算」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 10, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「トピック10 捨木」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 111, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「トピック12 内耳鍋」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 112, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「トピック13 いろいろな民具」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 114, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「塩籠と『塩俗問答集』」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 118, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「コラム9 塩の民間療法」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』pp. 124-125, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「薩南十島調査」『特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』p. 136, 大阪：国立民族学博物館。
- ◎口頭発表・展示・その他の業績
- ・展示
 - 2013年9月19日～12月3日 特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」実行委員長
- ◎調査活動
- ・国内調査
 - 2013年7月4日 工学院大学図書館（特別展「屋根裏部屋の博物館」展示資料調査）
 - 2013年7月5日 流通経済大学図書館（特別展「屋根裏部屋の博物館」展示資料調査）
- ◎上記以外の研究活動
- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 - 人間文化研究機構連携研究『日本関連在外資料の調査研究』『ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究』研究代表者、人間文化研究機構連携研究「画中国画の世界」（代表者：宇田川妙子）研究分担者
- ◎社会活動・館外活動
- ・他機関から委嘱された委員など
 - 芦屋市文化財審議会委員、伊丹市文化財審議委員会委員、財団法人 小田家博物館むろやの園評議員、神奈川大学国際常民文化研究機構運営委員、法政大学国際日本学研究所・研究プロジェクト「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討——〈日本意識〉の過去・現在・未来」プロジェクトメンバー、和歌山県立紀伊風土記の丘協議会委員
 - ・非常勤講師
 - 神戸大学国際文化学部「博物館概論」

笹原亮二 [ささはら りょうじ]————— 教授

1959年生。【学歴】早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士課程前期修了（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士課程後期退学（1995）【職歴】相模原市立博物館学芸員

(1982)、国立民族学博物館第1研究部助手(1996)、国立民族学博物館民族文化研究部助手(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(2001)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2004)【学位】博士(歴史民俗資料学)(神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科2001)、修士(歴史民俗資料学)(神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科1995)【専攻・専門】民俗学、民俗芸能研究 1)日本の獅子舞の民俗学的研究、2)日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、3)民俗学における資料論【所属学会】日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

【主要業績】

[単著]

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

[編著]

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化——文字の民俗学 声の歴史学』京都：思文閣出版。

[論文]

笹原亮二

2005 「用と美——柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司共編『柳宗悦と民藝運動』pp. 273-294, 京都：思文閣出版。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の祭と民俗芸能における装飾性の諸相

・研究の目的、内容

我々の日々の生活の場には衣類や食器や家具などさまざまなモノが存在し、我々はそれらを所有し、用いて生活を営んできた。そうしたモノに対し、我々は道具としての利便性や実用性に関心を向けがちである。しかし、現実の生活の場には、道具としての利便性や実用性が必ずしも問題とされないモノも存在している。それは、祭や民俗芸能において見られる御幣・仮面・笠・曳山などの品々である。それらは、形態や色彩などに殊更に趣向が凝らされていて、日々の生活の場のモノとは大いに趣を異にする。その最たるものが、祭や年中行事の際に地元の人びとが趣向を凝らして作りあげ、見物の観覧に供する造形物、「つくりもの」である。こうしたつくりものを初め、各地の祭や民俗芸能に登場する多種多様なハレの造形物を、人びとの願いや喜びや晴れがましさとといったハレの機会における闊達な精神活動の所産として捉え、特にその装飾性に注目して実態の把握を試みる。そして、それを通じ、各地でさまざまな祭や民俗芸能を脈々と営んできた人びとの心性、「ハレのこころ」のありようや歴史を考える。

・成果

「つくりもの」に類する装飾性が顕著な造形物が見られる各地の祭や民俗芸能について、現地調査や論文・調査報告書等の関係資料の調査を実施し、その装飾的な形状の多様性の把握を試みた。現地調査や関係資料の調査は、佐賀県域および、岡山県域・広島県域・香川県域・愛媛県域などの瀬戸内海沿岸地域を中心に実施した。その結果、佐賀県域を含む九州北西部に多数分布する「浮立」と呼ばれる民俗芸能では、被り物や装束の造形が隣接する地域であっても大きく異なるなど、著しい多様性が認められること、瀬戸内海沿岸に関しては、被り物や装束等に装飾性が認められる民俗芸能は、本州・四国双方に見られるものの、四国側のほうが装飾性が高いと思われること、現地では「つくりもの」と称していないがそれに類する造形物が見られる祭が本州・四国双方に散見されることが明らかになった。こうした研究の成果についてはみんぱくゼミナールやウィークエンド・サロンなどで紹介したほか、民博の出版助成を受けて『造り物の文化史——歴史・民俗・多様性(勉成出版)』を刊行する予定である。

なお、本研究の実施にあたっては、笹原が研究代表者の科学研究費補助金(基盤研究(C))「瀬戸内海および西日本における島唄世界の民俗芸能の研究」の資金を活用した。

◎映像音響メディアによる業績

- ・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[短編]

笹原亮二監修

2013 「長浜曳山まつり」日本語, 22分。

- ・電子ガイドの制作・監修

[日本の文化展示]

笹原亮二監修

2013 「トシドン」日本語, 英語, 中国語, 韓国語

2013 「吉念仏踊り(よしねんぶつおどり)」日本語, 英語, 中国語, 韓国語

2013 「九州北西部の浮立(ふりゅう)」日本語, 英語, 中国語, 韓国語

2013 「吹浦田楽(ふくらでんがく)」日本語, 英語, 中国語, 韓国語

2013 「鷺舞(さぎまい)」日本語, 英語, 中国語, 韓国語

2013 「早池峰神楽(はやちねかぐら)」日本語, 英語, 中国語, 韓国語

2013 「野原八幡宮大祭の風流(ふうりゅう)」日本語, 英語, 中国語, 韓国語

2013 「天蓋(てんがい)」日本語, 英語, 中国語, 韓国語

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

京都市立芸術大学伝統音楽研究センタープロジェクト研究「音楽・芸能史における芸術化の諸問題」(代表: 後藤静男) 共同研究員

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

島根県古代文化センター資料評価委員・同客員研究員

- ・非常勤講師

関西学院大学文学部「地理学地域文化学特殊講義」、阪南大学国際コミュニケーション学部「民俗学概説」

杉本良男 [すぎもと よしお] 教授

1950年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科卒(1974)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了(1977)、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学(1980)【職歴】国際基督教大学教養学部社会科学科非常勤助手(1979)、南山大学文学部講師(1981)、南山大学人類学研究所第一種研究所員併任(1984)、南山大学文学部助教授(1986)、国立民族学博物館第3研究部助教授(1995)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1995)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授(1998)、国立民族学博物館民族文化研究部教授(1999)、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授(2003)、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授(2004)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2007)、国立民族学博物館民族文化研究部教授(2011)【学位】博士(社会人類学)(東京都立大学 1995)、文学修士(東京都立大学 1977)【専攻・専門】社会人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[単著]

杉本良男

2002 『インド映画への招待状』東京:青弓社。

[編著]

杉本良男編

2014 『キリスト教文明とナショナリズム——人類学的比較研究』(国立民族学博物館論集2)東京:風響社。

杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編

2013 『スリランカを知るための58章』東京:明石書店。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

キリスト教文明とナショナリズム

・研究の目的、内容

本研究は、主としてフランス革命期以後の「キリスト教文明」の展開が、南アジア地域においてどのような影響を与え、またそれがどのような問題を引き起こしているのかについて、文献研究と現地調査によって系譜論的に明らかにしようとするものである。本年度は、グローバル化が進む南インドにおいて、構造的な社会変動が進んでいることについて実証的に明らかにすることを目的としている。本主題に関連して、各種外部資金により、ロシア、中国、インド文明の相互比較、津波災害復興過程における宗教間対立と融和、南インド村落社会の構造変動などについての研究を継続的に進めている。

・成果

本年度は、共同研究「キリスト教文明とナショナリズム」(2007～2011年度)の成果として、編著『キリスト教文明とナショナリズム——人類学的比較研究』(風響社)を刊行した。科学研究費新学術領域研究・計画研究「地域大国の文化的求心力と遠心力」(研究代表者：望月哲男)2008～2012年度)の研究成果として、望月哲男編『ユーラシア地域大国の文化表象』(シリーズ・ユーラシア地域大国論6)に論文「周縁からの統合イデオロギー——マダム・ブラヴァツキーと南アジア・ナショナリズム」を寄稿し公刊された。

科学研究費補助金(基盤研究(B))「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環——生活文化の視点から」(研究代表者：杉本大三、2013～2015年度)により、南インド農村の構造変化について資料の整理を行った。

科学研究費補助金(基盤研究(B))「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」(杉本良男・研究代表者)2013～2015年度)により、南インド、タミルナードゥ州クンバコーナム市および近郊農村における共同調査を指揮し、資料収集にあたりとともに、インド側のメンバーも含めて、全員で分担して整理分析作業を行った。

◎出版物による業績

[編著]

杉本良男編

2014 『キリスト教文明とナショナリズム——人類学的比較研究』(国立民族学博物館論集2)東京：風響社。

[論文]

杉本良男

2014 「周縁からの統合イデオロギー——マダム・ブラヴァツキーと南アジア・ナショナリズム」望月哲男編『ユーラシア地域大国の文化表象』(シリーズ・ユーラシア地域大国論6) pp. 177-197, 京都：ミネルヴァ書房。

2014 「序論 再定義からナショナリズムへ——ポスト・ポスト時代の人類学的宗教研究」杉本良男編『キリスト教文明とナショナリズム——人類学的比較研究』(国立民族学博物館論集2) pp. 9-30, 東京：風響社。

2014 「奇蹟譚のポリティカル・エコノミー——南インド、ウェーラーンガンニ聖堂のメディア戦略」杉本良男編『キリスト教文明とナショナリズム——人類学的比較研究』(国立民族学博物館論集2) pp. 153-184, 東京：風響社。

[その他]

杉本良男

2013 「聖なる河とミネラルウォーター」『季刊民族学』145：28-35。

2013 「ヴィジャヤ」『岩波世界人名大辞典』p. 271, 東京：岩波書店。

2013 「キールティ・スリー・ラージャシンハ」『岩波世界人名大辞典』p. 745, 東京：岩波書店。

2013 「ドットウギヤムヌ(ドゥッタガーマニー)」『岩波世界人名大辞典』p. 1854, 東京：岩波書店。

2013 「ラーフラ長老」『岩波世界人名大辞典』p. 3056, 東京：岩波書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年7月28日 「パチモンの逆襲——〈インド〉映画の21世紀」『グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究』

- 2013年12月7日 「幻想の聖地——ユーラシア地域大国における聖地の研究にむけて」『聖地の政治経済学』
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
- 2013年6月15日 「趣旨説明」科学研究費補助金「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（研究代表者：杉本良男）研究会、京都キャンパスプラザ
- 2014年3月17日 「2013年度調査報告」科学研究費補助金「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環——生活文化の視点から」（研究代表者：杉本大三）研究会、名城大学
- ◎調査活動
- ・国内調査
 - 2013年7月5日～7日 房総半島巡検調査
 - ・海外調査
 - 2013年8月11日～9月5日—インド（南インド社会の構造変動に関する調査研究）
 - 2013年9月24日～9月29日—オランダ（神智学関係の国際会議参加）
 - 2013年10月2日～10月7日—韓国（インド映画のアジア進出に関する調査研究）
- ◎上記以外の研究活動
- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 - 科学研究費補助金（基盤研究（B））「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環——生活文化の視点から」（研究代表者：杉本大三）研究分担者
- ◎社会活動・館外活動
- ・他機関から委嘱された委員など
 - 公益信託「澁澤民族学振興基金」運営委員、日本学術会議連携会員、神戸大学附属中等教育学校文部科学省指定研究開発に係る運営指導委員

竹沢尚一郎 [たけざわ しょういちろう] ————— 教授

1951年生。【学歴】東京大学文学部宗教学専攻卒（1976）、東京大学大学院人文科学研究科宗教学専攻修士課程修了（1978）、フランス社会科学高等研究院社会人類学専攻博士課程修了（1985）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1985）、九州大学文学部助教授（1988）、国立民族学博物館併任助教授（1996）、九州大学大学院人間環境学研究院教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究部教授（2001）、九州大学大学院併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2007）【学位】民族学博士（フランス社会科学高等研究院 1985）、文学修士（東京大学 1978）【専攻・専門】宗教人類学、アフリカ史、人類学学説史【所属学会】日本宗教学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会

【主要業績】

[単著]

竹沢尚一郎

2013 『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』東京：中央公論社。

2010 『社会とは何か——システムからプロセスへ』（中公新書）東京：中央公論社。

2007 『人類学的思考の歴史』京都：世界思想社。

【受賞歴】

1988 日本宗教学会賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 西アフリカ史研究
- 2) 被災のコミュニティ研究

・研究の目的、内容

- 1) 2012年～2015年度の日本学術振興会の科学研究費補助金を得て、アフリカ史研究を遂行した。具体的には、西アフリカ・マリ国で考古学発掘調査を実施し、その成果をもとに西アフリカ史の書き直しをおこなっている。
- 2) 三井物産環境基金の資金を得て、岩手県の大槌町、釜石市などで、被災者の被災後の行動を記録した。それと並行して、東日本大震災の展示をわが国および海外の博物館で実施するべく準備を進めている。

・成果

- 1) イェール大学出版会より、これまでの発掘成果について研究書を作成するよう依頼されているので、その執筆を進めている。とくに、長年共同研究を実施してきたマリ文化財保護局のママドゥ・シセ博士が民博の外国人客員教員として来日したので、章立てやその内容について討議し、執筆を進めている。また、2014年2月には科学研究費補助金によりマリで1か月間考古学発掘を実施し、西アフリカ史理解の知見を深めた。その他、数度のアフリカ史研究会を開催することで、共著書の出版に向けて尽力した。
- 2) 展示の準備に向けて、岩手県大槌町吉里吉里集落の被災前と被災後の模型を作成したほか、がれきを集めて展示の準備を進めた。また、地域の人びとが所有している古い写真を集めて、大槌町で写真展を開催した。これらは三井物産環境基金と総研大学融合プロジェクトの資金によって可能になったものである。さらに、三井物産環境基金の助成金により、2013年1月に出版した『被災後を生きる』の英訳を進めており、ほぼ完了したので、出版社を探しているところである。

◎出版物による業績

[論文]

竹沢尚一郎

- 2013 「サハラ砂漠をテロリズムの温床にしないために」『中央公論』2013(5): 118-126。
2013 「アルジェリア人質事件の背景を探る」『情況』3・4月合併号, pp. 60-70。
2013 「語り継ぐこと、記憶を保存すること」国際宗教研究所編『現代宗教』（特集：3.11後を拓く）pp. 209-228, 東京：秋山書店。
2013 「移民が可能にする世界」『学鏡』109(4): 6-9。
2014 「津波の破壊に抗する被災コミュニティ——大槌町の避難所に見る地域原理と他者との関係性」『国立民族学博物館研究報告』37(2): 127-197。
2014 「古王国」松田素二編『アフリカ社会を学ぶ人のために』pp. 87-97, 京都：世界思想社。

[その他]

Takezawa, S.

- 2013 The Cult of Things. Exhibiting Catastrophes in Ethnological Museum. *Minpaku Anthropology Newsletter*, 37: 5-6, 10-12.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2014年1月18日 「震災遺構の現在——トラウマを保持することの困難と可能性」機関研究「マテリアリティの人間学・文化遺産の人類学」公開フォーラム『負の文化遺産の保存と展示をめぐる』千里朝日阪急ビル第1会議室

◎調査活動

・国内調査

- 2013年4月20日～5月7日 岩手県大槌町（震災展示準備）
2013年5月17日～5月19日 岩手県大槌町（震災展示準備）
2013年6月10日～6月29日 岩手県大槌町（震災展示準備）
2013年8月17日～8月31日 岩手県大槌町（震災展示準備）
2013年10月24日～11月5日 岩手県大槌町（震災展示準備）
2013年12月11日～12月14日 岩手県大槌町（震災展示準備）

・海外調査

- 2014年2月1日～2月28日—マリ（アフリカ史の研究のための考古学研究およびアフリカ史の理解のための資料収集）
2014年3月20日～3月26日—中華人民共和国、韓国（南京虐殺記念館、南京博物院、韓国独立記念館、西大門刑務所資料館、ナムムの家の視察）

◎大学院教育

・論文審査

博士論文審査委員（1件）

予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

総研大学融合プロジェクト「ニュー・ミュージオロジーの確立のための研究」研究代表者（2013～2014年度）

- ・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

三井物産環境基金「被災の共同体から地域の復興へ——被災後の人びとの行動の記録化とそれに基づく新たな社会モデルの構築」研究代表者（2011～2014年度）

出口正之 [でぐち まさゆき] ————— 教授

1955年生。【学歴】大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）【職歴】ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、総合研究大学院大学学長補佐（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）【専攻・専門】NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学【所属学会】国際NPO・NGO学会（ISTR = International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA = The Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本NPO学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[共編著]

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White, and M. Deguchi

2010 *Civic Engagement in Contemporary Japan Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York/Dordrecht /Heidelberg/London: Springer.

本間正明・出口正之編著

1996 『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

[分担執筆]

Deguchi, M.

2001 The Distortion between Institutionalized and Noninstitutionalized NPO: New Policy Initiative and the Nonprofit Organizations in Japan. In H. K. Anheier, J. Kendall (eds.) *Third Sector Policy at the Crossroads: An International Nonprofit Analysis*. pp. 277-301, London and New York: Routledge.

【受賞歴】

1988 東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988 日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

1995 ESP 大来佐武郎賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

NPO・NGO等の総合的研究

・研究の目的、内容

NPO・NGO等（公益法人を含む。また、民間助成財団の研究も含む。）に関わる総合的な研究（制度研究を含む）を個別研究として実施する。

・成果

今年度は以下の出版、および学会等での報告、講演をおこなった。

◎出版物による業績

[論文]

出口正之

2014 「日本における民法施行前の『講』と現代非営利組織（NPO）との特性の共通点」『国立民族学博物館研究報告』38(3)：299-335。

[その他]

出口正之

2013 「研究助成を超える『助成財団』」『JFC Views』77：1。

2013 「これからの非営利セクターに期待すること」『コミュニティ財団NEWS』48：1-4。

2013 「非営利セクターの課題と展望」『ウォロ（Volo）』（大阪ボランティア協会市民活動総合情報誌）490：8-13。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年9月20日～22日 「非営利法人制度改革を総括する」基調報告、非営利法人制度学会第17回全国大会、近畿大学

2014年3月15日～16日 「新公益法人制度5年の『移行期間』を終えて（その1）：110年ぶりの改革法の完全施行で見えてきた公益法人セクターと公益認定制度の課題」（雨宮孝子・太田達男・出口正之・早瀬 昇・岡本仁宏）日本NPO学会第16回年次大会、関西大学

2014年3月15日～16日 「新公益法人制度5年の『移行期間』を終えて（その2）：110年ぶりの改革法の完全施行と新しい市民社会の姿～市民社会セクターの課題と展望」（太田達男・出口正之・初谷 勇・山岡義典・岡本仁宏）、日本NPO学会第16回年次大会、関西大学

・研究講演

2013年9月20日 「米国NPO法制・税制及び最近の助成財団の動向」公益財団法人公益法人協会

2013年10月14日 「政策人類学の対象としての公益法人制度改革」京都大学公益法人制度ワークショップ

2013年11月2日 「非営利セクターの課題と展望」第3回市民セクターの次の10年を考える研究会、ボランティアリズム研究所、大阪ボランティア協会

2013年11月19日 「これからの非営利セクターに期待すること」2013年度社会貢献セミナー、大阪コミュニティ財団

・広報・社会連携活動

2013年9月29日 「みんなの『磁力』を考える——音楽の祭日を事例に」第315回みんなぱくウィークエンド・サロン

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人助成財団センター評議員

森 明子 [もり あきこ]—————教授

【学歴】筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2009）、民族文化研究部教授（2011）【学位】文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）【専攻・専門】文化人類学 1）ヨーロッパ人類学、2）ドイツ、オーストリアの民族誌研究、3）民族学・民俗学の歴史的展開【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族——オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

[編著]

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社。

2004 『ヨーロッパ人類学——近代再編の現場（フィールド）から』東京：新曜社。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

人類学の記述とその社会的文脈

・研究の目的、内容

人類学の記述と社会との関わりのあり方を、政治的経済的関係を含めた歴史的な文脈のなかで検討し、社会における学問実践のあり方を問う。

具体的には、複数のプロジェクトのもとに研究をすすめる。まず、科学研究費補助金（基盤研究（C））「21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例」において、ベルリンの外国人集住地区の都市再生プロジェクトと保育園運動に焦点をあてて、人類学はこれをいかに記述するか検討する。科研最終年度として、現地調査と分析、研究総括を行う。また、科学研究費補助金（基盤研究（B））「民俗学的実践と市民社会——大学・文化行政・市民活動の社会的布置に関する日独比較」において、大学研究と市民社会の関わりについて検討する。本年度は、これまで収集したデータ分析を中心に行う。さらに、人類学的記述としての博物館展示について2013年3月に開催した国際シンポジウム「文化を展示すること——日本とヨーロッパの遠近法を考える」の成果とりまとめを行う。このほか、すでに終了したプロジェクト共同研究「ソーシャル概念の再検討——ヨーロッパ人類学の問いかけ」、科学研究費補助金（基盤研究（B））「戦後民俗学の展開に関するドイツと日本の比較研究——社会における学問実践の形」、共同研究「日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで」の成果とりまとめを、あわせておこなう。

・成果

- 1) 科学研究費補助金（基盤研究（C））「21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例」の最終年度の調査研究を行った。保育園運動と都市再生に関わる住民運動とのかかわりを中心に、関連する資料を収集し、インタビュー調査をおこなった。成果とりまとめに向けて、資料を整理し、分析を進めた。
- 2) 科学研究費補助金（基盤研究（B））「民俗学的実践と市民社会——大学・文化行政・市民活動の社会的布置に関する日独比較」の研究分担者として共同研究を行い、資料分析とネットワーク構築を進展させた。
- 3) 前年度末に開催した国際シンポジウム「文化を展示すること——日本とヨーロッパの遠近法を考える」の成果を、5本の英語論文から構成される国立民族学博物館研究報告38巻4号の特集（Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe）として刊行した。
- 4) 共同研究「ソーシャル概念の再検討——ヨーロッパ人類学の問いかけ」の成果をとりまとめ、単行本『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』として世界思想社より刊行した。
- 5) 共同研究「日本におけるネイティブ人類学／民俗学の成立と文化運動——1930年代から1960年代まで」に関連して、京都大学で開催された国際シンポジウムにコメンテータとして参加し、研究成果の総括を行った。
- 6) 科学研究費補助金（基盤研究（B））「戦後民俗学の展開に関するドイツと日本の比較研究——社会における学問実践の形」の成果とりまとめのデータ整理・分析を進めた。

◎出版物による業績

[編著]

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』京都：世界思想社。

Mori, A. (ed.)

2014 [Special Issue] Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 38(4): 461-554.

[論文]

森 明子

2014 「序章 ソシアルなるものへの関心とヨーロッパ人類学」森 明子編『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』pp. 1-28, 京都：世界思想社。

2014 「新しいネイバーフッドの形成——ベルリン・クロイツベルクの事例」森 明子 編『ヨーロッパ人類学の視座——ソーシャルなるものを問い直す』pp. 79-105, 京都：世界思想社。

Mori, A.

2014 Introduction: Exhibiting Cultures from Comparative Perspectives (In A. Mori (ed.) [Special Issue] Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe), *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 38(4): 461-473.

2014 Exhibiting European Cultures in the National Museum of Ethnology, Osaka (In A. Mori (ed.) [Special Issue] Exhibiting Cultures: Comparative Perspectives from Japan and Europe), *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 38(4): 475-494.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年11月9日 「コメント——国際比較からみた東アジアの民俗学」国際シンポジウム『東アジアの民俗学——歴史と課題』京都大学時計台記念館

・研究講演

2013年7月5日 「100万人の村、ミュンヘン」NPO 法人大阪府高齢者大学校、世界文化に親しむ科、大阪市教育会館

・広報・社会連携活動

2014年1月12日 「産業化と手仕事」第327回 みんなくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2013年9月25日～11月1日ドイツ（科研費研究「21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例」による調査研究）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C）「21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究——ベルリン外国人集住地区の事例」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B）「民俗学的実践と市民社会——大学・文化行政・市民活動の社会的布置に関する日独比較」（研究代表者：岩本通弥）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

日本文化人類学会学会誌編集委員会委員、日本学術振興会特別研究員等審査専門委員および国際事業委員会書面審査委員、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員、人間文化研究機構男女共同参画委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von Historische Anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag (Köln, Weimar, Wien)（ドイツ・オーストリアで刊行されている学術雑誌の研究顧問）

吉本 忍 [よしもと しのぶ]——教授

1948年生。【学歴】京都市立芸術大学美術学部工芸科卒（1971）、京都市立芸術大学美術専攻科修了（1973）【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手（1978）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1990）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1991）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（1991）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1998）【専攻・専門】民族技術、民族美術・工芸 1）全世界にわたる機織り技術の通文化的研究、2）インドネシアをはじめとする更紗や緋の染織文化研究【所属学会】民族芸術学会

【主要業績】

[単著]

吉本 忍

1996 『ジャワ更紗』東京：平凡社。

1977-78 『インドネシア染織大系（上・下巻）』京都：紫紅社。

[論文]

吉本 忍

1987 「手織機の構造・機能論的分析と分類」『国立民族学博物館研究報告』12(2): 315-447。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1840年代から1930年代にスイスで生産されたプリント更紗の研究（継続）

・研究の目的、内容

本研究は、1840年代から1930年代にスイスで生産されたプリント更紗の技術とデザインの解析をおこない、それらのうちに見いだされるジャワ更紗の技術とデザインの影響、およびその歴史的な展開をあきらかにすることをおもな目的としている。

研究対象とする原資料は、スイスのプーヴィエ・コレクションのプリント更紗の実物資料とサンプル帖であるが、本研究においては、昨年度中に撮影を完了した前記原資料のデジタル画像資料をもとに、プリント更紗の技術とデザインについて個別に検証するとともに、それらの多くに付随する文字資料の解説をおこなう。

なお、本研究は吉本 忍が研究代表者となっている科学研究費補助金（基盤研究（C））「アジア、アフリカ、ヨーロッパに関わるテキスタイル・グローバリゼーションの研究」にもとづいている。

・成果

本研究では、本年度はスイスのプルシンにおいて、プーヴィエ・コレクションのプリント更紗の実物資料、およびプリント更紗の製作に使用されたスタンプなどの版木や金属製のローラーを再度調査するとともに、その他の関連資料の調査を、グラルス州立博物館や旧ダニエル・ジェニー社（Daniel Jenny & Co.）資料室などでもおこなった。さらに、それらの新資料とともに、これまでに入手している資料の分析も継続しておこなった。そうしたことから、1840年代から1930年代にスイスで生産されたプリント更紗の実態について、不明であった事柄が次第にあきらかになってきているものの、膨大なサンプル帖の資料分析は未だ終わっていない。したがって、本研究は、本年度末の定年退職後も継続する予定であり、近い将来にその成果を刊行物として公開したいと考えている。

◎調査活動

・海外調査

2013年8月5日～8月21日—ウズベキスタン（中央・北アジア展示新構築のための資料収集）

2013年9月1日～9月10日—インドネシア（手織機の通文化的研究）

2013年10月2日～10月21日—フランス、ドイツ、イギリスオランダ、スイス（ヨーロッパにおけるプリント・テキスタイルの調査）

2014年1月27日～2月3日—タイ（東北タイにおける染色技術の現地調査）

2014年2月11日～2月19日—スイス（手織機の通文化的研究）

2014年2月20日～2月24日—大韓民国（韓半島の木綿織物に関する資料調査のため）

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CDなどの制作・監修

[みんぱく映像民族誌]

吉本 忍監修

2014 『みんぱく映像民族誌第10集 サーミ人の織機と織物』日本語、100分。

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

沖縄県立芸術大学附属研究所客員研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化ファッション研究機構運営委員

1959年生。【学歴】早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了（1992）【職歴】東方研究会専任研究員（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、帝京大学非常勤講師（1992）、国立民族学博物館第3研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2004）【学位】文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）【専攻・専門】宗教学・東欧研究【所属学会】東欧史研究会、「宗教と社会」学会

【主要業績】

[単著]

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国——ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

[共著]

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途3 人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

[論文]

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教——民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1-42。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ルーマニアにおけるマイノリティの音楽と宗教

・研究の目的、内容

ルーマニアに居住するマイノリティの文化とマジョリティ文化との関係を音楽と宗教の観点から研究すること。

・成果

研究主題はルーマニアの民族文化関係を音楽と宗教の観点から考察することであるが、中心となるロマの音楽文化の理解のために科学研究費補助金によって青森で大衆芸能としての津軽三味線の現状と歴史を調査した。津軽三味線の発達史において楽器と演奏法の改良が、鑑賞者に対するアピールをめぐる演奏者同士の競争から行われたことや、現在の演奏者の多様な活動などから、芸能文化の集団形成や外部集団との相互交流のありかたの理解について多くの示唆を得た。一方、バルカン半島における現代大衆文化の比較共同研究によって、バルカン地域内部での音楽の越境性と歴史的な重層性が明らかとなった。今後のルーマニア研究にも大いに寄与すると思われる。

◎出版物による業績

[その他]

新免光比呂

2013 「バルカンの民族衣装が生まれた頃」ナショナルジオグラフィック編『100年前の写真で見る世界の民族衣装』p. 8, 東京：日経ナショナルジオグラフィック。

2013 「ローマ・カトリック教会 南米出身の教皇誕生は何を意味するのか」『週刊エコノミスト』10/22：30。

2013 「旅・いろいろ地球人 よそ者？⑦ 居心地悪くつらくても」『毎日新聞』11月28日夕刊。

2013 コラム『「汚れなき祈り」によせて』『汚れなき祈り』（映画パンフレット）pp. 22-24, 東京：マジック・アワー。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2013年10月15日 「Soseki Natsume and Haruki Murakami: Two Intellectuals and the Japanese Modernization」エレヴァン教育大学

◎調査活動

・国内調査

2013年4月23日～4月26日—広島（2013年度集団研修「博物館学コース」広島研修旅行への同行・指導）

2013年6月1日—東京（コソボ報告会出席）

2013年6月2日～6月5日—盛岡（2013年度集団研修「博物館学コース」東北研修旅行への同行・指導）

2013年6月25日～6月28日—仙台（震災後の東北地方の復興状況を博物館の見学・視察）

2013年9月17日～9月21日—青森（伝統楽器（津軽三味線）の伝統的要素と現代的変容に関する調査）

2014年1月11日～1月12日—東京（科学研究費補助金（基盤研究（B））「旧東欧地域における『演歌型』大衆音楽の比較研究」研究会出席）

2014年3月22日～3月23日—東京（科学研究費補助金（基盤研究（B））「ファシズムと宗教文化に関する地域・時代比較的综合研究」研究会出席）

・海外調査

2013年10月6日～10月21日—アルメニア、フランス（アルメニアの大戦間期に関する歴史的評価と宗教文化についての調査研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1名）

・大学院ゼミでの活動

基本テーマゼミ

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「旧東欧地域における『演歌型』大衆音楽の比較研究」研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「ファシズムと宗教文化に関する地域・時代比較的综合研究」研究分担者

鈴木 紀 [すざき もと] ————— 准教授

1959年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）【職歴】ニューヨーク州立大学ビンガムトン校人類学科教務助手（1992）、千葉大学文学部助教授（1996）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1985）【専攻・専門】開発人類学・ラテンアメリカ文化論 1）開発援助プロジェクト評価、2）フェアトレード、3）マヤ・ユカテコ民族の社会変化、4）メキシコのナショナリズム【所属学会】日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、Society for Applied Anthropology

【主要業績】

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ 8）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2011 「開発人類学の展開」佐藤 寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp. 45-66, 東京：明石書店。

2008 「プロジェクトからいかに学ぶか——民族誌による教訓抽出」『国際開発研究』17(2): 45-58。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国際開発のための実践人類学

・研究の目的、内容

本研究の目的は、社会問題の解決に寄与するための文化人類学である実践人類学を、国際開発活動の分野で推進することにある。とくに開発プロジェクトが、その対象社会で持続、発展していくための条件を、プロジェクトのインパクト（事前に予期された影響および予期されていなかった影響）に関する民族誌的調査を通じて明らかにしていく。

本年度は、第1に、日本の政府開発援助の一環としてメキシコでおこなわれた技術協力プロジェクトのインパクトに関するこれまでの研究成果をまとめる。第2に、フェアトレード研究を継続する。フェアトレードのインパクトを調査するため、中央アメリカのカカオ栽培者を事例に、フェアトレードに参加している団体だけでなく、参加していない団体の情報収集を目的とした現地調査をおこなう。この調査は、科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学」（研究代表者：鈴木 紀）による。

・成果

メキシコでおこなわれた技術協力プロジェクトのインパクトに関する研究として、日本文化人類学会第47回研究大会（6月9日、慶応大学）で「農村開発におけるオーナーシップと嫉妬——メキシコ、チアパス州の事例から」を発表した。

フェアトレード研究の成果は、科学研究費補助金（基盤研究（B））「フェアトレードによる貧困削減と徳の経済の構築に向けた理論的・実証的研究」（研究代表者：池上甲一、近畿大学）の連携研究者として、タイのラチャバット・スリン大学で開催された国際ワークショップに参加し、9月6日に「消費者は生産者をいかに支援できるか——フェアトレード・カカオ／チョコレートの甘い側面と苦い側面」というテーマで研究発表をおこなった。この発表に基づき、Suzuki, Motoi, “Sweet or Bitter: What should Consumers Know about Fair Trade Cacao/chocolate Production?” In Koichi Ikegami, Saroj Aungsumalin, Tadasu Tsuruta (eds.) *Poverty Alleviation and Rural Development through Alternative Socio-economic Regimes: Fair Trade Movement and Economy of Virtue*. Nara: Kinki University and Kassetart University, 2014 を執筆した。

また、*MINPAKU Anthropology Newsletter* 36の特集 *The Anthropological Study of Fair Trade* を責任編集し、“Positively Eclectic! Fair Trade Studies at MINPAKU” (pp. 1-2) および “Fair Trade Tourism: An Effective Approach to Promote Solidarity between Producers and Consumers” (pp. 7-9) を寄稿した。

フェアトレード研究の調査は、科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学」（研究代表者：鈴木 紀）を活用し、ベリーズとアメリカ合衆国（11月18日～28日）、ガーナとイギリス（1月11日～23日）、コスタリカとグアテマラ（2月7日～21日）、フランス・ベルギー・ドイツ・オランダ（3月12日～22日）にてフェアトレード・カカオとチョコレートに関する情報収集をおこなった。カカオ豆の産地である、ベリーズ、ガーナ、コスタリカ、グアテマラでは、フェアトレード市場向け生産だけでなく、一般市場向け生産の情報も集め、フェアトレードのカカオ生産者に対する影響を非フェアトレード生産者と比較対照しながら検討することができた。またフェアトレード・チョコレートの消費地であるアメリカ・イギリス・フランス・ベルギー・ドイツ・オランダでは、小売店やチョコレート博物館等を訪問し、消費者向けのフェアトレード言説を分析するための資料収集をおこなった。

◎出版物による業績

[論文]

Suzuki, M.

2013 Positively Eclectic! Fair Trade Studies at MINPAKU. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 36: 1-2.

2013 Fair Trade Tourism: An Effective Approach to Promote Solidarity between Producers and Consumers. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 36: 7-9.

2014 Sweet or Bitter: What should Consumers Know about Fair Trade Cacao/chocolate Production? In K. Ikegami, S. Aungsumalin, T. Tsuruta (eds.) *Poverty Alleviation and Rural Development through Alternative Socio-economic Regimes: Fair Trade Movement and Economy of Virtue*. pp. 63-73, Kinki University and Kassetart University.

[その他]

鈴木 紀

2013 「包摂」『月刊みんぱく』37(5): 20。

2013 「フェアトレード①」『毎日小学生新聞』10月26日。

2013 「フェアトレード②」『毎日小学生新聞』11月2日。

2014 「みんなくワールドシネマ 映像に描かれる〈包摂と自律〉」『社会科NAVI』6：18-19。

2014 「『最優秀』は問題作」『毎日新聞』3月6日夕刊。

2014 「はじめに」『世界における無国籍者の人権と支援——日本の課題——国際研究集会記録』（国立民族学博物館調査報告118）pp. 1-2, 大阪：国立民族学博物館。

Suzuki, M.

2014 「Preface」『世界における無国籍者の人権と支援——日本の課題——国際研究集会記録』（国立民族学博物館調査報告118）pp. 119-120, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年6月9日 「農村開発におけるオーナーシップと嫉妬——メキシコ、チアパス州の事例から」日本文化人類学会第47回研究大会、慶応大学

2013年9月6日 ‘How Can Consumers Support Producers?: Bitter and Sweet Aspects of Fair Trade Cacao/Chocolate Production.’ International Workshop on “Rethinking Rural Development Strategies,” Surindra Rajabhat University.

◎調査活動

・国内調査

2014年3月28日～3月30日—熊本市（第8回フェアトレードタウン国際会議参加）

・海外調査

2013年9月3日～9月10日—タイ（ラチャパット・スリン大学にて開催される国際ワークショップ参加）

2013年11月18日～11月29日—ベリーズ、アメリカ合衆国（フェアトレード・カカオ生産の文化的影響調査）

2014年1月11日～1月23日—ガーナ共和国、イギリス（フェアトレード・カカオ生産の文化的影響調査）

2014年2月8日～2月21日—コスタリカ、グアテマラ（フェアトレード・カカオ生産の文化的影響調査）

2014年3月12日～3月22日—フランス、ベルギー、ドイツ、オランダ（開発教育としてのフェアトレード・チョコレート研究）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・論文審査

予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「フェアトレードによる貧困削減と徳野経済の構築に関する理論的・実証的研究」（代表：近畿大学 池上甲一）連携研究者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

国際開発学会常任理事（学会誌『国際開発研究』編集長）

・非常勤講師

神戸大学大学院国際協力研究科「開発人類学」（集中講義）

神戸大学国際文化学部「開発文化論」（集中講義）

大阪大学「ボランティア論」（10月30日「開発援助とボランティア」担当）

廣瀬浩二郎 [ひろせ こうじろう] ————— 准教授

【学歴】 京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校留学（1995）、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学（1997）【職歴】 京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）【学位】 文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）【専攻・専門】 日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）【所属学会】 日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすゝめ』 京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論——出口王仁三郎と近代日本』 大阪：解放出版社。

[学位論文]

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」 京都大学大学院文学研究科。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

今年度も「バリア・フリー」（多文化共生）という大テーマのもと、幅広い研究活動に取り組む。4月～7月には体験プログラム「瞽女文化にさわる」を担当する。「さわる展示」の新たな展開として、各方面に影響を与えることができるプログラムになるよう準備を進める。今年度前半には「さわる展示」関連の英文論文、拙著『さわる文化への招待』（世界思想社）の韓国語版も刊行される。8月～来年3月末の8か月間は、総合研究大学院大学の「若手教員海外派遣制度」により、シカゴ大学で在外研究を行う。シカゴでは、アメリカ天理教の調査を実施し、数年来の課題だった日系新宗教の海外布教に関する論文をまとめる。またシカゴを中心とする米国の博物館関係者と交流し、ユニバーサル・ミュージアムの国際的ネットワークを築くことも、在外研究の目標である。

・成果

今年度は2013年8月～2014年3月の8か月間、総合研究大学院大学の「若手教員海外派遣制度」により、シカゴ大学（東アジア言語文化学部）で在外研究に従事した。シカゴ滞在中に8つの大学で瞽女文化、「ユニバーサル・ミュージアム」をテーマとする講演を行った。また、米国内の20以上の博物館・美術館を訪問し、「さわる展示」、アクセシビリティ（障害者対応）について実地調査するとともに、担当学芸員、エデュケーターと意見交換した。シカゴでの充実した研究成果は1冊の単著、2冊の編著にまとめるべく、準備を進めている。

今年度前半（在外研究出発前）の業績としては、体験プログラム「瞽女文化にさわる」の企画・実施を上げることができる。本プログラムはMMP（みんなくミュージアムパートナーズ）の協力の下、2013年4月～7月に開催したが、参加人数も多く好評だった。民博の展示場新構築のシンボル、「さわる展示」の新たな展開として、今後も何らかの形で継続できればと考えている。

その他、ロシア博物館協会における「さわる展示」の事例報告（2013年6月）、拙著『さわる文化への招待』の韓国語版発行（2013年10月）などは、「ユニバーサル・ミュージアム」の国際連携の構築という観点で特筆に値する。

◎出版物による業績

[単著]

廣瀬浩二郎

2013 『さわる文化への招待』（韓国語版）ソウル：韓国点字図書館出版部。

[論文]

廣瀬浩二郎

2014 「共活という思想」山下麻衣編『歴史のなかの障害者』pp. 169-175, 東京：法政大学出版局。

2014 「ユニバーサル・ミュージアムの構想」黒沢 浩編『博物館展示論』pp. 145-157, 東京：講談社。

2014 「共活社会を創る」『広島文化学園大学学芸学部紀要』4：1-10。

Hirose, K.

2013 Research on Methods of “Touching the World”. *Disability Studies Quarterly* 33(3): 42-49.

[その他]

廣瀬浩二郎

2013 「“食”と“触”で拓く双方向コミュニケーション」『季刊民族学』144：92-96。

2013 「『さわる展示』の深化と応用①」『民博通信』141：16-17。

- 2013 「無目勝流武道の極意を求めて」『季刊民族学』145：92-99。
 2013 「ユニバーサルデザイン」『月刊みんぱく』37(8)：20。
 2013 「旅・いろいろ地球人 音の響き⑦ 盲人芸能の精神」『毎日新聞』8月8日夕刊。
 2013 「瞽女唄とブルース」『点字毎日』10月10日。
 2013 「密着取材から接触映像へ」『季刊民族学』146：92-96。
 2013 「世界に誇る日本文化」『点字毎日』11月7日。
 2013 「ウインディーシティの街で」『点字毎日』12月5日。
 2014 「情報の量か質か」『点字毎日』1月2日。
 2014 「身体で感じて撮る写真」『TASC MONTHLY』457：1。
 2014 「“保助”という思想」『季刊民族学』147：88-91。
 2014 「リンドバーグの気分で」『点字毎日』2月6日。
 2014 「視覚障害学生との交流」『点字毎日』3月6日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年6月2日 「Research on Methods of “Touching the World”」ロシア博物館協会主催「ミュージアム・フェスティバル」モスクワ・ロシア博物館協会
 2013年6月30日 「共活社会を創る」京都大学主催「バリアフリーシンポジウム」京都大学
 2013年12月20日 「瞽女文化と現代」フランス国立東洋言語文化研究所主催国際シンポジウム「日本文化の独自性」パリ・フランス国立東洋言語文化研究所

・みんぱくゼミナール

- 2013年7月20日 「色を創る、音で伝える、心に触れる——瞽女がみた風景」第422回みんぱくゼミナール

・研究講演

- 2013年6月15日 「世界をさわる手法を求めて」奈良大学主催特別講演会、奈良大学
 2013年6月17日 「ボランティア活動と情報変換」キッズプラザ大阪主催ボランティア研修会、キッズプラザ大阪
 2013年6月18日 「ユニバーサル・ミュージアムとは何か」東海大学主催特別講演会、東海大学
 2013年6月19日 「世界をさわる手法を求めて」相模女子大学主催人権講演会、相模女子大学
 2013年6月20日 「ボランティア活動と暗闇体験ワークショップ」キッズプラザ大阪主催ボランティア研修会、キッズプラザ大阪
 2013年6月23日 「動いて、触って、伝えて」ダンス&ピープル主催「他者理解」ワークショップ、大山崎公民館
 2013年7月10日 「博物館とバリアフリー」2013年度博物館学集中コース、国立民族学博物館
 2013年7月18日 「朗読・音訳から聴換へ」千葉県東部図書館主催ボランティア研修会、千葉県東部図書館
 2013年7月24日 「共活社会を創る」広島文化学園大学主催特別講演会、広島文化学園大学
 2013年7月31日 「ユニバーサル・ミュージアムとは何か」徳島県立博物館主催講演会、徳島県立博物館
 2013年8月3日 「世界をさわる手法を求めて」「二次元ドットコードの有効活用」研究会主催講演会、千里ライフサイエンスセンター
 2013年11月17日 「瞽女文化とユニバーサル・ミュージアム」シカゴ大学東アジア言語文化学部主催講演会、シカゴ大学（米国）
 2013年12月3日 「Hands of a Goze」テキサス大学アジア学部主催講演会、テキサス大学（米国）
 2014年1月21日 「Research on Methods of “Touching the World”」セントラルワシントン大学人類学部主催講演会、セントラルワシントン大学（米国）
 2014年1月30日 「Hands of a Goze」ミシガン大学日本研究センター主催講演会、ミシガン大学（米国）
 2014年2月4日 「Hands of a Goze」アールラム大学主催講演会、アールラム大学（米国）
 2014年2月9日 「世界をさわる手法を求めて」プリンストン日本語学校主催講演会、プリンストン日本語学校（米国）
 2014年2月10日 「Hands of a Goze」イェール大学人類学部主催講演会、イェール大学（米国）
 2014年2月12日 「Hands of a Goze」プリンストン大学東アジア学部主催講演会、プリンストン大学（米国）
 2014年2月27日 「Research on Methods of “Touching the World”」モンタナ州立大学人類学部主催講演会、モンタナ州立大学（米国）
 2014年3月23日 「信仰と文化の継承について」シカゴ地区「天理教よのもと会」主催講演会、天理教イリノイ教会（米国）

2014年3月24日 「The World Through Touch」シカゴ市立ナマステ・チャータースクール主催講演会、シカゴ市立ナマステ・チャータースクール（米国）

・ 広報・社会連携活動

- 2013年4月27日 体験プログラム「瞽女文化にさわる」新展示フォーラム
- 2013年5月25日 体験プログラム「瞽女文化にさわる」新展示フォーラム
- 2013年6月16日 「瞽女文化と現代——盲目の旅芸人の実像」第303回みんなのウィークエンド・サロン
- 2013年6月22日 体験プログラム「瞽女文化にさわる」新展示フォーラム
- 2013年7月27日 体験プログラム「瞽女文化にさわる」新展示フォーラム
- 2013年9月14日 ザ・ドキュメント「世界を触れ！」出演、関西テレビ放送

◎調査活動

・ 国内調査

- 2013年7月7日～9日—宮崎県延岡市・日南市（琵琶法師に関する資料収集、関係者からの聞き取り調査）
- 2013年7月17日～19日—千葉県旭市（瞽女文化に関する資料収集、音訳ボランティアからの聞き取り調査）

・ 海外調査

- 2013年5月31日～6月5日—ロシア（国際博物館大会参加）
- 2013年8月5日～2014年3月31日—アメリカ合衆国（総合研究大学院大学「若手教員海外派遣事業」による米国調査研究）

◎大学院教育

・ 大学院ゼミでの活動

「比較文化特論」（2013年5月17日、6月14日、7月12日）

◎社会活動・館外活動

・ 他の機関から委嘱された委員など

吹田市立博物館協議会委員

・ 非常勤講師

筑波大学理療科教員養成施設「視覚障害教育」（集中講義）、関西学院大学「障害者と人権」

山中由里子 [やまなか ゆりこ] ————— 准教授

1966年生。【学歴】カラマズー大学フランス語／美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退（1993）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1992）、東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）【学位】学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）【専攻・専門】比較文学比較文化 西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究【所属学会】日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会

【主要業績】

[単著]

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

[共編]

Yamanaka, Y. and T. Nishio (eds.)

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West*. London: I. B. Tauris.

[論文]

Yamanaka, Y.

2012 The Islamized Alexander in Chinese Geographies and Encyclopaedias. R. Stoneman, K. Erickson and I. Netton (eds.) *The Alexander Romance in Persia and the East* (Ancient Narrative Supplements 15) pp. 263-274, Groningen: Barkhuis.

【受賞歴】

2011 日本学術振興会賞

- 2011 日本学士院学術奨励賞
2010 島田謹二記念学藝賞
2010 日本比較文学会賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

・研究の目的、内容

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で *mirabilia*、アラビア語・ペルシア語で *'ajā'ib* と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。本研究で明らかにしようとする問題点は、次の3つの主要な軸にまとめることができる

- 1) ジャンルの枠組とモチーフの分類：驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手（あるいは編纂者）によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通する主なモチーフや逸話を関連作品から抽出し、「異民族の驚異」、「異境の驚異」、「太古の驚異」といった分類を試みる。
- 2) 知識の伝播と世界観の変遷：権力の移行、人間の移動、書物・視覚イメージの普及など、知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的な脈絡を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。さらに、世界地図や挿絵・装飾などの視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。
- 3) 宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性：上記1)と2)のような比較研究を通して、宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語り手の力を明らかにする。

・成果

7月にパリ大学で開かれた国際比較文学会大会の幻想文学パネルにおいて“Not ‘just’ Fantasy: A Comparative Study of Mediaeval Marvel Literature in the Middle East and Europe”、9月にはミュンスター大学で開かれたドイツ東方学会において“‘Ajā’ib as Discourse on Cultural Relativism? A Comparative Study of Persian, Arabic, European and Chinese Marvel Literature”、さらに11月には東京大学比較文学比較文化研究室主催の国際コロキウムにおいて“Not ‘Just’ Fantasy: Mediaeval Perspectives on the Marvelous and Uncanny”を発表した。

本研究は、「中東およびヨーロッパにおける驚嘆譚の比較文学的研究」と題して、科学研究費補助金（基盤研究(B)）の交付を受けている。また、共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」と連携しており、研究成果となる論文集刊行の準備に入っている。さらに、機構連携研究「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」とも連携しており、11月に国際日本文化研究センターで開かれた国際研究集会「怪異・妖怪文化の伝統と創造——ウチとソトの視点から」で発表し、連携研究メンバーとの意見交換を行った。

◎出版物による業績

[論文]

山中由里子

2013 「女人族伝承の東西伝播」『中央評論』（特集：驚異と好奇心）284：59-73。

Yamanaka, Y.

2013 The Arabian Nights in Traditional Japanese Performing Arts. In M. Warner and P. F. Kennedy (eds.) *Scheherazade's Children: Global Encounters with the Arabian Nights*, pp. 274-281, New York: New York UP.

[その他]

山中由里子

2013～2014 「編集後記」『月刊みんぱく』37(4)～38(3)。

2014 「天馬空を行く——馬のファンタジー」『月刊みんぱく』38(1)：8。

2014 「驚異の体系化」『民博通信』144：20-21。

2014 「時のとらえ方、描かれ方」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションに探る』pp. 104-106, 大阪：国立民族学博物館。

2014 「The Experience of Time」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションに探る』pp. 211-213, 大阪：国立民族学博物館。

2014 「ドリームタイム」『月刊みんぱく』38(3): 10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年4月23日 ‘From Alexander to Iskandar: Alexander Traditions in the Islamic World,’ Conferencia patrocinada pola Cátedra Jean Monnet “A Cultura da Integración Europea,” Universidade de Santiago de Compostela (USC), Spain

2013年7月24日 ‘Not “just” Fantasy: A Comparative Study of Mediaeval Marvel Literature in the Middle East and Europe,’ 20th Congress of the International Comparative Literature Association, University of Paris, France

2013年9月24日 ‘‘*Aja’ib* as Discourse on Cultural Relativism? A Comparative Study of Persian, Arabic, European and Chinese Marvel Literature,’ 32. Deutscher Orientalistentag, University of Münster, Germany

2013年11月26日 「未知との遭遇——驚異と怪異の比較研究」国際研究集会『怪異・妖怪文化の伝統と創造——ウチとソトの視点から』国際日本文化研究センター

2013年11月29日 ‘Not “Just” Fantasy: Mediaeval Perspectives on the Marvelous and Uncanny,’ International Colloquium “The Future of Comparative Literature,” 東京大学駒場キャンパス

2014年3月13日 「アレクサンドロス伝承が結ぶ——古代アレクサンドリア、中世イスラーム世界、宋・明中国」d-labo ミッドタウン（東京）。

2014年3月25日 ‘Authenticating the Incredible: Comparative Study of Narrative Strategies in Arabic and Persian ‘*Aja’ib* Literature,’ “Strategies of Preservation and Guardianship of the Authorial Composition in Medieval Arabic and Persian Literature” (2d/8th-9th/15th centuries), The Hebrew University of Jerusalem, Israel

・展示

「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員、本館展示新構築総括班

・広報・社会連携活動

『月刊みんぱく』編集長

2013年3月15日～16日 「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」展関連ワークショップ「わたし みんな めぐる イメージ——世界のもの向き合おう」講師、国立民族学博物館・国立新美術館共催、国立新美術館

◎調査活動

この部分は電子媒体による公開の許諾が得られていません

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国際日本文化研究所共同研究「21世紀10年代日本文化の軌道修正——過去の検証と将来への提言」共同研究員、人間文化研究機構小型連携研究「画中画の世界」共同研究員

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

日本学術振興会日独先端科学シンポジウム (JGFos) Planning Group Member、日本比較文学会関西支部幹事、

日本比較文学会国際活動委員会

齋藤玲子 [さいとう れいこ] ————— 助教

1966年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1989）【職歴】北海道教育委員会社会教育課学芸員（1989）、北海道立北方民族博物館学芸員（1990）、北海道立北方民族博物館主任学芸員（2005）、北海道立北方民族博物館学芸主幹（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部助教（2011）【専攻・専門】文化人類学・アイヌの文化変容と表象、北アメリカ北西海岸先住民の美術工芸【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[編著]

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶——イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

[論文]

齋藤玲子

2006 「極北地域における毛皮革の利用と技術」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp. 65-83, 札幌：北海道大学出版会。

2001 「北海道観光案内のなかのアイヌ文化紹介の変遷——昭和期の旅行案内・北海道紹介記事の考察をとおして」『他者像としてのアイヌ民族イメージを検証する——文化人類学におけるアイヌ民族研究の新潮流』（昭和女子大学国際文化研究所紀要6）pp. 29-42, 東京：昭和女子大学国際文化研究所。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アイヌの工芸の変遷に関する研究

・研究の目的、内容

昨年・一昨年度に引き続き、明治～昭和初期に収集された資料を中心に、アイヌの工芸の変遷について研究を行う。アイヌがつくった生活用具等は、和人や外国人によって記録や収集品が残され、アイヌ文化が大きく変容する時代の貴重な証左となっている。物質文化研究のみならず、近年は記録者・収集者とアイヌの人びとの関係やアイヌ文化がどのように表象されてきたかを読みとること、およびアイヌの主体性についての研究が求められており、そうした視点で研究を進める。今年度は、2012年秋にスタートした共同研究「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」の一環として、および秋季特別展のため、特に日本民族学会附属民族学博物館（在・旧保谷市）旧蔵のアイヌ資料の収集過程をたどり、情報の再検討をおこないながら、当時の工芸品の製作状況等について明らかにしたい。

・成果

特別展で展示する日本民族学会附属民族学博物館（アチック・ミュージアム時代の資料を含む）旧蔵資料を中心に、データの再検討と収集時の状況の研究をおこなった。その過程で、日本民族学会附属研究所の研究員で同附属博物館の中心的人物であった宮本馨太郎氏（1911～1979）の子息が理事長を務める宮本記念財団に、馨太郎氏が1938年に樺太で調査・収集をした時の写真および資料カードと1950年に同館の敷地にアイヌの伝統的家屋（チセ）を建設した際の写真等が保存されていることがわかった。これらにより、収集当時のアイヌの物質文化の使用状況や製作過程が判明したものもあった。成果の一部は、特別展『渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』図録および、共同研究の中間報告として『民博通信』No. 145に寄稿した。

◎出版物による業績

[論文]

齋藤玲子

2014 「鳥居龍蔵の見た北方の民族の交流と境界」ヨーゼフ・クライナー編『日本とはなにか——日本民族学の二〇世紀』pp. 24-39, 東京：東京堂出版。

[その他]

齋藤玲子

2013 「旅・いろいろ地球人 緑薫る② 北国の山菜採り」『毎日新聞』5月9日夕刊。

- 2013 「日本北部周辺の先住民民族資料の理解のために」『民博通信』141：18-19。
- 2013 「北海道・樺太」『特別展渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』pp. 146-156, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「過去と現在をつなぐ資料」『特別展渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』157, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「アイヌ家屋の野外展示」『特別展渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』pp. 158-159, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「みんなく世界の旅 渋沢敬三③」『毎日小学生新聞』10月19日。
- 2013 「まなざしの広がり 北海道・樺太、台湾、朝鮮半島の収集資料」『月刊みんなく』37(11)：6-7。
- 2014 「描かれたイヌイットの生活と精神世界」『山陰中央新報』1月14日。
- 2014 「商品としての新たな意味づけ」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』pp. 192-194, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2013年9月24日 「民族学資料の古い記述を確かめ登録するために——東京大学理学部人類学教室旧蔵資料を例に」国際ワークショップ『民族学資料の記録化・情報化の諸問題』ロシア民族学博物館（機関研究 代表：佐々木史郎「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」）
- 2013年10月13日 「北海道立北方民族博物館のシベリアおよび極東ロシア民族資料の収集と展示」（北海道立北方民族博物館・中田 篤と共同発表）国際シンポジウム「博物館コレクションの中のシベリア、極東諸民族の文化——収集、保存、展示方法の検討」国立民族学博物館

・共同研究会

- 2013年11月9日 「東京大学理学部人類学教室旧蔵資料の情報カードについて——報告と検討」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルト、ニヅフ資料の再検討』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年10月18日 「鳥居龍蔵の見た北辺の民族の交流と境界」国際シンポジウム『日本とはなにか——日本民族学の20世紀——鳥居・澁澤・梅棹・佐々木』法政大学国際日本学研究所

・展示

- 「特別展 渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」実行委員
「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員

・広報・社会連携活動

- 2013年7月23日 「国立民族学博物館の活動と資料管理」神戸女子大学「博物館実習」
- 2013年7月27日 「最高級の矢羽の交易——アイヌ」『企画展「アマゾンの生き物文化」トークイベント 鳥の羽いろとりどり』
- 2013年8月6日 「ものづくりとiPadを用いた現地学習」講師（文教大学 今田晃一、立命館守山中学校・高等学校 木村慶太、葛城市立磐城小学校 山田幸生とともに）『博学連携教員研修ワークショップ 2013 in みんなく』
- 2013年11月21日 「ミンパク オッタ カムイノミ」司会・解説
- 2013年11月24日 「アイヌの工芸について」第321回みんなくウィークエンド・サロン
- 2014年1月17日 企画展「イヌイット版画 カナダ先住民の生み出す美」ギャラリートーク、松江歴史館
- 2014年3月15・16日 「わたし みんな めぐる イメージ——世界のものと向き合おう」講師（吉田憲司、山中由里子、上羽陽子ほかとともに）『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』展関連ワークショップ、国立新美術館

◎調査活動

・国内調査

- 2014年3月28日—東京大学情報学環附属社会情報研究センター（坪井正五郎資料調査）

・海外調査

- 2013年9月22日～9月29日—ロシア（機関研究に係る国際ワークショップ「民族学資料の記録化、情報化の諸問題」参加）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

「民族共生の象徴となる空間」における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会臨時委員、カナダ国立美術館（National Gallery of Canada）特別展「Sakahàn: International Indigenous Art」諮問委員、北海道立北方民族博物館研究協力員

・非常勤講師

神戸女子大学「多文化共生論」

藤本透子 [ふじもと とうこ] ————— 助教

1975年生。【学歴】京都大学文学部史学科卒（1998）、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士（2002）、京都大学大学院人間・環境学研究科環境関連研究専攻博士課程研究指導認定退学（2007）【職歴】日本学術振興会特別研究員（2006）、京都大学大学院人間・環境学研究科研修員（2008）、国立民族学博物館機関研究員（2010）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2010）修士（人間・環境学）（京都大学大学院人間・環境学研究科 2002）【専攻・専門】文化人類学、中央アジア地域研究【所属学会】日本文化人類学会、日本中央アジア学会、日本中東学会、日本イスラム協会

【主要業績】

[単著]

藤本透子

2011 『よみがえる死者儀礼——現代カザフのイスラーム復興』東京：風響社。

2010 『カザフの子育て——草原と都市のイスラーム文化復興を生きる』（ブックレット《アジアを学ぼう》⑱）東京：風響社。

[論文]

Fujimoto, T.

2011 Kazakh Memorial Services in the Post-Soviet Period: A Case Study of Northern Kazakhstan Villages. In T. Yamada and T. Irimoto (eds.) *Continuity, Symbiosis, and the Mind in Traditional Cultures of Modern Societies*, pp. 117-132, Sapporo: Hokkaido University Press.

[受賞]

2013 人間文化研究奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中央アジアにおける社会再編とイスラームに関する人類学的研究——カザフスタンの事例から

・研究の目的、内容

中央アジアの人類学研究は、これまで主にポスト社会主義人類学の枠組みで行われてきたが、現在では社会主義の影響を問うこと自体よりも、中央アジアという地域やイスラームという宗教の特徴に深く根ざした研究が必要となっている。中央アジア諸国では、それぞれ異なるかたちでイスラームが社会再編に一定の役割を果たしてきたが、カザフスタンではイスラームの再活性化が国境を越えた移動と結びつくという新たな現象が顕著である。本研究では、一方では特定の中東諸国との関係、他方ではカザフスタン国外のカザフ人ディアスポラとの関係に着目し、カザフスタンにおいてイスラームが再構築され社会空間を創出していくメカニズムを読み解くことを目的としている。

・成果

1) カザフのイスラーム動態と共同性再構築に関する調査研究

中央アジアのテュルク系民族であるカザフ人は、カザフスタンに1000万人が暮らすほか、中国、ウズベキスタン、モンゴル、トルコなどにも約300万人が居住している。1990年代以降、これらの在外カザフ人の一部がカザフスタンに「帰還」する動きが生じている。このユーラシア全体におよぶ広範な移動をふまえて、科学研究費補助金（基盤研究（B））「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」（代表：山田孝子）の分担者として、イスラーム動態と共同性再構築に関する調査をカザフスタン、ウズベキス

タン、モンゴルで行った。その結果、社会主義体制から移行直後にはカザフスタンに「帰還」したカザフ人がイスラームの再活性化に一定の役割を果たしたものの、その後はカザフスタンと在外カザフ社会のイスラームをとおした連携は部分的なものにとどまっていること、カザフスタンとモンゴルが中東諸国との選択的連携に基づいてそれぞれ独自にイスラームを再活性化させていることが明らかとなった。その成果の一部は、次の論文としてまとめた。

藤本透子 「在外カザフ社会のイスラーム動態」王 柳蘭編『下からの共生——複相化する地域への視座』(CIAS Discussion Paper 39) pp. 62-73, 京都：京都大学地域研究統合情報センター。

また、カザフスタンにおける宗教動態と社会再編に関する研究成果は、「カザフの死者儀礼——日常から展望するイスラーム」(第427回みんぱくゼミナール, 2013年12月21日)として社会還元した。

2) 中央アジア展示新構築

2015年度の中央・北アジア展示新構築にむけて中央アジア資料の充実を図るため、文化資源プロジェクト「中央・北アジア展示新構築のための資料収集」の代表者として、カザフスタンで標本資料を収集した。収集資料は、祝祭用に手作りされた民族衣装や、持参財として製作されたフェルト製敷物、天幕の壁掛け用刺繍布、揺りかご、儀礼で贈与されたキツネ毛皮製外套、牧畜に関わる生活用品、イスワシを用いた狩猟の道具一式など約70点である。また、ウズベキスタンでは、約30年前に製作された民博の「タシュケントの民家」10分の1模型のモデルとなった民家を訪問し、そこに暮らすウズベク人家族から当時の状況や、現在までの家族生活および民家の変化に関する聞き取りを行った。これらの成果の一部は、機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究」に基づく下記の国際ワークショップで発表した。

Fujimoto, T. 'Renewing the Central Asian Exhibition at the National Museum of Ethnology.' International Workshop "Documentation and Recording of the Ethnographical Objects in the Museums" (Russian Museum of Ethnology, St. Petersburg, Russia, 2013年9月25日)

また、「みんぱくコレクションを語る——中央アジアの民家の現在」(第427回みんぱく友の会講演会, 2014年1月11日)で、新規収集資料を提示しつつ中央アジア社会の変容について紹介した。

3) 民博共同研究(若手)「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」の成果とりまとめ

2012年度に終了した上記の共同研究の代表者として、論文「移動が生み出すイスラーム動態——国境を隔てたカザフ社会の再編過程から」を執筆したほか、共同研究員の論文6本のとりまとめを行った。本共同研究では、社会主義を経験したアジアを対象として、イスラーム、シャマニズム、仏教、ボン教など多様な宗教が、地域社会との関係性を変化させながら(再)活性化していくメカニズムを論じている(『現代アジアの宗教——社会主義を経た地域を読む』として外部出版を申請中)。

◎出版物による業績

[論文]

藤本透子

2014 「在外カザフ社会のイスラーム動態」王 柳蘭編『下からの共生——複相化する地域への視座』(CIAS Discussion Paper 39) pp. 62-73, 京都：京都大学地域研究統合情報センター。

[その他]

藤本透子

2013 「書評へのリプライ」『宗教と社会』19：175-176。

2013 「中央アジアの日本人抑留者」『月刊みんぱく』37(9)：21。

2013 「イスラーム復興」『月刊みんぱく』37(10)：20。

2013 「重層する時間——カザフ草原における暮らしと信仰のリズム」『季刊民族学』146：56-63。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年9月25日 'Renewing the Central Asian Exhibition at the National Museum of Ethnology,' International Workshop "Documentation and Recording of the Ethnographical Objects in the Museums," Russian Museum of Ethnography, St. Petersburg, Russia

2014年3月29日 パネルディスカッション「出会いとフィールド・ワーク」公開シンポジウム『片倉もところ先生をフィールド・ワークする』国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2013年12月21日 「カザフの死者儀礼——日常から展望するイスラーム」第427回みんぱくゼミナール

・ 広報・社会連携活動

2014年1月11日 「みんなばくコレクションを語る——中央アジアの民家の現在」第427回国立民族学博物館友の会講演会

2014年1月26日 「ウマと暮らす——カザフスタンの草原の村から」第329回みんなばくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・ 海外調査

2013年7月29日～9月5日—カザフスタン、ウズベキスタン（中央アジア展示新構築のための標本資料収集、カザフ人ディアスポラに関する科研調査）

2013年9月22日～10月26日—ロシア、カザフスタン（国際ワークショップ「民族学資料の記録化・情報化の諸問題」参加、カザフ人の移動に伴う宗教動態に関する現地調査、中央アジア展示新構築のための標本資料収集）

2014年3月18日～3月27日—モンゴル（在外カザフ社会における祝祭と共同性の再構築に関する調査）

◎上記以外の研究活動

・ 人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「移動と宗教実践——地域社会の動態に関する比較研究」（代表：小島敬裕）共同研究員、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る」（代表：帯谷知可）共同研究員

先端人類科学研究部

寺田吉孝 [てらだ よしたか]————— 部長（併）教授

1954年生。【学歴】ワシントン大学総合学部学士課程修了（1979）、ワシントン大学音楽部修士課程修了（1983）、ワシントン大学音楽部博士課程修了（1992）【職歴】ワシントン大学音楽部講師（1994）、ピッツバーグ大学船上大学プログラム講師（1995）、国立民族学博物館第2研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2008）【学位】Ph. D.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1992）、M. A.（ワシントン大学音楽部民族音楽学科 1983）【専攻・専門】民族音楽学 1）南インド音楽文化の研究 2）南フィリピン人のゴング音楽の研究 3）北米のアジア系音楽の研究【所属学会】東洋音楽学会、Society for Ethnomusicology、International Council for Traditional Music、Society for Asian Music、British Forum for Ethnomusicology

【主要業績】

[編著]

Terada, Y. (ed.)

2008 *Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan* (Senri Ethnological Studies 71). Osaka: National Museum of Ethnology.

2001 *Transcending Boundaries: Asian Musics in North America* (Senri Ethnological Reports 22). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Terada, Y.

2000 T. N. Rajarattinam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460-490.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・ 研究課題

- 1) 音楽・芸能の伝承における映像音響メディアの活用
- 2) インド音楽・舞踏のグローバル化

・研究の目的、内容

- 1) 民博が映像メディアを用いて蓄積してきた音楽・芸能の情報はすでに膨大な量に達しており、その資料的価値は高い。しかし、活発な収集・制作活動に比べ、映像音響資料の活用に関する議論はこれまで十分に行われておらず、館外での利用、特に取材対象国・地域における利用は極めて限定的である。本研究は、これまでの番組作成と活用のプロセス（事前調査、取材、編集、上映など）を見直し、音楽・芸能の伝承に寄与することができる映像番組の制作方法を検討することを目的とする。
- 2) インドの音楽・舞踊はインド国内だけでなく、欧米・アジアのインド人コミュニティなどにおいても活発に実践されている。本研究は、インド国内外の複数地域で調査を行うことにより、これまで地域ごとに考察されてきたインド音楽・舞踊の実践を、グローバルな人的・経済的ネットワークの枠組みの中で統合的に分析することを目的とする。インド起源の音楽・舞踊が、グローバル化を背景にして、鳴り響く音響や身体の動きとそれらを支える社会関係の両面で、急激に変容している点を明らかにしたい。

・成果

- 1) 2013年3月にフィリピンで行った一連の上映会に基づいて、映像メディアを用いた研究と保存に関する論文を刊行した。2014年2月にはロンドン大学ゴールドスミス校（イギリス）で開催された国際シンポジウムにおいて、映像メディアが無形文化遺産の保全に果たしうる役割について発表を行うとともに、民博製作映像番組の上映会を計4回行った。また、ネパール、国内（大阪）でも上映会を行い、視聴者からの反応に基づいて映像メディアの活用について考察を進めた。なお、本研究は人間文化研究機構連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」（代表：福岡正太）および科学研究費補助金（基盤研究（B））「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」（代表：福岡正太）の一環として実施したものである。
- 2) 昨年度に引き続き、カナダのトロント市において現地調査を行った（2013年8月）。インド系舞踊グループ（サンブラダヤ舞踊団、ジャナク・ケンドゥリ舞踊団）の活動実態を調査するために個人練習、リハーサル、公演などを視察し、メンバーの経歴や参加動機などに関する情報を収集するためにインタビューを行った。また、南インド音楽・舞踊の最大のパトロンであるスリランカ系タミル人コミュニティに関する調査を行い、集住地域の歴史や現在の労働・生活環境に関する資料を収集した。本研究は人間文化研究機構推進事業「現代インド地域研究」民博拠点（代表：三尾 稔）および科学研究費補助金（基盤研究（B））「インド音楽・舞踊のグローバル化に関する総合的研究」（代表：寺田吉孝）に基づいて実施したものである。研究成果の一部を東洋音楽学会の年次大会（2013年10月、浜松）で発表した。

◎出版物による業績

[論文]

Terada, Y.

2013 Audiovisual Ethnography of Philippine Music: A Process-oriented Approach. *Humanities Diliman* 10(1): 90-112.

[その他]

寺田吉孝

2013 「旅・いろいろ地球人 音の響き④ 虫の知らせ」『毎日新聞』7月18日夕刊。

2013 「旅・いろいろ地球人 映画⑤ 音楽を『語る』」『毎日新聞』9月19日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・映像番組制作

[マルチメディア番組]

寺田吉孝監修

2013 『遠い記憶、呼びさます声——ダナンマル家の南インドの古典音楽』日本語。

2013 「Voices of Distant Memories: South Indian Classical Music of the Vina Dhanammal Lineage」英語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年5月25日 「フィリピンにおける民博映像番組の上映会」連携研究『映像による芸能の人間文化資源的活用』研究会、国立民族学博物館

2013年7月12日 パネリスト、国際伝統音楽評議会 第42回世界大会 “Minorities, Musicians and Powers” 上海音楽院（上海、中国）

2013年11月10日 「トロント市における南インド舞踊の実践」東洋音楽学会第64回大会、静岡文化芸術大学

2014年2月20日 ‘A Process-oriented Applications of Audiovisual Media in Safeguarding Intangible Heritage.’ 国際シンポジウム “Safeguarding Music Heritage,” ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ (ロンドン、イギリス)

・研究講演

2013年10月31日 「太鼓とタイコのお話」 智辯学園中学校

2013年12月20日 「チャルメラ——郷愁の音、異界の音」 立花市民大学 (尼崎市立立花公民館)

2014年1月10日 「フィリピン (系アメリカ) 音楽とは何か? ——アイデンティティ交渉の場としてのゴング音楽」 上智大学アジア文化研究所

2014年3月30日 「映像メディアを用いた研究と博物館活動」 第338回みんなくウィークエンド・サロン

・広報・社会連携活動

[映像番組上映]

2013年9月22日 「怒——大阪浪速の太鼓集団」 大阪人権博物館

2013年11月23日 The Maranao Culture at Home and in Diaspora 第3回国際民俗音楽映画祭 (カトマンドゥ、ネパール)

2014年2月17日 Angry Drummers: A Taiko Group from Osaka, Japan ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ (ロンドン、イギリス)

2014年2月18日 Angry Drummers: A Taiko Group from Osaka, Japan ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (ロンドン、イギリス)

2014年2月20日 Sbaek Thomm: The Large Shadow Puppet Theater of Cambodia ロンドン大学ゴールドスミス校 (ロンドン、イギリス)

2014年2月22日 Drumming out a Message: Eisa and the Okinawan Diaspora in Japan ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (ロンドン、イギリス)

◎調査活動

・海外調査

2013年8月7日～8月29日—カナダ (インド音楽・舞踊のグローバル化に関する調査、タミル人コミュニティにおける南インド舞踊の受容に関する調査)

2013年11月21日～12月11日—ネパール (「第3回ネパール国際民俗音楽映画祭」参加および民博制作映像番組「マラナオ伝統文化とディアスポラ」上映、南アジア展示新構築のための標本資料収集)

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員 (2人)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 「インド音楽・舞踊のグローバル化に関する総合的研究」 研究代表者、科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「インド音楽世界の定量的研究」 研究分担者、科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」 研究分担者、人間文化研究機構 連携研究「映像による芸能の人間文化資源の活用」 研究分担者、人間文化研究機構「現代インド地域研究」 民博拠点 拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

国際シンポジウム MusiCam 2014 (スペイン) プログラム委員、国際伝統音楽評議会 International Council for Traditional Music、理事、RILM 派遣委員、学会誌 Yearbook for Traditional Music フィルムレビュー編集委員、「音楽とマイノリティ」 研究グループ書記長、Asian Music 誌 (アメリカ合衆国) 編集助言委員、Ethnomusicology Forum 誌 (イギリス) 編集助言委員、ネパール民俗音楽映画祭 (ネパール) 国際運営委員

・非常勤講師

京都市立芸術大学「アジア文化史Ⅱ」(集中講義)

1957年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科第一卒（1981）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1983）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1985）【職歴】国立民族学博物館第1研究部助手（1985）、大阪大学言語文化部助教授（1991）、国立民族学博物館第4研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター長併任（2004-2007）、国立民族学博物館副館長併任（2010-2012）【学位】学術博士（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学 1）シベリア、ロシア極東先住民の狩猟文化、トナカイ飼育文化の研究、2）ロシア極東先住民の近世史、近代史の研究【所属学会】日本文化人類学会、言語文化学会

【主要業績】

[単著]

佐々木史郎

1996 『北方から来た交易民——絹と毛皮とサンタン人』（NHK ブックス772）東京：日本放送出版協会。

[編著]

Sasaki, S. (ed.)

2009 *Human-Nature Relation and Historical-Cultural Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan* (Senri Ethnological Studies 72).
Osaka: National Museum of Ethnology.

佐々木史郎・加藤雄三編

2011 『東アジアの民族の世界——境界地域における多文化的状況と相互認識』東京：有志舎。

【受賞歴】

1997 第25回澁澤賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アムール川下流域における近世から近代への転換

・研究の目的、内容

本研究は、これまで継続してきたアムール川下流域の歴史に関する研究の一部であり、各論である。本年度も昨年度に引き続き、ウデへとナーナイという特定の民族を対象にして、支配者が前近代的な中華王朝の清朝から、近代国家ロシア帝国、社会主義国家ソ連、そして現代のロシア連邦へと交替したことによる、アムール川の先住諸民族の社会と文化の変容を、氏族、集落、個人といったより小さい単位に掘り下げていく。

・成果

本年度は、本館機関研究『中国における家族・民族・国家のディスコース』（代表：韓 敏 2012年度～2014年度）での活動の一環として研究を行った。ことに第2回国際シンポジウム「中日人類学・民族学的理論刷新と田野調査」（2013年11月18日～19日、北京、中国社会科学院民族学・人類学研究所）で「博物館における赫哲族の歴史・文化表象」という研究報告を行い、その内容をさらに充実させた論考を『国立民族学博物館研究報告』に投稿した。そこでは、中国の赫哲族、ロシア側のナーナイという先住民族の文化が民族誌や博物館展示でどのように表象されてきたのか、それらは次々に明らかにされる歴史的な事実によって今後いかに修正されるべきであるのかという点を検討した上で、人類学的な研究において歴史的な事象はどのように取り扱えばよいのかという点についてまで考察を広げた。

また、2012年6月に実施された東アジア近代史学会主催のシンポジウムでの報告を元に書き上げた「一九世紀の国境策定と先住民——アムール、樺太、千島における日口中のせめぎあいの中で」（『東アジア近代史』第16号, pp. 23-44, ゆまに書房, 2013年）という論文では、19世紀後半にアムール川流域に近代という時代が訪れることによって、その住民たち（現在の先住民族、少数民族の直近の祖先）の中国、ロシアといった国家における地位がどのように変化し、それがこの地域における国境策定にどのように影響したのかということをも明らかにした。

◎出版物による業績

[論文]

佐々木史郎

- 2013 「シベリアに進出した狩人たち——北方狩猟民の寒冷地適応戦略」印東道子編『人類の移動誌』pp. 94-108, 京都：臨川書店。
- 2013 「一九世紀の国境策定と先住民——アムール、樺太、千島における日口中のせめぎあいの中で」『東アジア近代史』16：23-44。
- 2014 「鳥居龍蔵が会った北方民族——千島アイヌ」ヨーゼフ・クライナー編『日本とは何か——二〇世紀の民族学』pp. 78-96, 東京：東京堂出版。

[その他]

佐々木史郎

- 2014 「旅・いろいろ地球人 冬を楽しむ⑤ カワカマスの穴釣り」『毎日新聞』1月16日夕刊。
- 2014 「みんぱく世界の旅 ロシア① ロシアの成り立ち」『毎日小学生新聞』1月25日。
- 2014 「みんぱく世界の旅 ロシア② 文化と芸術の中心地」『毎日小学生新聞』2月1日。
- 2014 「みんぱく世界の旅 ロシア③ アジアの玄関口」『毎日小学生新聞』2月8日。
- 2014 「みんぱく世界の旅 ロシア④ とても寒い所に暮らす人々」『毎日小学生新聞』2月15日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年7月3日 「Вклад к изучению по айнам: Русскими академическими экспедициями на Курильские острова в XVIII веке,» “Секция 31. Кунсткамера и Академия наук в социокультурной модернизации России XVIII в.” (X Конгресс этнографов и антропологов России), Институт этнологии и антропологии РАН, Москва.
- 2013年9月23日 「国立民族学博物館における民族学資料の文書化、情報化の基本方針」第2回国際ワークショップ『民族学資料の記録化・情報化の諸問題』（機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究：ロシア民族学博物館との国際共同研究」）、ロシア民族学博物館、サンクトペテルブルク
- 2013年10月18日～19日 「コメント『鳥居龍蔵』」、「コメント『ナラ林文化論』」国際シンポジウム『日本とは何か——日本民族学の20世紀——鳥居・濫澤・梅棹・佐々木」、法政大学国際日本学研究所
- 2013年11月9日 「ナラ林文化の再検討：北からの視点」佐々木高明先生追悼シンポジウム『日本文化のしくみ——その多様性を考える』国立民族学博物館
- 2013年11月18日 「博物館における赫哲族の文化・歴史表象」『中日人類学・民族学的理論刷新与田野調査』（機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」）中央民族大学（北京）

◎調査活動

・海外調査

- 2013年7月1日～7月5日—ロシア（第10回全ロシア人類学者民族学者会議参加）
- 2013年8月5日～8月21日—ウズベキスタン（中央・北アジア展示新構築のための資料収集）
- 2013年9月2日～9月9日—中華人民共和国（中国大陸における少数民族の集落形成に関する研究）
- 2013年9月22日～9月29日—ロシア（機関研究に係る国際ワークショップ「民族学資料の記録化、情報化の諸問題」参加）
- 2013年11月17日～11月20日—中華人民共和国（機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」第2回国際シンポジウム参加）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1名）、副指導教員（1名）

・論文審査

予備審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

北海道大学スラブ研究センター共同利用・共同研究拠点運営委員会委員、文化庁「民族共生の象徴となる空間」における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会委員、アイヌ文化振興・研究推進機構評議委員

【学歴】東北大学薬学部薬学科卒（1981）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（1996）【職歴】財団法人仙台複素環化学研究所研究員（1981）、中外製薬株式会社国際開発部（1982）、財団法人相模中央化学研究所第4研究班研究員（1983）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師（1997）、京都文教大学人間学部助教授（2000）、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授（2002）、マギル大学人類学部客員助教授（2003）、放送大学文化人類学'04分担任協力講師（2004）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任教授（2005）、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2007）、放送大学客員教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2009）【学位】博士（学術）（お茶の水女子大学 1996）、修士（人文科学）（お茶の水女子大学 1992）、学士（薬学）（東北大学 1981）【専攻・専門】歴史人類学、医療社会史【所属学会】日本文化人類学会、日本教育学会、日本医史学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会、Association for Anthropology and Gerontology、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)

【主要業績】

〔単著〕

鈴木七美

2002 『癒しの歴史人類学——ハーブと水のシンボリズムへ』京都：世界思想社。

1997 『出産の歴史人類学——産婆世界の解体から自然出産運動へ』東京：新曜社。

〔編著〕

鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広編

2010 『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』東京：御茶の水書房。

【受賞歴】

1998 第13回女性史青山なを賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

高齢期のウェルビーイングと住環境の展開に関する応用人類学研究

・研究の目的、内容

高齢化する現代社会において、高齢者のニーズに応える環境について研究してきた。今年度は高齢者を対象として開発されてきた「高齢者コミュニティ」の研究動向に関し、国際共同研究を担う研究推進を目的として、情報を整理・蓄積する。また、終末期のケアとしても注目されている「オルタナティブ・メディシン」の適用に関し、実践の場への情報提供を念頭に、現地調査を開始し情報を蓄積する。さらに、エイジング研究の新しい動向に関し情報を蓄積する。

・成果

2013年度科学研究費補助金（基盤研究（C））（一般）「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」（研究代表者：鈴木七美）に関連し、エイジングに関する比較文化研究と社会的包摂に向けた実践に関し現地調査を進めた。また、「エイジフレンドリー・コミュニティ」研究動向を国際人類学民族学連合（IUAES2013）のパネルにおいて蓄積した。得られた知見を、第20回日本未病システム学会学術総会シンポジウムにおける招待講演「ウェルビーイングとケア・養生の文化」、および高齢者の住環境開発に関する研究集会「人間文化研究機構公開講演会 高齢期の多様な住まい方とウェルビーイング」の企画に生かした。

多文化社会における高齢者のウェルビーイングと住環境の開発に関わり、「2012年アメリカにおけるエイジング会議」（2012 Aging in America Conference、3月31日、Washington, DC）で企画開催したパネル「多文化高齢社会における文化再考」（Rethinking the Meaning of Culture in a Multicultural Aging Society）で発表したカナダの実践者との共同研究の内容を精査し、Senri Ethnological Studiesの論文としてまとめた。

◎出版物による業績

[編著]

Suzuki, N.

- 2014 *The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies* (Senri Ethnological Studies 87). Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Suzuki, N.

- 2014 The Values Transmitted by Lifelong Education in Denmark: The Conditions of Social Inclusion. In N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies* (Senri Ethnological Studies 87), pp. 175-199. Osaka: National Museum of Ethnology.

Suzuki, N. with Tilda Hui

- 2014 Development of a Life-care Community a “Town” Enriched with Diverse Ethnic Cultures: Focusing on the Cooperation of People Having Chinese and Japanese Cultural Backgrounds. In N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies* (Senri Ethnological Studies 87), pp. 129-147. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

鈴木七美

- 2013 「地球ミュージアム紀行——歴史を織りなすキルト」『月刊みんぱく』37(9): 14-15。
2013 「薬学がくれた私の道」『ファルマシア』49(8): 739-742。
2014 「生命をつなぐ融合」機関研究「包摂と自律の人間学」領域 ケアと育みの人類学 (2011-2013) 『民博通信』144: 8-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2014年3月8日 「企画趣旨『高齢者のウェルビーイングと多様な住まい方』」人間文化研究機構公開講演会・シンポジウム『高齢者のウェルビーイングと多様な住まい方』国立民族学博物館機関研究「包摂と自律の人間学」領域プロジェクト「ケアと育みの人類学」成果公開、イイノホール

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年6月6日 ‘A Reflection on the Meanings of Lifelong Learning: Focusing on Amish Mennonite People’s Values and Methods for Homeschooling in Rural Kansas.’ International Conference “Amish America: Plain Technology in A Cyber World,” The Young Center for Anabaptist and Pietist Studies at Elizabethtown College
- 2013年6月7日 Panel: International Perspectives on the Amish. International Conference Amish America: Plain Technology in A Cyber World, the Young Center for Anabaptist and Pietist Studies at Elizabethtown College
- 2013年8月7日 ‘Creating a Community of Resilience: New Meanings of Work, Technologies and Leisure for Greater Well-Being in a Depopulated Town in Japan,’ Panel LD34: Life and Death: Exploring well-being in later life: crossing cultures, crossing borders (IUAES Commission on Ageing and the Aged) The 17th World Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, The University of Manchester

・研究講演

- 2013年11月9日 (招待講演)「ウェルビーイングとケア・養生の文化」第20回日本未病システム学会学術総会 超高齢社会における未病イノベーション シンポジウム3『人はどう生まれ どう生きるのか——時間軸の未病』学術総合センター (一橋大学一橋講堂)

・文化資源プロジェクト

- 平成25年度文化資源プロジェクト「19~21世紀アメリカ合衆国におけるキルト標本資料収集」調査・資料分野 (標本・映像音響資料海外収集)

◎調査活動

・海外調査

2013年5月23日～6月17日—アメリカ合衆国（2013年アーミッシュ会議「アメリカのアーミッシュ——サイバーワールドにおける簡素なテクノロジー」参加および機関研究の成果報告に関する会合、スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究に関わる資料収集および調査、19～21世紀アメリカ合衆国におけるキルト標本に関する資料収集）

2013年8月2日～8月26日—イギリス・ドイツ・スイス（第17回国際人類学民族学連合大会参加、スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究に関わる資料収集および調査）

2013年11月22日～12月8日—アメリカ合衆国（キリスト教再洗礼派のフェアトレード実践に関する現地調査）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会「第1段審査（書面審査）委員 平成25年度」担当審査部門：1段 科学社会学・科学技術史1901、総合研究大学院大学学融合推進センター運営委員会委員、Editorial Advisory Board for Anthropology & Aging (A&A: The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology (AAGE), formerly Anthropology & Aging Quarterly)

飯田 卓 [いいだ たく] ————— 准教授

1969年生。【学歴】北海道大学文学部行動科学科卒（1992）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻修士課程修了（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科人間・環境学専攻博士後期課程研究指導認定退学（1999）【職歴】日本学術振興会特別研究員（DC1）（1994）、日本学術振興会特別研究員（PD）（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2000）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】博士（人間・環境学）（京都大学 2000）、修士（人間・環境学）（京都大学 1994）【専攻・専門】生態人類学、視覚メディアの人類学、文化遺産の人類学【所属学会】生態人類学会、日本アフリカ学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

飯田 卓

2008 『海を生きる技術と知識の民族誌——マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。

[編著書]

飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編

2013 『マダガスカルを知るための62章』東京：明石書店。

[論文]

飯田 卓

2010 「ブリコラージュ実践の共同体——マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」『文化人類学』75(1)：60-80。

【受賞歴】

2010 日本アフリカ学会学術研究奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

視覚メディアの発達と人類学の形成に関する学史的な研究

・研究の目的、内容

わたしはこれまで、主として1950年代後半の数年間を対象として学史的な研究をおこない、当時の人類学的調査が記録映画という比較的あたらしい視覚メディアの発達とともに発展してきたことを明らかにしてきた。本研

究は、考察の対象を戦前期および1960年以降の戦後期にも広げ、より広い視野のもとで、視覚メディアの発達と人類学の形成との相互関係を明らかにしようとするものである。

具体的にいうと、戦前期に関しては、洪澤敬三が後世に残した共同調査の映画記録をもとに、16ミリカメラなどが普及しはじめたモダニズムの時代に人類学者（民族学者）たちがあたらしいメディアを学問的基礎としてどのように活用しようとしていたかを明らかにする。また、戦後期に関しては、記録映画が流行した1950年代後半に文化人類学・民族学のアウトリーチに成功した研究者が、1960年代のテレビ普及期に視覚メディアとどのような関わりを保ったかを検証する。

・成果

戦前・戦後の両時代に関して、一定の知見を得ることができた。

戦前の状況に関してそろえた資料の一部は、民博において特別展「屋根裏部屋の博物館——洪澤敬三と Attic Museum」が開催されたさい、図録の記事や新聞コラムなどのかたちで若干公開している。しかし、本筋の議論は、関連する神奈川大学のプロジェクトの進捗が遅れてしまったため、まだ公開できないでいる。これは2014年度内に公開する予定である。

戦後の状況に関してそろえた資料は、箭内 匡・村尾静二編『映像の共有人類学』（せりか書房、2014年刊行予定）の一章としてまとめて公開する予定である。すでに校正まで作業が進んでいる。

◎出版物による業績

[編著]

飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編

2013 『マダガスカルを知るための62章』東京：明石書店。

[その他]

飯田 卓

2013 「アチックフィルムと戦後日本の映像人類学・映像民俗学」『国際常民文化研究機構年報』4：250-251。

2013 「文化遺産を受け継ぐコミュニティのあたらしいかたち」『民博通信』141：10-11。

2014 「アフリカのなかのアジア——マダガスカル」松田素二編『アフリカ社会を学ぶ人のために』pp. 70-71, 京都：世界思想社。

2014 「文化と情報メディア」内堀基光・奥野克己編『改訂新版 文化人類学』pp. 117-128, 東京：放送大学教育振興会。

2014 「災害と復興」内堀基光・奥野克己編『改訂新版 文化人類学』pp. 182-193, 東京：放送大学教育振興会。

Lida, T.

2013 Exhibition 'Zafimaniry Style: Life and Handicrafts in the Mist Forest of Madagascar.' *Minpaku Anthropology Newsletter* 36: 9-10.

飯田 卓・石井洋子

2014 「環境と開発」内堀基光・奥野克己編『改訂新版 文化人類学』pp. 142-155, 東京：放送大学教育振興会。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年5月28日 'From Decoration to the Ethnic Symbol: Zafimaniry Geometric Relief in Madagascar.' International Symposium "Can Cultural Heritage Forge Communities? Efforts in Africa," National Museum of Ethnology

・共同研究会

2013年11月10日 「あらたな漁法の習得と普及——海域ネットワーク社会の技術的基盤」『アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較』大濱泉水記念館

2014年1月11日 「『エージェンシーの定立と作用』に関わる今後の自身の研究計画」『エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年6月4日 'Balancing the Material and the Intangible: House Construction and Craft Making among the Zafimaniry of Madagascar.' 14th Conference of International Association of Commons

Studies, Onshirin kanri kumiai, Fujiyoshida

2013年11月25日 「マダガスカル、ザフィマニリの木彫り知識の無形文化遺産登録とその影響」文化遺産国際協力コンソーシアム第4回アフリカ分科会、東京文化財研究所

2014年1月13日 「ローカル漁民によるサンゴ礁保全のしくみ」科学研究費補助金プロジェクト『「在来知」と「近代科学」の比較研究——知識と技術の共有プロセスの民族誌的分析』（代表者：大村敬一）第5回研究会、国際日本文化研究センター

・みんぱくゼミナール

2013年4月20日 「マダガスカル 霧の森のものづくり」第419回みんぱくゼミナール

2013年5月18日 「マダガスカル 霧の森にくらすびと」第420回みんぱくゼミナール（内堀基光氏と合同講演）」

2013年9月21日 「屋根裏部屋博物館主人の横顔」第424回みんぱくゼミナール（永井美穂・木村裕樹氏と合同講演）

・研究講演

2013年4月6日 「マダガスカル中央高地のザフィマニリ文化」第418回 国立民族学博物館友の会講演会

・展示

特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」実行委員長

・広報・社会連携活動

2013年4月1日 「世代を超えて木造家屋に受け継ぐ心」「おとなが子どもに注ぐ視線——育児用寝台から割礼まで」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』ミニレクチャー

2013年4月1日 「ザフィマニリ式道具の使いかた」ワークショップ『ザフィマニリの敷物を編もう』

2013年4月2日 「ものづくりにみる粗さと細やかさ——焼畑と腰かけに通じるもの」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』ミニレクチャー

2013年4月4日 「世代を超えて木造家屋に受け継ぐ心」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』ミニレクチャー

2013年4月5日 「人が増える、森が減る——変わりゆくザフィマニリのくらし」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』ミニレクチャー

2013年4月8日 「人が増える、森が減る——変わりゆくザフィマニリのくらし」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』ミニレクチャー

2013年4月29日 「おとなが子どもに注ぐ視線——育児用寝台から割礼まで」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』ミニレクチャー

2013年5月6日 「ものづくりにみる粗さと細やかさ——焼畑と腰かけに通じるもの」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』ミニレクチャー

2013年5月11日 司会・解説「ザフィマニリストイルのゆくえ」みんぱく映画会

2013年5月13日 「世代を超えて木造家屋に受け継ぐ心」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』ミニレクチャー

2013年5月20日 「ヒトとウシ——供犠（くぎ）から編みものまで」ワークショップ『ザフィマニリの敷物を編もう』

2013年5月21日、28日、6月1日、8日 「ザフィマニリ家具に木彫り文様をほどこそう」ワークショップ『ザフィマニリの敷物を編もう』（朝岡知子氏と合同講演）

2013年5月25日 司会・解説「ギターマダガスカル」みんぱく映画会

2013年5月26日 「マダガスカル展——もうひとつの準備現場」第300回みんぱくウィークエンド・サロン

2013年6月3日 「人が増える、森が減る——変わりゆくザフィマニリのくらし」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』ミニレクチャー

2013年6月9日～11日 「ザフィマニリから考える無形文化遺産」特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』コンクルーディング・トーク

2013年6月11日 「豊富にみつかる天然素材」ワークショップ『ザフィマニリの敷物を編もう』

2013年10月27日、11月17日 ワークショップ「ファンタジック・コレクション 集まれ！なんでも収集家」

◎調査活動

・国内調査

2013年9月24日～9月27日—沖縄県（沖縄本島）（南西諸島の漁法における在来知と近代科学知に関する調査）

2013年11月3日～11月11日—沖縄県（八重山諸島）（南西諸島の漁法における在来知と近代科学知に関する調査）

2013年11月27日～12月3日—鹿児島県（九州および種子島）（薩摩藩の近代殖産技術と宇宙航空技術に関する調査）
2014年1月21日～1月26日—鹿児島県（奄美大島）（奄美大島の都市形成と人口移動および漁村の変化に関する調査）

・海外調査

2013年7月9日～7月30日—マダガスカル（マダガスカルの選挙と村落部の私企業活動に関わる資料収集、および山間地域の森林資源利用と私企業活動の実態に関する調査）

2014年2月15日～3月18日—マダガスカル（政治流動化が生業に与えた影響と大統領選挙に関する調査）

◎大学院教育

・指導教員

指導教員（1人）、副指導教員（1人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（2人）

・論文審査

博士論文審査委員（1件）、予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容」研究代表者、神奈川大学共同研究拠点整備推進事業「国際常民文化研究」に関わる共同研究「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」共同研究者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「インド洋西域島嶼世界における民話・伝承の比較研究」（研究代表者：東京外国語大学 小田淳一）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「『在来知』と『近代知』の比較研究——知識と技術の共有プロセスの民族誌的分析」（研究代表者：大阪大学 大村敬一）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「近代都市形成における多文化混住状況と出身地域社会への影響に関する研究」（研究代表者：神戸大学 岡田浩樹）研究分担者、挑戦的萌芽研究「宇宙開発に関する文化人類学的アプローチの検討」（研究代表者：神戸大学 岡田浩樹）研究分担者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会委員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究「現代アフリカにおける〈国家的なもの〉に関する研究——ニューメディア・グローバリゼーション・民主主義」（研究代表者：徳島大学・内藤直樹）共同研究員

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキウム運営委員、日本アフリカ学会評議員

- ・非常勤講師

神戸大学大学院国際文化科学研究科 文化情報リテラシー特殊講義（集中講義）

◎学会の開催

2014年3月29日 マダガスカル研究懇談会、国立民族学博物館

菊澤律子 [きくさわ りつこ] ————— 准教授

1967年生。【学歴】東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程言語学専攻修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退（1995）【職歴】東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）【学位】Ph. D. (Linguistics)（ハワイ大学 2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）【専攻・専門】言語学、比較（歴史）言語学、オーストロネシア諸語、記述言語学、オセアニア先史研究【所属学会】日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society (UK)、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics

【主要業績】

[単著]

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages*. Canberra: Pacific Linguistics.

[論文]

Kikusawa, R.

2003 A New View of the Proto Oceanic Pronominal System. *Oceanic Linguistics* 42(1): 161-186.

2003 Did Proto-Oceanians Cultivate *Cyrtosperma Taro*? *People and Culture in Oceania* 19: 26-54.

【受賞歴】

2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀奨学生賞

2008 第4回日本学術振興会賞

2005 第4回日本オセアニア学会賞

【2013年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究——動詞の形態法の発達史を探る

・研究の目的、内容

本研究は、オーストロネシア諸語の発達史における「名詞化接辞の動詞接辞化」の具体的なメカニズムと、その発達史を解明することを目的とする。

オーストロネシア諸語においては、早い時期に分岐した言語ほど動詞の形態法が複雑であり、オーストロネシア祖語の動詞のシステムは、これをほぼ直接反映させて再建される傾向にある。これに対し菊澤は、昨年度の研究において、形態統語論的な特徴の変遷はシステムの変遷として捉えるべきであり、drift等の可能性を考慮した、音韻や語彙の再建におけるものとは異なる視点および手法が必要であることを示した。2013年度はこれに基づき、オーストロネシア諸語における個別事象の比較再建およびそのための方法論の整備、という2つの課題に取り込む。

個別事象の比較再建においては、6月からのウィーラ・オスタピラト外国人客員研究員との共同研究データを取り入れることでマクロ語族からの視点をも加味する。また、方法論に関しては、対象語族を超えた一般化に向けて、2013年1月～3月に日本学術振興会特定国派遣事業により、ノルウェー・ベルゲン大学における印欧語の項構造の史的変遷解明のためのプロジェクトと共同研究を行う予定である。

・成果

オーストロネシア諸語の発達史解明のために、動詞の名詞化、および代名詞の形態論を中心に研究をすすめた。また、個別事象の比較再建と方法論の整備という観点からは、マラガシ祖語における代名詞の再建および諸方言における形態変化について、音韻および語彙の比較にパラダイム変化という視点を組み合わせることで、「システムとしての言語変化」という議論を試みた。

◎出版物による業績

[編著]

Kikusawa, R. and L. A. Reid (eds.)

2013 *Historical Linguistics 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011*, Current Issues in Linguistic Theory 326. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

[論文]

Kikusawa, R. and L. A. Reid

2013 Introduction. In R. Kikusawa and L. A. Reid (eds.) *Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011*, Current Issues in Linguistic Theory 326, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

[その他]

菊澤律子

- 2013 「『手話は言語である』の一步先へ」『民博通信』141:12-13。
 2013 「ことばから探る人の移動」印東道子編『人類の移動誌』pp. 264-277, 京都:臨川書店。
 2013 「言語の歴史」飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための62章』pp. 56-61, 東京:明石書店。
 2013 「方言と標準語」飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための62章』pp. 120-124, 東京:明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2013年9月27日～9月29日 《機関研究成果公開》『みんなく手話言語学フェスタ2013』コーディネーター
 2013年12月1日 《機関研究成果公開》『みんなくセミナー 暮らしの中の言語学「ことばの機能障害と言語学」
 コーディネーター・司会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年4月9日 The Application of Tree and Other Diagrams in Historical Linguistics and Field Data. Graduate Institute of Linguistics, National Taiwan University
 2013年4月14日 「歴史言語学における系統樹(とその他の)モデル」第68回日本生物地理学会大会シンポジウム『チェイン・ツリー・ネットワーク——体系学におけるデータ可視化と情報グラフィクス』立教大学
 2013年7月25日 「言語を通してみる人間研究——音声言語学・手話言語学とその先へ」平成25年度総研大研究プロジェクト第1回企画会議、学術情報センター
 2013年9月27日 (with Yasuhiro Ichida) 'Agent and Patient Expressions and Word Order in Japanese Sign Language.' SSSL2013 Workshop. National Museum of Ethnology
 2014年2月3日～4日 'Culture Contact and Language Diversity in Oceania: The Comparative Method and beyond.' SOKENDAI International Symposium "Modern Human Diversity on Genes and Culture: With Special Reference to Asia and Oceania." The Graduate University for Advanced Studies, Hayama, Japan
 2014年2月18日 'From Taiwan to Oceania: Austronesian Languages and Human Dispersal in the Pacific.' Department of Japanese, the University of Central Lancashire, UK
 2014年2月19日 'Identifying the Historical Development of Languages without a Written Record: With Special Reference to the Austronesian Language Family.' A Distinguished Visitor Lecture and the Linguistics Research Symposium (LRS) series hosted by iSLanDS and the School of Language, Literature and International Studies, the University of Central Lancashire, UK

・広報・社会連携活動

- 2013年4月27日～8月3日(全5回)「(手話通訳士のための)楽しい言語学を学ぶ会」国立民族学博物館
 2013年5月24日 「ことばにみるイネの栽培起源——ヒトとモノと言語の歴史」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
 2013年6月9日 「太平洋からきたマダガスカルのことば」第302回みんなくウイークエンドサロン
 2013年6月22日 「Word Order and Related Features in Austronesian Languages: An Introduction to the Basic Sentence Structures found in this Language Family.」第7回OS言語科研打合せ会、近畿大学東大阪キャンパス

◎調査活動

・海外調査

- 2013年4月7日～4月13日—台湾(オーストロネシア言語学に関する研究会参加)
 2013年9月8日～9月18日—フィジー(OS型言語の文処理メカニズムに関するフィールドの現地調査)
 2013年12月16日～2014年1月13日—アメリカ合衆国(言語の記述方法に関する調査研究およびサタワル語辞書執筆に関する文献調査)
 2014年2月15日～2月21日—イギリス(手話言語学に関する共同事業についての協議および研究調査)

◎大学院教育

・指導教員

副主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

民博機関研究プロジェクトマテリアリティの人間学「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」研究代表者、人間文化研究機構連携研究「第2回国際シンポジウム『手話言語と音声言語の記述・記録・保存』の開催」研究代表者、総合研究大学院大学学融合推進センター戦略的共同研究Ⅰ「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning開発に向けて」研究代表者、日本財団助成金「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」研究代表者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員、国立国語研究所共同研究員、筑波技術大学科研費研究分担者、東北大学科研費研究分担者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

日本歴史言語学会理事、日本言語学会広報委員、International Society for Historical Linguistics 評議員、Association for Linguistic Typology 評議員、国際オーストロネシア言語学会運営委員、第12回国際オーストロネシア言語学会専門委員、欧州リサーチ・カウンシル審査員、Journal of Historical Syntax 編集顧問委員、Brill's Studies in Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Linguistics 編集顧問委員

齋藤 晃 [さいとう あきら]

准教授

【学歴】 京都大学文学部文学科フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）【職歴】 国立民族学博物館第4研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）【学位】 学術修士（東京大学大学院総合文化研究科 1991）【専攻・専門】 文化人類学、ラテンアメリカ研究【所属学会】 日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

【主要業績】

[共著]

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』 名古屋：名古屋大学出版会。

[編著]

齋藤 晃編

2009 『テキストと人文学——知の土台を解剖する』 京都：人文書院。

[共編]

Saito, A. et Y. Nakamura (dir.)

2010 *Les outils de la pensée: étude historique et comparative des «textes»*. Paris: Éditions de la Maison des sciences de l'homme.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

スペイン領南米における集住政策の先住民社会への影響

・研究の目的、内容

スペイン統治下のアメリカでは、広い範囲に分散する小規模な集落を西欧式の大きな町に統合する集住政策が、植民地全土で実施された。本研究は、この政策の先住民社会への長期的影響を、南米のさまざまな地域の事例の比較を通じて解明する。なお、本研究は、民博の機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」（2011～2013年度、代表者：齋藤 晃）の一環として実施される。

・成果

2013年10月24日、教皇庁立ペルーカトリカ大学（リマ、ペルー）において、同大学大学院アンデス研究プログラムとの共催で、「Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas」（日本語訳：トレドの集住政策研究の新展開）と題する公開セミナーを開催した。このセミナーでは、16世紀後半にアンデス全土で実施された行政府主導の集住政策に関して米国とペルーの歴史学者と考古学者3名が最近刊行した著書の学術的意義が論じられた。齋藤は教皇庁立ペルーカトリカ大学の研究者と共同でセミナーを主催するとともに、3冊の著書のコメンテーターとして議論に加わった。

◎出版物による業績

[その他]

齋藤 晃

2013 「集住政策はアメリカをどう変えたのか？——機関研究：近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」『民博通信』143：8-9。

2013 「カメの卵狩り」『月刊みんぱく』37(7)：9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年10月24日 ‘Comentario sobre los tres libros.’ “Conversatorio: Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas.” Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú

・共同研究会

2014年2月24日 「Beyond the Lettered City: Indigenous Literacies in the Andesについて」『近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開』

・広報・社会連携活動

2013年6月28日 「ミッションの旧跡を訪ねて——ボリビア・パラグアイ・アルゼンチン」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

◎調査活動

・海外調査

2013年10月21日～11月11日—ペルー、アメリカ合衆国（スペイン領アメリカの集住政策に関する公開セミナーおよび研究成果公開の準備会合）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究『9-19世紀文書資料の多元的複眼的比較研究』共同研究員

丸川雄三 [まるかわ ゆうぞう] ————— 准教授

【学歴】 東京工業大学理学部応用物理学科卒（1996）、東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻修士課程修了（1998）、東京工業大学大学院情報理工学研究科計算工学専攻博士課程単位取得退学（2001）**【職歴】** 東京工業大学精密工学研究所助手（2001）、科学技術振興機構 CREST 研究員（国立情報学研究所高野明彦研究室）（2003）、国立情報学研究所高野明彦研究室特任助手（2004）、人間文化研究機構本部プロジェクト研究員（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究所開発センター特任助手（2006）、国立情報学研究所連想情報学研究所開発センター特任准教授（2007）、国際日本文化研究センター文化資料情報企画室准教授（2012）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2013）**【学位】** 博士（工学）（東京工業大学大学院 2003）、修士（理学）（東京工業大学大学院 1998）**【専攻・専門】** 1) 連想情報学、2) 文化財情報発信 **【所属学会】** アート・ドキュメンテーション学会

【主要業績】

[論文]

水谷長志・川口雅子・丸川雄三

2014 「アジアからの美術書誌情報の発信——東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC の artlibraries.net

における公開の経緯とその意義』『東京国立近代美術館研究紀要』18：6-31。
丸川雄三・阿辺川 武

2010 「横断的連想検索サービス『想-IMAGINE』——データベース連携が拓く新たな可能性』『情報管理』53
(4)：198-204.

2010 「『国立美術館遊歩館』の紹介』『専門図書館』239：1-5.

【受賞歴】

2011 文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムをデータと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行っている。2013年度は、近代日本の身装（身体と装い）関係資料および、民博の標本資料を対象とするサービスの研究開発をそれぞれ実施した。

・成果

近代日本の身装（身体と装い）関係資料の活用研究として、明治から昭和期（1868～1945年）における身装に関する画像（身装画像デジタルアーカイブ）をデータベース化し発信する取り組みを行った。身装文化研究資料の深さと広がりを利用者が自ら体験できるウェブサイト「近代日本の身装文化」の実現を目指し、当時の世相を十分に反映した新聞・雑誌記事中の挿絵や写真、図版など、7,500件を検索し閲覧できる「身装画像データベース」を構築した。また、連想検索エンジンGETAssocの活用により、身装画像デジタルアーカイブの深みを多様な切り口で探索可能なサービスである。さらに横断連想検索技術を用いた「想-IMAGINE 身装文化」を構築した。この研究は、「JSPS 科研費基盤B 課題番号24300099(2012年度～2014年度)「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」（代表：高橋晴子）」の助成を受けたものである。

さらに標本資料データベースの活用研究として、国立新美術館で開催されている「イメージの力」展向けに、展示資料と作品を、画像や解説とともに閲覧できるデジタルビューアを開発した。本ビューアは、タッチパネルインタフェースにより誰でも簡単に情報にアクセスできるサービスであり、2014年2月19日の公開初日から展示会場内に設置され、来館者の利用に供されている。なおこの研究は、国立情報学研究所と共同で実施した。

◎出版物による業績

[論文]

Marukawa, Y.

2013 Cultural Heritage Online: Discovering the Possibilities of a Digital Archive. *Art Libraries Journal*, 38(2): 6-10.

水谷長志・川口雅子・丸川雄三

2014 「アジアからの美術書誌情報の発信——東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC の artlibraries.net における公開の経緯とその意義』『東京国立近代美術館研究紀要』18：6-31.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年11月17日 「アジアからの美術書誌情報の発信——東京国立近代美術館・国立西洋美術館 OPAC の artlibraries.net における公開の経緯とその意義』『アート・ドキュメンテーション学会第6回秋季研究発表会』跡見学園女子大学文京キャンパス

2013年12月14日 「身装画像データベース『近代日本の身装文化』の構築』『人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2013」』京都大学

2014年3月14日 「文化財情報発信における画像資料の活用について』『電子情報通信学会 パターン認識・メディア理解研究会』早稲田大学

2014年3月25日 「美術史料のデジタル公開を念頭に置いた Web 版『みづゑ』の研究と開発』『東京文化財研究

所企画情報部研究会』東京文化財研究所

・ウェブサイト

「文化遺産オンライン」<http://bunka.nii.ac.jp/>

「想——IMAGINE 国立美術館」<http://imagine.artmuseums.go.jp/>

「実業史錦絵絵引 渋沢栄一記念財団」<http://ebiki.jp/>

「東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』の世界」<http://mizue.bookarchive.jp/>

・展示

「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員、デジタルビューア制作

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築——文化変容に視点を据えて」（代表：高橋晴子）研究分担者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など

国立デジタル文化情報保存センター（仮称）設立構想具体化：『保存と公開』基盤検討委員

- ・客員研究員

国立情報学研究所客員准教授、東京国立近代美術館客員研究員、東京文化財研究所客員研究員、奈良国立博物館調査員、立命館大学客員協力研究員

研究戦略センター

塚田誠之 [つかだ しげゆき]——センター長（併）教授

1952年生。【学歴】北海道大学文学部史学科東洋史学専攻卒（1978）、北海道大学大学院文学研究科修士課程東洋史学専攻修了（1980）、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程東洋史学専攻単位取得（1987）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1988）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2002）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科研究科長（2011）【学位】文学博士（北海道大学 2001）、文学修士（北海道大学大学院文学研究科 1980）【専攻・専門】歴史学 中国南部地域（広西・貴州等）のチワン（壮）族をはじめとする諸民族の歴史民族学的研究【所属学会】日本文化人類学会、史学会、宋代史研究会、北海道大学東洋史談話会、北大史学会、漢民族研究学会（中国）、壮学学会（中国）

【主要業績】

[単著]

塚田誠之

2000 『壮族文化史研究——明代以降を中心として』東京：第一書房。

[編著]

塚田誠之編

2010 『中国国境地域の移動と交流——近現代中国の南と北』東京：有志舎。

[論文]

塚田誠之

2012 「漢族と非漢族との相互影響について——広西の「蔗園人」の習俗に関する一考察」瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』（東北アジア研究専書）pp. 73-104, 京都：昭和堂。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

中国南部・広西におけるチワン(壮)族の文化の動態に関する歴史民族学的研究

・研究の目的、内容

中国広西のチワン(壮)族の文化の動態について、これまで現地調査によって得られた資料と、文献史料とを有機的に結び付ける歴史民族学的方法を駆使して分析を重ねてきた。本年度は、見直しを含めて文献史料からの分析を主体とする。その場合、第三者あるいはチワン族の知識人が記述した「歴史」は史実とは限らず、自らの正当性とアイデンティティの維持のため、往々書き換えられがちである。そのことは族譜における祖先の位置付けに端的に表れている。また、観光化などの新たな文脈の中で、政府・知識人など諸主体によって、史料は再生産されつつある。この点に留意して研究を進めたい。

・成果

北宋時代、11世紀半に広西で大規模な蜂起を行い華南を席卷した中越国境地域の豪族の首長儂智高が、1949年以降、現在に至るまで、中国の学者によってどのように表象されてきたかを文献をもとに検討した。1950、60年代の社会主義政権建設期においては、マルクス主義的史観に基づき壮族社会の発展段階（奴隷制・封建制）と関係付けて議論された。1979年前後の中越戦争期にはその国籍問題が議論され、儂が「中国人」であることが強調された。1980年代以降は、「愛国」の「民族英雄」としての位置付けが定着して現在に至っている。このように歴史上の人物に対する記述のされ方が時代の風潮に応じて変化してきたこと、他方で、中国の国家としての統一性が一貫して主張されてきたことが明らかになった。このほか、伝承のなかの人物であるが壮族の「歌海」イメージを担っている歌仙「劉三姐」について、その観光資源化について、歴史民族学的方法に基づいて、論文「広西のチワン族の文化資源——その形成と地域性」武内房司・塚田誠之編『中国の民族文化資源——南部地域の分析から』（風響社、2014）を公表した。

◎出版物による業績

[共編著]

武内房司・塚田誠之編

2014 『中国の民族文化資源——南部地域の分析から』東京：風響社。

[論文]

塚田誠之

2014 「広西のチワン族の文化資源——その形成と地域性」武内房司・塚田誠之編『中国の民族文化資源——南部地域の分析から』pp. 275-304, 東京：風響社。

[その他]

塚田誠之

2013 「みんなく世界の旅 中国① チワン族、無駄のない暮らし」『毎日小学生新聞』2月22日。

2013 「みんなく世界の旅 中国② 国境を越えた民族の交流」『毎日小学生新聞』3月1日。

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CDなどの制作・監修

[みんなく映像民族誌]

塚田誠之監修

2014 みんなく映像民族誌第11集『チワン(壮)族の伝統文化』日本語, 81分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年11月18日 「有関貴州“屯堡文化”的話語(discourse)和資源化的現状」、「中日人類学民族学理論創新与田野調査」国際学術研討会、中国社会科学院民族学与人類学研究所、北京

・展示

2014年3月20日 本館展示新構築「中国地域の文化」

・広報・社会連携活動

2013年12月13日 「チワン(壮)族とベトナム民族との交流」、NPO法人大阪府高齢者大学校世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

◎調査活動

・海外調査

2013年11月17日～11月20日—中華人民共和国（機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」第2回国際シンポジウム参加）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

東北大学東北アジア研究センタープロジェクトユニットにおける評価委員、総研大文化科学研究科学術資料マネジメント教育プログラム準備委員会委員

岸上伸啓 [さしがみ のぶひろ] ————— 副館長（研究・国際交流担当）、教授

關 雄二 [せき ゆうじ] ————— 教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1983）【職歴】東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）【学位】社会学修士（東京大学大学院 1982）【専攻・専門】アンデス考古学、文化人類学 1）古代アンデス文明の形成過程、2）現代ペルーの文化行政、3）考古学と国民国家形成、4）世界遺産と国別の文化遺産との相互関係【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

【主要業績】

[単著]

關 雄二

2010 『アンデスの考古学 改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス——権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

[共編]

大貫良夫・加藤泰建・關 雄二編

2010 『古代アンデス——神殿から始まる文明』（朝日選書863）東京：朝日新聞出版。

【受賞歴】

2008 濱田青陵賞

2008 科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008 クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈をおこなう。具体的には、ペルー北部山中パコパンパ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B. C. 2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費補助金（基盤研究（S））をあてる。

・成果

2011年度から科学研究費補助金（基盤研究（S））を取得し、フィールドワークを含め、研究を推進した。成果としては、日本のアンデス調査の歴史を扱った欧文論文を1点発表したほか、2009年に発見された貴人墓から

出土した金属製品の分析に関する論文を1本、遺跡の管理と活用に関する単著1冊、論文を1本出版した。このほか内外の国際学会、研究集会、シンポジウムにおいて11本の研究発表をおこなった。

◎出版物による業績

[単著]

関 雄二

2014 『アンデスの文化遺産を活かす——考古学者と盗掘者の対話』（フィールドワーク選書6）京都：臨川書店。

[編著]

小田博志・関 雄二編

2014 『平和の人類学』京都：法律文化社。

[論文]

関 雄二

2013 「最初のアメリカ人の移動ルート」印東道子編『人類の移動誌』pp. 206-218, 京都：臨川書店。

2013 「遺跡管理における住民参加の意味を問う——国際協力の現場から」『パブリックな存在としての遺跡・遺産——平成24年度 遺跡等マネジメント研究集会（第2回）報告書』pp. 4-9, 奈良：奈良文化財研究所。

Seki, Y.

2013 La búsqueda del origen de la civilización por la expedición japonesa: la época dirigida por Seiichi Izumi. En Henry Tantaleán y César Astuhamán (eds.), *Historia de la Arqueología en el Perú del siglo XX*, pp. 361-394. Lima: Institute Francés de Estudios Andinos, Institute of Andean Research.

2014 「中米グアテマラにおける内戦の記憶と和解」小田博志・関 雄二編『平和の人類学』pp. 95-117, 京都：法律文化社。

日高真吾、関 雄二、橋本沙知、椎野 博

2014 「アンデス文明形成期の金属製品の製作に関する一考察——クントゥル・ワシ遺跡およびパコパンパ遺跡出土の金属製品の蛍光X線分析の結果から」『国立民族学博物館研究報告』38(2): 125-185。

[翻訳]

セサル・ゴンサーレス・サインス、ロベルト・カチョ・トカ著、深沢武雄写真・文、吉川敦子訳、関 雄二監訳、平出教枝編

2013 『スペイン北部の旧石器洞窟壁画 図録集（上）カンタブリア篇』東京：テクネ。

2013 『スペイン北部の旧石器洞窟壁画 図録集（下）バスク・アストゥリアス篇』東京：テクネ。

セサル・ゴンサーレス・サインス、ロベルトカチョ・トカ著、吉川敦子訳、関 雄二監訳、深沢武雄編

2013 『スペイン北部の旧石器洞窟壁画 概説篇』東京：テクネ。

2014 『スペイン北部の旧石器動産美術』東京：テクネ。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年5月28日 関 雄二「コメント」《研究領域「マテリアリティの人間学」プロジェクト「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」成果公開》国際シンポジウム『文化遺産はコミュニティをかたどるか？ アフリカの事例から』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年4月5日 ‘The Archaeological Heritage Management and the Participation of the Local Community in the North Highlands of Peru.’ 78th Annual Meeting of Society for American Archaeology, Honolulu, Hawaii

2013年6月1日 「コメント」日本ラテンアメリカ学会第34回定期大会 パネルA『メキシコとグアテマラにおける先住民・アイデンティティ・自治をめぐる諸問題』獨協大学

2013年8月6日 ‘Dos modo del proceso social del Período Formativo en la sierra norte del Perú.’ I Simposio Internacional Arquitectura, Arqueología y Museos; Desde el Precerámico hasta los Incas en el Norte del Perú. Auditorio del Colegio Nacional San José, Chiclayo, Perú

2013年8月24日 ‘Defensa del patrimonio cultural y desarrollo turístico de Pacopampa.’ Jornada Arqueológica “Pacopampa: Hallazgos y Descubrimientos”, Grupo Cultural Wayrak,

- Dirección Regional de Cultura- Cajamarca. El Complejo Cultural Akunta, Chota, Perú
- 2013年10月2日 ‘La doncella alada: Formación de la memoria social en el sitio arqueológico Pacopampa, Perú.’ Conferencia Miercoles, Arqueologicos y Antropologicos, Museo de Arqueología de San Marcos, Centro Cultural de San Marcos, Lima, Perú
- 2013年10月10日 ‘El manejo del patrimonio arqueológico y la participación de la comunidad en la sierra norte del Perú’. XVI Congreso de la Federación Internacional de Estudios sobre América Latina y el Caribe (FIEALC 2013), Antalya, Turquía
- 2013年11月23日 (基調講演)「南米ペルーにおける文化遺産観光とその問題点」天理大学アメリカス学会第18回年次大会：シンポジウム「創られた観光イメージ——古代文明と開発戦略」天理大学
- 2013年11月26日 「古代アンデスにおける神殿の「はじまり」——モノをつくりモノに縛られる人々」総研大創立25周年記念事業「はじまり」シンポジウム——新しい質の創造がなぜ、いかにして起こったのか、総合研究大学院大学葉山キャンパス
- 2013年11月30日 ‘Kuntur Wasi y Pacopampa: Dos modos del proceso social del Periodo Formativo en la sierra norte del Perú.’ Simposio Internacional “Nuevos horizontes de los estudios de Chavín,” Museo Nacional de Etnología, Osaka
- 2013年12月7日 関 雄二、マウロ・オルドーニェス「ペルー北高地パコパンパ遺跡における石彫の発見」古代アメリカ学会第18回研究大会、山形大学
- 2013年12月7日 長岡朋人、森田 航、関 雄二、鶴澤和宏「ペルー・パコパンパ遺跡出土人骨の生物考古学的研究」古代アメリカ学会第18回研究大会、山形大学
- 2013年12月7日 鶴澤和宏、関 雄二、マウロ・オルドーニェス、ディアナ・アレマン、ファン・パブロ・ビジャヌエバ「ペルー北高地パコパンパ遺跡における哺乳動物利用」古代アメリカ学会第18回研究大会、山形大学
- 2014年1月13日 ‘Social Change from the Middle to Late Formative Period at Pacopampa.’ Ancient Chavin: Toward a New Synthesis in the Peruvian Formative Period, Center for Latin American Studies, Stanford University, USA
- 2014年1月26日 「ジャガー人間石彫の発見——アンデス文明における社会的格差の出現」公開フォーラム『古代文明の生成過程——西アジアとアンデス』JPタワー ホール&カンファレンス ホール1
- 2014年2月8日 「人類、アメリカ大陸に渡る」総研大公開シンポジウム「人類 地球をうごく」主催：総合研究大学院大学 戦略的融合研究 現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究、ゆうほうと
- ・ 広報・社会連携活動
- 2013年4月27日 「インカ帝国をさぐる——インカ帝国の起源と成立過程」朝日カルチャーセンター芦屋
- 2013年5月25日 「インカ帝国をさぐる——インカ帝国の政治経済と宗教」朝日カルチャーセンター芦屋
- 2013年5月29日 「マテ茶の文化」第12回ラテンアメリカ教養講座『嗜好品でめぐるラテンアメリカ』京都外国語大学 京都ラテンアメリカ研究所
- 2013年12月21日 「パコパンパ遺跡の最新調査速報」アンデス文明研究会
- 2014年2月1日 「神殿更新で社会が変わる 南米アンデス文明の誕生」第428回国立民族学博物館友の会講演会
- 2014年2月2日 「南米アンデス文明の神殿で発見されたジャガー人間石彫」第330回みんぱくウィークエンド・サロン
- ◎調査活動
- ・ 海外調査
- 2013年4月3日～4月9日—アメリカ合衆国（アメリカ考古学協会の第78回年次大会参加）
- 2013年6月23日～10月19日—ペルー、トルコ（中央アンデス地帯・アナトリア文化遺跡調査およびラテンアメリカ・カリブ海地域国際研究所連盟会議参加、JICAの地方開発プロジェクトに係わる調査）
- 2014年1月9日～1月17日—アメリカ合衆国（アンデス研究協会の年次大会およびチャビンシンポジウムに参加）
- 2014年3月1日～3月20日—ペルー（比較研究のためペルーの遺跡の考古学的調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（2人）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（S））「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、日本学術会議連携委員、ペルー全国学長会議編集局理事、ペルー国クントゥル・ワシ文化協会（NPO）クントゥル・ワシ博物館監査役、アンデス文明研究会顧問、金沢大学国際文化資源学研究センターアドバイザー

野林厚志 [のばやし あつし] ————— 教授

1967年生。【学歴】東京大学理学部生物学科卒（1992）、東京大学大学院理学系研究科修士課程修了（1994）、東京大学大学院理学系研究科博士課程中退（1996）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2000）、総合研究大学院大学先導科学研究科兼任（2000）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2004）【学位】博士（学術）（総合研究大学院大学 2003）、修士（理学）（東京大学大学院理学系研究科 1994）【専攻・専門】人類学、民族考古学 1）人間と動物との関係史、2）生業文化論【所属学会】日本台湾学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

野林厚志

2008 『イノシシ狩猟の民族考古学——台湾原住民の生業文化』東京：御茶の水書房。

[編著]

野林厚志編

2009 『百年來の凝視』台北：順益台湾原住民博物館（日本語／中国語）。

[論文]

野林厚志

2010 「文化資源としての博物館資料——日本統治時代に収集された台湾原住民族の資料が有する現地社会での意義」『国立民族学博物館研究報告』34(4)：623-679。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究——学術、制度、当事者の相互作用

・研究の目的、内容

本研究の目的は、1）台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）が台湾の日本統治期（1895-1945年）に複数の民族集団へと分類されてきた歴史的背景を明らかにする、2）現在の台湾社会における民族認定の様相とそれにもとづく民族集団の再編に、従前の歴史的背景がどのような影響を与えているかを現地調査によって明らかにする、3）1）と2）の結果にもとづき、民族の分類という営為をめぐる先住民族、先住民族含む現地社会、および分類を行ってきた施政者や研究者の関係についての人類学的モデルを引き出す、以上の3点である。本年度は特に原住民族の社会的位置づけとは対照的な様相をもつ平埔族に焦点をあて、彼らのエスニシティの形成がどのような過程を経ているかということを実地調査ならびに博物館資料の分析にもとづいて検討する。その結果や得られた知見を活かしながら、従前の研究目的を果たすものである。なお、本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（B））（海外）「台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究——学術、制度、当事者の相互作用」（課題番号22401046）と連動して行う。

・成果

本年度は、当初の研究計画にしたがい、平埔族のエスニシティの衰退、新たな再構築の過程について、具体的には台南県におけるシラヤ族の正名運動に焦点をあてながら、現地でおこなわれているシラヤ族自身の手によるエスニシティ検証の様子について調査を行った。シラヤは平埔族の中でも比較的、民族アイデンティティを保持してきたといわれているが、実際には吉貝要や北頭洋、頭社といった特定の集落を中心として個別的に保持されてきた。その一つのよりどころが、阿立（アリッ）信仰とその拠点となる公廟とよばれた祭祀施設である。個別的に存続してきたアイデンティティがシラヤの正名運動を通して、接合されていく過程はエスニシティが再構築されていくものとしてとらえられた。これは、最初からエスニシティが比較的明確に示された原住民のものとは異なる特徴をもったものである。これに、関連して、国立台湾歴史博物館の特別展示会「看見平埔」を再構成した企画展「台湾平埔族の歴史と文化」を民博で実施した。この過程で得られた成果の一つが、平埔族の物質文化の境界性である。オーストロネシア系祖先集団の漢族化という単一形成モデルに対して、平埔族の多元系統モデルを、民博に収蔵されている平埔族関連の資料の分析にもとづき仮説的に提案した。本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（B））（海外）「台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究——学術、制度、当事者の相互作用」と連動して実施した。

◎出版物による業績

〔論文〕

野林厚志

- 2013 「原住民族スーヴニールの製作と流通——洪沢敬三の『南島見聞録』と台湾収集資料をてがかりに」『台湾原住民研究』17：102-117。
- 2013 「台湾原住民の移動 居住地分布と居住様式の特徴からみる」印東道子編『人類の移動誌』pp. 109-121, 京都：臨川書店。
- 2014 「情報を体感する展示の方法論 国立民族学博物館の取り組み」平井康之他共著『知覚を刺激するミュージアム 見て、触って、感じる博物館のつくりかた』pp. 65-96, 京都：学芸出版社。

〔その他〕

野林厚志

- 2013 『台湾平埔族の歴史と文化』（展覧会リーフレット）大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「台湾」『特別展 洪沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』pp. 160-169, 大阪：国立民族学博物館。
- 2013 「台湾コラム① 魚にまつわるタオ族の風習」『毎日小学生新聞』9月7日。
- 2013 「台湾コラム② 豚の体重を競い合う」『毎日小学生新聞』9月14日。
- 2013 「台湾コラム③ 台湾の華やかな手工芸」『毎日小学生新聞』9月21日。
- 2013 「台湾コラム④ 食文化に影響を与えた歴史」『毎日小学生新聞』9月27日。
- 2013 「畏——時空をこえた人類の知恵」『月刊みんぱく』37：10-11。
- 2013 「探求と包摂のための博物館——国立台湾歴史博物館」『月刊みんぱく』37：14-15。
- 2013 「民族のモザイク——台湾」『月刊みんぱく』37：2-3。
- 2013 「御嶽を訪ねる」『まほら』77：50-51。
- 2013 「肉食の生態学的側面と文化的側面」『民博通信』143：14-15。
- 2013 「国際学術検討会『族群歴史文化與認同台湾平埔原住民』に参加して」『台湾原住民研究』17：238-241, 東京：日本順益台湾原住民研究会。
- 2013 「書籍紹介『台湾エスニックマイノリティ文学論——山と海の文学世界』」『台湾原住民研究』17：262-265, 東京：日本順益台湾原住民研究会。
- 2013 「現代に受け継がれるパイワン族の鼻笛演奏」下村作次郎他編『台湾原住民族の音楽と文化』pp. 48-49, 埼玉：草風館。
- 2014 「未来世紀のミュージアム」『月刊みんぱく』38：14-15。
- 2014 「旅の装い」『まほら』79：50-51。
- 2014 「台湾原住民と平埔族との関係」琉球大学琉球大学中期計画達成プロジェクト報告書『人類の拡散と琉球列島』pp. 9-14, 沖縄：琉球大学文学部。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年5月27日 コメンテーター、国際シンポジウム『文化遺産はコミュニティをかたどるか？——アフリカ

- の事例から』国立民族学博物館
- 2014年1月29日 「台湾原住民に関する情報遺産の記録化」国立民族学博物館国際ワークショップ『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』国立民族学博物館
- 2014年2月22日 ‘The Role of Museum Materials on Name-Correction Movement of “Ping-pu” Peoples in Taiwan.’ Core Research Project “Anthropological Studies of Inclusion and Autonomy,” International Symposium “Social Movements and the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia”
- 2014年3月4日 「博物館と知的財産——民博における管理の体制といくつかの事例」国際ワークショップ『コンピュータとドキュメンテーション——民族学資料のデジタル化とその利用』国立民族学博物館
- 2014年3月16日 「災害展示を考える」総合討論コーディネーター、公開シンポジウム『災害と展示』国立民族学博物館
- 2014年3月23日 総合研究大学院大学学融合研究プロジェクト学内公開セミナー『料理の環境文化史——生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト』主宰、国立民族学博物館
- 2014年3月30日 公開シンポジウム『伝統と創意——台湾における原住民族工芸』主宰、国立民族学博物館
- 2014年3月30日 「趣旨説明と講演者紹介」公開シンポジウム『伝統と創意——台湾における原住民族工芸』国立民族学博物館
- ・共同研究会
- 2014年1月11日 「台湾原住民族の『正名運動』における物質文化の位置づけ」『表象のポリティクス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
- 2013年8月28日 「民族誌展示を考える——日本国立民族学博物館展示リニューアルを事例に」第6届台日原住民族研究論壇、台北：国立政治大学
- 2014年2月9日 「台湾原住民と平埔族との関係」琉球大学琉球大学中期計画達成プロジェクト『人類の拡散と琉球列島』研究会、琉球大学
- 2014年3月14日 コメンテーター、フォーラム『アイヌ民族による文化資源の活用とその主体性——「象徴空間」と国立博物館の行方』（主催：福岡大学研究推進部 総合科学研究「文化資源をめぐる地域共生戦略」）福岡大学
- 2014年3月23日 「料理の環境文化史のねらい」総合研究大学院大学学融合研究プロジェクト学内公開セミナー『料理の環境文化史——生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト』国立民族学博物館
- ・みんぱくゼミナール
- 2013年11月16日 「台湾平埔族の歴史と文化」第426回みんぱくゼミナール
- ・展示
- 企画展「台湾平埔族の歴史と文化」（台湾国立台湾歴史博物館との国際連携展示）本館企画展示場 A 展示プロジェクトリーダー、特別展「洪沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」実行委員、年末年始展示イベント「うま」プロジェクトメンバー、本館展示新構築「中国地域の文化」プロジェクトメンバー
- ・広報・社会連携活動
- 2013年9月13日 「国立民族学博物館的研究と展示」台湾国立台南芸術大学を対象にした民博での講義、国立民族学博物館
- ◎調査活動
- ・海外調査
- 2013年6月26日～7月1日—台湾（国立台湾歴史博物館での研究および国立台北芸術大学において情報収集）
- 2013年8月2日～8月8日—台湾（台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究）
- 2013年8月24日～8月29日—台湾（台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究）
- 2013年12月13日～12月19日—台湾（台湾における地方料理の成立と食資源の生産の歴史に関する調査）
- 2014年2月11日～2月20日—イギリス、スペイン（博物館、美術館における学術情報の知覚化に関する調査および台湾における環境と食生活に関する情報収集、資料調査）
- 2014年2月24日～2月27日—台湾（台湾における先住民文化の情報化に関する国際共同研究の準備会合へ参加）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（1人）、副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ

・論文審査

予備審査委員（1件）

◎上記以外の研究活動

・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

奨学寄付金「順益台湾原住民博物館研究賛助金」順益台湾原住民博物館、総合研究大学院大学学融合推進センター研究事業「戦略的共同研究Ⅰ」総合研究大学院大学受託事業費、「台湾文化光点計画」台湾文化部

平井京之介 [ひらい きょうのすけ] ————— 教授

【学歴】 東北大学文学部社会学科社会学専攻卒（1988）、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了（1992）、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了（1998）**【職歴】** 花王株式会社本社チェーンストア部（1988）、国立民族学博物館第1研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科兼任（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）**【学位】** Ph.D.（ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998）、M.Sc.（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992）**【専攻・専門】** 社会人類学 1）アジア産業労働者の人類学的研究、2）ラオス仏教の人類学的研究、3）コミュニティの政治人類学的研究**【所属学会】** 日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute、組織学会

【主要業績】

[単著]

平井京之介

2011 『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT出版。

[編著]

平井京之介

2012 『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会。

[論文]

Hirai, K.

2008 The Romantic Ethic and the Notion of Modern Society: Imagining Communities among Northern Thai Factory Women. In S. Tanabe (ed.) *Imagining Communities in Thailand: Ethnographic Approaches*, pp. 135-160, Chiang Mai: Silkworm Books.**【2013年度の活動報告】**

◎各個研究

・研究課題

水俣病被害者支援運動の人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本研究では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援NPOをコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社会のイメージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

・成果

本年度は、2013年度～2015年度に研究代表者として実施する科学研究費プロジェクト（基盤研究（C））「水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究」の研究活動の一部として、熊本県水俣市のNPOに

において、10月から約2か月間の集約的な現地調査を実施し、NPOの現在の活動内容、組織形態、メンバーの社会的属性、メンバー間の関係、所有する運動の資源等についてデータを収集した。また、機関研究プロジェクト「ケアと育みの人間学」の一部として、2014年2月22～23日に国際シンポジウム“Social Movements and the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia”を組織した。そこでは、水俣病被害者支援運動のコミュニティについてのこれまでの研究成果の一部を発表した。

◎出版物による業績

[その他]

平井京之介

2013 『微笑みの国の工場——タイで働くということ』（フィールドワーク選書） 京都：臨川書店。

2013 「みんぱく若手研究者奨励セミナー」『民博通信』142：2-3。

2014 「旅・いろいろ地球人 悪人、悪玉⑦ 内なる魔」『毎日新聞』3月27日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年7月5日 「苦しむ者のコミュニティ——ラオス仏教僧の知識と実践」『東南アジアの社会と文化研究会』
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科総合研究2号館4階会議室

2014年2月22日 ‘Storytelling and Change in the Habitus: an Emergent Form of Minamata Disease Victims’
Movement in Japan.’ 国立民族学博物館機関研究国際シンポジウム “Social Movements and
the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia,” 国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年3月8日 ‘The Development of Community Museums in Thailand since the Late 1980s.’
“Community Movements in Mainland South East Asia,” Chiang Mai: Lanna Resort

・研究講演

2014年3月20日 みんぱく公開講演会『働き者とナマケモノ!? ——「はたらきかた」文化論』コメンテーター、
毎日新聞社、オーバルホール

◎調査活動

・国内調査

2013年7月1日～7月12日—愛媛県松山市（連携展示「武器をアートに」関連ワークショップ）

2013年9月4日～9月8日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2013年9月11日～9月13日—福島県いわき市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2013年10月2日～11月6日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2013年11月11日～11月29日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年1月15日～1月16日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

2014年3月17日～3月18日—熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

・海外調査

2013年9月21日～9月29日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）

2013年12月4日～12月30日—タイ（「東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動」のための調査研究）

2014年3月5日～3月13日—タイ（「東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動」の研究およびタイの博物館・博物館学に関する共同研究実施に向けた予備調査）

2014年3月21日～3月26日—中華人民共和国、韓国（中国と韓国における負の記憶の博物館展示の研究調査）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ担当

テーマシリーズ「コミュニティとはなにか——その歴史と可能性」

樫永真佐夫 [かしなが まさお] 准教授

1971年生。【学歴】早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）【職歴】日本学術振興会特別研究員（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）【学位】学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）【専攻・専門】文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）【所属学会】日本文化人類学会、早稲田大学文化人類学会

【主要業績】

[単著]

樫永真佐夫

- 2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」——村のくらしと恋』東京：雄山閣。
- 2011 『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。
- 2009 『ベトナムの祖先祭祀——家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

【受賞歴】

2010 第6回日本学術振興会賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ベトナム、ラオスにおける黒タイの伝統文化／ボクシングの文化人類学

・研究の目的、内容

今年度も、ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイの伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。

また人類学的視点からボクシングを中心とする格闘技について、日本、ベトナム、タイ、ラオスなどで現地調査と文献調査をおこなう。

・成果

2013年度は、ベトナムとラオスにおける黒タイ村落を中心に現地調査と文献調査もおこなった。その成果はつぎの通りである。

ベトナム西北部ソンラー省の地域開発が進み、現地の地域史が再構築されている中で、現地の多数派住民である黒タイの集合的記憶がどのように歴史化されているかを扱った論文「ベトナム、ソンラーにおける歴史構築」（科学研究費補助金（基盤研究（A））「東アジアにおける『地方的世界』の基層・動態・持続可能な発展に関する研究」（代表者：藤井 勝）の成果）を刊行した。

また、20世紀の社会変動に伴い変化していく黒タイの祖霊観と葬式慣行を扱った論文「ベトナムにおける黒タイの祖霊観と葬式の変化」（民博共同研究「民族文化資源の生成と変貌——華南地域を中心とした人類学・歴史学的研究」（代表：武内房司）の成果）を刊行した。くわえて東南アジア村落研究に関する小論を、『月刊みんぱく』などに発表した。

◎出版物による業績

[論文]

樫永真佐夫

- 2014 「ベトナムにおける黒タイの祖霊観と葬式の変化」武内房司・塚田誠之編著『中国の民族文化資源——南部地域の分析から』pp. 91-118, 東京：風響社。

[その他]

樫永真佐夫

- 2013 「みんぱくの制服」『月刊みんぱく』37(4)：22-23。
- 2013 「インドシナ民族衣装野外展覧会」『月刊みんぱく』37(5)：22-23。
- 2013 「岩田慶治民博名誉教授を偲ぶ」『月刊みんぱく』37(6)：21。
- 2013 「野生ナスの実」西村昌也さんを偲ぶ会編『情熱の人——西村昌也さんと私』p. 38, ハノイ：西村

昌也さんを偲ぶ会。

2013 「佐々木高明元館長の人と学問」『月刊みんぱく』37(12): 2-3。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年10月19日 「黒タイのブン村」岩田慶治先生追悼シンポジウム『草木虫魚と向きあう』国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2014年2月15日 「ベトナムの黒タイのうた、おはなし」第429回みんぱくゼミナール

・研究講演

2013年8月26日 「ベトナムの多民族性——黒タイの村から」名古屋ベトナムネット講演会、長谷川ビル8階第1会議室（名古屋市金山）

2013年11月9日 檜永真佐夫&谷由起子トークショー「ルアンナムタの養蚕村」OUTBOUNDにおける展覧会『H. P. E 谷由起子の仕事 ラオス少数民族との布づくり（2013年10月30日～11月11日）』OUTBOUND（東京都武蔵野市）

・広報・社会連携活動

2014年3月20日 みんぱく公開講演会「働き者と、ナマケモノ!? ——『はたらきかた』文化論」パネル・ディスカッション司会、国立民族学博物館・毎日新聞社主催、オーバルホール

◎調査活動

・海外調査

2013年9月23日～10月2日—ベトナム、タイ（東南アジア展示新構築に向けての収集）

2013年11月20日～12月3日—ベトナム（東南アジア展示新構築に向けての収集、ベトナムの北部少数民族の伝統家屋の台所の比較調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

1年生ゼミ「地域文化学基礎演習Ⅰ」、リサーチプロポーザル

丹羽典生 [にわ のりお] ————— 准教授

【**学歴**】慶應義塾大学文学部卒（1996）、東京都立大学大学院社会科学科修士課程修了（1999）、東京都立大学大学院社会科学科博士課程単位修得満期退学（2005）【**職歴**】日本学術振興会特別研究員PD・法政大学（2005）、法政大学社会学部兼任教員（2005）、首都大学東京非常勤講師（2006）、筑波大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2008）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2013）【**学位**】博士（社会人類学）（東京都立大学 2006）、修士（社会人類学）（東京都立大学 1999）【**専攻・専門**】社会人類学、オセアニア地域研究【**所属学会**】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、東京都立大学社会人類学会、早稲田文化人類学会、Association for Social Anthropology in Oceania

【**主要業績**】

[単著]

丹羽典生

2009 『脱伝統としての開発——フィジー・ラミ運動の歴史人類学』東京：明石書店。

[共編著]

丹羽典生・石森大知編

2013 『現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから』京都：昭和堂。

[論文]

Niwa, N.

2010 Leaving their tradition behind: Development of the Lami movement in Fiji from 1949 to the 1990s. *People and Culture in Oceania* 26: 81-108.

【**受賞歴**】

2010 第9回オセアニア学会賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

開発モデル村落に関する文化人類学的研究——フィジー諸島共和国の村落部を事例として

・研究の目的、内容

本研究は、開発モデル村落の変容について文化人類学的に考察することを通じて、どのような経済開発の方法が優れていると理解されてきたのか、また、その現在における有効性について明らかにすることを目的としている。主たる事例として、オセアニアのフィジー諸島の農村部を取り上げる。

・成果

研究発表は、アメリカ社会人類学会、科学研究費補助金（基盤研究（A））「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」、同基盤研究（C）「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」に基づく研究会等で行った。著作・論文は、編著『オセアニアの〈紛争〉に関する比較民族誌的研究——グローバル化の中での暴力・民族対立・介入』（仮）をとりまとめている段階であるほか、複数の本に原稿提出済である。以上の課題の推進は、科学研究費補助金（基盤研究（C））「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」によった。

◎出版物による業績

[その他]

丹羽典生

2013 「騙される人類学者」『月刊みんぱく』37(4): 5。

2013 「人間学」『月刊みんぱく』37(4): 20。

2013 「現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから」『民博通信』141: 25。

2013 「世界の武器」『月刊みんぱく』37(10): 10-11。

2014 「現代オセアニアの〈紛争〉——脱植民地期以降のフィールドから」『日本オセアニア学会ニュースレター』107: 28。

2014 「World Watching from Hiroshima 忘れられた日本人移民」『みんぱく e-news』152 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/152>)。

Niwa, N.

2013 Cargo Cults and Contemporary Conflicts in Pacific Societies: Seeking a Path of Coexistence in the Age of Globalization. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 36: 12.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年2月8日 'Ethnographic Research and Written Fijian Testimonies: From Studies of Social Movements around 1950.' Association for Social Anthropology in Oceania, Kona Hawaii, United States of America

2014年2月15日 「宮本善十郎は何を見たか——消えた日本人移民からみた記憶と記録」『科学研究費補助金「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」研究会』京都大学

2014年3月22日 「辺境からみるグローバル化——フィジー・ヴァヌアツ移民の位置性と戦略」『日本オセアニア学会』高知県国民宿舎桂浜

・共同研究会

2013年7月6日 「ヴァス論再考——母方交叉イトコ婚からみた集団間関係の変容」『贈与論再考——「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究』

・広報・社会連携活動

2013年4月26日 「フィジーと紛争の現在」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

◎調査活動

・海外調査

2013年8月8日～10月11日—フィジー（OS型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的研究）

2014年2月4日～2月13日—アメリカ合衆国（ハワイ）（オセアニア社会人類学会参加およびハワイ大学での調査研究）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同・研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」(研究代表者：高倉浩樹) 共同研究員、科学研究費補助金(基盤研究(A))「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」(研究代表者：風間計博) 研究分担者、科学研究費補助金(基盤研究(C))「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大國の移民を事例に」研究代表者

三尾 稔 [みお みのる] ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京大学教養学部卒(1986)、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了(1988)、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程退学(1992)【職歴】東京大学教養学部助手(1992)、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師(1995)、東洋英和女学院大学社会科学部助教授(1999)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授(2003)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授(2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2004)、国立民族学博物館研究戦略センター准教授(2008)【学位】社会学修士(東京大学大学院社会学研究科 1988)【専攻・専門】社会人類学・インドの宗教と社会【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会

【主要業績】

[編著]

三尾 稔編

2011 『インド ポピュラー・アートの世界——近代西欧との出会いと展開』大阪：千里文化財団。

[共編]

出口 顯・三尾 稔編

2010 『人類学的比較再考』(国立民族学博物館調査報告90) 大阪：国立民族学博物館。

[論文]

Mio, M.

2009 Young Men's Public Activities and Hindu Nationalism: Naviyuvak Mandals and the Sangh Parivar in a Western Indian Town. In D. Gellner (ed.) *Ethnic Activism and Civil Society in South Asia*, pp. 27-56. New Delhi: Sage.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

世界市場への直接的な連結や情報テクノロジーの広範な浸透などを背景に、1990年代以降のインドの文化や宗教は地域外の動向と共振しつつ基層的な部分から大きな変容を遂げている。三尾が20年あまりにわたってフィールド調査を継続してきたインド西部の都市や村落においても、それは例外ではない。そこで、本年度の各個研究においては、特に情報テクノロジーの浸透や宗教の政治化・商品化といった全インド規模で見られる宗教や文化の変容動向が、地方のサバルタンの宗教実践をどのように変容させているかという点に注目し、フィールド調査や文献調査をもとに、変容の諸相を実証的に解明し、これが政治・経済・社会の動向とどのように関連するのかを明らかにする。

人間文化研究機構地域研究推進事業の一環である「現代インド地域研究」は、第4年度目に入る。三尾は、この研究プロジェクトにおいて国立民族学博物館拠点の拠点代表を引き続きとめ、拠点構成員や研究分担者とともに国際的な連携協力のもとでインド研究を推進する。この研究プロジェクトの国立民族学博物館拠点におけるテーマは、「現代インドの文化と宗教の動態」である。各個研究のテーマは、この大テーマに密接に関連するものであり、拠点予算も活用しつつ拠点の研究テーマの本での1つの実証的研究として各個研究を遂行する。

また、文化資源プロジェクト予算による、『沖 守弘インド民族文化写真資料アーカイブ』のデータベース作

成] プロジェクトでは、上記「現代インド地域研究」プロジェクト経費も活用しつつ、20世紀後半のインドの文化変容を写真によって跡づけられるデータベース資料とすべく、今年度はスライド写真のデジタル化およびデータベース化に向けた資料詳細目録の作成にあたる。

・成果

上記テーマに関して、「現代インド地域研究」推進経費に基づき2013年11月および2014年2月にインドに赴き民衆的で地域限定的なヒンドゥー教の信仰実践のサイバー空間利用に関して短期間の現地調査を行った。

「現代インド地域研究」推進事業に関しては、国立民族学博物館拠点の代表として、研究会やシンポジウムの開催、研究資料の受け入れなど拠点事業の推進を主導した。拠点の研究はグループ1「現代インドの宗教：運動と変容」およびグループ2「環流する現代インド文化」から組織される。今年度は両グループ合同の研究会を4回開催した。報告者はこれらの国内研究会の企画立案に関与し、研究会を主宰した。拠点プロジェクトの研究成果は、「現代インド地域研究」ネットワーク全体で出版を計画している全6巻の研究叢書のうちの第6巻として出版する予定である。2013年度は、研究会の機会も活用してこの巻の編集を行った。この巻において、報告者自身は編者として関与するだけでなく、序論および第12章を執筆している。本巻は2014年中に出版される予定である。

「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点は、研究ネットワークの国際化の推進にも積極的に取り組んでいる。2010年度に研究交流に関する覚書を交わしたエジンバラ大学南アジア研究センターとの間では日本の南アジア研究の成果の英文叢書としての刊行事業を進めている。本年度は、原稿の取りまとめ等の編集作業を進め、来年度中に刊行が開始される。報告者は、この英文叢書のうちの2冊の編集執筆を行った。

『「沖 守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、文化資源プロジェクト経費と「現代インド地域研究」プロジェクト経費を活用し、総点数20,217点のスライド写真のうち8,612点のデジタル化を終えるとともに、5,986点分のテキスト情報の打ち込みを行った。

◎出版物による業績

[その他]

三尾 稔

2013 「旅・いろいろ地球人 よそ者?⑥ 東の国から来たスパイ」『毎日新聞』11月21日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2013年12月21日 「ビデオテークより 婚礼に映じだされるインドのいま」第107回国立民族学博物館友の会東京講演会、モンベル品川店（東京都港区高輪）

・広報・社会連携活動

2013年10月4日 「インドの神々の世界」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2013年10月6日 「インドの婚礼のいま」第316回みんなくウィークエンドサロン

2013年10月25日 みんなく公開講演会「ミャンマー 刻んだ歴史 未来へのまなざし」全体コーディネーター、パネルディスカッション司会、国立民族学博物館・日本経済新聞社共催、日経ホール

2014年2月7日 「婚礼を通して見るインド社会の現在」園田民博連携講座、園田学園女子大学

2014年3月20日 みんなく公開講演会「働き者とマナケモノ!? ——『はたらきかた文化論』」総合司会、国立民族学博物館・毎日新聞社主催、オーバルホール

◎調査活動

・海外調査

2013年11月7日～11月22日—インド（現代インドにおける宗教の動態に関する調査）

2014年2月13日～2月26日—インド（現代インドにおける宗教の動態に関する調査および現代インド地域研究の国際的展開に関する意見交換）

◎大学院教育

・指導教員

特別共同利用研究員の研究指導教員（1人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点 拠点代表

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など
京都大学地域研究統合情報センター運営委員

伊藤敦規 [いとう あつのり]————— 助教

1976年生。【学歴】東京都立大学人文学部卒（社会学学士）（2000）、東京都立大学大学院社会科学研究科修士課程修了（社会人類学修士）（2003）、国立民族学博物館平成19年度特別共同利用研究員修了（2008）、国立民族学博物館平成20年度特別共同利用研究員修了（2009）、東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程単位取得満期退学（2009）【職歴】三重大学人文学部非常勤講師（2008）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター研究員（2008）、A:shiwi A:wana Museum and Heritage Center Visiting Researcher（2009）、日本学術振興会特別研究員 PD（2009）、立教大学兼任講師（2009）、北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員（2010）、国立民族学博物館平成22年度文化資源プロジェクト共同研究員（2010）、東北大学東北アジア研究センター共同研究員（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2011）【学位】博士（社会人類学）（東京都立大学 2011）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）【専攻・専門】社会人類学・米国先住民研究、先住民の知的財産権問題、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、民族藝術学会、西洋史学会、アメリカ学会、日本財経学会、American Anthropological Association、International Union of Anthropological and Ethnological Sciences

【主要業績】

[編著]

山崎幸治・伊藤敦規編著

2012 『世界のなかのアイヌ・アート』北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

[論文]

伊藤敦規

2013 「民族誌資料の制作者名遡及調査——『ホビ製』木彫人形資料を事例として」『国立民族学博物館研究報告』37(4): 495-633。

2011 「博物館標本資料の情報と知識の協働管理に向けて——米国南西部先住民ズニによる国立民族学博物館所蔵標本資料へのアプローチ」『国立民族学博物館研究報告』35(3): 471-526。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本国内博物館等所蔵アメリカ南西部先住民資料の協働管理に向けた調査研究

・研究の目的、内容

本研究は5年計画で実施される。その目的は、第1に日本国内の博物館等が所蔵しているアメリカ先住民資料（物質文化）の来歴や情報管理や保存状況を総合的に把握することである。第2の目的は日本国内での調査結果をアメリカ先住民コミュニティと共有し、将来的な管理に向けた要望等を聞き取り調査することである。第3の目的は、先住民コミュニティから寄せられる声を博物館などと共有することによって、今後の資料管理に反映されるだろう協働の制度的な枠組みを整理・検討することである。なお、具体的な調査対象機関は、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館（宮城）、豊島みみずく資料館（東京）、静岡市立芹沢銈介美術館（静岡）、柏木博物館（長野）、リトルワールド（愛知）、天理参考館（奈良）、国立民族学博物館（大阪）、日本郷土玩具博物館（広島）、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（香川）、の9機関とする。また、資料調査対象とする民族集団は、約20のプエブロ諸民族、ナバホ、アパッチ、ヤキなどである。なお、必要な場合はアイヌ民族も対象に含める。

・成果

2013年度は、2012年に調印した民博と A:shiwi A:wana Museum and Heritage Center との間の学術協定に基づき、民博にて国際シンポジウムを開催した。本シンポジウムの実施経費は、「本館全体の研究の応用ないし発展に係る必要経費——クラウド型情報ミュージアム構築に向けた基盤整備」を利用した。また、共催に北海道大学アイヌ・先住民研究センター、連携プロジェクトとして1）民博機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究（代表：佐々木史郎）」、2）民博機関研究「文化遺産の人類学（代表：飯田 卓）」、3）民博共同研究「米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究（代

表：伊藤敦規)」を加えたことで、議論を活発に行うことが出来た。その他の調査事項として、民博機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究（代表：佐々木史郎）」として実施した国際ワークショップの際に、ロシア民族学博物館の学芸員などと共に、天理参考館を訪問し、収蔵庫にて米国先住民関連の資料を閲覧した。さらに企画展示や米国先住民の招聘と熟覧調査の可能性などについて意見を交わした。

本年度の成果として、『民博通信』、『文教速報』、『MINPAKU Anthropology Newsletter』、『社会と調査』などに寄稿した。

◎出版物による業績

[論文]

Ito, A.

- 2013 Collaborating with the Source Community: Legal and Ethical Issues on the Ethnological Museum Collection Management. *Documentation and Recording of the Ethnographical Objects in the Museums 2* (the Research and Practical Seminar), pp. 1-7, Russian Museum of Ethnography, St-Petersburg, Russia(国際ワークショップ・プロシーディングス).

伊藤敦規

- 2014 「『先住民の知的財産問題』と文化人類学との関わり（特集 社会調査とデータの利用をめぐる研究倫理の動向）」『社会と調査』12：29-37，東京：一般社団法人社会調査協会。

[翻訳]

伊藤敦規・齋藤みほ・吉元菜々子訳

- 2013 永田脩一「ホピ族の『オバ』の謎」『社会人類学年報』39：77-108，東京都立大学・首都大学東京社会人類学会。

[その他]

伊藤敦規

- 2013 「旅・いろいろ地球人 よそ者？⑤ 記録禁止というマナー」『毎日新聞』11月14日夕刊。
- 2013 「World Watching from Arizona ——戦争と米国先住民」『みんぱく e-news』146 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/146>)。
- 2013 「みんぱくコレクションを語る カチーナ人形の作り手たち——40年後の『もの語り』の可能性」(友の会講演会要旨)『国立民族学博物館友の会ニュース』217：4。
- 2013 「北アリゾナ博物館」『月刊みんぱく』37(12)：14-15。
- 2013 (コラム解説)「はじまりは馬具づくり——米国南西部先住民の宝飾品」『年末年始展示イベント「うま』展示パネル。
- 2014 「『季節の踊り』の盛装と織り手」『月刊みんぱく』38(2)：22-23。
- 2014 『アメリカ先住民アート展解説』(北海道大学アイヌ・先住民研究センター国際シンポジウム『アイヌ・アートが担う新たな役割——米国先住民アートショーに学ぶ』レジュメ，2014年1月26日，北海道大学学術交流会館小講堂)。
- 2014 「民博が国際ワークショップを開催——“フォーラム型情報ミュージアム”実現に向け」『文教速報』7973：15。
- 2014 「揺りかご」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 248，大阪：国立民族学博物館。

Ito, A.

- 2013 Conservation and Restoration on Ethnological Materials. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 36: 12-13.
- 2014 Cradle. In the Organizing Committee of “The Power of Images” (ed.) *The Power of Images: The National Museum of Ethnology Collection*, p. 248, Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2013年7月27日 「羽根への思い——北アメリカ」『鳥の羽根 いろとりどり』企画展「アマゾンの生き物文化」関連トークイベント、国立民族学博物館
- 2014年1月29日 「趣旨説明」国立民族学博物館国際ワークショップ『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』国立民族学博物館

・共同研究会

- 2013年11月24日 「民族誌資料を活用する研究者とソースコミュニティとの協働関係構築の可能性」『米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』
- 2013年11月25日 「国立民族学博物館が所蔵する米国先住民資料について」『米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』
- 2014年2月10日 ‘Introduction of the A:shiwi A:wam Museum and Heritage Center’ 『米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年6月9日 「映像上映『アメリカ先住民 ホピの銀細工づくり——銀板に重ね合わせる伝統』」第47回日本文化人類学会研究大会、慶應義塾大学
- 2013年6月16日 「日本における北米先住民研究」東京外国語大学アジア・アフリカ研究所共同研究会『地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求』（代表：高倉浩樹）2013年度第1回研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所本郷サテライト
- 2013年9月24日 ‘Collaborating with the Source Community: Legal and Ethical Issues on the Ethnological Museum Collection Management,’ Documentation and Recording of the Ethnographical Objects in the Museums (the Research and Practical Seminar), Russian Museum of Ethnography, St-Petersburg, Russia
- 2014年1月26日 「趣旨説明」北海道大学アイヌ・先住民研究センター国際シンポジウム『アイヌ・アートが担う新たな役割——米国先住民アートショーに学ぶ』北海道大学学術交流会館小講堂

・展示

- 2013年12月12日～2014年1月28日 『年末年始展示イベント「うま」』実行委員
- 2014年1月26日 『アメリカ先住民アート展』企画・資料提供、北海道大学アイヌ・先住民研究センター国際シンポジウム『アイヌ・アートが担う新たな役割——米国先住民アートショーに学ぶ』、北海道大学学術交流会館小講堂

・映像作品上映

- 2013年6月9日 『アメリカ先住民 ホピの銀細工づくり——銀板に重ね合わせる伝統』第47回日本文化人類学会研究大会、慶應義塾大学
- 2014年1月26日 『インディアン・ジュエリーの現在』、『アメリカ先住民アート展』北海道大学アイヌ・先住民研究センター国際シンポジウム『アイヌ・アートが担う新たな役割——米国先住民アートショーに学ぶ』、北海道大学学術交流会館小講堂
- 2014年2月10日 『インディアン・ジュエリーの現在』国立民族学博物館共同研究会『米国土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究』（代表：伊藤敦規）2013年度第2回研究会、国立民族学博物館

・広報・社会連携活動

- 2013年6月14日 「アメリカ先住民ホピへの旅」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- 2013年8月25日 「米国先住民ホピのソーシャルダンス」第312回みんぱくウィークエンド・サロン
- 2013年9月7日 「カチーナ人形の作り手たち——40年後の『もの語り』の可能性」第423回国立民族学博物館友の会講演会
- 2014年2月20日 「ソースコミュニティによる民族誌資料の熟覧」北海道アイヌ協会・国立民族学博物館第1回研修生講義、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

- 2014年1月25日—アイヌ民族博物館・二風谷町（アイヌ民族のアート制作と展示に関する実見調査）
- 2014年1月28日—国立民族学博物館（米国先住民ズニ宗教指導者とのズニ関連資料熟覧調査）

・海外調査

- 2013年6月25日～7月11日—アメリカ合衆国（北アリゾナ博物館との学術協定締結に向けた調査、「人類の文化遺産に関するクラウド型情報ミュージアムの基盤構築」プロジェクトに関する調査研究）
- 2013年9月22日～9月29日—ロシア（機関研究に係る国際ワークショップ「民族学資料の記録化、情報化の諸

問題」参加)

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

国立民族学博物館共同研究会「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」研究代表者、国立民族学博物館「本館全体の研究の応用ないし発展に係る必要経費「クラウド型情報ミュージアム構築に向けた基盤整備」研究代表者、国立民族学博物館機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」(研究代表者：佐々木史郎) 共同研究員、国立民族学博物館機関研究「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」(研究代表者：飯田 卓) 共同研究員、北海道大学アイヌ・先住民研究センター共同研究「先住民アートプロジェクト」(研究代表者：山崎幸治) 共同研究者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」(研究代表者：高倉浩樹) 共同研究者

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など
地域研究コンソーシアム運営委員

◎学会の開催

2014年1月26日 北海道大学アイヌ・先住民研究センター国際シンポジウム『アイヌ・アートが担う新たな役割——米国先住民アートショーに学ぶ』(共催：国立民族学博物館)、北海道大学学術交流会館小講堂

2014年1月28日～29日 国際ワークショップ『伝説、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』(共催：北海道大学 アイヌ・先住民研究センター)、国立民族学博物館

河合洋尚 [かわい ひろなお]————— 助教

1977年生。【学歴】関西学院大学社会学部卒業(2001)、東京都立大学大学院社会科学研究科(修士課程)修了(2003)、東京都立大学大学院社会科学研究科(博士課程)修了(2009)【職歴】嘉応大学客家研究院講師(2008)、中山大学社会学・人類学学院助理研究員(講師)(2010)、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員(2011)、国立民族学博物館研究戦略センター助教(2013)【学位】博士(社会人類学)(東京都立大学 2009)、修士(社会人類学)(東京都立大学 2003)【専攻・専門】都市人類学、景観人類学、漢族研究【所属学会】日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

【主要業績】

[単著]

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

[編著]

河合洋尚編

2013 『日本客家研究的視角与方法——百年の軌跡』北京：社会科学文献出版社。

[論文]

Kawai, H.

2012 Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Production of Cantonese Landscape in Urban Guangzhou. *Asia Pacific World* (International Association for Asia Pacific Studies, New York and London: Berghahn) 3(1): 50-68.

【受賞歴】

2001 安田三郎賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 中国漢族地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究
- 2) 環南シナ海における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌
- 3) 客家研究にまつわる先行研究の整理

・研究の目的、内容

- 1) 日本では萌芽的な段階にある景観人類学を理論的に整理するとともに、その視点と手法をもって中国華南地方の漢族社会における景観形成を解説する。
- 2) 漢族のサブ・エスニック集団である客家に特に着目し、その国境を超えた文化的ネットワークを明らかにする。華南地方の客家に対する理解を深めるとともに、中国西南地方および東南アジアの華人社会における客家とのつながりを考察する。
- 3) 国際的な対話に欠ける客家研究の現状を脱するべく、とりわけ日本やアメリカで蓄積された客家の人類学的研究を再読し、それを中国客家学に紹介する。

・成果

- 1) 景観人類学の手法から、華南客家社会における空間／景観の形成過程について明らかにした。その結果、客家というエスニシティは、自然発展的なものではなく、市場経済化政策採択以降の空間政策と関連した、空間の生産の産物であることを明らかにした。
- 2) フィールドワークおよび文献調査を通し、中国広東省、広西チワン族自治区、四川省の客家についての研究を継続させた。また、東南アジアの客家をめぐるフィールドワークも促進させた。近年は特にベトナムの客家の一種であるンガイ人の国際ネットワークについても研究している。
- 3) 国内外の客家研究の動向を学会誌にて発表した。特に、日本の客家研究については中国から編著として出版しただけでなく、台湾の査読付き雑誌でも論文として発表した。

◎出版物による業績

[単著]

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

[編著]

河合洋尚編

2013 『日本客家研究の視角与方法——百年の軌跡』北京：社会科学文献出版社。

[翻訳]

河合洋尚・姜 娜訳、蔡 文高監訳

2013 瀬川昌久『客家——華南漢族の族群性及其辺境』北京：社会科学文献出版社。

[論文]

河合洋尚

2013 「客家建築と文化遺産保護——景観人類学視野」『学術研究』（広東省社会科学界联合会），CSSCI 期刊，341期，pp. 55-60。

2013 「馬來西亞沙巴州の客家人——關於移民、認同感、文化標志の初歩報告」『客家研究輯刊』（中国広東省嘉應大学客家研究所）42：134-144。

2013 「東南アジアにおける客家研究の新傾向——シンガポール、マレーシアを対象として」『国立民族学博物館研究報告』38(1)：17-33。

2013 「被創造的巷道景観——広州老城区のグローバル化と景観建設」黄 忠彩・張 繼焦編『対经济社会転型の探討——中国的城镇化、工業化和民族文化伝承』pp. 14-30，北京：知識産権出版社。

2013 「客家語話と文化産業——以梅州、玉林、成都為例」黄 忠彩・張 繼焦編『企業和城市發展——并非全是經濟的問題』pp. 180-190，北京：知識産権出版社。

河合洋尚・飯島典子

2013 「日本客家研究の軌跡——從日本時代台湾調査到後現代主義視角」『全球客家研究』（台湾国立交通大学）創刊号：123-162。

[その他]

河合洋尚

- 2013 「ランドスケープの人類学」『月刊みんぱく』37(1): 10-11。
 2013 「(特集序)『硬性』客家文化与『軟性』客家文化」『客家研究輯刊』(中国広東省嘉応大学客家研究所) 42: 1-3。
 2013 「景観人類学——認知とマテリアリティのはざま」『民博通信』143: 22-23。
 2013 「評論 日本宗教人類学現状」『宗教人類学』(中国社会科学院宗教研究所) 4: 375-381, 北京: 社会科学文献出版社。
 2014 「パブリック人類学とパブリック民俗学の対話可能性」『現代民俗研究』(現代民俗学会) 6: 152-154。
 2014 「中国の七夕」『旅とフィールドワーク』(園田学園女子大学シニア国際総合研究) 3: 70-71。
 2014 「旅いろいろ地球人 悪人、悪玉① 英雄への思い」『毎日新聞』2月13日夕刊。
 2014 「みんぱく世界の旅 中国⑤ 世界文化遺産の土楼」『毎日小学生新聞』3月22日。
 2014 「みんぱく世界の旅 中国⑥ アメリカで活躍する中国人」『毎日小学生新聞』3月29日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

- 2013年11月19日 「越南客家的神佛信仰与宗教景観的創造」機関研究『中日人類学民族学理論刷新与田野調査』
 中国社会科学院民族学人類学研究所

・共同研究会

- 2014年3月8日 「客家聖地のポリティクス——同時代世界における華人ネットワークと宗教景観の創造」『聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究』

・学会または館外のシンポジウム

- 2013年10月10日 「日本沖縄与客家原郷的民俗風水」国際シンポジウム「国際移民与客家文学術研討会」嘉応大学客家研究院 (星野麗子との共同発表)
 2013年11月6日 'Landscape Politics and Life Practices around Cultural Heritage: Comparison between Fujian Tulow and Hakka Weilongwu,' Second International Conference on Cultural Heritage, Zhejiang University
 2013年11月10日 「日本、美国客家団体的比較研究」『客家網絡工作坊』台湾交通大学客家文化学院

◎調査活動

この部分は電子媒体による公開の許諾が得られていません

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

- 流通科学大学「民族文化誌」

菅瀬晶子 [すがせ あきこ] ————— 助教

【学歴】東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒 (1995)、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程 (アジア第三専攻) 修了 (1999)、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程 (地域文化学専攻) 修了 (2006)

【職歴】日本女子大学文学部史学科非常勤講師 (2006)、総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員

(2006)、日本女子大学文学部史学科非常勤講師(2008)、日本女子大学文学部史学科非常勤講師(2009)、神奈川大学経営学部非常勤講師(2010)、日本女子大学文学部史学科非常勤講師(2010)、共立女子大学国際学部非常勤講師(2010)、大阪大学外国語学部非常勤講師(2010)、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員(2010)、国立民族学博物館民族社会研究部助教(2011)【学位】博士(文学)(総合研究大学院大学2006)、修士(学術)(東京外国語大学大学院1999)【専攻・専門】文化人類学・中東地域研究(パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏)【所属学会】日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

[単著]

菅瀬晶子

- 2012 『豊穡と共生への祈り——パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』(民族紛争の背景に関する地政学的研究19) 大阪：大阪大学世界言語研究センター。
- 2010 『イスラームを知る6 新月の夜も十字架は輝く——中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。
- 2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』広島：溪水社。

【受賞歴】

2006 長倉研究奨励賞、総研大研究賞受賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

前年度に引き続き、東地中海地域アラビア語圏における宗教的マイノリティ、ことにキリスト教徒とシーア派ムスリム、中東系ユダヤ人(ミズラヒーム)の宗教的アイデンティティの表象のありかたについて、研究を進めた。イスラエル・ガリラヤ地方とヨルダン川西岸地区、レバノン南部をおもな調査地とし、聖者崇敬と食文化の研究を軸としている。

本年度おこなった調査・研究は、以下のとおりである。

- 1) 過去におこなったレバノン南部の聖者崇敬の事例についての論文執筆
- 2) イスラエル・ガリラヤ地方とヨルダン川西岸地区における聖者崇敬調査の続行
- 3) 前年度末におこなったキリスト教徒の食文化調査の続行、研究発表、論文の執筆

・成果

- 1) レバノン南部の聖者崇敬の事例についての論文執筆
現在修正作業中であり、次年度中に研究報告に再提出、掲載予定である。
- 2) イスラエル・ガリラヤ地方とヨルダン川西岸地区における聖者崇敬調査の続行
2013年末から翌年初頭にかけて現地調査をおこない、聖者崇敬にしばしばみられる奇跡譚の聞き取りをおこなった。過去に聞き取りをおこなった世代が徐々に世を去り、若い世代の間では聖者崇敬が日常生活からやや遠い存在になりつつあることに、危機感をおぼえた。聖者崇敬の様態については、ここ数年パレスチナ・イスラエルのみでの調査が続いているため、次年度はヨルダンとの比較をおこなうことをめざしたい。また、シリア内戦にともないあらたな奇跡譚がうまれつつある現象にも、注目してゆきたい。ほかに、2011年度末に参加したカナダでの国際シンポジウムの内容が出版されることが決まり、当時発表した聖者崇敬研究の内容を英語論文とし、あらためて寄稿した。2014年度中に出版予定である。
- 3) 食文化調査の続行、研究発表、論文の執筆
2012年度末におこなった豚肉食調査の内容については、みんぱくウィークエンド・サロンや館内外の研究会で数回発表をおこない、異なる分野の研究者と意見交換をおこなった。また、食文化調査の現在までの内容については、論文を1本執筆した。

◎出版物による業績

[論文]

菅瀬晶子

- 2013 「東地中海アラビア語圏キリスト教徒にみられる食文化の特徴」『総合研究大学院大学葉山彙報』5：

71-80。

[その他]

菅瀬晶子

- 2013 「旅・いろいろ地球人 緑薫る① 野草ににじむ郷愁」『毎日新聞』5月2日夕刊。
 2013 「旅・いろいろ地球人 緑薫る⑥ 聖なる大樹」『毎日新聞』6月6日夕刊。
 2013 「特集 食べない食べもの、食べられない食べもの 肉食礼賛の中東で、ベジタリアンとして調査する」『月刊みんぱく』37(6):7。
 2013 「似たものさがし 羽根飾り」『月刊みんぱく』37(7):10-11。
 2013 「旅・いろいろ地球人 音の響き⑧ 聖都の安宿で」『毎日新聞』8月15日夕刊。
 2013 「イギリス委任統治時代の再考へ向けて——共同研究 パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点(2011-2014)」『民博通信』142:12-13。
 2013 「旅・いろいろ地球人 よそ者?④ ここが、私たちの村だ」『毎日新聞』11月7日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年8月29日 「パレスチナ・イスラエルにおけるキリスト教徒の食文化——メルキト派カトリック信徒を中心に」第14回古代・東方キリスト教研究会、国立民族学博物館

・共同研究

2013年12月21日 「パレスチナ・イスラエルにおける豚肉食の現状」『肉食行為の研究』

・広報・社会連携活動

2013年6月1日 「金曜日はムジャッダラの日——アラビア語圏キリスト教徒の暮らし」第420回国立民族学博物館友の会講演会

2013年6月25日 「中東のキリスト教徒からみたイスラーム世界」伊丹市中央公民館現代課題セミナー『日本人の知らないイスラーム世界』第1回講座、伊丹市中央公民館

2013年11月10日 「それでも豚を食べる人びと——パレスチナ・イスラエルにおける豚肉食」第320回みんぱくウィークエンド・サロン

2013年11月27日 「パレスチナ・イスラエル紛争を知る」川西市清和台公民館民族学講座、川西市清和台公民館

2013年12月4日 「占領下のパレスチナ人の暮らし——キリスト教徒の事例」川西市清和台公民館民族学講座、川西市清和台公民館

2014年1月18日 「中東のキリスト教徒の食文化——パレスチナ・イスラエルの事例より」日本家政学会食文化研究会、謙堂文庫

◎調査活動

・海外調査

2013年12月24日～2014年1月10日—イスラエル（イスラエル・ガリラヤ地方およびパレスチナ自治区・ヨルダン川西岸地区のキリスト教徒間における聖者崇敬についての調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

NIHU プログラム・イスラーム地域研究東大拠点研究協力者、東京工業大学創立130周年記念「ぐるなび」食の未来創成寄附講座・食文化共同研究会共同研究者、大阪大学世界言語研究センター「民族紛争の背景に関する地政学的研究」パレスチナ班研究分担者

・非常勤講師

滋賀県立大学「国際関係論」

文化資源研究センター

朝倉敏夫 [あさくら としお]——センター長（併）教授

1950年生。【学歴】武蔵大学人文学部社会学科卒（1974）、明治大学大学院政治経済学研究科修士課程修了（1977）、明治大学大学院政治経済学研究科博士後期課程満期退学（1985）【職歴】国立民族学博物館第4研究部助手（1988）、

国立民族学博物館第1研究部助教授(1994)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(1994)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授(1998)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2001)、国立民族学博物館民族文化研究部長(2006)、国立民族学博物館民族社会研究部教授(2008)国立民族学博物館文化資源研究センター教授(2010)【学位】政治学修士(明治大学大学院政治経済学研究科1977)【専攻・専門】社会人類学、韓国社会論【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、韓国文化人類学会

【主要業績】

[単著]

朝倉敏夫

2005 『世界の食文化1 韓国』東京：社団法人農山漁村文化協会。

[編著]

朝倉敏夫編

2003 『「もの」から見た朝鮮民俗文化』東京：新幹社。

[共編]

朝倉敏夫・嶋 陸奥彦編

1998 『変貌する韓国社会——1970～80年代の人類学調査の現場から』東京：第一書房。

【受賞歴】

2013 大韓民国玉冠文化勲章

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

韓国社会の人類学的研究

・研究の目的、内容

1980年代以降、韓国社会に関するフィールド・ワークを推進してきたが、この30年間に韓国社会は大きく変化してきた。その変化に対応して、私自身の韓国社会に対する関心も変化し、研究の対象および調査方法も変わってきた。そうした私自身の体験をふまえて、これからの韓国社会の人類学的研究について再考してみたい。

今年度は、その第一歩として、1970年代末から1980年代にかけての韓国社会を、現在の視点から振り返って見る。それは韓国社会が高度経済成長を経て、伝統的な文化が消滅していくとともに、創造される時代であったと考えられる。

・成果

外部出版社から、韓国社会のフィールド・ワークについての執筆を依頼されており、その中に本研究を反映させていこうと考え、現在執筆中である。2014年度に出版される予定である。

◎出版物による業績

[論文]

朝倉敏夫

2013 「사할린의 김치 (サハリンのキムチ)」『2003ユネスコ無形遺産諮問機構(NGO)国際シンポジウム Proceedings 김치와 김장 (キムチとキムジャン)』pp. 99-113, ソウル：韓国文化財保護財団(韓国語)。

2013 「일본문화인류학에서 한국학의 상황과 전망-제2세대의 Memorandum (비망록) (日本文化人類学における韓国学の状況と展望——第2世代のメモランダム)」『韓国日本語文学会第41回学術大会 Proceedings』pp. 3-20, ソウル：韓国日本語文学会(韓国語)。

2013 「일본의 쓰케모노와 한국의 김치 (日本の漬物と韓国のキムチ)」『2013 第1回キムチ学シンポジウム Proceedings』pp. 101-121, ソウル：世界キムチ研究所(韓国語)。

2013 「일본의 쓰케모노와 한국의 김치 (日本の漬物と韓国のキムチ)」世界キムチ研究所編『キムチとキムジャン文化の人文的理解』pp. 117-147, ソウル：民俗苑(韓国語)。

Asakura, T.

2013 Korean Society as seen from the Japanese Perspectives: A through Analysis of Books Published in Japan. In Hyup Choi (ed.) *Representing the Cultural 'Other': Japanese Anthropological Works*

on Korea, pp. 165-200, Gwangju: Chonnam National University Press.

[編集協力]

朝倉敏夫

2013 韓国ドラマ・ガイド『馬医』前編, 東京: NHK 出版。

2014 韓国ドラマ・ガイド『馬医』後編, 東京: NHK 出版。

[その他]

朝倉敏夫

2013 「キムチ」『民俗小事典 食』 pp. 55-56, 東京: 吉川弘文館。

2013 「韓国料理」『民俗小事典 食』 pp. 435-436, 東京: 吉川弘文館。

2013 「石毛直道さんとわたし——韓国食研究者との交友」記念冊子『石毛直道さんとわたし』出版をすすめる会編『石毛直道さんとわたし——石毛直道自選著作集出版記念』 p. 3, 東京: ドメス出版内 記念冊子『石毛直道さんとわたし』出版をすすめる会。

2013 「地球ミュージアム紀行 大韓民国歴史博物館」『月刊みんぱく』37(10): 14-15。

2014 「World Watching from Japan and Korea 和食とキムジャン」みんぱく e-news 151 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/151>)。

2014 「旅・いろいろ地球人 冬を楽しむ⑦ キムジャンの心」『毎日新聞』1月30日夕刊。

2014 「赤松智城」『[新版] 韓国朝鮮を知る事典』 p. 8, 東京: 平凡社。

2014 「石首魚」『[新版] 韓国朝鮮を知る事典』 p. 21, 東京: 平凡社。

2014 「塩辛」『[新版] 韓国朝鮮を知る事典』 p. 216, 東京: 平凡社。

2014 「明太」『[新版] 韓国朝鮮を知る事典』 p. 543, 東京: 平凡社。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[短編]

朝倉敏夫 (制作指導)

2013 西江中学校チーム『ボランティアが見た2012年韓国の大統領選挙——キム・シヨンさんの選択』(韓国国立民俗博物館との交流事業) 日韓両国語, 11分。

2013 漢陽中学校チーム『2012年 安東権氏 時祭』(韓国国立民俗博物館との交流事業) 日韓両国語, 11分。

2013 延世中学校チーム『牛と共に』(韓国国立民俗博物館との交流事業) 日韓両国語, 10分。

・TV・ラジオ番組などの制作・監修

[TV]

朝倉敏夫監修

2013年7月7日～日本語版監修 『馬医』NHK。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年9月26日 「사할린의 김치 (サハリンのキムチ)」2003ユネスコ無形遺産諮問機構 (NGO) 国際シンポジウム 김치와 김장 (キムチとキムジャン)、韓国文化財保護財団、重要無形文化財伝習会館

2013年10月12日 「일본문화인류학에서 한국학의 상황과 전망-제 2 세대의 Memorandum (비망록) (日本文化人類学における韓国学の状況と展望——第2世代のメモランダム)」韓国日本語文学会第41回学術大会、建国大学校

2013年11月5日 「일본의 쫄케모노와 한국의 김치 (日本の漬物と韓国のキムチ)」2013第1回キムチ学シンポジウム、世界キムチ研究所、韓国国立民俗博物館

・研究講演

2013年11月24日 司会 「1930年代の蔚山・多島海の民俗」『歴泊映像祭 映像民俗学の先駆者たち——渋沢敬三と宮本馨太郎』国立歴史民俗博物館

2013年12月3日 「食を通して見た韓日文化」ワンアジア財団支援「慶熙大学校 アジア研究——アジア共同体の形成基盤」慶熙大学校

2013年12月12日 「『食文化』を通して見た韓日比較」『2013 新安文学講演会』新安文化院、新安ビーチホテル

・展示

特別展『渋沢敬三没後50年 屋根裏部屋の博物館』実行委員 (総括)、企画展「アリラン展」実行委員長、新構築「朝鮮半島の文化」展示 実行委員

・ 広報・社会連携活動

2013年5月18日 (聞き手) 宮塚利雄『『アリランの誕生』裏話』国立民族学博物館

2014年2月16日 NHK 美の壺「韓国家庭料理」

2014年3月14日 「ようこそ、みんなくへ！——似て非なるものの理解」帝塚山中学校、国立民族学博物館

◎調査活動

・ 海外調査

2013年5月30日～6月3日—大韓民国(東アジアにおける海外コリアンの人類学的研究および「朝鮮半島の文化」映像プロジェクト参加)

2013年9月25日～9月28日—大韓民国(2013年ユネスコ無形文化遺産諮問機構(NGO)国際シンポジウム参加)

2013年10月11日～10月13日—大韓民国(韓国日本語学会国際学術大会参加)

2013年10月18日～10月20日—大韓民国(2013年度大韓民国文化勲章授賞式参加)

2013年11月4日～11月8日—大韓民国(第1回キムチ学シンポジウム参加および韓国食生活文化学会2013年秋季学術大会参加)

2013年12月2日～12月4日—大韓民国(慶熙大学校において韓国社会の人類学的研究)

2013年12月11日～12月14日—大韓民国(東アジアにおけるコリアン・ネットワークの人類学的研究に関する調査)

◎大学院教育

・ 指導教員

主任指導教員(3人)

◎社会活動・館外活動

・ 非常勤講師

神戸女子大学「世界の食文化」、仏教大学 通信教育課程

久保正敏 [くぼ まさとし]————— 副館長(企画調整担当)、教授

小林繁樹 [こばやし しげき]————— 教授

1949年生。【学歴】南山大学文学部人類学科卒(1973)、南山大学大学院文学研究科文化人類学専攻修士課程修了(1976)【職歴】野外民族博物館リトルワールド学芸研究員(1976)、東京造形大学造形学部助教授(1992)、東京造形大学学芸員課程室室長(1994)、東京造形大学造形学部教授(1997)、国立民族学博物館文化資源研究センター教授(2004)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任(2005)、国立民族学博物館館長補佐併任(2005)、国立民族学博物館情報管理施設長併任(2006)、国立民族学博物館文化資源研究センター長併任(2009)【学位】文学修士(南山大学大学院文学研究科1976)【専攻・専門】道具人類学、文化人類学、博物館学【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、民族藝術学会、道具学会、日本展示学会

【主要業績】

[単著]

小林繁樹

2004 『世界一周道具パズル これ、なんに使うのかな?』(電子書店mm文庫)、東京:光文社。

[論文]

小林繁樹

2011 「次世代展示はモノコミだ!」(特集10のキーワードで語る“博物館展示の未来”6モノ:情報集合)『展示学』49:36-39。

2009 「世界のものづくり——創造のキッカケを動詞で試みる」国立民族学博物館編『茶の湯のものづくりと世界のわざ——千家十職×みんなく』pp.154-157、東京:河出書房新社。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・ 研究課題

文化資源の活用に関する研究

諸文化における道具人類学的研究

・研究の目的、内容

文化資源の活用に関する研究においては、人類が生み出し、育み、築いてきている人類文化を文化資源としてとらえ、その活用に関する一連の過程（認識し、理解し、留め、さらには伝え、促進し、より有効な利用へと展開させる）を全般的に調査研究するが、特に研究組織間や博物館同士の連携のあり方やその具体的方策の検討と文化人類学・民族学博物館における文化資源の有効な活用についての考察や実験的研究に重点をおく。

諸文化における道具人類学的研究においては、ことに身体の動きと道具との関連の考察を進める。

・成果

文化資源の活用に関する研究においては、標記課題を引続き考察、研究するなかで、日本学術振興会受託事業「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」（研究代表者：園田直子）の一環としてミャンマーで開催された研究集会において、*Museum Exhibitions as the Place for Creativity in the National Museum of Ethnology, Japan* と題した発表を行った（現在、印刷中）。また、日本展示学会（会長：高橋 貴）主催、日本博物館協会共催による「日本展示学会2013年度研究集会 in 福島」の企画、実施を同学会副会長の草刈清人と担当し、国立民族学博物館・人間文化研究機構主催、日本展示学会共催による公開シンポジウム「災害と展示」（実行委員長：須藤健一）では実行委員として企画、実施に携わり、基調講演「災害を展示することの意義と課題」をしたほか、パネルディスカッション「災害展示を考える」ではパネラーもつとめた。そして、これらの討議を通して文化資源の効果的な提示に関して認識を深めた。さらに、国際協力機構からの委託集団研修事業である「博物館学コース」に運営委員会委員長として携わり、講義を担当し、ニューズレターを編集するなど外国人受託研修員の研修に当たり、民博の文化資源の有効活用に関する実践的研究を試みた。日本展示学会の学会誌『展示学』51号の編集長も務め、博物館資料の理解の仕方やこれからの展示の在り方も展望した。

また、民博恒例で10回目となる年末年始展示イベント「うま」のプロジェクトチーム・リーダーとして計画、実施を担当し、合わせてこれに伴う展示活動研修会を主催した。

諸文化における道具人類学的研究においては、標記課題を引続き考察、研究するなかで、創造のための工夫に関する研究講演や講義を重ねた。

◎出版物による業績

[共編]

Kobayashi, S., N. Sonoda and I. Hayashi (eds.)

2013 *Museum Co-operation 2013 Newsletter of the Comprehensive Museology Course*. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

小林繁樹

2013 「道具学会理事・近藤雅樹さんを偲ぶ」『道具学会 News』50: 6-7。

2014 「みんなのオタカラ 美濃路人形(熊谷直実)」『みんな e-news』151 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/151otakara>)。

2014 「思い込みの転換と導いてくれる人びと」『月刊みんな』38(2): 18-19。

2014 「日本展示学会賞論文賞 講評」『展示学』51: 41。

2014 「後書」『展示学』51: 裏表紙見返し。

Kobayashi, S.

2013 Preface. In S. Kobayashi, N. Sonoda and I. Hayashi (eds.) *Museum Co-operation 2013 Newsletter of the Comprehensive Museology Course*, pp. 4-5. Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年3月16日 基調講演「災害を展示することの意義と課題」公開シンポジウム『災害と展示』（国立民族学博物館・人間文化研究機構主催、日本展示学会共催）、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年9月26日 ‘Museum Exhibitions as the Place for Creativity in the National Museum of Ethnology, Japan.’ 『アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流』（研究代表者：園田直子）、National Museum, Yangon, Myanmar.

・研究講演

2013年5月18日 「野外展示家屋『フランス アルザス地方の家』について」『2013年度リトルワールドカレッ

ジ・ベーシックコース第2回』 野外民族博物館リトルワールド

2014年3月12日 「モノ・文化・博物館をめぐって」 定年退職記念講演会、国立民族学博物館

・展示

「年末年始展示イベント『うま』」プロジェクトチームリーダー

・広報・社会連携活動

2013年4月15日 「民博の展示活動」博物館学コース、国立民族学博物館

2014年1月2日 「年末年始展示イベント『うま』について」『新春特別番組千里からおめでとう』FM千里

2014年1月13日 「うま」年始年末展示イベント『うま』関連イベント『みんなく教員によるギャラリートーク』

◎調査活動

・海外調査

2013年9月21日～9月29日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

野外民族博物館リトルワールド客員研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

道具学会理事、日本展示学会副会長、日本展示学会理事、日本展示学会学会誌『展示学』51編集長、野外民族博物館リトルワールド学芸顧問

・非常勤講師

川崎医療福祉大学「道具文化特論」、愛知県立芸術大学「陶磁論」

園田直子 [そのだ なおこ] ————— 教授

【学歴】 パリ第1大学文学部卒（1980）、パリ第1大学科学技術修士課程修了（1982）、エコール・ド・ルーブル卒（1983）、パリ第1大学博士課程修了（1987）【職歴】 フランス博物館科学研究所研究員（1987）、国立美術館絵画修復研究所（フランス）研究員（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第5研究部助手（1993）、国立民族学博物館第5研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館情報管理施設長（2009）、館長補佐（2010）【学位】 Doctorat de 3^{ème} cycle (Histoire de l'art) 博士（美術史）（Université de Paris I, 1987）、Maîtrise des Sciences et Techniques (Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques) 科学技術修士（Université de Paris I, 1982）【専攻・専門】 保存科学【所属学会】 ICOM（国際博物館会議）、IIC（国際文化財保存学会）、文化財保存修復学会、IIC-Japan（国際文化財保存学会日本支部）

【主要業績】

[編著]

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学（第2版）』東京：岩田書院。

日高真吾・園田直子編

2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』千葉：三好企画。

[学位論文]

Sonoda, N.

1987 Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3^{ème} cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

【受賞歴】

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

環境問題に配慮した資料保存環境の構築 その2

・研究の目的、内容

博物館の資料保存は、環境への配慮なしに考えることはできなくなっている。20世紀後半のオゾン層保護の問題が、日本の博物館における防虫・殺虫方針を根本から見直す契機となったことは、記憶に新しい。近年は地球温暖化、そして東日本大震災後の社会状況を受けて、全国規模で節電の動きが起きている。本研究の目的は、人間文化研究機構・連携研究により研究開発した保存環境分析システムを活用し、本館の資料保存環境を、実測値をもとに検証することにある。昨年度に実施した、平常時と節電時の温度・湿度データの総合分析につき、今年度はさらなる詳細分析をおこなう。

・成果

人間文化研究機構・連携研究により研究開発した保存環境分析システムを活用し、温度・湿度データを総合的に分析した。一般収蔵庫（昼のみ空調）で15分ごとに計測している実測値をもとに、季節毎の温度・湿度の平均値、1日あたりの最大差、季節を通じた推移を比較検討したところ、外気の影響を受けにくい部屋であれば、中間期（春期と秋期）は空調を停止したほうが、温度・湿度の推移が緩やかになり、資料保存の見地から望ましいことが分かった。また、空調停止により節電効果も期待できる。実測値に基づいた環境分析は、他機関においても資料管理基盤を形成する上での基礎情報となるため、この分析結果は国内外の保存関連の学会やシンポジウムで発表した。

◎出版物による業績

[編著書]

Sonoda, N., C. Laroque, H.-Y. Jeong and G. Chen (eds.)

2013 *Research on Paper and Papermaking: Proceedings of an International Workshop* (Senri Ethnological Studies 85), Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Sonoda, N.

2013 Research on Conservation of Paper and Books and New Techniques for Evaluating Paper Deterioration. In N. Sonoda, C. Laroque, H.-Y. Jeong and G. Chen (eds.) *Research on Paper and Papermaking-Proceedings of an International Workshop* (Senri Ethnological Studies 85), pp. 1-10. Osaka: National Museum of Ethnology.

[その他]

園田直子

2013 「旅・いろいろ地球人 たちこめる⑥ 暑さ対策にはタナカー」『毎日新聞』4月11日夕刊。

2013 「博物館の『保存科学』」『産経新聞』8月15日夕刊。

2013 「みんなく世界の旅 博物館の裏側①」『毎日小学生新聞』12月14日。

2013 「みんなく世界の旅 博物館の裏側②」『毎日小学生新聞』12月21日。

Sonoda, N. and C. Laroque

2014 Preface. In N. Sonoda, C. Laroque, H.-Y. Jeong and G. Chen (eds.) *Research on Paper and Papermaking: Proceedings of an International Workshop* (Senri Ethnological Studies 85), pp. i-ii. Osaka: National Museum of Ethnology.

日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・小谷竜介

2013 「東日本大震災で被災した民俗資料の脱塩に関する一考察」『文化財保存修復学会第35回大会 in 仙台研究発表要旨集』pp. 46-47。

日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・小谷竜介・幡野寛治

2013 「東日本大震災による被災民俗文化財の一時保管場所の環境について」『文化財保存修復学会第35回大会 in 仙台研究発表要旨集』pp. 108-109。

園田直子・日高真吾・河村友佳子

2013 「省エネを考慮した持続的な空調管理——国立民族学博物館の事例から」『文化財保存修復学会第35回大会 in 仙台研究発表要旨集』pp. 142-143。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年7月3日 「2013年度計画 温度・湿度分析システムスモールパッケージの開発」「人間文化資源」の総合的研究連携研究総括班会議、情報・システム研究機構

2014年2月13日 「温度・湿度分析システム・スモールパッケージ」「人間文化資源」の総合的研究——「人間文化資源の保存環境研究」国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年7月17日 「国立民族学博物館における国際協力・研修の新たな展開」、文化遺産国際協力コンソーシアム第2回ミャンマーワーキンググループ会合、東京国立博物館

2013年7月20日 「東日本大震災で被災した民俗資料の脱塩に関する一考察」（日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・小谷竜介、発表は日高真吾）、文化財保存修復学会第35回大会、東北大学百周年記念会館川内萩ホール

2013年7月20日 （ポスター発表）「東日本大震災による被災民俗文化財の一時保管場所の環境について」（日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・小谷竜介・幡野寛治）、文化財保存修復学会第35回大会、東北大学百周年記念会館川内萩ホール

2013年7月20日 （ポスター発表）「省エネを考慮した持続的な空調管理：国立民族学博物館の事例から」（園田直子・日高真吾・河村友佳子）、文化財保存修復学会第35回大会、東北大学百周年記念会館川内萩ホール

2013年10月3日 ‘Storage Re-organization for Sustainable Collection Management and better Access to Collection,’ The International Conference and Workshop on Open Storage and Use of Collections of Museums、国立科学技術博物館（台湾）

2013年10月24日 ‘Sustainable and Environmental Friendly Museum Environment: A Case Study from the National Museum of Ethnology after the Great East Japan Earthquake’ (Sonoda, N. and S. Hidaka), Cultural Heritage Conservation Science and Sustainable Development: Experience, Research, Innovation, International Conference in the Frame of the 50th Anniversary of the Centre de Recherche sur la Conservation des Collections、フランス国立図書館

2013年10月24日 ‘Applicability of Japanese bast Fibers (koso, mitsumata, gampi) as Strengthening Fibers for the Fleece Method’ (関正純・岡山隆之・園田直子、発表は関正純), Cultural Heritage Conservation Science and Sustainable Development: Experience, Research, Innovation, International Conference in the Frame of the 50th Anniversary of the Centre de Recherche sur la Conservation des Collections、フランス国立図書館

2013年12月9日 「国立民族学博物館における国際協力・研修の新たな展開——ミャンマーでの博物館学に関する共同研究会・公開フォーラム」、文化遺産国際協力コンソーシアム第3回ミャンマーワーキンググループ会合、東京国立博物館

2013年12月12日 「国立民族学博物館での保存科学研究」第1回知覧特攻平和館保存対策委員会開催

2014年1月15日 ‘Preventive Conservation in Japan: Case study from National Museum of Ethnology, Japan,’ The Open International Seminar on Conservation of Archeological Bronze Objects、アルメニア歴史博物館

2014年1月18日 ‘Integrated Pest Management,’ The Open International Seminar on Conservation of Archeological Bronze Objects、アルメニア歴史博物館

・広報・社会連携活動

2013年7月13日 「資料の保存・取り扱いについて」『MMP2013年度新規メンバー養成研修③』みんぱくミュージアムパートナーズMMP、国立民族学博物館

2013年11月20日 「標本資料の保存と活用」文化資源プロジェクト2013年度年末年始展示イベント『うま』国立民族学博物館、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2013年8月31日～9月1日—長岡市（中越地震メモリアルに関する情報収集と意見交換会）

2014年2月22日～2月23日—高知県立紙産業技術センター（紙資料の強化実験に関する研究会）

・海外調査

- 2013年9月21日～9月29日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）
 2013年10月1日～10月6日—台湾（博物館コレクションの活用とオープンストレージに関する国際シンポジウム、ワークショップ参加）
 2013年10月20日～10月27日—フランス（コレクション保存研究センターにおいて調査研究および国際シンポジウム「文化遺産の保存科学とその持続的展開」参加）
 2014年1月13日～1月21日—アルメニア（アルメニア共和国歴史博物館において国際シンポジウム参加および近隣諸国の博物館における予防保存に関する情報収集と現状調査）
 2014年3月8日～3月13日—タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究実施に向けた予備調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究：「人間文化資源の保存環境研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））（一般）「劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発」研究代表者、日本学術振興会研究拠点形成事業——B. アジア・アフリカ学術基盤形成型「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」日本側コーディネータ

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など

国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、独立行政法人文化財研究所自己点検評価・外部評価委員、舞鶴市ユネスコ世界記憶遺産有識者会議委員、知覧特攻平和会館保存検討委員会委員

- ・非常勤講師

関西大学国際文化財・文化研究センター「文化財保存修復セミナー」「文化財各論（保護と活用）」「美術工芸品（I）絵画」

吉田憲司 [よしだ けんじ] ————— 教授

1955年生。【学歴】京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）【職歴】ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター長（2006）、放送大学客員教授（2010）【学位】学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】文化人類学、博物館人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族芸術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

【主要業績】

[単著]

吉田憲司

- 2013 『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』東京：岩波書店。
 1999 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。
 1992 『仮面の森——アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

【受賞歴】

- 2004 第1回木村重信民族芸術学会賞
 2000 第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）
 1993 日本アフリカ学会研究奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化遺産の管理と表象に関する博物館人類学的研究

・研究の目的、内容

ユネスコによる無形文化遺産条約の成立に伴い、有形と無形を含めた文化遺産の管理・継承における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化遺産をいかに管理・継承し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。文化遺産の管理と表象にかかわる博物館・美術館のありかたを歴史的に検証し、その問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を考究する。

・成果

内戦という負の歴史の遺産としての銃をもちいて、創造的なアートの作品に仕上げるというモザンビークの営みについてのこれまでの研究・収集の成果を、2013年7月11日から11月5日まで民博で開催した企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」で公開した。同展は、アートの作品や博物館というものが平和構築や社会の安定にいかんにか貢献できるかを問う試金石となった。また、これまでの世界の文化遺産・物質文化の知見を生かし、報告者が実行委員長となって、館全体の研究者の参加を得て、国立民族学博物館創設40周年記念展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」を国立新美術館にて2014年2月19日から開催した。

博物館における文化遺産の表象の研究成果は、『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』にまとめ、2003年4月23日に刊行した。

◎出版物による業績

[単著]

吉田憲司

2013 『文化の「肖像」——ネットワーク型ミュージオロジーの試み』 東京：岩波書店。

1999(2014) 『文化の「発見」——驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』(岩波人文書セレクション) 東京：岩波書店。

[編著]

吉田憲司編

2014 『武器をアートに——モザンビークにおける平和構築』大阪：「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」展プロジェクト・チーム。

「イメージの力」実行委員会(代表：吉田憲司)編

2014 『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』大阪：国立民族学博物館。

[論文]

吉田憲司

2013 「特集・武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」『月刊みんぱく』37(10):2-9。

2013 「座談会〈今、博物館団体に求められる底力①——大阪会場から〉」『博物館研究』(公益財団法人日本博物館協会)48(12):6-17。

2014 「イメージの力をさぐる」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』pp.14-25, 大阪、国立民族学博物館。

Yoshida, K.

2013 The Power of Museum Display. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 37: 6-7.

[その他]

吉田憲司

2013 「フォーラムとしてのミュージアム、その後」『民博通信』140:2-7。

2013 『物質文化を通じた新たなアフリカ像の構築』2009年度～2012年度科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書。

2013 「特集・武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」『月刊みんぱく』37(10):2-9。

2014 「特集・イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」『月刊みんぱく』38(2):2-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

- ・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告
2013年7月13日 《機関研究成果公開》国際ワークショップ「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築の営みを考える」
- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
2013年10月3日 『国立民族学博物館における文化の展示』研修課程「博物館と教育——地域コミュニティとの連携」台湾国立台北芸術大学
2013年10月5日 『東日本大震災と災害の記憶』研修課程「博物館と教育——地域コミュニティとの連携」台湾国立歴史博物館
2013年10月21日 「民具と民藝」周期特別展講演会、大阪日本民芸館
- ・みんぱくゼミナール
2013年10月19日 「心の武装解除——モザンビーク『武器をアートに』プロジェクトを考える」第425回みんぱくゼミナール
- ・研究講演
2013年9月9日 ‘Museum as a Forum: Ongoing Exhibition Projects at National Museum of Ethnology, Japan’ “2013 Asia Culture Forum, Gwangju (Korea),” Chonnam National University
- ・展示
本館企画展示「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」実行委員長、企画展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」国立新美術館（2014年2月19日～6月9日）実行委員長
- ・広報・社会連携活動
2014年3月28日 出演「ぶらぶら美術・博物館」（BS日テレ）特集：国立新美術館「イメージの力」展——ピカソやモディリアーニの心を揺さぶった民族の造形

◎調査活動

- ・海外調査
2013年9月8日～9月12日—大韓民国（アジア文化フォーラム2013会議参加）
2013年9月21日～9月29日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）
2013年10月3日～10月7日—台湾（国立台湾博物館「博物館とモノを通じた文化への解釈と発信」研修における講義・指導）

◎大学院教育

- ・指導教員
主任指導教員（4人）
- ・論文審査
博士論文審査委員（1件）

◎社会活動・館外活動

- ・他機関から委嘱された委員など
文化遺産国際協力コンソーシアム アフリカ分科会 会長、UCLA African Arts Consulting Editor
- ・非常勤講師
放送大学「博物館概論」、お茶の水女子大学「文化情報論」（集中講義）、大阪芸術大学「藝術行動学特論」（集中講義）

上羽陽子 [うえば ようこ] ————— 准教授

1974年生。【学歴】大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程前期修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程後期修了（2002）【職歴】大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）【学位】博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）【専攻・専門】民族芸術学、染織研究、手工芸研究【所属学会】民族芸術学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

【主要業績】

[単著]

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人びと』 京都：昭和堂。

[論文]

上羽陽子

2010 「NGO 商品を作らないという選択——インド西部ラバーリー社会における開発と社会変化」『地域研究』10(2): 204-223。

2008 「インドの手工芸と振興活動——ラバーリー社会を事例に」デザイン史フォーラム編, 藤田治彦責任編集『近代工芸運動とデザイン史』 pp. 292-299, 京都：思文閣出版。

【受賞歴】

2010 意匠学会作品賞

2007 第4回木村重信民族芸術学会賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

・研究の目的、内容

現代インドにおいて、ものづくりの作り手の創意工夫や、手工芸技術の継承法について実践的にアプローチし、製作者が伝統的形態の継承と現代的な要素の採用をいかに選択しているかを明らかにすることを目的とする。同時に、文化資源である現地の人びとのものづくりに関する知識を、どのように活用することができるか、さらに共同利用や社会還元への可能性を展示やワークショップを通じて実践的研究を行う。

・成果

本年度は、計3回の海外調査（地域研究推進経費）を実施した。1回目は、インド西部グジャラート州とラージャスターン州において、染織道具の生産地や生地を生産地といった染め、織り、刺繍の原材料の現場から、染織の加工や販売まで、手工芸品の製作に関する調査をおこなった。2回目はグジャラート州、ウツタルプラデシュ州、オリッサ州において、捺染、ムガル王朝時代に栄えた刺繍と金糸、銀糸といった布地への装飾技術の調査、ローカルマーケットでの調査をおこなった。3回目は、ブータン、インドアッサム州において野蚕の生産現場と、野蚕糸生産・使用状況の調査をおこなった。今年度の調査では、広範囲をめぐったことにより、各地を比較することができ、南アジアの染織技術の現状を包括的に把握した。また、実践的研究として、手工芸文化の理解を目的としたものづくりワークショップを企画・実施した。

◎出版物による業績

[監修]

上羽陽子

2013 『世界のかわいい民族衣装』 東京：誠文堂新光社。

[その他]

上羽陽子

2013 「旅・いろいろ地球人 音の響き③ 装身具の役どころ」『毎日新聞』7月11日夕刊。

2014 「光と色が放つイメージ」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』 pp. 128-130, 大阪：国立民族学博物館。

2014 「かたちを楽しむ」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』 pp. 160-162, 大阪：国立民族学博物館。

2014 「ブラウス『モラ』」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』 p. 245, 大阪：国立民族学博物館。

2014 「坐椅子」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』 p. 248, 大阪：国立民族学博物館。

2014 「男性用上着『カフタン』」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』 p. 249, 大阪：国立民族学博物館。

- 2014 「女性用ヴェール」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 249, 大阪：国立民族学博物館。
- 2014 「帽子」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 254, 大阪：国立民族学博物館。
- 2014 「沙漠のきらめき（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.1）」『フラワーデザインライフ』552, p. 8, 東京：株式会社マミ。
- 2014 「牧草に咲く花（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.2）」『フラワーデザインライフ』553, p. 8, 東京：株式会社マミ。
- 2014 「風とおる刺繍の花（世界の民族衣装 手仕事からうまれる花々 file.3）」『フラワーデザインライフ』554, p. 8, 東京：株式会社マミ。

Ueba, Y.

- 2014 The Playfulness of Forms. Organizing Committee of “The Power of Images” (ed.) *The Power of Images: The National Museum of Ethnology Collection*, pp. 219-221, Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2014 Images Exuded by Light and Color. Organizing Committee of “The Power of Images” (ed.) *The Power of Images: The National Museum of Ethnology Collection*, pp. 214-217, Osaka: National Museum of Ethnology.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

- 2013年6月2日 「国立民族学博物館とは」『みんなくミュージアムパートナーズ新規募集にかかる養成研修』国立民族学博物館
- 2013年6月4日、10日、25日 「インド西部の刺繍技術を読みとる——模写実践と異文化理解」川島テキスタイルスクール主催、川島テキスタイルスクール（3回連続講座）
- 2013年6月12日 「手織り絨毯の織技術について」『シルクロード絨毯塾』株式会社絨毯ギャラリー主催、神戸ファッションマート
- 2013年7月6日 「インドのキターブチャルカで糸紡ぎ」川島テキスタイルスクール主催、川島テキスタイルスクール
- 2013年8月5日 「国立民族学博物館とは」『大阪府教育センター 自主研修または初任者研修プログラム』国立民族学博物館第5セミナー
- 2013年10月8日 「幼児婚からみるラバーリー女性の手仕事」岩立フォークテキスタイルミュージアム『豊かなインドの針仕事——村の女性の縫い、刺繍、アップリケ』展（2013年9月5日～12月21日）関連講演会、岩立フォークテキスタイルミュージアム

・展示

企画展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」国立新美術館、実行委員

・広報・社会連携活動

- 2013年3月17日、4月1日、15日、5月3日、20日、31日、6月11日 「ザフィマニリの敷物を編もう」特別展『マダガスカル 霧の森の暮らし』関連、国立民族学博物館特別展示場内
- 2013年4月7日 「ザフィマニリの編みもの」第294回みんなくウィークエンド・サロン
- 2013年4月15日 「目を閉じて編みものと対話する」特別展『マダガスカル 霧の森の暮らし』関連ミニレクチャー、国立民族学博物館特別展示館
- 2013年5月3日 「つばなし帽子と女性の髪型」特別展『マダガスカル 霧の森の暮らし』関連催し『ザフィマニリの敷物を編もう（おはなしの時間）』国立民族学博物館特別展示館
- 2013年5月27日 「草を編み材につくりかえる」特別展『マダガスカル 霧の森の暮らし』関連ミニレクチャー、国立民族学博物館特別展示館
- 2013年5月31日 「よくみて判る大きなちがい——素材から編み方まで」特別展『マダガスカル 霧の森の暮らし』関連催し『ザフィマニリの敷物を編もう（おはなしの時間）』国立民族学博物館特別展示館
- 2014年3月15日、16日 「わたし みんな めぐる イメージ——世界のものと向き合おう」「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」展関連ワークショップ、国立新美術館・国立民族学博物館共催、国立新美術館展示室2E、研修室

2014年3月31日 春のこどもワークショップ「世界一周ビーズの旅——フィールドワークに挑戦！」国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2013年8月24日～9月28日—インド（現代インド地域研究に関する調査）

2013年11月30日～12月28日—インド（現代インド地域研究に関する調査）

2014年2月25日～3月11日—インド、ブータン（現代インド地域研究に関する調査）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

民族芸術学会編集（学会誌）委員

・非常勤講師

京都精華大学「文様史1」、京都嵯峨芸術大学「工芸概論」、「工芸研究」、大阪芸術大学「繊維基礎実習—2（バスケタリー）」

信田敏宏 [のぶた としひろ] ————— 准教授

1968年生。【学歴】東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）【職歴】東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）【学位】社会人類学博士（東京都立大学 2002）【専攻・専門】社会人類学、東南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

【主要業績】

[単著]

信田敏宏

2013 『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書 1）京都：臨川書店。

2004 『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

Nobuta, T.

2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia*. Subang Jaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

【受賞歴】

2006 第4回東南アジア史学会賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

マレーシアの先住民コミュニティに関する民族誌的研究

・研究の目的、内容

本研究では、マレーシアの先住民コミュニティ（集落や村落などの伝統的コミュニティから NGO や先住民ネットワークなどを媒介とする新たなコミュニティを含む）の変容過程について、世界の先住民が置かれた状況と比較しながら民族誌的に検討する。具体的には、グローバル化のなかで変容する先住民のコミュニティや人びとの関係性、近年になって活発化している先住民運動や NGO 活動などに焦点を当てながら研究を進める。

・成果

本研究の成果として、オラン・アスリ社会におけるフィールドワークに焦点を当てた単著（『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書 1）京都：臨川書店、2013年）を発表した。

◎出版物による業績

[単著]

信田敏宏

2013 『ドリアン王国探訪記——マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書1）京都：臨川書店。

[その他]

信田敏宏

2013 「グローバル支援の人類学——協力の人類史に向けて」『民博通信』143：16-17。

2014 「狩猟神の像」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 241, 大阪：国立民族学博物館。

2014 「乳児背負子」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 249, 大阪：国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年6月16日 「イスラーム世界の周縁、あるいは周縁世界のイスラーム——マレーシア先住民の事例から」AA研共同研究プロジェクト「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」東京外国語大学本郷サテライト

・広報・社会連携活動

2013年5月30日 「マレーシア研修旅行に向けて」大阪府立泉北高等学校

2013年10月25日 「オラン・アスリの生活世界」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2013年12月7日 「フィールドワークを語る ドリアン王国探訪記」第426回国立民族学博物館友の会講演会

2014年1月31日 「多民族国家マレーシアの現在——先住民の生活文化を中心に」園田・民博連携講座「世界の人間文化を学ぶ——伝統と現在」園田学園女子大学

◎調査活動

・海外調査

2014年1月17日～1月25日—マレーシア（東南アジア展示新構築のための標本資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

副指導教員（1人）

・大学院ゼミでの活動

研究計画シリーズ

2013年6月27日 喬旦加布（主任指導：横山廣子、副指導：信田敏宏）志望研究内容：中国青海省同仁県におけるチベット文化とその民族誌的研究——同仁県フォッコル村の事例から

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」共同研究員（代表：高倉浩樹）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

東京外国語大学「東南アジア地域文化論」（集中講義）、奈良女子大学「比較社会学特殊研究」

林 勲男 [はやし いさお]————— 准教授

【学歴】立教大学文学部史学科卒（1980）、立教大学大学院文学研究科地理学修士課程修了（1983）、一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程単位取得退学（1992）【職歴】シドニー大学人類学科客員研究員（1992）、国立民族学博物館第4研究部助手（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2001）【学位】文学修士（立教大学大学院文学研究科 1983）【専攻・専門】社会人類学 1）パプアニューギニアにおける社会組織と世界観に関する研究、2）

オセアニア近代史の人類学的研究、3) 自然災害への対応に関する人類学的研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、地域安全学会、日本災害復興学会

【主要業績】

[編著]

林 勲男編

2010 『自然災害と復興支援』（みんぱく実践人類学シリーズ9）東京：明石書店。

[共編著]

岩崎信彦・田中泰雄・林 勲男・村井雅清編

2008 『災害と共に生きる文化と教育——〈大震災〉からの伝言（メッセージ）』京都：昭和堂。

[論文]

林 勲男

2006 「意識の変容、多次元的な自己——ベトナムにおける夢と交霊をめぐる」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』pp. 351-378, 京都：世界思想社。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

災害研究における民族誌的方法に関する研究

・研究の目的、内容

災害研究の分野では、被災地調査を含め、短期ではあるが頻繁に同じ調査地に足を運び、フィールドワークをおこなう研究者が増えてきている。本研究では、こうした実態の正確な把握と、人類学が育んできたエスノグラフィの災害研究における可能性を、その課題と共に検討する。国内外の調査報告書や論文等の文献調査と、南海トラフ地震発生による被害想定の見直しに伴う地域防災の変化に関して紀伊半島南部での現地調査と、2011年3月に発生した東日本大震災被災地での地域コミュニティ再建に関する現地調査を継続する。

・成果

東日本大震災に関しては、日本文化人類学会誌『文化人類学』78巻1号にて、川口幸大と共に「特集 災害と人類学——東日本大震災にいかに向き合うか」を責任編集した。また、日本文化人類学会第47回研究大会（於：慶應義塾大学、2013年6月8日～9日）にて、分科会「『生』の復興に向けて——3.11と人類学(3)」で「被災民俗芸能の『復活』——三陸沿岸の鹿踊り支援を通じて」と題して発表をおこなった。さらに、被災地調査の成果として、「災害復興における民俗文化の役割——南三陸町歌津地区の民俗行事の再生から」が高倉・滝澤編『無形民俗文化財が被災するということ——東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社に所収、出版された（同内容で、宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2012年度報告集 別冊』（文化庁、2013）にも収録された）。

和歌山県串本町にて、地域防災に関して町の総務課および複数の自主防災会で調査を実施したが、研究成果にするにはさらなるデータの収集が必要である。災害のエスノグラフィ研究についても、継続してデータの収集が必要である。

◎出版物による業績

[論文]

林 勲男

2013 「災害復興における民俗文化の役割——南三陸町歌津地区の民俗行事の再生から」宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2012年度報告集 別冊』pp. 29-38, 文化庁。

2013 「災害を語り継ぐ——ミュージアムと災害の記録・記憶」『復興』（災害復興学会）5(2): 21-27。

2014 「災害復興における民俗文化の役割——南三陸町歌津地区の民俗行事の再生から」高倉浩樹・滝澤克彦編『無形民俗文化財が被災するということ——東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』pp. 29-38, 東京：新泉社。

林 勲男・川口幸大

2013 「序〈特集〉 災害と人類学——東日本大震災にいかに向き合うか」『文化人類学』78(1): 50-56。

[その他]

林 勲男

- 2013 「南三陸町歌津地区寄木集落」宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2012年度報告集』pp. 216-221, 文化庁。
- 2013 「南三陸町歌津地区寄木集落」、高倉浩樹・滝澤克彦編『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2012年度報告集』（東北アジア研究センター報告9）、pp. 216-221。
- 2013 『大規模災害被災地における環境変化と脆弱性克服に関する研究』科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書。
- 2014 「鹿の角を贈る——『愛 deer プロジェクト』について」無形文化遺産情報ネットワーク『東日本大震災被災地域における無形文化遺産とその復興』（3.11復興支援 無形文化遺産情報ネットワーク報告書）pp. 99-101, 独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所無形文化遺産部。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年6月9日 「被災民俗芸能の『復活』——三陸沿岸の鹿踊り支援を通じて」日本文化人類学会第47回研究大会 研究講演『分科会「生」の復興に向けて——3.11と人類学③』慶應義塾大学

・研究講演

- 2013年8月8日 「災害の記憶を残し、伝える——災害に関わる二つの記憶」『津波災害の記憶を巡る』シンポジウム、東北大学防災科学国際研究所
- 2014年3月1日 「鎮魂と復興のきずな——東日本大震災と民俗芸能」大阪府立中央図書館

◎調査活動

・国内調査

- 2013年7月11日～14日—宮城県気仙沼市・南三陸町・仙台市（東日本大震災被災地の復興支援に関わる情報収集）
- 2013年8月10日～12日—岩手県大船渡市（笹崎鹿踊保存会の活動に関する調査）
- 2013年8月30日～9月2日—和歌山県串本町（東日本大震災発生をうけての南海トラフ地震津波災害への防災状況の調査）
- 2013年10月19日～22日—岩手県遠野市・釜石市・大船渡市（東日本大震災被災地における文化遺産の保護対応に関する調査）
- 2013年11月1日～3日—新潟県長岡市・小千谷市（新潟県中越地震被災地における震災の記録化に関する調査）
- 2013年11月16日～18日—岩手県盛岡市・奥州市・北上市（無形民俗文化への東日本大震災の影響の記録化に関する調査）
- 2013年12月14日～16日—宮城県気仙沼市・岩手県花巻市（東日本大震災展示に関する情報収集と津波被災地の現地調査および研究打ち合わせ）
- 2014年3月8日～10日—新潟県長岡市・小千谷市・東京都（科学研究費補助金（基盤研究（S））「減災の決め手となる行動防災学の構築」に関わるデータ収集）
- 2014年3月17日～20日—群馬県嬬恋村・東京都（天明3年（1783年）の浅間山噴火災害を伝える彼岸行事の参与観察調査、文化遺産の保存と継承に関する調査、災害遺構に関する文献調査）

・海外調査

- 2013年9月21日～9月29日—ミャンマー（ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

- 1年生ゼミ テーマシリーズ 「災害の人類学」

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

- 東北大学防災科学国際研究所 特定プロジェクト研究「災害の記憶・記録に関する拠点間の連携を通じた災害アーカイブ学の探求」（代表：佐藤翔輔）共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（S））「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表：林 春男）研究分担者

1971年生。【学歴】東海大学文学部史学科日本史学専攻卒（1995）【職歴】財団法人元興寺文化財研究所研究員（1995）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（2002）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター助手（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター准教授（2008）【学位】文学博士（東海大学 2005）【専攻・専門】保存科学、保存修復【所属学会】文化財保存修復学会、文化財科学会、日本民具学会、近畿民具学会

【主要業績】

[単著]

日高真吾

2008 『女乗物——その発生経緯と装飾性』神奈川：東海大学出版会。

[編著]

日高真吾編

2012 『記憶をつなぐ——津波被害と文化遺産』大阪：千里文化財団。

日高真吾・園田直子編

2008 『博物館への挑戦——何がどこまでできたのか』千葉：三好企画。

【受賞歴】

2009 日本文化財科学会第4回ポスター賞

2008 文化財保存修復学会第2回奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から

・研究の目的、内容

本研究は、大規模災害において壊滅的な被害を受けた文化遺産を被災地の大学機関やミュージアムと連携し、どのように復興させ、活用していくかを調査・研究するものである。そして、そのような活動に研究機関である大学共同利用機関がどのような役割を果たせるのかを明らかにしていくことを目的とする。このテーマのなかで、本研究では、特に保存科学的見地から、被災地における一時保管場所の環境改善対策の立案に力点をおく。なお、本研究は主に、人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」のうち、日高が主催する「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から」において実施する。

・成果

宮城県気仙沼市旧月立中学校文化財収蔵庫において導入したIPM活動では、こまめな清掃を心がけることを基軸とした運用をおこない、施設内の清潔度が格段に上がった。一方、窓や板塀からの虫の侵入は防ぎ切れておらず、虫の侵入路を防ぐための処置をおこなう必要があることを確認した。外光対策については、斜光カーテンを設置することで、大きな効果が得られたことが分かった。また、新潟県村上市奥三面歴史交流館重要有形民俗文化財奥三面の山村用具収蔵庫との比較においては、温度湿度の安定度において、気仙沼の施設に大きな変動が観察された。これは、教室窓側からの外気の影響が大きく、その対策が必要であることを改めて確認した。なお、本研究課題のひとつとして、一時保管場所で劣化が進み始めている漆器製品の保存について、その応急処置マニュアルを作成し、施設内で応急的な保存修復がおこなえる情報を提供した。

◎出版物による業績

[論文]

Hidaka, S.

2014 The Exhibition of Japanese Culturals in the National Museum of Ethnology. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 38(4): 533-554.

日高真吾・関 雄二・橋本沙知・椎野 博

2014 「アンデス文明形成期の金属製品の製作に関する一考察——クントゥル・ワシ遺跡およびパコパンバ

遺跡出土の金属製品の蛍光 X 線分析の結果から」『国立民族学博物館研究報告』38(2)：125-186。

[その他]

日高真吾

2013 「東日本大震災における文化財レスキューについて」『文化財の虫菌害』（文化財虫害研究所）65：3-9。

2013 「日々のくらし」『月刊みんぱく』37(5)：6。

2013 展示紹介「国立民族学博物館企画展『記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産』」『日本民具研究』147：144-148。

2013 「国立民族学博物館の支援活動」『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会 平成24年度活動報告書』pp. 84-86。

2014 「東日本大震災で被災した民俗資料の取り組み」『PASSION』35：21-24。

2014 「安藤緑山作『染象牙果菜置物』『染象牙貝尽し置物』の蛍光 X 線分析」『超絶技巧！明治工芸の粋』pp. 150-153, 東京：浅野研究所。

2014 「文化財レスキューの現在——保存科学の現場から」『季刊民族学』148：13-17。

2014 「文化という視点からの支援活動」『季刊民族学』148：10-11。

日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・小谷竜介

2013 「東日本大震災で被災した民俗資料の脱塩処理に関する一考察」『文化財保存修復学会第35回大会要旨集』pp. 46-47。

日高真吾・園田直子・和高智美・河村友佳子・橋本沙知・小谷竜介・幡野寛治・村上市教育委員会

2013 「東日本大震災による被災民俗文化財の一時保管場所の環境について」『文化財保存修復学会第35回大会要旨集』pp. 108-109。

古水 力・笹山政幸・橋本裕之・日高真吾

2014 「支援をどうつないでいくか——沿岸部民俗芸能をとりまく状況から」『季刊民族学』148：32-39。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

[マルチメディア]

日高真吾監修

2014 『紙芝居で語る郷土玩具』日本語

・電子ガイドの制作・監修

[日本の文化展示]

日高真吾監修

2013 『大和盆地の稲作』（日本語、英語、中国語、韓国語）

2013 『牡蠣（かき）の養殖』（日本語、英語、中国語、韓国語）

2013 『鞆の浦（とものうら）の鯛しばり網漁』（日本語、英語、中国語、韓国語）

2013 『こけし』（日本語、英語、中国語、韓国語）

2013 『螺鈿（らでん）の制作』（日本語、英語、中国語、韓国語）

・DVD・CDなどの制作・監修

[みんぱく映像民族誌]

日高真吾監修

2014 『みんぱく映像民族誌 第12集：今に伝わる日本の鑄造技術』（日本語、95分）

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年3月16日 「企画展『歴史と文化を救う』を振り返る——災害に強い展示技術の観点から」国立民族学博物館公開シンポジウム『災害と展示』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年7月19日 「民俗文化財の応急処置」文化財保存修復学会公開シンポジウム『救え！故郷の証——津波被災資料の応急処置と修復』仙台市博物館

2013年7月20日 「東日本大震災による被災民俗文化財の一時保管場所の環境について」文化財保存修復学会第35回大会、東北大学

2013年7月20日 「東日本大震災で被災した民俗資料の脱塩処理に関する一考察」文化財保存修復学会第35回大会、東北大学

- 2013年9月23日 ‘Conservation and Restoration of Tangible Cultural Properties: Rescue Operations Related to the Great East Japan Earthquake.’ International Research Meeting on Museology, “Myanmar New Horizons in Asian Museums and Museology,” Bagan Archaeological Museum
- 2013年10月5日 「東日本大震災と文化財レスキュー」台湾の文化部の補助による博物館専門人材育成の研修課程『博物館とモノを通じた文化への解釈と発信』、台湾国立博物館
- 2013年11月10日 「国立民族学博物館における日本の文化展示」追手門学院大学 文化復興と芸術創造に関する総合的研究 第2回公開フォーラム『日本を展示する方法の理念と実際——国立歴史民俗博物館の民俗展示と国立民族学博物館の日本の文化展示をめぐって』国立民族学博物館
- 2013年11月18日 「博物館を再考する——東日本大震災の文化財レスキューの現場から」特別公開講座『宇宙・人間アート』女子美術大学
- 2013年11月19日 「女乗物の修復事例」『漆製品応急処置ワークショップ』東北歴史博物館
- 2014年1月11日～13日 「東日本大震災における文化財レスキュー」企画展『牡鹿半島のくらし展 in 仙台——再生・被災文化財』仙台メディアテーク
- 2014年1月25日 「被災地と連携したミュージアム活動——被災文化財を保全する」公開シンポジウム『災害に学ぶ』津田塾ホール
- 2014年3月10日 「災害と文化財救援活動——東日本大震災の事例から」『文化財保存修復セミナー』関西大学
- ・研究公演
- 2013年11月23日 「雄勝法印神楽の面製作について」(小谷竜介/東北歴史博物館、片山 毅/公益財団法人美術院と共同発表) 研究公演『雄勝法印神楽みんなく公演』国立民族学博物館
- ・広報・社会連携活動
- 2013年10月14日 公開講演会「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」『文化遺産と自然科学 過去に学ぶ防災——文化財科学が解き明かす自然災害Ⅱ』名古屋大学
- 2013年10月26日 「日本の漆工品、世界の漆工品」みんなく友の会体験セミナー、若狭三方縄文博物館
- 2014年2月14日 「文化財の保存修復事情」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
- ◎調査活動
- ・海外調査
- 2013年9月21日～9月29日—ミャンマー (ミャンマーの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査)
- 2013年10月3日～10月7日—台湾 (国立台湾博物館「博物館とモノを通じた文化への解釈と発信」研修における講義・指導)
- ◎社会活動・館外活動
- ・他機関から委嘱された委員など
- 文化財保存修復学会理事、日本民具学会理事、文化財虫害研究所総合的防除対策検討委員会委員

福岡正太 〔ふくおか しょうた〕 ————— 准教授

1962年生。【学歴】東京藝術大学音楽学部楽理科卒 (1986)、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了 (1991)、東京藝術大学大学院博士課程単位取得退学 (1994) 【職歴】国立民族学博物館第2研究部助手 (1994)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手 (1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授 (2003)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授 (2004) 【学位】芸術学修士 (東京藝術大学大学院 1991) 【専攻・専門】民族音楽学、東南アジアとくにインドネシア西ジャワのスダラ伝統音楽についての研究 【所属学会】東洋音楽学会、日本音楽学会、日本ポピュラー音楽学会

【主要業績】

〔論文〕

福岡正太

2003 「音楽からみた『インドネシア民族』の形成」端 信行編『民族の二〇世紀』(二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容9) pp. 144-160, 東京: ドメス出版。

2003 「小泉文夫の日本伝統音楽研究——民族音楽学研究の出発点として」『国立民族学博物館研究報告』28

(2): 257-295。

Fukuoka, S.

2003 Gamelan Degung: Traditional Music in Contemporary West Java. In S. Yamashita and J. S. Eades (eds.) *Globalization in Southeast Asia: Local, National, and Transnational Perspectives*, pp. 95-110. New York and Oxford: Berghahn Books.

【2013年度の活動報告】

◎各個人研究

・研究課題

音楽芸能研究における映像音響メディア

・研究の目的、内容

音声および映像の記録技術は、学術的な記録および分析の手段として、音楽芸能研究に大きな影響を与えてきた。民族音楽学の誕生と展開は、映像音響メディアの影響を抜きにして論じることにはできない。一方で、20世紀を通じて、映像音響メディアは、人々が音楽芸能を楽しむ媒体として普及定着し、メディアの変化が音楽芸能の展開に大きな影響を及ぼすようになった。さらに、ビデオ撮影機器の普及により、音楽芸能の伝承や創造、研究の過程において、関係者が自ら作成する映像が一定の役割をもつようになり、映像作成が、音楽芸能の活動に不可分なものとして組み込まれつつある。本研究は、様々な位相における音楽芸能と映像音響メディアの結びつきについて明らかにすることを目的としている。

具体的には、1) 鹿児島県硫黄島および徳之島の芸能を例として、映像による芸能の民族誌的記録の作成および活用のあり方を探る。特に、映像を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像による民族誌の作成が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。2) 東南アジアの音楽芸能、特にゴングにかかわる文化に焦点をあて、映像を用いて地域間の比較研究を進め、相互関係を明らかにする。また、1)、2)を通じて、映像音響資料のアーカイブ化と公開における諸課題についても検討したい。なお、1)は主に人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」班の研究活動として進め、2)は、科学研究費補助金(基盤研究(B))「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」の研究活動として進める。

・成果

- 1) 硫黄島の芸能について、これまでの記録映像の仮編集を進めた。旧暦8月1日には、八朔太鼓踊りの調査撮影をおこなった。なお、旧暦9月10日、11日におこなわれた九月踊りについては、台風により村営フェリーが欠航したため、調査撮影をおこなうことができなかった。徳之島の芸能については、天城町文化財活性化実行委員会から民博が「天城町伝統芸能映像記録作成事業」の研究委託を受け、天城町の伝統芸能ならびに町内の史跡等の調査撮影をおこなった。この成果に基づき、笹原亮二教授とともに同町のケーブルテレビにて放映することを想定した映像プログラム3本を製作した。また、すでに作成したマルチメディアプログラム「徳之島の唄と踊りと祭り」に、新たな調査撮影に基づく映像を編集し追加した。両地域の調査撮影の機会には、これまでの記録映像の上映もおこない、集落関係者との意見交換をおこなった。また、連携研究とLLPあたりえ西濱との共催で『「怒」——大阪浪速の太鼓集団』(寺田吉孝監修、民博製作)の上映会(大阪人権博物館リパティホールにて)の企画に寺田吉孝教授とともに加わった。さらに下中記念財団とポレポレタイムス社が主催して、Space & Café ポレポレにて開催した「20世紀の映像百科事典エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを見る 連続上映会⑤ 仮面」において、『硫黄島の八朔太鼓踊りとメンドン』(笹原亮二監修)および『トベン・チルボン——西ジャワの仮面舞踊』(福岡正太監修)などの上映と解説をおこなった。
- 2) 東南アジアのゴング文化について、インドネシアのバリ島およびジャワ島にて調査撮影をおこなった。これまでの研究成果に基づき、東洋音楽学会第64回大会において、パネルディスカッション「東南アジアのゴング文化研究への視角」(2013年11月10日、於：静岡文化芸術大学)を企画し、研究分担者、協力者とともに研究発表をおこなった。

◎出版物による業績

[書評]

福岡正太

2013 「書評 田子内進著『インドネシアのポピュラー音楽グンドウットの歴史——模倣から創造へ』」『東洋音楽研究』78: 107-111。

[その他]

福岡正太

- 2013 「メンドンと映像記録」『月刊みんぱく』37(5):5。
2013 「国立民族学博物館音楽展示場+音楽の祭日——民博と音楽」『HUMAN: 知の森へのいざない』4:116-121。
2013 「旅・いろいろ地球人 音の響き⑥ 聖なる楽器」『毎日新聞』8月1日夕刊。
2013 「カンボジアの社会復興と伝統芸能」『月刊みんぱく』37(10):8。
2013 「制服の世界・世界の制服 王宮の楽師——ジャワ島西部チルボンのスカテン」『月刊みんぱく』37(12):22-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

- 2013年5月14日 「Whose Videos Are They?: Rights for Audio-visual Recordings of Traditional Performing Arts, "Cultural Rights Forum," Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre, Bangkok, Thailand.
2014年1月29日 コメント「民族誌的知見の形成と共有の場としての情報ミュージアム」国際ワークショップ『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』、国立民族学博物館第4セミナー室

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年11月10日 「東南アジアのゴング研究プロジェクトについて」パネルディスカッション「東南アジアのゴング文化研究への視角」東洋音楽学会第64回大会、静岡文化芸術大学
2014年3月9日 「音盤に聴く東アジアの音楽交流——日本コロムビア外地録音資料を例に」神奈川大学国際常民文化研究機構第5回国際シンポジウム『渋沢敬三の資料学——日常史の構築』神奈川大学横浜キャンパス16号館視聴覚ホールB

・広報・社会連携活動

- 2013年10月20日 「東南アジアのゴング文化」第318回みんぱくウィークエンド・サロン
2013年10月31日 「エインサイクロペディア・シネマトグラフィカを見る⑤仮面」下中記念財団・ポレポレタイムス社共催、Space & Café ポレポレ坐

◎調査活動

・国内調査

- 2013年9月4日～6日一鹿児島県硫黄島（三島村硫黄島の芸能に関する調査撮影）
2013年10月14日～16日一鹿児島県（三島村硫黄島の芸能に関する調査撮影）
2014年1月31日～2月2日一鹿児島県徳之島（徳之島の民俗芸能の調査・保存・伝承への映像の活用に関する資料収集）

・海外調査

- 2013年5月13日～5月15日一タイ（シリントン人類学センターにおいて文化的権利セミナー参加）
2013年9月20日～9月26日一インドネシア（インドネシアのゴングを用いる芸能に関する調査）
2014年1月12日～1月16日一インドネシア（ゴング文化に係わる調査および展示資料収集）
2014年3月16日～3月23日一インドネシア（東南アジア展示資料収集）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」代表者
・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト
委託研究「天城町伝統芸能映像記録作成事業」

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

- 大谷大学「民族誌講義」「社会学研究」、同志社大学「芸術学特論」、京都文教大学「音楽人類学」

南 真木人 [みなみ まきと] 准教授

1961年生。【学歴】弘前大学人文学部人文学科卒（1985）、筑波大学大学院修士課程環境科学研究科修了（1989）、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科中退（1991）【職歴】国立民族学博物館第3研究部助手（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2007）、文化資源研究センター准教授（2011）【学位】学術修士（筑波大学大学院修士課程環境科学研究科 1989）【専攻・専門】人類学、南アジア研究【所属学会】日本文化人類学会、日本南アジア学会、生態人類学会

【主要業績】

[共編]

Yamashita, S., M. Minami, D. W. Haines and J. S. Eades (eds.)

2008 *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77), Osaka: National Museum of Ethnology.

[論文]

Minami, M.

2008 Overstaying Undocumented Workers on the Decrease in Japan: The Case of Nepali Immigrant Workers. In S. Yamashita, M. Minami, D. W. Haines and J. S. Eades (eds.) *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77), pp. 89-99. Osaka: National Museum of Ethnology.2007 From Tika to Kata?: Ethnic Movements among the Magars in an Age of Globalization. In H. Ishii, D. N. Gellner and K. Nawa (eds.) *Social Dynamics in Northern South Asia Vol. 1: Nepalis Inside and Outside Nepal*, pp. 443-466. New Delhi: Manohar.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

移住労働から見る地域社会の変化

・研究の目的、内容

本研究の目的は、ネパールにおいて、中東湾岸諸国やマレーシアなどで働く、あるいは働いて帰村した移住労働者の不在や送金、経験が、地域社会をどのように変えているのかを明らかにすることである。後進におかれた民族やカーストの人びとの生活が、送金により以前と比して余裕が生まれるいっぽう、農業における若年男性労働力の不足が顕在化している実態、および移住労働の経験がその個人の権利意識、自画像、労働観、消費行動などを変えている諸側面とその地域社会への影響を現地調査によって明らかにする。調査は、人間文化研究機構地域研究推進事業・現代インド地域研究・みんぱく拠点（代表者：三尾 稔）、および科学研究費補助金（基盤研究（B））「体制転換期ネパールにおける「包摂」を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」（代表者：名和克郎）により進める。

・成果

上述の科学研究費により「移住労働者の移住システムと社会的送付に関する調査研究」（2014年2月24日～3月11日）というテーマで現地調査を行った。昨年度の調査からネパールにおける労働移民の送出過程では、村レベルの仲介者の役割が大きいことが明らかになった。そこで本年度は仲介者D氏からの聞き取り調査を主とし、併せてD氏を介して海外で働き、現在は帰還している人から話を聞いた。2003年から現在までD氏が渡航させた55人の青年男性について出身村、渡航先などの情報を入手した。ネパールでは労働移民は必ず政府が認可した人材派遣会社を介さなければならない。だが、実際には現地のネパール人からの要請に仲介者が個人ベースで応じる例も少なくなかった。本来ありえない個人ベースの労働者派遣の仕組みとはいかなるもので、どのように変わってきたのかに関し知見を得ることができた。他方、文化資源プロジェクト「南アジア展示新構築関連の映像音響取材（ネパール）」を寺田吉孝氏、株式会社エスパと行った。その一部において、1982年に本館名誉教授の藤井知昭氏が現地で撮影し番組を制作した、職人、楽師、商店主を探し訪ね、それぞれの家族と生業のその後を追跡取材した。景観の変化は言をまたず、地域社会や生業の30年間の変化を調査したが、過去の映像の今日的な価値に気づかされる機会となった。

◎出版物による業績

[その他]

南 真木人

- 2013 「旅・いろいろ地球人 たちこめる⑦ ドーハの悲劇」『毎日新聞』4月18日夕刊。
- 2013 「シェルパジとの最後の面会」『チョータラの風』58:2-3, 東京:青年海外協力隊ネパール会。
- 2013 「旅・いろいろ地球人 映画⑥ 多元化する情報発信」『毎日新聞』9月26日夕刊。
- 2013 (インタビュー記事) Int'l Folk Music Fest Narrates Folk Culture. *The Himalaya Times*, p. 9, November 24, Kathmandu, Nepal.
- 2013 「日本のネパール人社会」吉原和男編『人の移動事典——日本からアジアへ・アジアから日本へ』pp. 320-321, 東京:丸善出版株式会社。
- 2014 「仏伝図」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 245, 大阪:国立民族学博物館。
- 2014 「漁網」「イメージの力」実行委員会編『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』p. 263, 大阪:国立民族学博物館。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究

2013年10月20日 「移住労働による社会的送付——『包摂』の可能性」『ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究』

2013年12月21日 「オープンボーダーと市民権——ネパールの事例から」『人の移動と身分証明の人類学』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年7月27日 (コメンテーター) 鹿野勝彦「1970～80年代のフィールドワーク——ネパールの場合」『シンポジウム「1970～1980年代の南アジア経験」』第46回南アジア研究集会、山喜旅館(伊東市)

・研究講演

2013年10月18日 「王制廃止後のネパール社会」NPO 法人大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年3月16日 「ネパール人移住労働者の現状——ネパールから見て、日本から見て」反差別草の根交流会「サマンタ」公開講演会、NPO 法人伊丹人権啓発協会事務所

・展示

東アジア展示(日本の文化「多みんぞくニホン」)新構築プロジェクト班員

◎調査活動

・海外調査

2013年10月29日～11月8日—ブータン(ブータン高地における近代化と物質文化の変容調査)

2013年11月18日～12月11日—ネパール(現代インド地域研究情報収集およびネパールにおける結婚式儀礼と物質文化の変容調査)

2014年2月24日～3月11日—ネパール(移住労働者の移住システムと社会的送付に関する調査研究)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点(代表者:三尾 稔)研究分担者、科学研究費補助金(基盤研究(B))「体制転換期ネパールにおける『包摂』を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」(研究代表者:名和克郎)研究分担者

山本泰則 [やまもと やすのり] ————— 准教授

【学歴】大阪大学基礎工学部生物工学科卒(1978)、大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了(1980)、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程退学(1983)【職歴】国立民族学博物館第5研究部助手(1983)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手(1998)、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授(1998)、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授(2004)【学位】工学修士(大阪大学大学院基礎工学研究科1980)【専攻・専門】文化資源情報学【所属学会】情報処理学会、電子情報通信学会

【主要業績】

[論文]

山本泰則

2011 「国立国会図書館PORTAと人間文化研究機構 統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』2：53-68。

Yamamoto, Y., F. Adachi and K. Hachimura

2013 Common Metadata to Search for Non-digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases. *Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013*, pp. 225-224, IEEE Computer Society (CD-ROM).

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

機械学習をもちいた民族学情報の検索

・研究の目的、内容

国立民族学博物館では、さまざまな民族資料情報のデータベースを作成して公開しているが、必ずしも十分な情報が付与されているわけではない。特に標本資料に関するものは、同種の資料が多数ある、同じ資料に異なる名称が与えられているなど、単純な検索文字列の照合による従来の検索手法で情報を得るには限界がある。

本研究は、最近情報科学の分野で進展がめざましい機械学習の技術を応用して、データベースから有用な情報を抽出しようとするものである。多量のデータの統計処理やクラスタリングなどの手法により、データの構造を概観して全容を把握し、また不完全な情報から有用な情報を抽出する可能性について研究をおこなう。

・成果

今年度は機械学習の基礎技術と知識を修得するとともに、研究の現状のサーベイをおこなった。それと並行して、比較的構造の簡単な標本資料目録データベースおよびジョージ・ブラウン・コレクション・データベースを対象に、以下のような観点から基礎的な分析を試みた。

- 1) 標本資料情報を各項目の情報の有無や資料画像の有無を2値で可視化することで、資料情報を概観する。
- 2) 資料名を形態素解析することで民博の資料命名の特性を把握する。
- 3) 各資料の資料名と文脈（資料とかかわる場所・人）をキーとして、標本資料のグループ化を試みる。

◎出版物による業績

[論文]

Yamamoto, Y., F. Adachi and K. Hachimura

2013 Common Metadata to Search for Non-digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases. *Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013*, pp. 225-224, IEEE Computer Society (CD-ROM).

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2013年12月12日（司会）人間文化研究機構企画セッション4 ‘NIHU’s Activity on Research and Resource Sharing of Humanities,’ “PNC Annual Conference and Joint Meetings 2013”、京都大学

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年9月17日 ‘Common Metadata to Search for Non-Digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases,’ The International Conference on Culture and Computing 2013, Kyoto

・広報・社会連携活動

2013年8月11日 「梅棹忠夫著作目録データベースの引越越し」第310回 みんなくウィークエンド・サロン

◎学会の開催

2013年10月12日 情報処理学会「人文科学とコンピュータ研究会」第100回記念研究会、国立民族学博物館

1977年生。【学歴】立命館大学文学部卒（2001）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）【職歴】日本学術振興会PD（2007）、マンチェスター大学研究員（2010）、ベルギー SoundImageCulture 客員講師（2011）【学位】博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 2007）【専攻・専門】映像人類学、民族誌映画制作【所属学会】英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

【主要業績】

[編著]

北村皆雄・新井一寛・川瀬 慈編

2006 『見る・撮る・魅せるアジア・アフリカ！——映像人類学の新天地』東京：新宿書房。

[論文]

Kawase, I.

2012 The Azmari Performance During Zar Ceremonies in Northern Gondär, Ethiopia—Challenges and Prospects for the Documentation—. In J. Kawada (ed.) *Cultures Sonores d’Afrique V*, pp. 65-80, Institut de Recherches sur les Cultures Populaires du Japon. Yokohama: Universite Kanagawa.

[映像作品]

川瀬 慈

2012 『精霊の馬/When Spirits Ride Their Horses』

【受賞歴】

2013 第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

[国際映画祭入選]

2013 第10回 Worldfilm Festival of Visual Culture (エストニア)

2012 第6回 モスクワ国際映像人類学祭

2012 第32回 北欧人類学映画協会主催映画祭（ノルウェー）

2012 第9回 スラヴォニア国際民族映画祭（クロアチア）

2008 最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovative イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族誌映画のナラティブの革新

・研究の目的、内容

2013年度は、特別展「マダガスカル霧の森の暮らし」展のために民族誌映画「ザフィマニスタイルのゆくえ」を制作し、みんぱく映画会で公表した。科学研究費補助金（若手研究（B））による調査の一環として、エチオピア北部において調査を行い、伝統的な刺青の変容をテーマにしたインスタレーション作品「Tattoo Gondar」を制作し、東京都写真美術館において開催された第6回恵比寿映像祭において発表した。

エチオピア北部の人々と精霊のコミュニケーションをテーマにした映画「精霊の馬/When Spirits Ride Their Horses」は、エジンバラ国立博物館で開催された第13回英国王立人類学協会主催国際民族誌映画祭や南カリフォルニア大学での同映画祭・巡回展に入選した。プレーメン大学人類学部、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究科、愛知県立大学、ブリュッセル SoundImageCulture、ルーヴル美術館 Filmforum においては、川瀬の作品の特集上映が開催され、川瀬はすべての上映・討論の場に参加した。これまでの民族誌映像制作と上映活動に対して、日本ナイルエチオピア学会より第19回高島賞が与えられた。

よこはま創造都市センターにおいて開催された第5回アフリカ開発会議（TICAD）パートナー事業「Sound/Art——Tuning in to Africa」、マンチェスター大学において開催された IUAES2013 民族誌映画上映プログラム、上記の第6回恵比寿映像祭に、報告者は企画の段階から関わり、アフリカの無形文化の映像記録に関心を持つ研究者、アーティスト、行政関係者と幅広い交流を行った。また、2014年に開催が予定されている第12回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭の作品選抜委員として、出品された作品の審査・選抜、上映プログラムづく

りに関わった。学術誌『年報カルチュラル・スタディーズ』に論文「音、身体、イメージの新たな関係——Sensory Scape from Gondar のこころみ」を投稿し受理された。

◎出版物による業績

[その他]

川瀬 慈

2013 「アーカイブ映像の創造的活用にむけて——エンサイクロペディア・シネマトグラフィカを事例に」
『民博通信』141：2-7。

◎映像音響メディアによる業績

・DVD・CDなどの制作・監修

[民族誌映画]

川瀬 慈制作、川瀬 慈・飯田 卓監修

2013 『ザフィマニリストスタイルのゆくえ』マダガスカル語（日本語字幕），33分。

[映像インスタレーション]

川瀬 慈制作

2013 “Tattoo Gondar” 7分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年5月27日 「文化的アイデンティティの形成と再発見——エチオピアの事例から」《機関研究成果公開》
国際シンポジウム「文化遺産はコミュニティをかたどるか？アフリカの事例から」国立民族学博物館

・共同研究

2014年3月1日 「映像民族誌の新たな時代に向けて」『映像民族誌のナラティブの革新』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年8月8日 ‘Greeting Seyfou Tchengar Audiovisually—Challenges and Prospects of the Documentation of Zar Spirits in Gondar, Ethiopia.’ Panel V07: Representing the Non-representable: Visual Representations of Extraordinary Beings in Ethnographic Films, The XVII Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, University of Manchester

2014年2月20日 ‘Intangible Cultural Heritage and Filmmaking: The Investigation of Knowledge, Method and Politics Based on Case Studies from Ethiopia’ “Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage,” Goldsmiths, University of London

・みんぱくゼミナール

2014年1月18日 「熱狂エチオジャズ!!!」第428回みんぱくゼミナール

・研究講演

2013年5月14日 「感覚と創造のアフリカ——芸術と人類学の交点から」（石倉敏明、分藤大翼との合同発表）
第5回アフリカ開発会議（TICADV）ヨコハマ創造都市センター

2013年5月23日 「エチオピアの今を生きる伝統音楽家たち」道祖神主催、在日エチオピア大使館

2013年5月25日 高木正勝×川瀬 慈 公開対談「うたがき展」第5回アフリカ開発会議（TICADV）ヨコハマ創造都市センター

2013年10月12日 「世界に羽ばたくエチオピアの音楽職能者たち」音楽夜嘶主催、下北沢 Com. Cafe 音庫

2013年11月10日 中沢新一×川瀬 慈 公開対談「アフリカの音響、音としての精霊、音楽と身体」ムッサハマ & カバコ公演実行委員会主催、CAY（南青山）

2013年11月18日 「Prospects and Challenges of Ethnographic Filmmaking in Ethiopia」ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究科主催、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究科

・展示

特別展 マダガスカル霧の森のくらし 実行委員

2014年2月7日～23日 第6回恵比寿映像祭展示、東京都写真美術館

・広報・社会連携活動

2013年5月11日 上映作品『ザフィマニリストスタイルのゆくえ』みんぱく映画会 文化とはなにか——マダガスカル
の生活文化、マダガスカルの音楽文化、国立民族学博物館

- 2013年 6月16日 上映作品『精霊の馬』『Room 11, Ethiopia Hotel』『ラリベロッチ』みんなく映画会「文化の記録と映像表現」、国立民族学博物館
- 2013年 7月 3日 上映作品『ザフィマニリストイルのゆくえ』『精霊の馬』『禁断の夜』民族誌映画上映と討論、愛知県立大学主催、愛知県立大学
- 2013年 5月14日 上映作品『精霊の馬』民族誌映画上映と討論、第5回アフリカ開発会議（TICAD V）主催、ヨコハマ創造都市センター
- 2013年 6月15日 上映作品『When Spirits Ride Their Horses』民族誌映画上映、第13回英国王立人類学協会主催国際民族誌映画祭、スコットランド国立博物館
- 2013年10月14日 上映作品『Room 11, Ethiopia Hotel』民族誌映画上映と討論、山形国際ドキュメンタリー映画祭、山形まなび館
- 2013年11月19日 上映作品『When Spirits Ride Their Horses』民族誌映画上映と討論、ハンブルグ大学音楽学研究科主催、ハンブルグ大学音楽学研究科
- 2013年12月 1日 上映作品『Lalibalocc』『Room 11, Ethiopia Hotel』『When Spirits Ride Their Horses』民族誌映画上映と討論、ジューゲン大学主催、ルードヴィッヒ美術館（ケルン）
- 2013年12月 5日 上映作品『Room 11, Ethiopia Hotel』『When Spirits Ride Their Horses』民族誌映画上映と討論、SoundImageCulture（SIC）主催、PIANOFABRIEK（ブリュッセル）
- 2013年12月17日 上映作品『Room 11, Ethiopia Hotel』『When Spirits Ride Their Horses』民族誌映画上映と討論、ブレーメン大学人類学部主催、ブレーメン大学人類学部
- 2014年 2月 9日、19日 上映作品『禁断の夜』民族誌映画上映と討論、第6回恵比寿映像祭、東京都写真美術館
- 2014年 2月10日、12日 上映作品『Room 11, Ethiopia Hotel』民族誌映画上映、桃山学院大学・愛知県立大学主催、映画館 シネヌーヴォ
- 2014年 2月20日 上映作品『When Spirits Ride Their Horses』民族誌映画上映と討論、国際シンポジウム Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage、日本学術振興会、ロンドン大学ゴールドスミス校主催、ロンドン大学ゴールドスミス校
- 2014年 3月 8日 上映作品『When Spirits Ride Their Horses』民族誌映画上映、南カリフォルニア大学人類学部、英国王立人類学協会主催、南カリフォルニア大学人類学部

◎調査活動

・海外調査

- 2013年 5月30日～6月 3日—大韓民国（日韓共同映像制作プロジェクトへの参加および韓国映像人類学に関する研究調査）
- 2013年 7月30日～8月12日—イギリス（第17回国際人類学民族学連合大会参加およびアフリカの無形文化保護における民族誌映画に関する調査）
- 2013年 8月25日～9月18日—エチオピア（エチオピア北部高原における無形文化遺産の役割に関する調査）
- 2013年10月23日～12月22日—ドイツ（ハンブルグ大学での文献調査および資料収集）
- 2014年 1月21日～1月27日—ドイツ（第12回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭の上映作品の調査研究）
- 2014年 2月18日～2月22日—イギリス（国際シンポジウム「音楽文化遺産を守る——文化の垣根を越えて」にて発表および参加）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
国立歴史民俗博物館共同研究「研究資源としての民俗研究映像の制作と活用に関する研究」（研究代表者：内田順子）共同研究員

◎社会活動・館外活動

- ・他の機関から委嘱された委員など
第12回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭・作品審査選抜委員
- ・客員教授
ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究科ヒオブ・ルドルフ・エチオピア研究所客員教授「Visual Anthropology and Ethiopia」

国際学術交流室

岸上伸啓 [さしがみ のぶひろ]——— 室長 兼：副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

印東道子 [いんとう みちこ]——— 兼：民族社会研究部教授

菊澤律子 [きくさわ りつこ]——— 兼：先端人類科学研究部准教授

齋藤 晃 [さいとう あきら]——— 兼：先端人類科学研究部准教授

MATTHEWS, Peter Joseph [マシウス、ピーター・ジョセフ]——— 兼：民族社会研究部准教授

山中由里子 [やまなか ゆりこ]——— 兼：民族文化研究部准教授

横山廣子 [よこやま ひろこ]——— 兼：民族社会研究部准教授

梅棹資料室

久保正敏 [くほ まさとし]——— 室長 兼：副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

機関研究員

加賀谷真梨 [かがや まり]——— 研究員

1977年生。【学歴】お茶の水女子大学文教育学部卒（2001）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科発達社会科学専攻（博士前期課程）修了（2003）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較社会文化学専攻（博士後期課程）修了（2006）【職歴】放送大学非常勤講師（2005-2014）、法政大学非常勤講師（2006-2011）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科附属人間文化研究所研究院研究員（2006-2009）、札幌医科大学非常勤講師（2008-現在）、日本学術振興会特別研究員PD（2009-2011）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2012）【学位】博士（社会科学）（お茶の水女子大学 2006）修士（社会科学）（お茶の水大学 2003）【専攻・専門】文化人類学、民俗学、南西諸島研究、ジェンダー研究【所属学会】日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、Society for Applied Anthropology

【主要業績】

[学位論文]

加賀谷真梨

2006 「小浜島と竹富島の生存戦略にみる女性の実践——沖縄におけるジェンダー関係の再検討」お茶の水女子大学。

[論文]

加賀谷真梨

2012 「プロセスとしての〈共同体〉——沖縄・波照間島の『戦争マラリア』をめぐる語りを事例に」『東洋文化』93：79-97。

2005 「沖縄県・小浜島における生涯教育システムとしての年中行事」『日本民俗学』242：35-63。

【受賞歴】

2006 第26回日本民俗学会研究奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究
- 2) 離島の子どもの身体観・健康観・医療観に関する研究

・研究の目的、内容

- 1) 介護保険サービスの拡充後もなお「家族」が高齢者の生に対する責任を手放さない要因を「継承」という行為がそれ自体を重んじる日本人の観念に由来すると仮定し、それを高齢者介護と位牌や土地の相続との相関に関する実態調査を通じて検証する。調査地は沖縄の波照間島と久高島とする。
- 2) 「離島医療離れ」が指摘されてきた離島社会における子どもの身体観・健康観・医療観と親世代のそれとの比較を通じて、その連続性/不連続性、およびそうした現象が生じる要因を北海道利尻島と沖縄県波照間島の比較調査を通じて明らかにする。また、もしも「離島医療離れ」が確認されたならば、それが子どもの身体と健康にもたらしている影響についても明らかにする。

・成果

- 1) 2013年度は、竹富町における地域介護の実態調査から当該地域の人々の家族観を明らかにした。家族介護者は自分自身を高齢者の生の有体として認識する傾向にあること。加えて、家の存続を重視する価値観が、家族を介護から分離しにくくしていることを明らかにした。相続の実態に関しては、まだ十分な調査データを集められていないものの、同じ家社会といえども中国や韓国では配偶者の代襲相続権が認められていることやその理論的根拠を国内外の文献レビューから導き出した。

具体的な研究成果として、波照間島における地域介護の実態を「日本民俗学会」で発表し、その発表原稿に加筆修正を加え、『(人)と向き合う民俗学(2014)』に寄稿した。また、国立民族学博物館で開催された国際シンポジウム「Social Movements and Production of Knowledge」において、DV被害者のための民間シェルターを運営してきた神奈川県NPO法人を事例に、女性同志の連帯がどのように可能となるかを明らかにし、そこから現在国が後押ししている地域住民による介護を通じた連帯の可能性と不可能性を検討した。

- 2) 北海道利尻島では、本土の医療を好んで受診するという「離島医療離れ」が見られるのに対し、沖縄県波照間島ではその傾向は顕著ではなく、その要因は医療システムの相違に由来する。また、両島の子どもの身体観・健康観・医療観は親世代のそれとは大きく変わらないが、祖父母世代と親世代の間には明らかな違いが見られた。その連続性/不連続性が生じる要因には、親を含む移住者の増加や情報化等による価値観の多元化が挙げられる。離島における専門医の不在が子どもの身体と健康にもたらしている現象には、島外での受診の遅延や抑制が挙げられ、特に経済的に厳しい家庭では症状が放置される場合もあり、子どもの身体状況に格差が生じていることが明らかになった。なお、これらの一連の研究成果を「比較家族史学会」と「SfAA(アメリカ応用人類学会)」において発表した。

◎出版物による業績

[書評]

加賀谷真梨

2013 「書評 田中雅一著『癒しとイヤラシ——エロスの文化人類学』」『文化人類学』7(3): 432-435。

[その他]

加賀谷真梨

2013 「地球ミュージアム紀行『島の営みがつまった民俗資料館——沖縄・小浜島』」『月刊みんぱく』37(7): 14-15。

2013 「人間学のキーワード『親密圏』」『月刊みんぱく』37(9): 20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年2月22日～2月23日 ‘Women’s Movement in Embarrassment: The Ideal and Real.’ International Symposium “Social Movements and the Production of Knowledge: Politics, Identity and Social Change in East Asia.” National Museum of Ethnology

- ・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告
 - 2013年7月27日 コメンテーター「現代文化をどう捉えるか——金益見氏の調査方法に学ぶ」現代民俗学会第18回研究会、東京大学東洋文化研究所
 - 2013年9月13日 「人類学で『いじめ』を読む」大阪自由大学民博フレッシュ講座、キャンパスポート大阪
 - 2013年10月13日 「転回するしがらみ——沖縄・八重山諸島における高齢者福祉活動を事例に」日本民俗学会年会、新潟大学
 - 2013年11月16日 「沖縄島嶼部の子どもの民族誌——身体観・医療観に着目して」比較家族史学会（秋季大会）、茨城キリスト教大学
 - 2014年3月18日～3月22日 ‘Friction in Values as Represented by Children’s Body.’ Society for Applied Anthropology (SfAA), Hotel Albuquerque, New Mexico, USA
- ・広報・社会連携活動
 - 2014年1月5日 「女に寄り添う女たち——転回する『新しい社会運動』」第326回みんなくウィークエンド・サロン
- ◎調査活動
 - ・国内調査
 - 2013年8月15日～24日—沖縄県竹富町（高齢者介護にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究）
 - 2013年9月1日～9日—北海道利尻町、利尻富士町（離島の子どもたちの身体観・健康観・医療観に関する調査）
 - 2013年12月15日～24日—沖縄県那覇市、石垣市、竹富町（高齢者介護にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究）
 - 2014年3月26日～30日—沖縄県竹富町（離島の子どもたちの身体観・健康観・医療観に関する調査）
 - ・海外調査
 - 2013年10月28日～11月8日—ドイツ（ドイツにおける民俗学とその実践に関する動向調査）
 - 2014年3月16日～3月24日—アメリカ合衆国（国際研究集会「応用人類学会」での成果発表および参加）
- ◎社会活動・館外活動
 - ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など
 - 科学研究費補助金（若手研究（B））「高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の『家族』に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（C））「離島の子どもたちの身体観・健康観・医療観と医療環境とのかかわりに関する人類学的研究」（代表者：道信良子）研究分担者、法政大学沖縄文化研究所研究員
 - ・非常勤講師
 - 神奈川大学「日本文化論」、放送大学「文化人類学で読む日本社会」「家族の人類学」、札幌医科大学「21世紀問題群」

金田純平 [かねだ じゅんぺい]—————研究員

1977年生。【学歴】関西学院大学 総合政策学部 総合政策学科卒業（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション学専攻博士前期課程修了（2005）、神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション科学専攻博士後期課程修了（2008）【職歴】しんきん大阪システムサービス株式会社（2000-2003）、日本学術振興会特別研究員（DC2）（2006-2008）、神戸大学大学院国際文化学研究科特命助教（2008-2010）、株式会社国際電気通信基礎技術研究所専任研究員（2010-2011）、ATR Learning Technology 株式会社（2009-2011）、関西大学文学部特別任用准教授（2010-2012）、関西大学教育推進部特別任用准教授（2012）、国立民族学博物館機関研究員（2013）【学位】博士（学術）（神戸大学大学院総合人間科学研究科 2008）、修士（学術）（神戸大学大学院総合人間科学研究科 2005）【専攻・専門】話し言葉における文法と音声および非言語行動の対照研究、人文研究および教育に関するコンピュータシステムのユーザーインタフェース研究【所属学会】情報処理学会、日本語教育学会、日本音声学会、日本語文法学会、ヨーロッパ日本語教師会

【主要業績】

[共著]

- 定延利之・森 篤嗣・茂木俊伸・金田純平
2012 『私たちの日本語』東京：朝倉書店。

【論文】

金田純平

- 2014 「日本語教師によるビデオ教材の作成と共有のすすめ——企画・制作・公開・コミュニケーション」『日本語音声コミュニケーション』2: 28-59, 日本語音声コミュニケーション研究会。
- 2011 「要素に注目した役割語対照研究——「キャラ語尾」は通言語的なりうるか」金水 敏編『役割語研究の展開』pp. 127-155, 東京: くろしお出版。

【受賞歴】

2013 日本音声学会 学術研究奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) 博物館展示情報システムのユーザビリティの研究
- 2) 会話のマルチモーダル分析
- 3) 談話標識（間投詞・文末詞）の言語間対照
- 4) 人文研究・教育における ICT 技術の活用

・研究の目的、内容

- 1) 来館者が直接利用する博物館展示情報システムについて、その利用状況やログの解析による数理・統計的手法に加え、人文・社会科学的手法である参与観察・行動観察による定性分析を通じて、そのシステムのユーザビリティ（使いやすさ）における問題点を明らかにし、根拠に基づいた改善案を提示することでユーザビリティの向上につなげる。
- 2) ヒトが話す際に現れる言いよどみや間投詞、特徴的な韻律（声の調子）、非言語行動（視線・頭の動き・身振りなど）について、ビデオカメラや音響分析ツールを用いて記述し、発話内容に並行するこれらの現象がどのような状況でどのようなタイミングに出現するかを、発話者の内部（意図・態度・感情など）に注目して明らかにする。
- 3) 日本語以外の言語に現れる文末表現およびそれに類する間投詞・呼びかけについて、日本語の文末詞（終助詞等）との異同について明らかにし、文末詞が通言語的であることを主張する。話し言葉コーパスやフィクション作品（ドラマ・マンガ等）のセリフの対訳を中心に調査して、主に文法・韻律（特にイントネーション）について対照を行い研究を進める。
- 4) ICT 技術を人文研究および教育に活用する場合、予算規模が小さく、また、特別な ICT スキル（サーバ構築・運営技術等）を持たない個々の研究者・教員のレベルでも導入可能でかつ効果的な手法を提案する。当初は日本語教育分野に的を絞って研究を行う。

・成果

- 1) ビデオテークの利用ログからの利用状況と実際に被験者を用いたユーザーテストの結果を分析して、操作画面における問題点を洗い出し、ユーザーインタフェースの改善策について検討を行った。また、過去の特別展・企画展の視聴についてもユーザーインタフェース上の問題点を明らかにした。これらの成果はビデオテークのインタフェースのマイナーチェンジの際に盛り込まれ、2014年度中に環境に反映される予定である。また、論文として2014年度中に報告する予定である。

次世代電子ガイドの検討において、動画によるガイドと並行した博物館観覧支援システムについて関西大学文学部の大学生と共同して調査・研究を行い、要件やインタフェースについて素案を提案した。

- 2) これまでに収録した関西在住の女性による笑い話の構造および非言語行動について記述および分析を行い、笑い話における「オチ」や笑いのポイントの直前に現れる言語的特徴や、その際の韻律および視線に特徴があることを明らかにした。この研究成果の中間報告として、2013年8月の都市言語研究国際セミナーおよび同9月のヨーロッパ日本語教育シンポジウムで研究発表を行った。同様の内容については館内の研究懇談会（同10月）および、みんなくウィークエンド・サロン（同10月）でも報告・講演を行った。
- 3) フィクション作品における特殊な文末表現（キャラ語尾・呼びかけ詞）について日本語・英語・フランス語の対訳を用いて調査を行い、日本語の文末形式の特殊性と方言・外国語訛り等の言語バリエーションのフィクション作品での使用の実態について明らかにした。この内容は、2014年近刊「文末の感動詞・間投詞について——感動詞対照のもうひとつの形」（『感動詞の言語学』所収）および国際会議 Colloque International:

Japonais oral en context (2014年4月) で発表する予定である。

- 4) 日本語を学習するフランスの大学生(レンヌ第1大学)と日本語教育を学ぶ日本の大学生(神戸大学国際文化学部)の間でインターネットを介し協働して動画によるプレゼンテーションを制作する教育プロジェクトにおいて、動画の作成・公開に関する講義と授業 Web サイトおよび動画の発信環境の整備を行った。プロジェクトの成果は2013年9月のヨーロッパ日本語教育シンポジウムでのポスター発表および紀要論文にて報告した。

◎出版物による業績

[論文]

金田純平

2014 「日本語教師によるビデオ教材の作成と共有のすすめ——企画・制作・公開・コミュニケーション」『日本語音声コミュニケーション』2: 28-59。

定延利之・友定賢治・朱 春躍・林 良子・金田純平・宿利由希子・昇地崇明

2014 「キャラクタと電子資料を駆使した日本語教育の新展開」『ヨーロッパ日本語教育』18: 277-282。

林 良子・国村千代・金田純平

2013 「情報発信と協働作業を通じた異文化コミュニケーション授業——レンヌ第一大学と神戸大学間の遠隔授業報告」『国際文化学研究』(神戸大学大学院国際文化学研究科) 41: 31-4。

2014 「文化理解と協働を目指した遠隔教育の実践——共同作品と動画制作を通して」『ヨーロッパ日本語教育』18: 263-264。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2013年10月23日 「関西の女性による笑い話の構造」第251回民博研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年7月22日 ‘Perception et production des voyelles orales du français par des japonophones avec des dialectes différents’ (Takeki Kamiyama, Ryoko Hayashiと連名), 19^e Congrès International des Linguiste, Université de Genève, Suisse

2013年8月18日 「関西地方在住の女性による笑い話の特徴——語りの構成と話者の韻律・非言語行動に注目して」(波多野博顕・乙武香里・定延利之・田畑亜希子と連名) 第11回都市言語研究国際セミナー、広島市文化交流会館

2013年9月6日 「日本人のしぐさ——しぐさは何を示すのか」ヨーロッパ日本語教師会シンポジウム パネルセッション『キャラクタと電子資料を駆使した日本語教育の新展開』マドリッド・コンプルテンセ大学(スペイン)

2013年9月6日 「異文化理解と協働を目指した遠隔教育の実践——共同作品と動画制作を通して」(林 良子・国村千代と連名) ヨーロッパ日本語教師会シンポジウム パネルセッション『キャラクタと電子資料を駆使した日本語教育の新展開』、マドリッド・コンプルテンセ大学(スペイン)

・広報・社会連携活動

2013年10月27日 「笑い話を分析する——関西の女性の面白さとは」第319回みんなのウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2013年7月20日～7月27日—スイス、フランス(第19回国際言語学会議参加および情報収集、言語コミュニケーションに関する研究調査、博物館情報メディアに関する研究調査)

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

神戸大学大学院国際文化学研究科「文化情報リテラシー専門演習」、関西大学大学院文学研究科「日本文献情報処理研究A・B」、関西大学文学部「国語学研究A・B」、兵庫医科大学「医学概論入門」、神戸総合医療専門学校「音響学Ⅱ(音響・音声学実習)」「音声学」

呉屋淳子 [ごや じゅんこ]————— 研究員

1978年生。【学歴】沖縄国際大学法学部卒(2001)、ソウル大学大学院人類学科修士課程修了(2007)、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻博士後期課程単位取得退学(2012) 【職歴】ソウル大学大学院人類学科ティー

チングアシスタント (2005)、日本学術振興会特別研究員 (DC 2) (2010)、国立民族学博物館文化資源研究センター機関研究員 (2012) 【学位】 修士 (人類学) (ソウル大学大学院 2007) 【専攻・専門】 教育人類学 【所属学会】 日本文化人類学会、韓国教育人類学会、日本比較教育学会

【主要業績】

[論文]

呉屋淳子

2013 「『伝統と文化』の教授を巡る教育制度と学校の関係性——沖縄県立八重山高等学校の教育課程の事例から」韓国・中央大学日本研究所編『日本研究』36: 293-310。

2011 「学校教育における郷土芸能の実践様相と教師の役割——沖縄八重山諸島の事例を中心に」韓国教育人類学会編『教育人類学研究』14(2): 184-208。

Goya, J.

2011 “Tanedorii” of Taketomi Island: Education of Performing Arts and Interrogational Transmission. *International Journal of Intangible Heritage* 6: 86-94.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代沖縄の高等教育機関における伝統芸能の継承と創生に関する研究

・研究の目的、内容

本研究は、高等教育機関に設けられた伝統芸能の教授形態に注目し、伝統芸能が創生されるメカニズムを明らかにすることを目的とする。現代沖縄の若手芸能実演家たちは、徒弟制の中で芸能を身につけることに加え、高等教育機関でも琉球芸能を修練し、実践的活動を展開している。こうした新しい教授基盤の登場は、従来にはなかった「流派」を越えた美意識とパフォーマンスを身につけた新しい琉球芸能の担い手を創出し、琉球芸能の発展と創造に繋がっている。そこで、若手芸能実演家からの聞き取り、高等教育機関で目指される〈教授システム〉、行政文書の分析から 1) 高等教育機関で「琉球芸能」が創生される様相、2) 「伝統」と「創造」のはざままで揺れ動く彼らの琉球芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的關係を考察する。これらを通して、公的な教育機関で伝統芸能を「教育する」という行為が与える影響を明らかにする。

・成果

- 1) 沖縄県の高等教育機関に設けられた伝統芸能コースで教授を受けた若手実演家を対象に、2012年10月から2013年2月までインタビュー調査を行い、彼らのライフヒストリーの収集・分析を行った。その結果、二重的な教授過程に見られる両者の関係 (高等教育機関と従来の徒弟制のなかでの教授) が明らかになった。
- 2) 「伝統」と「創造」のはざままで揺れ動く彼らの伝統芸能の継承をめぐる取り組みと実践の再帰的關係を考察した。その結果、彼らの「二重的な教授の経験」、つまり従来の修練の場である「研究所」に加え、高等教育機関において芸能の修練は、「沖縄らしさ (okinawanness)」をいかに表現するかという問いに向き合うきっかけとなっていた。また、この成果は、2013年4月に米国・サンディエゴで開催された Biennial Meeting of the Society for Psychological Anthropology において発表した。
- 3) 2013年1月に国立歴史民俗博物館で行われた『平成22年度共同研究——人の移動とその動態に関する民俗学的研究』において琉球芸能の流派をめぐる教授の実態に着目して明らかにした研究を発表した。また、この成果については、2014年度中に『国立歴史民俗博物館研究報告』で成果論集を出版予定である。

◎出版物による業績

[論文]

呉屋淳子

2013 「『伝統と文化』の教授を巡る教育制度と学校の関係性——沖縄県立八重山高等学校の教育課程の事例から」韓国・中央大学日本研究所編『日本研究』36: 293-310。

[その他]

呉屋淳子

2013 「エレクトリック三線『チェレン』」『月刊みんぱく』37(8): 8-9。

2014 「『金網』に囲まれた島・沖縄の『音』」『月刊みんぱく』38(1): 21。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年4月5日 Young Traditional Art Performers in Okinawa and Their Dual Educational Experiences, Biennial Meeting of the Society for Psychological Anthropology, San Diego, CA, USA.

2013年5月31日 「고등학생을위한야에야마예능의실천——오키나와현야에야마3고등학교사례를중심으로」(高校生による八重山芸能の実践——沖縄県八重山の3高校の事例を中心に)『高麗大学韓国語文教育研究所第2回国際學術大会』韓国・高麗大学

2014年1月25日 「八重山芸能の伝統と創造——高等学校の教育課程と部活動の事例から」『南西諸島研究会』明治大学

・展示

新構築日本展示「沖縄のくらし」(「戦後のくらし」企画)

・広報・社会連携活動

2013年8月6日 ワークショップ企画・運営者「『みんなぱっく』で世界と教室をつなごう！」博学連携教員研修ワークショップ2013 in みんなぱく『学校と博物館でつくる 国際理解教育——センセイもつくる・あそぶ・おどる・たのしむ』国立民族学博物館

◎調査活動

・海外調査

2013年4月3日～4月9日—アメリカ合衆国(アメリカ人類学協会主催の心理人類学会参加)

2013年5月30日～6月1日—大韓民国(高麗大学韓国語文教育研究所において第2回国際學術大会「中高校演劇教育の現況と展望」参加)

2014年2月25日～2月28日—韓国(韓国国立民俗博物館・子ども博物館における博物館教育に関する調査および博物館教育の国際会議の打ち合わせ)

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金(研究活動スタート支援)「現代沖縄の高等教育機関における琉球芸能の継承と創生に関する研究」研究代表者

浜田明範 [はまだ あきのり]————— 研究員

1981年生。【学歴】千葉大学文学部行動科学科卒業(2003)、千葉大学大学院文学研究科人文科学専攻修士課程修了(2005)、一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻単位取得(2010)【職歴】産業能率大学兼任教員(2008)、日本学術振興会特別研究員(PD)(2010)、江戸川大学非常勤講師(2011)、国立民族学博物館機関研究員(2013)、高知大学非常勤講師(2013)、立命館大学客員協力研究員(2013)【学位】博士(社会学)(一橋大学社会学研究科2012)、修士(文学)(千葉大学文学研究科2005)【専攻・専門】医療人類学・アフリカ地域研究(西アフリカにおける生物医療と生政治の展開に関する研究)【所属学会】日本文化人類学会、日本アフリカ学会、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences、Society for the Social Studies of Science and Technology

【主要業績】

[学位論文]

浜田明範

2012 「薬剤と健康保険の人類学——ガーナ南部の農村地帯における生物医療的な布置についての民族誌」一橋大学社会学研究科。

[論文]

浜田明範

2010 「医療費の支払いにおける相互扶助——ガーナ南部における健康保険の受容をめぐる」『文化人類学』75(3): 371-394。

2008 「薬剤の流通をめぐるポリティクス——ガーナ南部における薬剤政策とケミカルセラー」『文化人類学』73(1): 25-48。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

西アフリカにおける生権力の複数性に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、ガーナ南部における生物医療の展開に注目することにより、生物医療が、1) どのように異なる立場の人々の行為を統制しながら全体的な目標を達成しようとしているのか、2) どのようなモノ・行為・制度の配置によって人々の自己統治を促しているのか、3) どのように「生かすべき者」と「死ぬに任せる者」を結果的に選別しているのか、の3点について明らかにすることにある。

・成果

2013年度は、ガーナ南部の農村地帯における結核対策プログラムに関する文字資料の収集・分析と現地調査を実施した。具体的な成果として、1) 当該地域の結核対策プログラムは患者の発見に力を入れていること、2) 看護師に対する働きかけが焦点化していること、の2点が明らかになった。

ガーナにおける結核に関する文字資料は、結核のみに焦点を当てたものよりも感染症対策という枠組みの中でHIV/AIDSやマラリアなどと共に包括的に議論しているものが多い。それらを含め、現地やwebを通じて収集した文字資料を分析した結果、結核対策に関しては投薬管理などの患者に対する統治は一定の水準を満たしているとされ、結核に感染しているが患者と診断されていない人をより多く発見するための対策に重点が置かれていることが分かった。

現地調査を実施した農村地帯においては、患者の発見は看護師への働きかけを通じて強化することが目指されていた。看護師たちは、外来で訪れた咳を頻繁にしている患者に塗抹検査を指示したうえで、その結果にかかわらず登録しリストを作成している。そのリストに基づいて家庭訪問というかたちで村落内部を歩き回りながら、結核やその他の病気が疑われる患者を発見することが求められていた。

このように、当該地域の結核対策プロジェクトでは、投薬管理のような患者に対する統治よりは看護師に対する統治が重視されている。しかし、このことはガーナ政府が主張しているように患者への投薬管理がすでに十分にうまくいっていることを必ずしも意味しない。現地調査では、患者に対する投薬管理に対する看護師の遠慮を感じる場面が多々あり、薬剤の服用が定められた通りになされているかどうかは必ずしも確認されていないからである。

これらの得られた成果については、2014年度に公開する予定である。

◎出版物による業績

[その他]

浜田明範

2013 「フィールドで考える——知り合いを助ける、見知らぬ誰かを助ける」『月刊みんぱく』37(9): 18-19。

2013 「エリック・ンティリ・メンサの選挙——2012年ガーナ大統領選挙の一側面」『くにたち人類学研究』8: 1-18。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年12月7日 「再分配を通じた集団の生成——手続きと多層性に注目して」『再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して』

・民博研究懇談会

2013年6月19日 「結核対策における統治の干渉——ガーナ南部における医療と家族について」第249回民博研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年5月26日 「遊びを食べること——ガーナ南部における人物評価についての一考察」日本アフリカ学会第50回学術大会、東京大学

2013年6月9日 「ドキュメントを通じた統治の連鎖——ガーナ南部のヘルスセンターを事例として」日本文化人類学会第47回研究大会、慶応義塾大学

2013年9月21日 「フィールドでただ生きているということ」現代社会エスノグラフィ研究会、立命館大学

・広報・社会連携活動

2013年8月18日 「ガーナの病気と医療」第311回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2013年10月8日～10月20日—アメリカ合衆国（科学についての社会科学学会年次大会参加およびカリフォルニア大学において医療人類学に関する情報収集）

2013年12月14日～2014年2月2日—ガーナ共和国（「西アフリカにおける生権力の複数性——ガーナ南部における結核対策を事例に」に関する調査研究活動）

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（研究スタート支援）「西アフリカにおける生権力の複数性——ガーナ南部における結核対策を事例に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究若手「再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して」研究代表者、立命館大学生存学研究センター若手研究者研究協力型プロジェクト「現代社会エスノグラフィ研究会」客員協力研究員

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

第3回日本文化人類学会次世代育成セミナー実施運営委員、IUAES Inter-Congress 2014 Social Programme Sub-Committee Member

・非常勤講師

産業能率大学「文化を知る」、江戸川大学「福祉・医療人類学」、高知大学「医療人類学（集中講義）」

◎学会等の開催

2013年11月16日 日本文化人類学会第3回次世代育成セミナー

山本 睦 [やまもと あつし]————— 研究員

1978年生。【学歴】埼玉大学教養学部教養学科卒（2001）、埼玉大学大学院文化科学研究科修了（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科単位取得退学（2009）【職歴】日本学術振興会特別研究員PD（2009）、法政大学非常勤講師（2009）、茨城大学非常勤講師（2010）、埼玉大学非常勤講師（2010）、文京学院大学非常勤講師（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2014）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2012）、修士（文化科学）（埼玉大学大学院文化科学研究科 2003）【専攻・専門】アンデス先史学、ラテンアメリカ研究、文化人類学 1）アンデス文明形成期の社会動態、2）神殿における建設活動と儀礼行為、3）地域間交流と社会変化の相互関連、4）地域間移動ルートの形成・維持過程、5）ペルー、とくに地方における文化遺産の管理と活用【所属学会】日本文化人類学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

【主要業績】

[博士論文]

山本 睦

2012 「先史アンデス形成期の社会動態——ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から」総合研究大学院大学文化科学研究科。

[論文]

山本 睦・伊藤裕子

2013 「ペルー北部とエクアドル南部における形成期の地域間ルートと地域間交流——GISによる加重コストルート分析を用いて」『古代アメリカ』16：1-30。

Yamamoto, A.

2010 Inगतambo: Un sitio estratégico de contacto interregional en la zona norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 25-52.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける文明形成期の社会動態

・研究の目的、内容

南米ペルーを中心に成立したアンデス文明形成期（紀元前3000～紀元前後）社会の展開に際して、公共・祭祀建造物をめぐる諸活動や地域間交流が重要な役割をはたしたことは明白である。しかし、両者の関係性についての実証的研究は不十分であるため、ペルー北部地域の考古学調査を通じて、既述の動態的相関を明らかにし、従来の文明論に新たな視座をもたらすことを目的とする。

・成果

2013年度には、ペルー北部山地に位置するチョターノ川流域において、集中的な遺跡分布調査を実施した。この成果については、ペルー文化省へ提出する報告書にまとめたほか、国内の学会においても発表した。また、これまでの調査成果にもとづいて、和文および西文論文を各1本発表し、ペルー文化省へ2本の西文報告書を提出した。なお、2013年度の調査は、科学研究費補助金（基盤研究（S））「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関 雄二）の一部として、実施されたものである。

◎出版物による業績

[共著]

Yamamoto, A. y J. L. Peña Martínez

2013 *Informe de Análisis de los Proyectos de Investigación Arqueológica Inगतambo y el valle de Huancabamba, Provincia de Jaén, Departamento de Cajamarca, Perú(2005-2013 Informe Final)*. Perú: Ministerio de Cultura.

2013 *Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica “INGATAMBO,” Valle de Huancabamba, Provincia de Jaén, Departamento de Cajamarca, Perú (Tercera Temporada)*. Perú: Ministerio de Cultura.

[論文]

山本 陸・伊藤裕子

2013 「ペルー北部とエクアドル南部における形成期の地域間ルートと地域間交流——GISによる加重コストルート分析を用いて」『古代アメリカ』16：1-30。

Yamamoto, A.

2013 Las rutas interregionales en el periodo Formativo para el norte del Perú y el sur de Ecuador: Una perspectiva desde el sitio Inगतambo, valle de Huancabamba. *Arqueología y Sociedad* 25: 9-34.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2014年1月8日 「アンデス文明形成期社会の動態と考古学調査からはじまる文化遺産管理——ペルー北部ワンカバンバ川流域を事例として」第254回民博研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年12月7日 「ペルー北部チョターノ川流域の遺跡踏査」古代アメリカ学会第18回研究大会、山形大学

2014年2月20日 「文化遺産管理とパブリック考古学」日本文化人類学会課題研究懇談会『東アジア公共人類学懇談会』中間報告会、国立民族学博物館

2014年3月22日 「パコパンバ遺跡周辺地域の遺跡分布調査」科研費プロジェクト研究会「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（基盤研究（S）、代表：関 雄二）、富山大学

2014年3月30日 「ペルー最北部ワンカバンバ川流域における考古学調査と文化遺産管理」第29回京都メソアメリカ考古学研究会、NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所（京都）

◎調査活動

・国内調査

2013年11月7日～11月9日—沖縄（日系ペルー人留学生の琉球芸能の習得、および留学と芸能の習得を目指す背景などについての参与観察と聞き取り調査）

・海外調査

2013年8月5日～9月9日—ペルー（ペルー・パコパンバ遺跡周辺地域における考古学調査）

2014年2月25日～3月9日—フランス（フランスにおけるラテンアメリカ、とくにアンデスとアマゾン研究の動向調査）

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（S））「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：関 雄二）
研究協力者

◎社会活動・館外活動等

- ・非常勤講師

法政大学国際文化学部「言語文化演習——世界遺産に学ぶ」、法政大学文学部、経営学部「スペイン語 2 I」、
「スペイン語 3 I」

吉田ゆか子 [よしだ ゆかこ] ————— 研究員

1976年生。【学歴】国際基督教大学教養学部卒（2000）、筑波大学地域研究研究科東南アジアコース（修士課程）修了（2002）筑波大学人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻（博士課程）修了（2012）【職歴】株式会社インテ
ー ジ マーケティング事業部（2002-2004）、日本学術振興会 特別研究員（DC2）（2009-2010）、筑波大学人文社会
系博士特別研究員（2012）、国立民族学博物館 研究戦略センター研究部機関研究員（2012）【学位】博士（学術）
（筑波大学 2012）、修士（地域研究）（筑波大学 2002）【専攻・専門】文化人類学 インドネシア（バリ）地域研究
芸能研究【所属学会】日本文化人類学会、東方学会、「宗教と社会」学会、the International Union of Anthropological
and Ethnological Sciences、International Council for Traditional Music

【主要業績】

[論文]

吉田ゆか子

- 2011 「仮の面と仮の胴——バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンブラージュ」『文化人類学』76(1): 11-32。
- 2011 「仮面が芸能を育む——バリ島トベン舞踊劇に注目して」床呂郁哉・河合香史編『ものの人類学』pp. 191-210, 京都: 京都大学学術出版会。
- 2009 「バリ島仮面舞踊劇トベン・ワリと『観客』——シアターと儀礼の狭間で」『東方学』117: 156-139。

【受賞歴】

- 2013 日本文化人類学会奨励賞
- 2011 みんなく若手セミナー賞
- 2009 東方学会賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

- 1) バリ島天女の舞におけるレプリカの仮面の利用に関する研究
- 2) 観光ショーにおける仮面の利用に関する研究
- 3) バリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する研究
- 4) モノからみるバリ芸能文化のグローバル化に関する研究

・研究の目的、内容

- 1) ケテウェル村の仮面舞踊「天女の舞（topeng legong）」は長い歴史と際立った神聖性においてバリ社会で特別な価値を置かれている奉納芸であり、そこに使われる一連の仮面はご神体としてパヨガン・アゲン寺院にて祀られている。この演目は芸術祭などの世俗のイベントに招かれることがあるが、仮面の神聖性を守るため、寺院はレプリカの仮面を作成しそちらで代用している。本研究は、このレプリカの仮面の位置づけがしばしば曖昧であり、かつオリジナルとの境界をかく乱するような側面を有していることに着目する。そして、このレプリカの仮面が天女の舞の実践や地元共同体にどのような影響をもたらしているのかを明らかにし、レプリカや類似品の制作や利用といった営みが有している豊かな可能性について考える。
- 2) バリの村落ではバロンの仮面がご神体として祀られている。バリでは、観光芸能ショーなど世俗の上演には

これらご神体ではなく、神聖でない仮面を用いることが法令で定められている。しかし実際には、この観光用の仮面が、次第に神聖性を帯びたり、儀礼で地元のご神体の仮面と共演したりというケースがある。本研究は、観光ショー用に生み出された仮面が引き起こす様々な出来事や、人々と仮面の関わり合いを分析し、これまで人間中心的に論じられてきた観光化という現象をモノ（仮面）の側からとらえなおす。

- 3) バリの演劇では、身体・精神障害を模倣した表現が、頻繁にジョークに用いられる。役者（通常は健常者）は麻痺のある不規則な歩き方や、ナンセンスな物言いを演じ、劇に生き生きとしたニュアンスを添える。このバリで、実際に自ら障害を抱えつつ演劇活動をする者たちがいる。本研究は、彼らの演劇実践の実態、動機、活動実態、その社会的受容を明らかにし、身体の損傷の有り方の社会的文化的多様性を考察する。
- 4) バリ芸能が、世界各地で現地の芸能家によって実践されるようになった現象について、仮面や楽器といったモノの移動の側面から考察する。バリでは、楽器や仮面は神格（あるいはその力）を宿す存在である。これらのモノが新たな土地でどのように扱われ、またその土地のモノの配置（e.g. 住環境）や物質文化や音楽文化にどのように影響され、また現地の人々にどのように働きかけるのか。音や舞や演技だけでなく、それを支える物質文化をも含みこんだ「芸能文化」の越境の問題として、このバリ芸能のグローバル化の現象を問い直す。

・成果

- 1) 本年は、一般の村人の多くがレプリカとオリジナルとを見分けられないこと、しかしそれゆえに、世俗の上演に演じるレプリカも独特な神秘的魅力を放つことなどを中心に考察した。また、フェティシズム論や、他の複製論の先行研究との接続を検討した。日本文化人類学会および慶應義塾大学人類学研究会と三田哲学会の共催した研究会において、研究成果の発表を行った。
- 2) 昨年度の調査データをまとめ、報告書を執筆した。また、バロン・ダンスの主要な3つの村において、特にバロンと関連する儀礼について重点的な調査を行った。かつて観光に使われていたランダが再加工されたのち、他のご神体と同様に、あるいはそれ以上に念入りに祀られている事例を記録した。半ばご神体となりながら、観光用のショーで使われ続ける仮面の例もあった。こうした仮面のステイタスの曖昧さは、それを所有し世話する人々の社会的ステイタスも曖昧にし、共同体に不協和音を奏でる。研究の成果の一部を京都人類学研究会10月例会および民博研究懇談会にて発表した。
- 3) 数名の演者の元を訪れ、インタビューおよび練習や上演の観察を行った。調査からは、視覚障害、小人症、構音障害、肢体不自由などを抱えた個人や団体が、宗教儀礼の場で催される余興としての上演を中心に活動していることがわかった。また、盲学校、聾学校などの特別学校においても数多くの芸能活動が見られること、さらに州都デンパサルでは市長婦人が中心となり、学生や成人によるこれらの活動を取りまとめ、市の福祉関連のイベントの余興に起用していることが明らかになった。2014年2月にはデンパサル市主催のイベントにて行われた創作ミュージカルのリハーサルと本番を観察した。主要な事例を3つ選び、その中で身体の損傷がどのように表現されるのかを分析した。特に、コメディシーンに注目し、上演において笑いはどのような効果をもたらしているのかを考察し、2014年4月に行われる口頭発表の準備を進めた。
- 4) 関東圏内にある3つのバリ芸能を上演する団体および、宮城県でバリ音楽を演奏する高等学校の吹奏楽部に対しての調査を行った。代表者に創立の経緯や、楽器や仮面といったモノの入手経路やこれまでの取り扱い等についてインタビューした。またいくつかの事例では本番や練習を観察することができた。なお、今年度より科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「モノからみる芸能文化のグローバル化——バリの仮面と楽器を事例として」の助成を受けた。

◎出版物による業績

[その他]

吉田ゆか子

2014 「仮面と人形の待つ家——インドネシア・バリ島」『月刊みんぱく』38：(1)：14-15。

2013 「バリ島の仮面（トベン）」『みんぱく e-news』150 (<http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/150otakara>)。

2013 「観光用芸能ショーの人類学的研究——バリ島バロン・ダンスの仮面に注目して」三島海雲記念財団編『平成24年度受贈者 研究報告書』50：134-136。

2013 「舞台で学べ——仮面舞踊修行の日々」『月刊みんぱく』37(6)：18-19。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2013年9月21日 「インドネシア・バリ島の仮面と物性」『物質性の人類学——物性・感覚性・存在論を焦点と

して』

・ 民博研究懇談会

2013年11月6日 「バリ島文化観光論再考——バロン・ダンスの仮面に着目して」 第252回民博研究懇談会

・ 学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年6月10日 「仮面の『親・子』——バリ島天女の舞の仮面のレプリカをめぐる」 日本文化人類学会第47回研究大会、慶応大学

2013年10月4日 「バリ島文化観光論再考——バロン・ダンスの仮面に着目して」 京都人類学研究会10月例会、京都大学

2013年11月9日 「仮の面と仮の胴——バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンブラージュ」 合評会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2014年1月7日 「レプリカの仮面の社会生活——バリ島天女の舞の事例から」 慶應義塾大学人類学研究会・三田哲学会共催、慶應義塾大学三田キャンパス

・ 広報・社会連携活動

2013年5月10日 「さかさまから見る観光」 大阪自由大学 民博フレッシュ講座、キャンパスポート大阪

2013年7月27日 「バリ島の芸能世界——仮面・音・舞」（講演および仮面舞踊のデモンストレーション）神戸学院大学地域研究センター主催『第5回大蔵谷なう。』大塩邸（明石市都市景観形成重要建築物）

2013年7月27日 「多民族国家インドネシアの現在——衣食住と祭祀を中心に」 京都美山高等学校生向けレクチャー、国立民族学博物館

2013年10月31日 連続上映会「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカをみる」 第5回「仮面」ゲスト出演（トーク・仮面舞踊デモンストレーション・映像作品上映）、東中野 Space & Cafe ポレポレ坐

2014年2月23日 「仮面が育む芸能——バリ島仮面舞踊劇トペンの世界」 第333回みんなくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・ 国内調査

2014年1月25日～1月27日—神奈川県横浜市・東京都大田区（関東圏のバリ芸能上演集団に関する調査研究）

2014年1月31日～1月31日—京都大学（モノの神聖性についての資料収集）

2014年2月8日～2月10日—神奈川県横浜市・東京都江東区（関東圏のバリ芸能上演集団に関する調査研究）

2014年3月23日～3月25日—宮城県仙台市（日本の高等学校におけるガムラン演奏実践に関する調査研究）

・ 海外調査

2013年6月13日～7月12日—インドネシア（観光芸能ショー用の仮面に関する人類学的研究調査および文献調査）

2013年7月29日～8月11日—イギリス、オランダ（「マテリアリティ」の人類学に関する動向調査および国際・人類学民族学科学連合2013年大会参加）

2013年11月24日～12月23日—インドネシア（バリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する人類学的研究現地調査）

2014年2月14日～2月21日—インドネシア（バリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する人類学的研究現地調査）

◎上記以外の研究活動

・ 民間の奨学金および助成金からのプロジェクト

2012年7月～2013年6月 2012年度三島海雲記念財団学術研究奨励金（人文）

研究課題「観光芸能ショー用の仮面の人類学的研究——バリ島バロン・ダンスの事例から」

2013年4月～2015年3月 公益財団りそなアジア・オセニア財団 調査研究・国際交流活動助成

研究課題「バリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する人類学的研究」（代表）

◎社会活動・館外活動等

・ 非常勤講師

園田学園女子大学総合生涯学習センター「インドネシア・中国南部の観光と祭」

拠点研究員

■人間文化研究機構地域研究推進センター・「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点

宮本万里 [みやもと まり] 研究員

1977年生。【学歴】山口大学人文学部卒（2000）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程研究指導認定退学（2006）【職歴】日本学術振興会特別研究員（PD）（2006）、京都大学東南アジア研究所研究員（2009）、北海道大学スラブ研究センター学術研究員（2009）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点拠点研究員（2011）【学位】博士（地域研究）（京都大学 2009）、修士（地域研究）（京都大学 2006）、学士（文学）（山口大学 2000）【専攻・専門】南アジア地域研究、現代ブータン研究、政治人類学、国民形成と環境政治【所属学会】日本南アジア学会、日本文化人類学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[単著]

宮本万里

2009 『自然保護をめぐる文化の政治——ブータン牧畜民の生活・信仰・環境政策』東京：風響社。

[論文]

宮本万里

2008 「森林放牧と牛の屠殺をめぐる文化の政治——現代ブータンの国立公園における環境政策と牧畜民」『南アジア研究』20：77-99。

2007 「現代ブータンにおけるネーション形成——文化・環境政策からみた自画像のポリティクス」『人文学報』94：77-100。

【受賞歴】

2009 日本南アジア学会賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

ブータンにおける環境主体の形成と村落の価値体系の再編に関する政治人類学的研究

・研究の目的、内容

行政システムの精緻化や民主化に伴い様々な制度が急速に農村に入り込みつつある近年のブータンにおいて、偏在する国家と制度をいかに引き受けようとしているのかを、特に環境保護にかかわる統治と主体化のプロセスに注目しながら考察する。

・成果

本年度は研究課題に関してブータンでの2度（7月および11月）の渡航調査と、英国での1度の研究発表および調査を実施した。7月の国政選挙を挟んだ現地調査では、都市部近郊の村落を中心に投票行動や言説構築のプロセスについて聞き取りおよび観察を実施し、また11月の調査では選挙法で公の政治領域から排除された宗教者たちとその活動を手がかりに、ブータンの村落社会における宗教空間と政治文化の変容について考察した。同時に、牧地村における屠畜人の位置づけを手がかりに、牧畜社会と食文化、宗教空間、グローバルな環境主義と連関について考察をすすめた。

◎出版物による業績

[論文]

宮本万里

2013 「現代ブータンの祭りと儀礼——顔のない踊り『テル・チャム』」立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）プロジェクト研究（自由プロジェクト研究）「ユーラシアにおける汎文化圏的な世界認知の研究——仮頭・仮面に着目して」編『ユーラシアにおける仮頭文化の研究』pp. 49-57, 東京：立教大学アジア地域研究所。

- 2014 「国立公園の『烧畑農耕民』と『環境にやさしいブータン人』」カール・ベッカー、桑子敏雄、原口弥生、櫻井次郎、柏木志保、宮本万里、箕輪真理、松井健一、木村武史共著『現代文明の危機と克服——地域・地球的課題へのアプローチ』pp. 107-130, 東京：日本地域社会研究所。

[その他]

宮本万里

- 2013 「ジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュック」『世界人名事典』p. 1157, 東京：岩波書店。
 2013 「ジクメ・ドルジェ・ワンチュク」『世界人名事典』p. 1157, 東京：岩波書店。
 2013 「ジクメ・センケ・ワンチュク」『世界人名事典』p. 1157, 東京：岩波書店。
 2013 「シャプトウン・ンガワン・ナムギャル」『世界人名事典』p. 1203, 東京：岩波書店。
 2014 「現代ブータンにおける屠畜と仏教——殺生戒・肉食・放生からみる『屠畜人』の現在について」『ヒマラヤ学誌』15：72-81。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年8月6日 「Global Conservation Method and the Cultural Politics of Forest Grazing in Bhutan」, IUAES2013, Manchester.
 2013年11月24日 「ネーションのプロジェクトと『マイノリティ』——ブータンにおける『ネパール系』人口とその難民化をめぐる」2013年度「現代インド地域研究」国内全体集会、東京大学
 2014年2月18日 「不殺生戒と肉食をめぐる文化の政治——現代ブータンにおける仏教振興と『屠畜人』の現在」京都人類学研究会、京都大学

◎社会活動・館外活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（若手研究（B））「ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に関する政治人類学的研究」研究代表者、人間文化研究機構地域研究推進センター研究員、北海道大学スラブ研究センター共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「コミュニティで支える高齢者ヘルスケア・デザイン——国際地域比較研究」（研究代表者：松林公蔵）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「体制転換期ネパールにおける「包摂」を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」（研究代表者：名和克郎）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

立命館大学国際関係学部「南アジア研究Ⅱ」、大阪大学人間科学研究科「国際フィールドワーク論 特講Ⅱ」（集中講義）

客員教員

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

STIRK, Ian Christopher [スターク、イアン・クリストファー]——教授

1946年生。【学歴】ケンブリッジ大学卒（1967）、北ウエールズ大学教職専門課程修了（1969）、エセックス大学言語学部博士課程単位取得（1978）【職歴】アンカラ大学講師、トリポリ大学（リビア）講師、エセックス大学講師を経て大阪外国語大学外国人教師（1980）、国立民族学博物館併任助教授（1994）、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員助教授（2004）【学位】M. A.（エセックス大学 1976）

【主要業績】

[論文]

Stirk, I. C.

- 2005 「Restoring the naturalness of deduction」『大阪外国語大学英米研究』29：43-61。
 2004 「Naturally ad absurdum」『大阪外国語大学英米研究』28：99-109。
 2003 「On the Welsh verb system」『大阪外国語大学英米研究』27：19-32。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

対照言語学の研究

・研究の目的、内容

自然言語の統語論的解析、類推（analogy）構成文法の成立過程を考察する。

・成果

今年度は、自らの考えのいくつかを統語論（syntax）およびウェールズ語教授法に適用してきた。その結果を論文としてまとめたものを自身のホームページに掲載している。

Rhagarweiniad i'r Iaith Gymraeg ac Ieithyddiaeth — Introduction to the Welsh Language and Linguistics（ウェールズ語およびウェールズ語言語学入門、www.iancstirk.com/Teaching//Welsh.html）

Braslun o'r Ynganiad—Sketch of the Pronunciation（ウェールズ語発音の概略、www.iancstirk.com/Teaching/Iaith_Gymraeg_Braslun_Ynganiad.pdf）

Gwers 1—Lesson 1（レッスン1、www.iancstirk.com/Teaching/Iaith_Gymraeg_1.pdf）

Social expressions（挨拶などの社会生活で使われる表現、www.iancstirk.com/Teaching/Social_expressions.pdf）

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

中山京子 〔なかがやま きょうこ〕 ————— 教授

1972年生。【学歴】東京学芸大学教育学部卒（1990）、東京学芸大学教育学研究科修士課程修了（1997）【職歴】静岡県公立小学校教諭（1994）、東京学芸大学附属世田谷小学校教諭（1998）、京都ノートルダム女子大学講師（2005）、京都ノートルダム女子大学准教授（2009）、帝京大学准教授（2010）【学位】学術博士（総合研究大学院大学 2010）【専攻・専門】社会科教育 国際理解教育【所属学会】日本国際理解教育学会、日本社会科教育学会、全国社会科教育学会、日本移民学会、異文化間教育学会

【主要業績】

[単著]

中山京子

2012 『先住民学習とポストコロニアル人類学』東京：御茶の水書房。

[編著]

中山京子編著

2012 『グアム・サイパン・マリアナ諸島を知るための54章』東京：明石書店。

森茂岳雄・中山京子編著

2008 『日系移民学習の理論と実践——グローバル教育と多文化教育をつなぐ』東京：明石書店。

【受賞歴】

2012 沖永壮一文化学術奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

文化人類学と教育をつなぐ国際理解教育

・研究の目的、内容

本研究では、以下の2つを目的とする。

1) 文化人類学と教育が重なる領域「教育人類学」に関する文献を収集し、これまで内外で示されてきた概念および領域の整理をする。その検討をふまえて、現代の「教育人類学」の定義、整理を試みる。

2) 1) の中から特に国際理解教育に関わる方法論・内容論に着目し、具体的な教材開発やワークショップを行う。

以上の研究の目的の達成にむけて、本館展示を本研究の視点から調査する他、民博研究者へのヒアリングを行う。7月には、日本国際理解教育学会研究大会（広島）にて、国際理解教育とスタディツアーを検討する課

題研究において、教師のフィールドワークの在り方や教材の選択について議論を行う。

8月6日開催予定の国立民族学博物館と日本国際理解教育学会共催による「博学連携教員ワークショップ in 民博——学校と博物館でつくる国際理解教育」(文化資源プロジェクト)においては、本ワークショップ8年間で行われてきたワークショップを検討し、文化人類学と教育をつなぐ方法論を整理する。また、ワークショップ「歌と踊りで語り継ぐ南の島の物語Ⅲ」を行い、「伝統や文化」に関する教育のあり方を国際理解教育の視点から考える。

秋以降、日本と歴史的、経済的に関わりが深いものの、学校教育ではほとんど取り上げられていない太平洋島嶼で、教育人類学の視点からフィールドワークを行う。特に、学校教育現場の観察を通して、教育人類学に関する資料収集を行う。

民博のオセアニア展示を中心に展示の構成や内容を再度分析し、文化人類学と教育をつなぐ「国際理解教育」として、どのように展示を活用することが可能か、教育現場でどのように太平洋島嶼をテーマに教材開発や授業をすることができるか、検討をする。

外部資金の獲得に関しては、科学研究費補助金「ポストコロニアルの視点にたった太平洋地域学習の教材開発」(代表：中山京子、2011～2013年度)と連携して本研究を展開することとする。

・成果

研究の目的1)に関しては、科学研究費補助金「ポストコロニアルの視点にたった太平洋地域学習の教材開発」(代表：中山京子、2011～2013年度)の一部を活用して文献の収集を行い、教育人類学に関する論考を検討した。

目的2)については、以下の活動を実施した。日本国際理解教育学会研究大会(広島大学、7月)にて、特定課題研究「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」において、教師のフィールドワークの在り方や授業用資料の選択、ツアーのプログラムづくりと参加者の学びについて議論を行うことができた。

国立民族学博物館と日本国際理解教育学会共催による「博学連携教員ワークショップ in 民博——学校と博物館でつくる国際理解教育」(8月6日開催)においては、本ワークショップ8年間で行われてきたワークショップを検討し、「博学連携教員研修ワークショップ8年のあゆみ——センセイもたのしむ」を基調講演で報告し、文化人類学と教育をつなぐことの可能性と課題を示した。また、ワークショップ「歌と踊りで語り継ぐ南の島の物語Ⅲ」を行い、オセアニア展示場を活用しながら、「伝統や文化」に関する教育のあり方について国際理解教育の視点から教員と意見交換をすることができた。

8月と2月に、日本と歴史的、経済的に関わりが深いものの、学校教育ではほとんど取り上げられていないグアムにおいて、教育人類学の視点からフィールドワークを行った。特に、チャモロダンスの教育的取り組みについて参与観察し、文化と伝統の再生について検討することができた。

活動の成果の一部を以下の場で報告した。

- ・「スタディツアーにおける学習論——グアム・スタディツアーを事例に」日本国際理解教育学会第23回研究大会、特定課題研究「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」、広島大学(共同発表者 居城勝彦(東京学芸大学附属世田谷小学校)・織田雪江(同志社中学校・高等学校))(2013年7月7日)
- ・Educational Approach to Express the Understandings and Message: Guam Case studies, 2013 The 14th Annual Conference on Education for International Understanding at Jeonbuk National University, Korea (2013年11月9日)
- ・「授業科目『国際理解教育』とゼミ活動における取り組み——グアム理解をコラージュ作品とチャモロダンスを通して表現する」大学コンソーシアム京都2013年度第19回FDフォーラム、龍谷大学(2014年2月23日)

◎出版物による業績

[論文]

中山京子

2014 「異文化理解および主張を表現する教育活動——グアム研究を事例に」『帝京大学教育学部紀要』2：197-206。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2013年7月7日 「スタディツアーにおける学習論——グアム・スタディツアーを事例に」日本国際理解教育学会第23回研究大会、特定課題研究『海外研修・スタディツアーと国際理解教育』、発表収録 pp.146-147 (居城勝彦/東京学芸大学附属世田谷小学校・織田雪江/同志社中学校・高等学校との共同発表) 広島大学

2013年8月7日 「博学連携教員研修ワークショップ8年のあゆみ——センセイもたのしむ」博学連携教員研修ワークショップ2013 in みんなく、国立民族学博物館

- 2013年9月13日～20日 “East Meets West,” Nissan Infinity Gallery, Guam への ‘Cultural Voyage’、‘Gifts from the Marianas’、‘The Celebration of Culture’ の出展
- 2013年10月27日 「アジアにおける社会的課題の共有と社会科授業開発の可能性」全国社会科教育学会第63回研究大会、課題研究発表Ⅲコーディネーター、山形大学
- 2013年11月9日 Educational Approach to Express the Understandings and Message: Guam Case Studies, 2013 The 14th Annual Conference on Education for International Understanding at Jeonbuk National University, Korea
- 2014年2月8日 “East Crosses West,” Historic Inalahan and Gef Pago’ Park, Guam 主催チャモロ文化フェスティバル Dinana Minagfo でのチャモロダンス公演
- 2014年2月23日 「授業科目『国際理解教育』とゼミ活動における取り組み——グアム理解をコラージュ作品とチャモロダンスを通して表現する」大学コンソーシアム京都2013年度第19回FDフォーラム、レジュメ・資料集 pp.11-17-11-23、龍谷大学

山内直樹 [やまうち なおき]————— 教授

1947年生。【学歴】早稲田大学第二文学部卒業（1977）【職歴】山内編集事務所設立（1984）、季刊文化誌『is』編集長（1984）【所属学会】文化資源学会

【主要業績】

[共著]

山内直樹・辛島 昇・坂田貞二他
1981 『インド』東京：実業之日本社。

[編著]

山内直樹編
1998 『ぬっとあったものと、ぬっとあるもの』東京：ポラ文化研究所。

[論文]

山内直樹
1976 「中部インド・ビームベトカの岩壁画群Ⅰ～Ⅲ」『考古学ジャーナル』121, 124, 125。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

広報誌のあり方に関する研究

・研究の目的、内容

研究および博物館活動の社会的還元のための媒体としての広報誌が、研究活動や展覧会の報告・告知にすぎなくなっている現状にかんがみ、現代性、一般性をもったみんぱくにふさわしいテーマ内容、表現について、関連諸分野と連携しながら検討を重ね、研究者に提議する。

・成果

新構築による新しい展示コンセプトが示されるなか、各地域の文化および企画展示テーマに沿った特集を行い、より現代的な内容を盛り込んで誌面を充実させた。また概説的な記述をさげフィールドでの体験的話題を多くして、読者の関心に近づけることが出来た。

■文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門

中村嘉志 [なかむら よしゆき]————— 准教授

1971年生。【学歴】神奈川大学理学部情報科学科卒（1994）、電気通信大学大学院情報システム学研究科博士前期課程修了（1996）、電気通信大学大学院情報システム学研究科博士後期課程退学（1997）【職歴】電気通信大学大学院情報システム学研究科助手（1997）、独立行政法人産業技術総合研究所特別研究員（2002）、独立行政法人産業技術総合研究所研究員（2005）、芝浦工業大学大学院連携大学院客員助教授・客員准教授（2006）、独立行政法人産業技

術総合研究所技術研究員（2010）、電気通信大学大学院情報システム学研究科非常勤講師（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター客員准教授（2010）【学位】博士（工学）（電気通信大学 2005）【専攻・専門】情報システム学、情報通信工学、メディア情報学【所属学会】情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、IEEE、ACM

【主要業績】

[分担執筆]

赤松幹之・荒井民夫・内藤 耕・村上輝康・吉本一穂 監修

2012 『サービス工学 51の技術と実践』東京：朝倉書店。

[論文]

中村嘉志・濱崎雅弘・石田啓介・松尾 豊・西村拓一

2008 「個人端末をWeb支援システムIDへリンクする一手法の提案」『日本知能情報ファジィ学会誌』20(4): 130-141。

中村嘉志・並松祐子・宮崎伸夫・松尾 豊・西村拓一

2007 「複数の赤外線タグを用いた相対位置関係からのトポロジカルな位置および方向の推定」『情報処理学会論文誌』48(3): 1349-1360。

【受賞歴】

2003 Best Presentation Award, The 29th Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society (IECON2003)

2003 優秀論文賞、情報処理学会マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム (DICOMO2003)

2002 野口賞（優秀デモンストレーション賞）、情報処理学会マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム (DICOMO2002)

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インタラクティブセンシングのアプローチによる学術資料の情報提供に関する方法論的研究

・研究の目的、内容

情報展示新構築を推進するため、学術資料の情報提供を来館者に行うためのインタラクティブな情報支援システムの方法論および設計法について、情報工学の側面から実践的に研究する。具体的には、資料情報のデータ整備、資料の研究情報の抽出、そして、情報提供のためのインタフェースそれぞれを対象とする。

・成果

2013年度は、2012年度に運用を開始した本館2階の探究ひろばの情報支援システム：イメージ・ファインダーの利用状況分析を行った。具体的には、探究ひろばの天井にイメージ・ファインダーの操作に連動するデジタルカメラを設置して来館者ユーザの利用状況を第三者視点で記録できるようにした。また、どのような操作がなされたかの記録をシステム本体で取れるようにした。これらの記録を基に利用状況分析を行い、システムの設計と実装、そして初期的な結果を2014年1月に情報処理学会のヒューマンコンピュータインタラクション(HCI)研究会にて対外的な学術研究発表を行った。これにより、国立民族学博物館の研究推進ならびに広報の一助をなした。

◎出版物による業績

[論文]

中村嘉志・Harry Vermeulen・高橋 徹・中川 隆・福岡正太・野林厚志

2014 「イメージファインダー——構造展示を考慮した博物館向け展示物案内システムの提案と実装」『情報処理学会研究報告』2014-HCI-156(3): 1-6。

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

情報処理学会 ヒューマンコンピュータインタラクション研究会 幹事、日本ソフトウェア科学会 第21回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ 運営委員

・非常勤講師

電気通信大学大学院情報システム学研究科「情報システム学特別講義4」

1961年生。【学歴】京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）【職歴】コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部人材開発課付（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2007）【学位】修士（英国王立芸術大学院 1992）【専攻・専門】デザイン専攻【所属学会】日本インテリア学会、日本デザイン学会、芸術工学会

【主要業績】

[監修]

平井康之

2006 『インクルーシブデザインハンドブック』財団法人たんぼぼの家編、奈良：財団法人たんぼぼの家。

[共著]

平井康之・藤 智亮・野林厚志・真鍋 徹・川窪伸光・三島美佐子著

2014 『知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた』東京：学芸出版社。

[論文]

Elokla, N., Y. Hirai and Y. Morita

2010 Emotion Measurement: A Proposal for Measuring User's Kansei. *Journal of Kansei Engineering and Emotional Research International Conference*, pp. 2281-2292.

【受賞歴】

- 2013 「ユニバーサル都市・福岡賞 みんなにやさしい部門」最優秀賞（こども×くすり×デザイン実行委員会）
- 2013 The Include Asia Conference Awards「Champion of Inclusive Design」賞
- 2013 IAUD アワード2013 入賞「みんなの美術的プロジェクト」
- 2010 第4回キッズデザイン賞（ソーシャルキッズサポート部門）
- 2009 2009年度グッドデザイン賞（パブリックコミュニケーションデザイン部門）
- 2009 第3回キッズデザイン賞（コミュニケーションデザイン部門）
- 2008 2008年度グッドデザイン賞（子どもの服薬に関するデザイン研究、こども×くすり+デザイン）
- 2008 第2回キッズデザイン賞（リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども×くすり+デザイン）
- 2003 三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞
- 2002 富山プロダクトデザインコンペティション入選
- 2002 2002年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Full Metal Jacket Chair）
- 1996 1996年度グッドデザイン賞（シナジアシリーズ）
- 1996 海南デザインコンペティション大賞（健康器具バンボレオ）
- 1996 1996年度レッド・ドット賞〈ドイツ・エッセンデザインセンター〉（インタープレイスシリーズ）
- 1994 1994年度グッドデザイン賞（インタープレイスシリーズ）
- 1993 第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選（インタープレイスシリーズ）
- 1993 コクヨ株式会社功労賞（インタープレイスシリーズ）
- 1992 1992年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Perch Chair, Stacking Table）
- 1991 1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館を中心とした公共空間におけるインクルーシブデザインの理論と方法に関わる実践的研究

- ・研究の目的、内容

ユニバーサルミュージアム実現のために、館の入り口から展示スペースまで、ユーザーの視点から調査を行い、現状の物品や空間の物理量、ユーザーの気づきの分析をもとに、インクルーシブデザインの手法を用いて展示デザインに関わる館内外の関係者にわかりやすい指針を確立する。昨年度に着手したアクセスワーキングを継続し、誰でもがアクセスしやすいユニバーサルミュージアムを実現することを目的としている。

- ・成果

2014年6月に2回のユーザーワークショップを開催し、8タイプの12名の来館者ユーザーからアクセスデザインに関する気づきを収集した。それらの気づきをもとに最寄り駅からみんぱく2階受付までのサインをはじめとする情報デザインの基本要件をまとめ、新構築チーム、情報企画課、企画連携系の連携協力を得ながら、印刷媒体、サイン、情報媒体、サービスマニュアルを含めた総合的な基本デザイン案を完成した。アクセスデザインは、通常最後に付加的に扱われ、時間不足で不十分になりがちであるが、ユニバーサルミュージアムをめざし、多様な来館者の快適なアクセス確保には必須の内容である。館内外の専門家、一般市民の協力のもと、十分なコンセンサスを得ながら全体の計画を達成できたのは今年度の大きな成果である。また並行して全体の館内マップと触地図を融合したデジタル触地図については、4人の視覚障がい者（全盲、弱視）によるユーザー評価を2回実施し評価を行い、2次試作を完成した。今後引き続き現場での実証実験が必要である。

◎出版物による業績

[共著]

平井康之・藤 智亮・野林厚志・真鍋 徹・川窪伸光・三島美佐子著

2014 『知覚を刺激するミュージアム——見て、触って、感じる博物館のつくりかた』東京：学芸出版社。

特別客員教員

■先端人類科学研究部・社会環境研究部門

末成道男 [すえなり みちお] ————— 教授

1938年生。【学歴】東京大学教養学部卒（1962）、東京大学大学院生物系研究修士課程修了（1964）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学（1970）【職歴】聖心女子大学文学部専任講師（1972）、北京外国語学院日本学研究中心客員教授（1987）、ピッツバーグ大学フルブライト派遣客員教授（1990）、東京大学東洋文化研究所教授（1990）、東洋大学社会学部教授（1998）、同定年退職（2005）【学位】社会学博士（東京大学社会学系大学院 1971）【専攻・専門】社会人類学・東アジアの社会と祖先祭祀【所属学会】日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

末成道男

1998 『ベトナムの祖先祭祀——潮曲の社会生活』東京：風響社。

1983 『台湾アミ族の社会組織と変化』東京：東京大学出版会。

[責任編集]

末成道男

1995 『中国文化人類学文献解題』東京：東京大学出版会。

【受賞歴】

1975 第8回澁澤賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

- ・研究課題

東アジアにおける祖先祭祀の変動に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

- 1) 前年度に引き続き、中部ベトナムにおける祖先祭祀を中心テーマとした社会人類学的現地調査を3か月冬期に実施する。
- 2) 機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコースの生成と実態」へ参加し、東アジア人類学における中国研究の位置づけを考究する。

・成果

- 1) 中国中山大学人類学部主催のフォーラムの成果報告『人類学と‘歴史’』は日中両文で討論部分も含めたため600頁を超える大部になった。
- 2) 中部ベトナムにおける祖先祭祀現地調査の成果の一部は、2013年9月7日にハノイ国家大学で開かれたワークショップで「So sanh hai lang cua mien Bac Viet Nam (truong hop lang Trieu Khuc va Thanh Phuoc) ——北部ベトナムにおける2村落の比較（潮曲と清福村の事例から）」、11月18日北京社会科学院で開かれたシンポジウムで「我的田野工作与調査方法（私のフィールドワークと調査方法）」、12月17日香港中文大学において開かれたフォーラムで「History and “anthropology”」の口頭発表を行った。

◎出版物による業績

[編著]

末成道男・麻 国慶・劉 志偉編

2014 『人類学与“历史”——第一届东亚人类学论坛报告集』中山大学人類学系・歴史人類学研究中心，社会科学文献出版社。

古谷嘉章 [ふるや よしあき]—————教授

1956年生。【学歴】東京大学教養学部教養学科卒（1980）、東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学（1986）【職歴】東京大学助手（1988）、九州大学助教授（1989）、九州大学教授（2002）【学位】博士（学術）（東京大学大学院総合文化研究科 1992）、社会学修士（1982、東京大学大学院）【専攻・専門】文化人類学【所属学会】日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、American Anthropological Association

【主要業績】

[単著]

古谷嘉章

2003 『憑依と語り』福岡：九州大学出版会。

2001 『異種混淆の近代と人類学』京都：人文書院。

[論文]

古谷嘉章

2010 「物質性的人类学に向けて」『社会人類学年報』36：1-23。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代社会における先史文化の物質性についての研究

・研究の目的、内容

過去の時代に生きた人々の生活の営みは、現在でも物質的に存在しているが、その様態は様々である。本研究は、先史文化すなわち歴史資料の存在しない過去の社会に生きていた人々の文化が、現代社会において物質的に存在している（あるいは存在しなくなっている）様態について、人類学的に分析することを目的とする。具体的には、一方で、考古学的調査研究を対象として、他方で、現代の世界各地の社会において「先史文化がどのように物質的に存在しているか」を対象として、人類学的に研究する。

・成果

民博共同研究「物質性的人类学：物性・感覚性・存在論を焦点として」を組織し、4回（5日間）の研究会を主宰した（内容の一部は「石器や土器の物質性、からだの物質性、見えないものの物質性」『民博通信』142号、「人間学のキーワード：物質性」『月刊みんぱく』第38巻第1号に掲載した）。船橋市立飛ノ台史跡公園博物館における「縄文国際コンテンポラリー展」に前年から引き続いて協力した。科学研究費補助金（基盤研究

(C)「現代アートを用いての先史文化理解と先史文化を用いての現代アート制作の人類学的研究」の研究代表者として、飛ノ台史跡公園博物館のほか、東京国立博物館、新潟県（十日町市博物館、津南町立農と縄文の体験実習館なじょもん、県立歴史博物館、馬高縄文館ほか）、長野県茅野市（茅野市立尖石縄文考古館、茅野市民館・茅野市美術館ほか）においてフィールドワークを行い、「現代社会における縄文文化の意味づけと利用」の様態について具体的かつ詳細に調査を実施した。

森山 工 [もりやま たくみ] ————— 教授

【学歴】 東京大学教養学部教養学科卒（1984）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（1994）**【職歴】** 広島市立大学国際学部講師（1994）、広島市立大学国際学部助教授（1997）、東京大学大学院総合文化研究科助教授（2000）、東京大学大学院総合文化研究科教授（2012）**【学位】** 博士（学術）（東京大学大学院、1994）、修士（社会学）（東京大学大学院、1986）**【専攻・専門】** 文化人類学、マダガスカル地域文化研究**【所属学会】** 日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本オセアニア学会

【主要業績】

[編著]

森山 工・飯田 卓・深澤秀夫編著

2013 『マダガスカルを知るための62章』東京：明石書店。

森山 工・鏡味治也・関根康正・橋本和也編著

2011 『フィールドワーカーズ・ハンドブック』日本文化人類学会監修、京都：世界思想社。

[論文]

Moriyama, T.

2013 Cultural Resource in Action: Mobilization of Culture in Madagascar under French Colonial Rule. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 14: 31-53.

【受賞歴】

1997 第25回澁澤賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

葬送と遺体の「所有」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究計画は、マダガスカル中央高地北東部の農村地域における現地調査にもとづき、国家独立後の農村開発事業の影響によって変化しつつある葬送の実態を明らかにするとともに、そこにおいて遺体を「所有する」ということが持つようになった社会的意義を解明するものである。遺体の「所有」をめぐるのは、当該の死者に連なる過去、および当該の死者から連なる過去によって現在を正当化するという観点から、その「所有」のあり方を考察する。マダガスカルについては、1988年以来断続的に行っている現地調査を継続するとともに、マダガスカル以外の他地域についても歴史学的・人類学的な文献を精査することにより、比較論的な視角から考察をほどこす。

・成果

2013年度は、マダガスカル側の政情が前年度に引き続いて不安定であり、現地調査を行うことができなかった。それを補うべく、上記の「研究の目的、内容」に応じた文献による調査を鋭意実施し、本研究課題に関連する業績として、以下の研究成果を発表した。

『マダガスカルを知るための62章』（エリア・スタディーズ118）、飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編、2013年5月、明石書店、352p.

"Cultural Resource in Action: Mobilization of Culture in Madagascar under French Colonial Rule." *Japanese Review of Cultural Anthropology*, vol. 14, 2013, pp. 31-53.

◎出版物による業績

[編著]

飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編著

2013 『マダガスカルを知るための62章』(エリア・スタディーズ118) 東京: 明石書店。

[論文]

Moriyama, T.

2013 Cultural Resource in Action: Mobilization of Culture in Madagascar under French Colonial Rule. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 14: 31-53.

◎口頭発表・展示・その他の業績

2013年5月19日 「マダガスカル農村部の日常生活と墓制」 第299回みんなくウィークエンド・サロン

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

公益信託澁澤民族学振興基金運営委員、文部科学省教科用図書検定調査審議会専門委員

◎学会の開催

2013年11月16日 日本文化人類学会「次世代育成セミナー」

山本直美 [やまもと なおみ] ————— 准教授

【学歴】 お茶の水女子大学文教育学部教育学科卒(1990)、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了(1992)、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了(2003) **【職歴】** お茶の水女子大学文教育学部教育学科助手(1992)、放送大学非常勤講師(2001)、お茶の水女子大学人間文化研究所特別研究員(2003)、関東学院大学キリスト教と文化研究所客員研究員(2005)、自治医科大学非常勤講師(2005)、関東学院大学非常勤講師(2006)、専修大学非常勤講師(2006)、同志社大学非常勤講師(2008)、大阪医専非常勤講師(2009)、立命館大学非常勤講師(2010)、佛教大学非常勤講師(2014) **【学位】** 博士(人文科学)(お茶の水女子大学 2003)、教育学修士(お茶の水女子大学1992) **【専攻・専門】** 文化人類学、社会学、対抗文化運動、共同体論 **【所属学会】** 日本文化人類学会、日本社会学会、関東社会学会

【主要業績】

[単著]

山本直美

2007 『「居場所のない人びと」の共同体の民族誌——障害者・外国人の織りなす対抗文化』東京: 明石書店。

[論文]

山本直美

2007 「コミュニケーション不全を介して成立する〈つながり〉」浮ヶ谷幸代・井口高志編『病いと〈つながり〉の場の民族誌』pp. 47-67, 東京: 明石書店。

2009 「リサーチクエストを変えていく」箕浦康子編『フィールドワークの技法と実際Ⅱ——分析・解釈編』pp. 175-192, 京都: ミネルヴァ書房。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代日本におけるマイノリティの共同性と個人のライフデザイン

・研究の目的、内容

本研究は、現代日本の共同性の希求される場面において、多様な個々人の欲求や困難がいかんして調整されるかの検討を目的とする。本研究の内容は、特定の共同体をフィールドとして、その成立と存続、成員の参入と離脱の過程をめぐって考察を行うものである。本年度は、成人中心の集団に加え、全寮制学校などの子どもを核とする集団についても、フィールドワーク、文献調査を行う。

・成果

昨今いじめ自殺事件などを機に論じられる「教育の荒廃」と呼ばれる状況は、多様な個々人の欲求や困難をいかんして調整するかという問題に連なる。その際、両極の立場として、一方に自由度の優先という立場(例:

マジョリティもマイノリティも含め個々人の尊厳を重視する人間教育)があり、他方に縛りの優先という立場(例:マジョリティ側のルールを重視し罰則としての排除を含むゼロ・トレランス方式)がある中、実際の教育現場では、両立場を混在させた試行錯誤が重ねられている。本年度の研究では、こうした学校場面に注目する中で、従来研究対象としてきた生活共同体が母体となった学校法人に改めて注目し、そのありようについて調査研究を進めた。そして、その成果の一部を、報告者が所属する関東学院大学キリスト教と文化研究所の『所報』(2014年3月)において、論考として刊行した。

◎出版物による業績

[論文]

山本直美

2014 『『教育の荒廃』をめぐる私立宗教系学校の試み——燈影学園の芸・作務・祈りのもつ可能性』『関東学院大学キリスト教と文化研究所所報』12:149-160。

◎調査活動

・国内調査

2013年4月～2014年3月一京都府内の生活共同体および関連施設(個人の多様な欲求と集団におけるその調整に関し、参与観察・インタビュー・資料収集)

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

立命館大学大学院「応用人間科学研究法」、同志社大学「社会学演習」「ファーストイヤーセミナー」、大阪医専「文化人類学」

■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

佐々木利和 [ささき としかず] ————— 教授

1948年生。【学歴】國學院大學文学部文学科卒(1976)、法政大学大学院人文科学研究科日本史学修士課程修了(1979)【職歴】東京国立博物館(1969)、文化庁(2002)、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授(2006)、北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授(2010)【学位】博士(文学)(早稲田大学2000)【専攻・専門】日本近世史、アイヌ民族史【所属学会】日本文化人類学会、日本考古学会

【主要業績】

[単著]

佐々木利和

2004 『アイヌ絵誌の研究』千葉:草風館。

[共編]

佐々木利和・ビルギト・マヤ編

2003-2006 『在独日本文化財総合目録1～3』東京:国書刊行会。

[学位論文]

佐々木利和

2000 「アイヌ絵誌の研究」早稲田大学。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

民族学博物館におけるアイヌ文化展示の研究

・研究の目的、内容

民博の展示改定計画のなかで、アイヌ文化に関わるそれをいかに行うかを検討する。とりわけ、東大からのアイヌ資料については精査しておく必要がある。東大のアイヌ資料の大半は民博に収蔵されているが、アイヌ絵等の貴重作品はなお東大にある。これらは歴史性を踏まえた展示に欠くことができないものである。

・成果

本年度は東大総合博物館保管『蝦夷生計圖説』について精査した。この作品は作者村上嶋之允の養子である

村上貞助が、作者の意を受けて増補したもので、18世紀末のアイヌの生業を知るうえで欠くことができないものである。今回の調査において、東大本は村上貞助の自筆本であることが確認され、資料として極めて信頼性がたかいことが明らかとなった。

◎出版物による業績

[単著]

佐々木利和

2013 『アイヌ史の時代へ——余瀝抄』（北海道大学アイヌ・先住民研究センター叢書3）札幌：北海道大学出版会。

山田孝子 [やまだ たかこ] ————— 教授

1948年生。【学歴】京都大学理学部数学科卒（1970）、京都大学大学院理学研究科動物学専攻博士課程単位取得退学（1977）【職歴】京都大学総合人間学部（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科（2003）、京都大学名誉教授（2012）【学位】博士（理学）（京都大学 1983）【専攻・専門】文化人類学、認識人類学、シャマニズム研究【所属学会】日本文化人類学会、日本人類学会、American Anthropological Association、International Association for Academic Shamanistic Research

【主要業績】

[単著]

山田孝子

2012 『南島の自然誌——変わりゆく人—植物関係』京都：昭和堂。

2009 『ラダック——西チベットにおける病いと治療の民族誌』京都：京都大学学術出版会。

1993 『アイヌの世界観——「ことば」から読む自然と宇宙』（講談社選書メチエ）東京：講談社。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

多文化空間におけるミクロ・リージョナル共同性構築・維持

・研究の目的、内容

これまでの研究により、1990年代以降の社会状況は、文化的同質性をもたらすとされた近代化やグローバル化の予想に反し、ローカルな文化の価値の見直しと、それにもとづく共同性とコミュニティの再構築に特徴があるという知見を得てきた。これを踏まえ、本研究は、チベット難民をはじめとする越境した人々に焦点をあて、ホスト社会の多文化空間のなかで、どのように自分たちのコミュニティを作り出していくのか、共同性構築と維持の原理を解明することを目的とする。JSPS 科研費24310181「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」との連携により、比較の視点から調査研究を進めた。

・成果

JSPS 科研費24310181により、カナダ在住チベット難民を対象とする継続調査を実施し、チベットカナダ文化センターが、維持・発展をめぐるますます財政的問題を抱えるなかで、チベット人女性たちがコミュニティの統合のためにリーダーシップを発揮し始めていること、初期のカナダ定住第1世代においても、リーダーシップの発揮という個人の力がコミュニティの統合をもたらしてきたこと、および、多文化社会の政策をとるカナダ政府、カナダ市民等の支援もまたチベット難民のカナダ定住成功の重要な鍵になっていたことが明らかになった。また、共同性の概念について、文献資料やこれまでのフィールドデータなどをもとに吟味・考察し、「共同性」とは、共同体の成立と存続を支える人々の関係性、つまり、集団としてつながり合う連繋性（connectedness）であり、「信仰や世界観といった何らかの共有観念や、共有できる価値、生活感などをベースとするもの」と捉えるという視点を提起した（山田 2014：10）。

◎出版物による業績

[論文]

山田孝子

2013 「青海省同仁県におけるルロ祭りの復興と維持」『チベット文化研究会報』37(4)：1-7。

2014 「人類学フィールドワークからよむ共同性の構築——インド独立後のラダックにおける宗教対立から

共存への展開を事例に」王 柳蘭編『下からの共生を問う——複相化する地域への視座』（CIAS Discussion Paper Series 39）pp.8-19, 京都：京都大学地域研究統合情報センター。

- 2014 「八重山諸島における人々の自然認識——人-植物関係にみる地域性と共通性」『琉球・沖縄学における先端的研究領域の開拓——文理融合型研究を旨とした実践的研究プロジェクト』2013（平成25）年度中期計画達成プロジェクト成果報告書, pp. 53-69, 那覇：琉球大学国際沖縄研究所。

〔書評〕

山田孝子

- 2014 「書評 島村一平著『増殖するシャーマン——モンゴル・ブリヤートのシャマニズムとエスニシティ』（春風社、2012）」『地域研究』14(2)：248-252。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年12月1日 「八重山諸島における人々の自然認識——人-植物関係にみる地域性と共通性」琉球大学国際沖縄研究所中期計画達成プロジェクト 公開シンポジウム『琉球列島の自然・文化・環境——人文学と自然科学の対話』、沖縄県立博物館・美術館

陳 天璽 [チェン ティエンシ]————— 准教授

1971年生。【学歴】筑波大学第三学群国際関係学類卒（1994）、香港中文大学国際交流計画学部修了（1995）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士前期課程修了（1996）、筑波大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程修了（2000）【職歴】ハーバード大学フェアバンクスセンター東アジア研究所客員研究員（1997）、筑波大学社会科学系日本学術振興会特別研究員（1999）、ハーバード大学法学部東アジア法律研究所客員研究員（1999）、東京大学総合文化研究科日本学術振興会特別研究員（2001）、杏林大学社会学科非常勤講師（2001）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2010）【学位】国際政治経済学博士（筑波大学大学院博士課程国際政治経済学研究科 2000）【専攻・専門】文化人類学、移民・移動者研究【所属学会】移民政策学会、日本華僑華人学会、American Anthropology Association、日本文化人類学会、アジア政経学会

【主要業績】

〔単著〕

陳 天璽

- 2011 『無国籍』（新潮文庫）東京：新潮文庫。

〔編著〕

陳 天璽・近藤 敦・小森宏美・佐々木てる編

- 2012 『越境とアイデンティフィケーション——国籍・パスポート・IDカード』東京：新曜社。

陳 天璽編

- 2010 『忘れられた人々——日本の「無国籍」者』東京：明石書店。

【受賞歴】

- 2002 第1回井植記念「アジア太平洋研究奨励賞」

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

アジアにおける移民と文化

・研究の目的、内容

民博展示の新構築において、中国展示場に華僑華人コーナー、日本展示場に多民族コーナーの新設が計画されている。本研究では、その両コーナーで必要となる標本資料を収集し、華僑華人を中心としたアジア系移民、および日本に暮らす諸外国からの移民へのインタビューをビデオ収録することで、彼らの暮らしや文化について理解を深める。

・成果

東アジア展示場の新構築、中国地域展示場の「華僑・華人」コーナーと日本展示場の「多みんぞくニホン」コーナーの企画準備に携わった。

各コーナーの資料収集と選定、展示レイアウト、そしてキャプション作成、その他関連写真の収集選定など一連の作業を行った。また、日本展示については、各国から来日した移民の映像資料の撮影を行い、展示ブースで放映している。以上、両コーナーに関連した研究、調査を行い、東アジア展示新構築のオープンにつなげることができたことが、本研究の成果といえる。

展示のほか、華僑華人コミュニティーに関する研究成果については、2013年10月に金門大学で行われた国際会議、また同年11月に慶応大学で行われて日本華僑華人学会設立10周年記念シンポジウムにおいて発表した。

◎出版物による業績

[編著]

陳天璽編

- 2014 『世界における無国籍者の人権と支援——日本の課題 国際研究集会記録』（国立民族学博物館調査報告118）大阪：国立民族学博物館。

[論文]

陳天璽

- 2013 「特集『在留カード』導入と無国籍問題を考える——日本における無国籍者の類型」『移民政策研究』5：4-21。

Chen, T. (Lara)

- 2014 Officially Invisible: the Stateless (*mukokusekisha*) and the Unregistered (*mukosekisha*). In D. Chapman and K. J. Krogness (eds.) *Japan's Household Registration System and Citizenship-Koseki, Identification and Documentation*, pp. 221-238, London: Routledge Taylor & Francis.

- 2014 Open Education Space: Multi-strata Class Inclusion in Japan's Chinese Schools. In N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Care and Education for Life (Senri Ethnological Studies 87)* pp.111-128, Osaka: National Museum of Ethnology.

[書評]

Chen T.

- 2014 “Creation of Culture and Identity of Ethnic Chinese in Japan: Chinese School, Lion Dance, Guandi Temple, Overseas Chinese History Museum (Kakyo Bunka no Soushutsu to Identity: Chuka Gakko, Shishimai, Kanteibyō, Rekishi Hakubutsukan). Written by Yuling Zhang.” Japan: Yunita Co. Ltd. 2008. p. 229.

[その他]

陳天璽

- 2013 「在日中国人コミュニティーの過去と現在」編者代表 吉原和男『人の移動辞典——日本からアジアへ・アジアから日本へ』pp. 296-297, 東京：丸善出版。
- 2013 「華人社会から日中関係を見る——求められる視点」『政策研究報告 Views on China 中国の今、プロが見る I 「現代中国」プロジェクト WEB 論考集』pp. 21-25, 東京：東京財団。
- 2013 「新たな“移民潮（ブーム）”——投資で勢力を拡大する新・新華僑」『政策研究報告 Views on China 中国の今、プロが見る I 「現代中国」プロジェクト WEB 論考集』pp. 61-65, 東京：東京財団。
- 2013 「学びのフォーラム 国際化——国の視点を越えて」『神奈川新聞』7月8日。
- 2013 「学びのフォーラム 無国籍とは——存在を知って支援を」『神奈川新聞』9月23日。
- 2013 「学びのフォーラム 五輪と資格——無国籍者の出場は」『神奈川新聞』11月25日。
- 2014 「金門今昔」『政策研究報告 Views on China 中国の今、プロが見る I 「現代中国」プロジェクト WEB 論考集』pp. 21-25, 東京：東京財団。
- 2014 「学びのフォーラム 仲間づくり——よい環境を与える」『神奈川新聞』2月3日。
- 2014 「保険証難民の悲劇——無国籍者が直面する現実」『産経新聞』2月4日。
- 2014 「憲法って？ 日本国民はで始まるけれど」『北海道新聞』2014年3月15日。
- 2014 「世界では無国籍ブーム、日本はどうするか？」『東亜』561：76-77。

■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

市田泰弘 [いちだ やすひろ] 教授

1962年生。【学歴】立教大学文学部教育学科卒（1986）、立教大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了（1989）【職歴】名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校専任教員（1989）、国立身体障害者リハビリテーションセンター更生訓練所生活訓練専門職（1991）、国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官（1996）、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科主任教官（2011）【学位】文学修士（立教大学 1989）【専攻・専門】手話言語学【所属学会】日本語学会、日本手話学会、日本特殊教育学会

【主要業績】

[共著]

木村晴美・市田泰弘

1995 『はじめての手話』東京：日本文芸社。

[論文]

Ichida, Y.

2010 Introduction to Japanese Sign Language: Iconicity in Language. *Studies in Language Sciences* 9: 9-32.

Sakai, K., Y. Tatsuno, K. Suzuki, H. Kimura, and Y. Ichida

2005 Sign and Speech: Amodal Commonality in Left Hemisphere Dominance for Comprehension of Sentences. *Brain* 128(6) 1407-1417.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本手話の特徴をふまえた手話言語学教授法に関する研究

・研究の目的、内容

現在、大学および大学院レベルで手話言語学の講義を行うための日本語による教科書は存在しない。また、国内の大学において手話言語学を導入するにあたっては、日本手話の言語事実を取り込むのが適当であると考えられるが、その教授法はまだ確立していない。近年の手話言語学に対する関心の高まりなどから、各単年度の講義の教授法を踏まえたシラバスの内容の検討が急務となっている。本研究では、複数の大学において実施する手話言語学の講義を通して、シラバス案の策定とその実効性の検証を行い、その結果を長期的には、日本語による手話言語学講義のための教科書執筆という形に反映させることを目的とする。具体的な内容としては、シラバスの検討においては受講学生の一般言語学の基礎知識の程度に合わせた内容および用例の選択を中心に、実効性の検証については主として受講学生の評価の集計によって行う。

・成果

東京大学にて「日本手話研究Ⅱ」の講義を担当、シラバス案を策定し実践した。社会言語学的背景について扱う導入と、ヴォイス⇒アスペクト⇒モダリティという文法カテゴリーを基盤とした配列による本編からなるシラバス案を採用した。このようなタイプのシラバスにおいては、その実効性が受講学生の一般言語学の知識の程度に大きく依存することが、学生から提出されたレポートによっても明らかであった。そこで学生のレポートをもとに、各文法カテゴリーの概説および日本語と日本手話を対照させるための用例の再検討を行って翌週の講義で再説明を試み、その結果について受講学生に評価をしてもらった。結果についてはおおむね好評であったが、今回は受講学生が聴講生を含めて11名と少なかった上、言語学の基礎知識についてもばらつきが大きく、十分なデータは得られなかった。次年度は授業時間を変更するなどして受講学生の数を増やしたい。

そのほか、日本手話学会において動詞連続構文、日本語学会において知覚的非手指標識について発表、筑波技術大学にて単発の概論的講義を実施した。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年11月15日 「日本手話の基本文法——認知言語学の視点から」手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催事業「手話言語学勉強会」筑波技術大学天久保キャンパス 講堂

2013年12月1日 「手話言語学の音韻論の視点から」みんぱくセミナー暮らしの中の言語学『ことばの機能障害と言語学』日本財団ホール

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年10月27日 「日本手話における動詞連続構文——語彙概念構造による分析」第39回日本手話学会大会 鈴鹿医療科学大学 千代崎キャンパス

2013年11月24日 “Perceptive Non-manual Markers in Japanese Sign Language” 日本言語学会第147回大会 神戸市外国語大学

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

「日本手話研究Ⅱ」東京大学文学部・大学院人文社会系研究科

沢山美果子 [さわやま みかこ]————— 教授

【学歴】 福島大学教育学部卒（1973）、お茶の水女子大学大学院教育学研究科修士課程修了（1976）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻単位修得満期退学（1979）【職歴】 東京都婦人情報センター専門員（1979）、順正短期大学講師（1982）、順正短期大学助教授（1986）、順正短期大学教授（1987）、順正短期大学退職（2008）、岡山大学大学院客員研究員（2008）【学位】 学術博士（お茶の水女子大学 1998）、教育学修士（お茶の水女子大学 1978）、教育学士（福島大学 1973）【専攻・専門】 日本教育思想史、女性史【所属学会】 日本教育学会、比較家族史学会、日本人口学会、歴史学会

【主要業績】

[単著]

沢山美果子

2013 『近代家族と子育て』東京：吉川弘文館。

2005 『性と生殖の近世』東京：勁草書房。

1998 『出産と身体の近世』東京：勁草書房。

【受賞歴】

2006 岡山市出版文化賞

1999 第14回女性史青山なを賞

1989 両備聖園記念賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

近世における「家」と女の身体・子どものいのちの社会史

・研究の目的、内容

本研究の目的は、「家」の維持・存続のために、子どもを産む女の身体と子どものいのちが着目されていく近世社会を対象に、両者の結節点にある「乳」に焦点を当て、近世社会における女の身体と子どものいのちの関係を明らかにするとともに、「家」の維持・存続のための性・生殖と「家族計画」を軸に、近代への展開も視野に入れ、近世社会の性・生殖、いのちをめぐる問題に多角的に接近することにある。

・成果

今年度の研究成果として、2013年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「近世の性・生殖、いのちと『家族計画』」の交付も受け、①「日本近世公権力による人口と『いのち』への介入」（広田照幸、橋本伸也、岩下誠編『叢書・比較教育社会史 福祉国家と教育——比較教育社会史の新たな展開に向けて』2013年11月、98～113頁）、②「女たちの声を聴く——近世日本の妊娠、出産をめぐる史料読解の試み」（『歴史学研究』2013年11月、27～38頁）を発表した。また2009年度～2011年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究「『子ども』の保護・養育と遺棄をめぐる学際的比較史研究」）の研究成果として共編著『保護と遺棄の子ども史』（橋本伸也、沢山美果子編、昭和堂）が5月に刊行予定である。

口頭発表としては、政治経済学・経済史学会シンポジウム（2013年10月19日、於：下関市立大学）において

「歴史のなかの『いのち』への視点——日本近世社会の「家」と「いのち」を中心に」と題する報告をおこなった。

近世社会の「いのち」の問題を「乳」に焦点をあて考察するという本研究の目的を追究する中で明らかになったことは、3点ある。1つは、近世社会の子どもの「いのち」は、人々の生存の基盤である「家」の維持・存続と密接な関係をもって存在したこと、しかしそのことは、「家」の維持・存続にとって必要ないのちか否かという「いのち」の選択をもたらすものであり、とりわけ将来「家」を繋いでいく生殖能力、労働力を持っているかどうかということが「いのち」の選択の基準になったということである。

2つには、近世社会にあって女の身体と子どものいのちの結節点に位置する乳は、「家」の維持・存続を願う民衆にとっても、人口の再生産をはかる藩にとっても重要な位置を占め、出産管理政策や捨て子禁止政策のなかでも乳をめぐる様々な措置がとられ、また人々の胎児観にも影響を与えていたことである。

3つには、その背景には産む性である女性の出産による死亡率の高さや乳児死亡率の高さといった、女と子どものいのちをめぐる状況があったこと、また、そうした女・子どものいのちの脆さを背景に、農村の貫い乳や都市の乳母奉公、赤子を亡くし乳のある女性に捨て子を託すといった乳をめぐるネットワークが形成されていたことである。しかし、赤子の命綱である乳の重要性は、乳の商品化をもたらす一方で、捨て子の原因ともなるという矛盾をはらんでいた。

以上のような研究の過程を通し、日本近世における胎児・赤子のいのちをめぐる観念を明らかにするためには、妊娠から出生へのプロセスのなかでなされた、特に「家」の維持・存続と関わってなされた墮胎・間引き、捨て子、そして長期授乳による避妊など、出生コントロールをめぐる人々の様々な選択を、近世社会のいのちをめぐる環境と関わらせて明らかにする必要性が浮かびあがってきた。そこで今後はさらに、今まで積み重ねてきた近世の妊娠、出産をめぐる史料読解の方法を深めつつ、妊娠から出生へのプロセスのなかで「家」の維持・存続と関わってなされた人々の様々な選択の諸相を具体的なフィールドと事例に即して明らかにすることを課題としたい。

◎出版物による業績

[単著]

沢山美果子

2013 『近代家族と子育て』東京：吉川弘文館。

[共著]

沢山美果子

2013 広田照幸・橋本伸也・岩下 誠編『叢書・比較教育社会史 福祉国家と教育——比較教育社会史の新たな展開に向けて』京都：昭和堂。

[論文]

沢山美果子

2013 「女たちの声を聴く——近世日本の妊娠、出産をめぐる史料読解の試み」『歴史学研究』912：27-38。

◎機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年10月19日 「報告」「歴史のなかの『いのち』への視点——日本近世社会の『家』と『いのち』を中心に」政治経済学・経済史学シンポジウム『「いのち」「生存」「福祉」の関係史——方法的提言』下関市立大学

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C）2013～2015年度「近世の性・生殖、命と『家族計画』」研究代表者

- ・他の機関から委嘱された委員など

松江市史専門委員、岡山県文化財保護審議会委員、岡山県男女共同参画審議会会長、岡山県立記録資料館運営協議会委員、倉敷市男女共同参画審議会委員

- ・非常勤講師

富山大学「ジェンダー論」（集中講義）、ノートルダム清心女子大学「女性史」、岡山大学「生きることとジェンダー」

清水郁郎 [しみず いくろう] ————— 教授

1966年生。【学歴】芝浦工業大学工学部（1990）、芝浦工業大学大学院建設工学専攻修了（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了（2001）【職歴】大同工業大学工学部建築学科助教授（2005）、芝浦工業大学工学部建築工学科准教授（2009）、芝浦工業大学工学部建築工学科教授（2013）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 2001）【専攻・専門】建築学（計画）、東南アジア研究、物質文化研究【所属学会】日本文化人類学会、日本建築学会

【主要業績】

【単著】

清水郁郎

2005 『家屋とひとの民族誌——北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌』東京：風響社。

【編著】

日本建築学会編

2012 『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』東京：風響社。

【論文】

清水郁郎、蟹澤宏剛、木本健二、畑 聡一、増田千次郎、パタナー・ボンティップ、トンワン・テップカイソン

2011 「ラオス深南部山地のロングハウスに関する統合的研究——『高密度居住』を可能にする木造長大家屋の特質と居住文化」『住宅総合研究財団研究論文集』37：121-132。

【受賞歴】

1992 第3回日本建築学会優秀修士論文賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東南アジアにおける木造建築建設にかかわる比較研究

・研究の目的、内容

本研究は、東南アジア大陸部のタイ系民族集団の木造住居や寺院について、建設にかかわる比較研究をおこなうことを目的とする。研究においては、現地調査を実施し、そこで得られた資料を中心に使う。また、国立民族学博物館所蔵の資料を適宜利用し、かつ文献資料とあわせて、当該地域の建築生産の現在の様態をあきらかにする。そのさいには、建築物自体の物理的特徴に加え、建設にかかわる道具の伝播や材料の加工方法に留意し、それらによって産み出される建築構法にも着目する。さらに、建築生産にかかわる職能や社会組織の把握もおこなう。これらを統合して、当該地域における木造建築生産の整理・分類と理解の一助としたい。

・成果

2013年夏期に、タイ王国北部チェンライ県メーサイ郡近郊の民族集団シャン（タイヤイ）の農村で、2週間程度の現地調査を実施した。現地調査では、実測による住居の各種図面の採集、建設道具の把握、建築生産の様態について調べ、住居の形式、構法、間取り、職能などについて理解を深めることができた。特に、住居の形式に関しては、伝統的高床形式に加え、中床式や地床式が近年増加していること、間取りも多様化しているが、伝統的住居にみられた一定の空間配列は保たれていることなどがわかった。

当該研究を含む一連の研究に関する書籍・発表等の成果としては、以下が該当する。

◎出版物による業績

【論文】

清水郁郎

2013 「ルーの居住空間の特徴——東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究 その3」『日本建築学会学術講演梗概集』北海道：1307-1308。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年8月30日 「ルーの居住空間の特徴 東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究 その3」日本建築学会学術講演、北海道大学

2013年8月30日 「滞在型グリーン・ツーリズムにみられるバナキュラー性の考察 宮崎県椎葉村K集落の農家民宿を事例として」日本建築学会学術講演、北海道大学

2014年2月22日 「十島村の居住空間の現在 口之島を中心に」『神奈川大学国際常民文化研究機構 共同研究グループ「ビジュアル資料と渋沢敬三——アチックフィルム・写真からの展望」国際成果発表会』神奈川大学

◎調査活動

・国内調査

2013年7月25日～8月10日一宮崎県東臼杵郡椎葉村（住居と住まい方の調査）

2013年8月17日～8月30日一沖縄県宮古島市下地地区来間（生活財の調査と空き家を利用した集落活性化に関わる調査・研究）

2013年7月から随時一東京都（低層集合住宅の住まい方と高齢化の実際にかかわる研究）

・海外調査

2013年9月3日～17日一タイ王国チェンライ県（タイヤイ（シャン）集団の民家調査と移住による住まい方の変遷に関する研究）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本建築学会建築計画委員会比較居住文化小委員会委員・同出版ワーキンググループ主査、国立民族学博物館共同研究『映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論』共同研究員、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究『アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象』共同研究員

関根久雄 [せきね ひさお] ————— 教授

1962年生。【学歴】法政大学文学部卒（1985）、広島大学大学院社会科学研究科博士課程前期（社会人類学）修了（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程中退（1996）【職歴】名古屋大学大学院国際開発研究科助手（1996）、筑波大学社会科学系専任講師（2000）、筑波大学社会科学系助教授（2003）、筑波大学大学院人文社会科学系准教授（2004）、筑波大学大学院人文社会科学系教授（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特別客員教授（2010）、筑波大学人文社会系教授（2011）【学位】博士（文学）（総合研究大学院大学 1998）【専攻・専門】文化人類学、地域開発論、オセアニア島嶼研究【所属学会】日本文化人類学会、日本オセアニア学会、国際開発学会、太平洋諸島学会、日本国際文化学会、日本社会学会、日本国際地域開発学会

【主要業績】

[単著]

関根久雄

2001 『開発と向き合う人びと——ソロモン諸島における「開発」概念とリーダーシップ』東京：東洋出版。

[論文]

関根久雄

2012 「疎外される州民——ソロモン諸島における『開発的公共圏』」須藤健一編『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』pp. 257-274, 東京：風響社。

2012 「国家からの離脱と『市民社会』——ソロモン諸島における開発的公共圏の伸縮」柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』pp. 35-52, 京都：昭和堂。

【受賞歴】

2001 国際開発学会賞奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

「感情」からみるオセアニア島嶼国の近代化——ソロモン諸島における開発の事例から

・研究の目的、内容

ソロモン諸島では、1998～2003年に発生した国内紛争を機に、州レベルの大規模開発の模索、州への政治的権

限の委譲（連邦制移行）という社会情勢の変化に加え、村落における現金収入源の確保やサブシステムの維持を指向した生業活動の安定化のための活動（社会開発）がNGOや援助共与国のODAなどによって試みられている。これらの動きには、いずれもその起点および実施過程において人々の感情とそれに基づく様々な行為の束が関与し、それらが同国の近代化に関わる事柄の動向を左右し、実質的に近代化の姿を形作っているともいえる。本研究では、ソロモン諸島における有機農法普及プロジェクトや観光開発プロジェクトの実施プロセス、州社会から国家に向けられる低開発の語りなどに現れる人々の感情に注目し、ソロモン諸島民にとっての近代化あるいは開発の意味を再考する。本研究課題は前年度からの継続課題である。

・成果

2011年度に研究代表者として立ち上げた国立民族学博物館共同研究会「実践と感情——開発人類学の新展開」の研究会を3回（+民博資金に拠らない会を1回）開催した。同研究会の研究成果の一環として、研究会メンバーと共に、日本文化人類学会第47回研究大会（於・慶應義塾大学）において分科会「感情と開発——人類学における応用的実践の新展開」（研究代表者：関根久雄）を、国際開発学会第24回全国大会（於・大阪大学）において企画セッション「開発実践と『感情』——リアリティをめぐる新たなアプローチの可能性」（研究代表者：関根久雄）を組織し、自らもソロモン諸島の事例による研究発表をおこなった。

また、本研究課題に関わるソロモン諸島における継続的な現地調査を、2014年2月に、科学研究費助成事業（基盤研究（B））「感情と実践——開発人類学の新たな地平」（研究代表者：関根久雄）、および同基盤研究（B）「社会的包摂のための実践人類学的研究」（研究代表者：鈴木 紀）を通しておこなった。今回の調査では、従来のNGOによる農村開発事業の過程に注目するだけでなく、現地で活動する青年海外協力隊員の活動や彼らとソロモン人との協働関係における感情のやりとりから、同国における開発や近代化のリアリティを考察することを試みた。なお、青年海外協力隊員に係る研究調査は、JICA（国際協力機構）研究所の企画プログラム「青年海外協力隊の学際的研究」への参加を通じておこなったものである。

◎出版物による業績

[その他]

関根久雄

2014 「開発実践における人々の感情・フィールドワーカーの感情・国家と住民感情」『民博通信』144: 16-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2014年3月8日 「まとめ：『開発実践における感情』の人類学とは何か」、共同研究会「実践と感情——開発人類学の新展開」（代表：関根久雄）、筑波大学東京キャンパス

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年6月9日 「怒りを『管理』する——ソロモン諸島における開発実践と感情経験」、日本文化人類学会第47回研究大会、慶應義塾大学

2013年6月15日 「趣旨説明」シンポジウム『太平洋島嶼国と日本の環境協力——その実態と課題を考える』（代表：関根久雄）太平洋諸島学会第1回研究大会、明治大学

2013年7月7日 [コメンテーター] 合評会（木村周平著『震災の公共人類学——揺れとともに生きるトルコの人びと』世界思想社、2013年）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2013年7月13日 「つなぐ——開発人類学の認識論」早稲田文化人類学会研究集会、早稲田大学

2013年11月30日 「怒りの『管理』——ソロモン諸島における開発実践と感情」、国際開発学会第24回全国大会、大阪大学

2014年3月19日 「太平洋島嶼国と青年海外協力隊——地域性の視点から」JICA 研究所青年海外協力隊（JOCV）研究セミナー 第2回「地域社会を見る目——協力隊と人類学」、JICA 研究所

・研究講演

2013年12月14日 「太平洋島嶼国の開発と地域文化」明治大学リバティアカデミー「太平洋諸島学への誘い」第5回講演会、明治大学

◎調査活動

2014年2月15日～2月24日—ソロモン諸島（科学研究費助成事業（基盤研究（B））「感情と実践——開発人類学の新たな地平」（研究代表者：関根久雄）、および同基盤研究（B）「社会的包摂のための実践人類学的研究」（研究代表者：鈴木 紀）に係る現地調査。

◎上記以外の研究活動

- ・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「感情と実践——開発人類学の新たな地平」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「社会的包摂のための実践人類学的研究」研究分担者、国際開発学会「地域社会と開発」研究部会、研究代表者、国立民族学博物館共同研究員「実践と感情——開発人類学の新展開」研究代表者、国立民族学博物館共同研究員「NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」研究分担者

◎社会活動・館外活動等

- ・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事・評議員、太平洋諸島学会理事・学会誌編集委員長、茨城県つくば市北条まちづくり振興会相談役

関根政美 [せきね まさみ] ————— 教授

1951年生。【学歴】慶應義塾大学法学部卒（1974）、慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻前期博士課程修了（1976）、慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻後期博士課程修了（1979）【職歴】慶應義塾大学法学部専任講師（1979）、慶應義塾大学法学部助教授（1984）、慶應義塾大学法学部教授（1989）、豪州NSW州立大学経済・商学部訪問研究員（1980）、在豪日本大使館専門調査員（1989）【学位】社会学博士（慶應義塾大学 1989）、法学修士（慶應義塾大学 1976）【専攻・専門】社会学、国際社会学、人口移動と人種・民族・エスニシティの国際社会学、現代オーストラリア論、多文化共生・競生論【所属学会】オーストラリア学会、日本国際政治学会、日本社会学会、日本政治学会

【主要業績】

[単著]

関根政美

- 1989 『マルチカルチュラル・オーストラリア——多文化社会オーストラリアの社会変動』東京：成文堂。
- 1994 『エスニシティの政治社会学——民族紛争の制度化のために』愛知：名古屋大学出版会。
- 2000 『多文化主義時代の到来』東京：朝日新聞社。

【受賞歴】

- 2000 義塾賞
- 1990 桜田会奨励賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

多文化主義の実践と現代的問題に関する国際社会学的研究

・研究の目的、内容

従来より、関根はオーストラリア研究者として、オーストラリアの多文化共生についての研究を行ってきた。2013年度も「多文化主義の実践と現代的問題に関する国際社会学的研究」と題する課題のもとに、多文化主義の現状に関する国際社会学的研究を行った。具体的には、2013年4月のボストン・マラソン・テロ事件に焦点を当てて研究し、多文化「凶生」時代の到来を防ぐための方策を考えたい。

・成果

近年、従来より実施してきたオーストラリアを含む先進諸国の多文化主義・多文化主義政策展開についての研究に加え、欧米（EU）・オーストラリアで2000年代より顕著となった反多文化主義の社会的風潮に興味を持っている。多文化主義には共生（移民・難民定住者への支援を中心とする諸政策）と競生（移民・難民の社会参加を促進して国民と対等の競争を実現するための諸政策）の2側面がある。当初、社会的弱者とされていた移民・難民およびその子孫が多文化共生の成功により社会参加し競争に参加すると、国民の間に移民・難民支援（多文化主義政策など）への反発が高まり、昂じると「移民排斥・反多文化主義政治」（ポピュリスト政治・

極右政治)が出現し、極右政党・運動の活動が促進されると考えている。これは、伝統的な極右政党研究の知見に従ったものである。この典型は、2012年のノルウェー事件である。それに対してボストン・マラソン・テロは、競生の段階に進むために必要な米国の多文化共生政策の不十分さに対する移民の不満が昂じて、発生したものではないかと考えられるので、比較検討したいと思いつき着手したが、現在、研究は停滞している。ボストン事件は移民個人(兄弟)による犯罪でもあり、犯行に及んだ彼らの個人情報にかかわる資料などの入手が難しいことにもある。他方、2013年9月にはオーストラリアの総選挙があり、労働党から保守連合に政権交替があった。そのため、オーストラリア多文化主義にも変化が生じた。そちらへの対応も忙しく、二兎を追うことができなかつた。今後も両者についての研究は続け、今後、『国立民族学博物館研究報告』などに投稿したいと思っている。

関本照夫 [せきもと てるお] ————— 教授

1947年生。【学歴】 東京大学大学院社会学研究科博士課程中退(1976) 【職歴】 国立民族学博物館第五研究部助手(1976)、一橋大学社会学部講師(1981)、同学部助教授(1983)、東京大学東洋文化研究所助教授(1987)、同研究所教授(1991)、同研究所長(2006-2009)、東京大学を定年退職(2010)、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任教授(2010-2013) 【学位】 社会学修士(東京大学 1974) 【専攻・専門】 仕事の人類学、布、工芸、物質文化、東南アジア研究 【所属学会】 日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、Association for Asian Studies

【主要業績】

[編著]

Sekimoto, T. (ed.)

2000 *Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia* (Toyota Foundation Research Grant Report), Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

[共編著]

関本照夫・船曳建夫編

1994 『国民文化が生れる時——アジア・太平洋の現代とその伝統』東京：リプロポート。

Sekimoto, T., Semiarto Aji Purwanto and Hanantiwi Adityasari (eds.)

2003 *Handicrafts in the Age of Global Economy: Indonesia and Japan*. Depok: Center for Japanese Studies, University of Indonesia.

【受賞歴】

1983 第14回澁澤賞

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

物質性の人類学的研究

・研究の目的、内容

布・衣と人間の相互作用を明らかにし、人類学的物質性研究に貢献する。

・成果

2010年度～2012年度に実施した、民博機関研究「マテリアリティの人間学」のプロジェクト・布と人間の人類学的研究の成果も踏まえ、研究成果刊行のための準備・編集作業を行った。

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

財団法人東洋文庫研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・外部評価委員、国立大学法人教育研究評価委員会委員

曾我 亨 [そが とおる]—————教授

【学歴】名古屋大学理学部卒（1988）、京都大学大学院理学研究科後期博士課程修了（1994）【職歴】京都大学理学部助手（1994）、弘前大学人文学部助手（1995）、同助教授（2000）、同教授（2010）【学位】理学博士（京都大学 1999）【専攻・専門】生態人類学 1) 北東アフリカの牧畜社会を対象とした生業・社会に関する研究、2) エスニシティと稀少資源に関する研究、3) 難民の生存戦略に関する研究、4) 人類進化論的研究【所属学会】日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会、生態人類学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[共著]

高倉浩樹・曾我 亨

2011 『シベリアとアフリカの遊牧民』宮城：東北大学出版会。

[論文]

曾我 亨

2011 「国家に抗する拠点としての生業——牧畜民ガブラ・ミゴの難民戦術」松井 健・名和克郎・野林厚志編『生業と生産の社会的布置』pp. 389-426, 京都：昭和堂。

曾我 亨

2007 「〈稀少資源〉をめぐる競合という神話——資源をめぐる民族関係の複雑性をめぐって」松井 健編『資源人類学06 自然の資源化』pp. 205-249, 東京：弘文堂。

【受賞歴】

1999 高島賞（日本ナイル・エチオピア学会）

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバル化する現代社会における生業の意義

・研究の目的、内容

本研究の目的は、グローバル化する社会において、生業がいかなる意味をもつかを考察することである。南部エチオピアに住む牧畜民ガブラ・ミゴを題材にとり、彼らが厳しい環境のなかで生み出してきた生業に関する技術に焦点をあてる。20世紀後半、ガブラ・ミゴは何度も難民となり、他国に逃げている。その要因を探ると、国際政治の影響に加え、近年においてはグローバル化した低強度の紛争、すなわちカルドーの言う「新しい戦争」の影響が認められる。こうした困難な状況において、ガブラ・ミゴの人々が、生業を活用しながらいかに生き延びようとしているのかを明らかにするのが本研究の目的である。

・成果

2013年度は、科学研究費補助金を用いて約4週間の現地調査を実施した。2012年度までの調査に於いて、難民化したガブラ・ミゴの商人達は、北ケニアから痩せ衰えたラクダを購入し、南エチオピアの牧野に暮らす親族や友人のもとに届け、高値がつくこの地域の市場で転売して利益をえていること、さらに南エチオピア地域のガブラ・ミゴの人々は、肥育したラクダをアラブ諸国に輸出する仕事に係わることで、利益を得ていることが判明した。また、このラクダ取引には、ガブラ・ミゴだけでなく近隣の半農半牧民グジも参加している。ガブラ・ミゴはラクダの放牧や移動に係わっていたのに対し、グジはガブラ・ミゴ商人から痩せたラクダを購入し、収穫後の畑を利用して肥育を行っていた。これは、各民族の生業経済を生かした係わり方であり、経済学のいう比較優位論にあてはまる事例であると考えられ、この取引は、難民化したガブラ・ミゴの生存を経済的に保障するだけでなく、異民族との共存を保障するものにもなっている可能性がある。2013年度の調査でも、この傾向を確認することができた。

以上の知見の一部は、東京大学で開催された日本アフリカ学会で発表したほか、シカゴで開催されたアメリカ人類学会でも発表した。

◎出版物による業績

[論文]

曾我 亨

2013 「制度が成立するとき」河合香史編『制度』pp.1-18, 京都：京都大学学術出版会。

Soga, T.

2013 Perceivable “Unity”: Between Visible “Group” and Invisible “Category.” In K. Kawai(ed.) *Groups*, pp.219-238. Kyoto: Kyoto University Press.

曾我 亨

2014 「生業」松田素二編『アフリカ社会を学ぶ人のために』, pp.56-69, 京都：世界思想社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2013年5月25～26日 「難民の生存を可能にする新たな経済活動(2)——南エチオピアにおけるラクダ交易の変化」日本アフリカ学会第50回学術大会、東京大学

2013年11月20～24日 ‘Pastoral Identities in East Africa for Surviving Neoliberal Era.’ A paper presented at the 112th Annual Meeting of the American Anthropological Association, Chicago, USA

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員、科学研究費補助金(基盤研究(A))「アフリカ在来知の生成と共有の場における実践的地域研究」(代表：重田真義、京都大学)研究分担者、科学研究費補助金(基盤研究(C))「難民の生存を支える新たな経済活動に関する人類学的研究」(代表：曾我 亨)

◎社会活動・館外活動等(2013年4月1日～2014年3月31日)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所海外調査専門委員、京都大学アフリカ地域研究センター African Study Monographs 編集委員

大杉 豊 [おおすぎ ゆたか] ————— 准教授

【学歴】 University of Rochester (米国ロチェスター大学) 大学院言語研究科博士課程修了(1997) 【職歴】 人形劇団「デフパペットシアターひとみ」団員(1983)、学校法人名古屋文化学園言語訓練専門職員養成学校教員(1989)、米国ロチェスター大学アメリカ手話学科客員教員(1997)、財団法人全日本ろうあ連盟本部事務所長(2000)、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター障害者基礎教育研究部准教授(2007) 【学位】 Ph. D (ロチェスター大学1997) 【専攻・専門】 手話言語学、ろう者学 【所属学会】 日本特殊教育学会、日本手話学会、日本聾史学会

【主要業績】

[単著]

大杉 豊

2005 『聾に生きる——海を渡ったろう者山地彪の生活史』東京：財団法人全日本ろうあ連盟出版局。

[共編]

大杉 豊・関 宣正編

2010 『わたしたちの手話学習辞典』東京：財団法人全日本ろうあ連盟出版局。

[論文]

大杉 豊

2012 「日本の手話における語彙の共通化の現象」『手話学研究』21: 15-24。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語学に関する研究ネットワーク拠点の形成に向けての現状調査

・研究の目的、内容

学術的により堅固な基盤をもって手話言語学研究を推進するための研究ネットワーク拠点を形成することを長

期的な目標とし、今年度は昨年度に引き続き、国内外の手話言語学研究的現状および課題、その背景的要因の整理を継続することを目的とする。方法としては、人間文化研究機構連携研究として『手話言語と音声言語のシンポジウム②「身体表現と言語」』を9月末に実施する過程で研究者との情報・意見交換を行う。また、筑波技術大学で継続している「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業にて実施する言語学分野に対応した手話通訳の研究会では、手話通訳を行った言語学分野の学術発表に言語学情報を付与するコーパスを数点作成する。

・成果

人間文化研究機構連携研究として「身体表現と言語」をテーマとする「手話言語と音声言語のシンポジウム」のコーディネートに関わる中で、国内外の手話言語学研究的現状および課題、その背景的要因について情報・意見交換を行った。この成果を出版物にまとめるにはいたらなかったが、国立大学法人筑波技術大学で2014年度開設が予定されている大学院技術科学研究科情報アクセシビリティ専攻手話教育コースのカリキュラム設計および開設科目「手話言語学特論」「手話教育特論」等の準備に活かすことが出来た。成果の執筆は2014年度の課題とする。

一方、筑波技術大学の「情報保障のための情報・技術・人材拠点の整備」事業では、言語学分野に対応した学術手話通訳の研究会を関西地域で継続する中で、1) 言語学知識を有する手話通訳者の増加(可視化)、2) 言語学用語に対応する手話語彙の増強、3) 言語学分野の手話通訳知識と経験を蓄積する機能の検討の3点をもって、次年度の民族学博物館・筑波技術大学共同事業「関西地域学術手話通訳研究事業」につなげることが出来た。

◎出版物による業績

[共著]

青柳美子・浅野順一・浅利義弘・池上芳夫・石川 渉・石倉義則・伊藤芳子・植野圭哉・江原こう平・大内祥一・大瀧浩司・大杉 豊・奥田しのぶ・加藤 薫・亀田明美・小畑修一・金原輝幸・黒崎信幸・小出真一郎・斎藤千英・鈴木博司・高田英一・高塚千春・高塚 稔・高橋幸子・竹島春美・田中保明・長野秀樹・中山真理・那須英彰・西滝憲彦・浜野秀子・早瀬久美・曲 真理子・前田真紀・本村順子・柳 喜代子・山口健二・山本直樹・吉岡真人・吉田正雄・吉野木の実・若杉義光・若浜ひろ子

2013 『わたしたちの手話 新しい手話2014』東京：一般財団法人全日本ろうあ連盟。

[共編]

西滝憲彦・大杉 豊・西垣正展・田中清之・木村美津子・長谷川達也・中根はるみ・遠藤良博・関間千恵子編
2013 『学校の手話——ゆたかな学習と生活のために』東京：NPO 法人ろう教育を考える全国協議会。

石川芳郎・小中栄一・坂井田美代子・松本正志・近藤幸一・原田宗一・大杉 豊

2014 『手話奉仕員テキスト 手話を学ぼう 手話で話そう』京都：社会福祉法人全国手話研修センター。

2014 『手話奉仕員指導書』京都：社会福祉法人全国手話研修センター。

2014 『手話通訳I ホップ ステップ ジャンプ』京都：社会福祉法人全国手話研修センター。

2014 『手話通訳I ホップ ステップ ジャンプ 指導書』京都：社会福祉法人全国手話研修センター。

2014 『手話通訳II ホップ ステップ ジャンプ』京都：社会福祉法人全国手話研修センター。

2014 『手話通訳II ホップ ステップ ジャンプ 指導書』京都：社会福祉法人全国手話研修センター。

2014 『手話通訳者のための講義テキスト』京都：社会福祉法人全国手話研修センター。

[その他]

大杉 豊

2014 「ことばの仕組み(手話)」『手話通訳者養成のための講義テキスト』pp.46-53, 京都：社会福祉法人全国手話研修センター。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイド・データベースの制作・監修

大杉 豊制作

2013 『聾唖教授手話法データベース』(日本手話・日本語) <http://www.deafstudies.jp/osugi/kagoshima/>
大杉 豊・菅野奈津美・戸井有希制作

2013 『ろう者学教育コンテンツ開発プロジェクト』(日本語・日本手話) <http://www.deafstudies.jp/>

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年9月28日 「言語地図の作成と利用(日本手話の方言)」機関研究成果公開『みんぱく手話言語学フェス

タ2013』国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

- 2013年 8月25日 「手話を学ぶ環境の整備に向けて——手話言語データベースを教育現場で活用することの意義」 特殊教育学会第51回大会、明星大学
- 2013年 9月19日 「手話言語資源の整備について」 異分野融合ワークショップ『手話・社会・技術』、国立情報学研究所
- 2013年10月 6日 「聴覚障害児に関わる教育と医療を考える会——戦略研究からの展開」（代表：福島邦博） 東京・テクノエイド協会
- 2013年10月27日 「『日本手話話し言葉コーパス』の可能性——語彙 課題のデータを分析する」（岡田智裕・坊農真弓・菊地浩平との合同発表） 日本手話学会第39回大会、鈴鹿医療科学大学千代崎キャンパス
- 2013年12月 8日 第2分科会「面接にチャレンジ！——聴覚障害学生と就職活動」のアドバイザー、第9回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム、群馬大学荒巻キャンパス

・研究講演

- 2013年 8月25日 「(手話講習会における) 良い指導者を目指そう」 広島県ろうあ連盟、東広島市
- 2013年 9月 7日 「国際生活機能分類を解く——手話言語と情報コミュニケーション」 第62回全九州ろうあ者大会 / 第41回全九州手話通訳者研修会・共通研修会、鹿児島県鹿児島市
- 2013年 9月 7日 「明治時代の史料からわかる鹿児島の手話について」 第62回全九州ろうあ者大会 / 第41回全九州手話通訳者研修会・手話分科会、鹿児島県鹿児島市
- 2013年11月22日 「映像メディアを考える——無声映画から発声映画へ」 『情報アクセシビリティフォーラム』 財団法人全日本ろうあ連盟、東京・秋葉原・UDXシアター
- 2013年11月24日 「映画に見るろう者の生活文化と社会観」 『情報アクセシビリティフォーラム』 財団法人全日本ろうあ連盟、東京・秋葉原・UDXシアター

・研究公演

- 2013年 7月21日 「手話オープン——父と娘」 (庄崎隆志、貴田みどり、大杉豊、廣川麻子) 『第36回関東ろう者大会 in とちぎ』 関東ろう連盟、栃木・日光市藤原総合文化会館
- 2014年 2月 1日 「手話言語法運動劇」 (庄崎隆志、貴田みどり、大杉豊、廣川麻子) 『手話言語法イベント大阪』 財団法人全日本ろうあ連盟、大阪・御堂会館大ホール

・展示

- 2013年11月22日～24日 〈映像エリアのプロデュース〉 『情報アクセシビリティフォーラム』 財団法人全日本ろうあ連盟、東京・秋葉原・UDXシアター (入場者数：のべ1261名)

◎調査活動

・国内調査

- 2013年 9月 5日～6日 一大分県大分市・鹿児島県鹿児島市 (語彙集「九州の手話」所収の手話単語に関する調査)
- 2014年 3月25日～26日 一沖縄県那覇市 (語彙集「九州の手話」所収の手話単語に関する調査)

・海外調査

- 2014年 1月 4日～14日 一ケニア・ナイロビ市およびキスム市周辺地域 (ケニアにおける標準手話研究および手話通訳養成の基盤の調査) JICA フォローアップ事業

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは他の研究機関の科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構連携研究「第2回国際シンポジウム「手話言語と音声言語の記述・記録・保存」(代表：菊澤律子)」連携研究員、総合研究大学院大学学融合戦略的共同研究支援事業「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning開発に向けて」(代表：菊澤律子) 研究分担者、科学研究費補助金(基盤研究(B))「ろう者コミュニティの視点による日本手話語彙体系の記録・保存・分析」研究代表者、科学研究費補助金(基盤研究(B))「ろう者・聴者の言語意識の改革を目指した「日本手話話し言葉コーパス」の構築」(代表：坊農真弓) 研究分担者、国立情報学研究所共同研究「日本手話による語りの伝承行為とデジタルアーカイブ技術・ネットワークシステムとの融合による新しい未来価値創成研究」研究代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター教育研究等推進経費事業「日本手話文再生テスト試作版の作成とパイロットスタディ」研究

代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター「東日本大震災における聴覚障害学生への支援経験をベースとした大学間コラボレーションスキームの構築」事業「情報保障に関する研究基盤構築：日本語-手話コーパスの作成」研究代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター「聴覚・視覚障害学生のイコールアクセスを保障する教育支援ハブの構築——情報保障と障害特性に基づく教育方法の協調的開発と資源共有に向けて」事業「ろう者学教育コンテンツ開発」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

社会福祉法人全国手話研修センター日本手話研究所事務局長、NPO 法人日本 ASL 協会会長、財団法人現代人形劇センター理事、Executive committee member, Institute on Disability and Public Policy for the ASEAN Region

・非常勤講師

「聴覚障害児指導法概論」国立大学法人群馬大学教育学部（集中講義）、「ろう者コミュニティとろう史」香港中文大学手話言語学・ろう者学センター（集中講義）、「ろう者文化と教育」国立特別支援教育総合研究所 特別支援教育専門研修（単発講義）

■文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門

前川啓治 [まえがわ けいじ] ————— 教授

【学歴】大阪大学文学部卒（1980）、大阪大学人間科学研究科博士前期課程修了（1983）、大阪大学人間科学研究科博士後期課程単位取得退学（1989）【職歴】筑波大学歴史・人類学系講師（1992）、静岡大学人文学部准教授（1996）、筑波大学人文社会科学研究科准教授（2000）、筑波大学人文社会科学研究科教授（2004）【学位】博士（文学）（筑波大学 1993）【専攻・専門】文化人類学・民俗学【所属学会】日本オセアニア学会、日本文化人類学会

【主要業績】

[単著]

前川啓治

2004 『グローカリゼーションの人類学——国際文化・開発・移民』東京：新曜社。

2000 『開発の人類学——文化接合から翻訳的適応へ』東京：新曜社。

[編著]

前川啓治編

2012 『カルチュラル・インターフェースの人類学——「読み換え」から「書き換え」の実践へ』東京：新曜社。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

グローバリゼーションから視る組織文化の比較研究

・研究の目的、内容

筑波山麓の地域づくりを考える際、今後重要なのは、狭義の地域とその外部との関係性の構築であろう。竜巻被害からの復興などの点では、大学など外部のエージェントと復興の担い手となる地元組織との協力体制が速やかに構築されるものの、一般の地元民の関与が限定的で、地元民の間での立場の差異への理解とその解消が進まないという問題点が顕在化している。その結果、復興のプロセスが進まないという、開発における典型的な問題への直面に対し、大学など外部のエージェントとコミュニティ内部の地域づくりの担い手が、どのような関係性を自ら、および一般の地元民との間に築いて対処してゆくのかを、その過程への参与も含め理解する。

・成果

地域づくりのリーダーの生の声を視聴覚資料として保存した。具体的には、筑波大学人文社会系プロジェクト資金により、映像アーカイブの作成を行った。筑波山麓地区の中心地である北条地区の会長が竜巻災害復興委員会の主要な委員であるが、その会長に、従来からの地域づくりと一昨年度の竜巻復興という短期的な対策との関連という観点からインタビューした。世代間のコミュニケーションや地区内での立場の違いなどから、具体的な地域再生のプロジェクトへの地域成員の参加・協力が限定的な現状が明らかにされた。大学の研究者や

学生の参加が地域活性化に大きく貢献していると同時に、地域の成員がそうした外部からの支援者に頼りがちになってしまう構造的な問題も明らかになった。また、神郡地区では、旧商家を訪ね、昭和初期からの仕事の風景や地区の共同作業、地域の昔話などについて語ってもらい、また店蔵の保存活動に参加する地元住民による活動への取り組みと思い、地域づくりの組織化に関する見解などを同時に記録した。

筑波大学出版会から出版予定の編著『筑波山から学ぶ——「とき」を想像・創造する』の査読が終了し、2月刊行を予定している。筑波山麓地域の歴史や民俗、文化、経済への理解が、具体的な地域づくりやその組織化の過程とどのように結びついているのかという点も明らかにしている。

外国人研究員 客員

■研究戦略センター・超領域研究部門

CHUANG Ya-Chung (莊 雅仲) [チュワン ヤーチョン] ————— 准教授

任期：2014年 1月31日～2014年 2月28日

研究課題：現代台北におけるニューアーバニズムと主婦のコミュニティ運動

【学歴】 国立清華大学卒 (1987)、国立清華大学大学院修士課程修了 (1990)、デューク大学博士課程修了 (2000) 【職歴】 国立花蓮教育大学多文化教育研究所助教授 (2000)、国立雲林科技大学文化遺産保護研究所助教授 (2001)、国立交通大学人文社会学部助教授 (2004)、国立交通大学人文社会学部副教授 (2005) 【学位】 Ph.D. (文化人類学) (デューク大学 2000)、M.A. (人類学) (国立清華大学 1990) 【専攻・専門】 文化人類学

【主要業績】

[単著]

Chuang, Y.

2013 *Democracy on Trial: Social Movements and Cultural Politics in Post-authoritarian Taiwan*. Hong Kong: Chinese University Press.

[論文]

Chuang, Y.

2012 Xingzou taipei de xingcheng (The Formation of a Walking Taipei). *Wenhua yanjiu* (Router: A Journal of Cultural Studies 15 (forthcoming)).

2012 Studying Taiwan: The Academic Politics of Bentu in Post-authoritarian Taiwan. In A. Dirlik (ed.) *Sociology and Anthropology in 20th Century*, pp. 283-306. Hong Kong: The Chinese University Press.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

現代台北におけるニューアーバニズムと主婦のコミュニティ運動

・研究の目的、内容

研究者は、過去10年以上のあいだ、グローバル化が進む台湾における社会運動とアーバニズムとの関係について人類学的な研究活動をおこなってきた。都市や農村で活動する NGO やコミュニティ、さらには民族集団が、グローバル化のなかで、中国との関係を視野に入れつつ、いかにアイデンティティや民主主義を求めて運動をおこなっているかに注目してきた。その成果として発表されたいくつかの論文、ならびに2013年に Chinese University Press から出版された単著は、台湾の社会運動に関するほとんど唯一といってよい人類学的研究として、台湾の国内外で高い評価を得ている。

招聘期間中は、これまでの人類学的調査において集めたデータをもとに、90年代半ば以降に台北の地域住民のあいだでつくられるようになった主婦のネットワークについての理論的な検討を進めた。彼女たちのあいだで「コミュニティ (shequ)」という名とともに生み出される場所についてのさまざまな想像とそれに基づく実践が、地域の伝統的な保護主義や、グローバル化によって進む商業主義と、いかに交渉してきたかを明らかに

した。なお、この成果は、期間中に開催された機関研究の国際シンポジウムにおいて発表された。

・成果

社会運動についての人類学的研究は最近になって注目されている研究領域のひとつであるが、まだ東アジア地域を対象にした研究はきわめて少ない。研究者は台湾の社会運動についての人類学的研究をおこなってきた数少ないひとりであり、民博で研究を推進しつつ、内外の研究者と研究交流を進めることは、東アジアの社会運動の人類学的研究の発展に大きく寄与することになった。また、研究者は受入担当教員とともに、滞在期間の後半（2014年2月22日、23日）に、民博で機関研究領域『包摂と自律の人間学』『ケアと育みの人類学』のもとで、東アジアの社会運動に関する国際シンポジウムを開催した。当シンポジウムでは、台湾、日本、韓国の社会運動を研究する人類学者が集まり、これまでの成果を比較検討するとともに、今後の研究の可能性を展望した。研究者には、受入担当者とともに、当シンポジウムの準備および運営において中心的な役割を果たした。

CISSÉ, Mamadou [シセ、ママドゥ] ————— 准教授

任期：2013年9月4日～2013年12月4日

研究課題：西アフリカ考古学の深化

【学歴】 タシケント大学歴史考古学部・修士課程修了（1993）、ライス大学人類学部修士課程修了（2008）、ライス大学人類学博士課程修了（2010）【職歴】 マリ人文科学研究所研究員（1993）、マリ青年スポーツ省研究員（1999）、マリ青年スポーツ省職員（2000）、マリ文化省文化財保護局遺産管理部門長（2002）、マリ文化省文化財保護局考古学部門長（2010）【学位】 Ph.D.（考古学）（ライス大学 2011）【専攻・専門】 考古学

【主要業績】

[博士論文]

Cissé, M.

2011 Archaeological Investigations of Early Trade and Urbanism at Gao saney (Mali). Ph.D. thesis, Rice University.

[論文]

Cissé, M.

2013 Archaeological Investigations of Early Trade and Urbanism at Gao saney (Mali). Résumé de thèse de Ph.D., Taylor and Francis Online (eds.) *Azania: Archaeological Research in Africa* 48(1): 147-148.

Takezawa S. et M. Cissé

2012 Discovery of the Earliest Royal Palace in Gao and its Implications for the History of West Africa. *Cahiers d'études africaines*, UI(4), 208: 813-844.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

西アフリカ考古学の深化

・研究の目的、内容

1998年より、アフリカ考古学の世界的権威であるライス大学スーザン・マッキントッシュ教授とイェール大学ロデリック・マッキントッシュ教授がマリ共和国で行った発掘に参加して考古学調査の手法を学んだ。その後、2000年よりマリ人文科学研究所および竹沢尚一郎教授と共同でマリ各地の発掘調査に従事した。その間、2003年からはマリ北部のガオ市で発掘調査を実施し、西アフリカ最古の王宮と思われる西暦9～10世紀の大規模建造物の発掘に成功している。

その成果は、フランスの代表的な人類学雑誌である *Cahiers d'études africaines* 誌に共著論文を発表するなど、国際的に高い評価を受けている。その結果、イェール大学出版会より研究成果の出版依頼があり、それを完成させることを第1の目的とする。

・成果

民博での滞在の3か月のあいだに、下記の研究に従事した。

1) アフリカ史および博物館研究に関する史料調査

民博が所蔵する50冊以上の本と200本以上の論文を読んだ。これらは、考古学、歴史学、社会学、文化研究

に関する研究である。

2) 出版予定の本

イエール大学出版部より出版依頼を受けている本について、竹沢尚一郎教授と話し合い、目次とおおよその内容を送付した。目次と内容については、出版社より合意を得た。

第1冊は、『古ガオ——西アフリカ最古の主国の発掘』、第2冊は、『ガオ・サネの初期の交易と都市化に関する考古学的研究』である。これらの著書は、国立民族学博物館の竹沢尚一郎教授とマリ文化省文化財保護局が実施した共同研究の成果であり、その最初の数章についてすでに2人で書き終えている。この他に、2000年以来実施した共同研究の成果である第3冊について話し合い、目次を定めた。これについては、日本ないしマリで出版の予定である。

3) 土器分析

古ガオ遺跡から出土した土器片300について分析をおこなった。その成果は、イエール大学出版部から出版予定の本に収める予定である。

4) 公開シンポジウム・研究会への出席

京都大学、大阪大学で実施された公開のシンポジウムや研究会に出席した。

2013年10月5日 京都大学のシンポジウム『脱植民地化とアフリカにおける社会的公正性』に出席し、Frederic Cooper (アメリカ、ニューヨーク大学) 教授の講演を聴講した。

2013年10月12日 京都大学で実施された研究会に出席し、竹沢尚一郎教授の発表「アトランティック・ヒストリーと西アフリカ」を聴講した。同日、鈴木英明氏 (マッギル大学研究生) の発表「インド洋の歴史と東アフリカ」を聴講した。

2013年11月12日 大阪大学でおこなわれた Christian Christiansen (ゲッテンブルグ大学) 教授の講演「複雑性を理論化する：首長制から国家へ、青銅器時代への理論的接近」を聴講した。

5) 博物館展示の研究

滞在期間中に国立民族学博物館の各地域展示を見学・分析した。とりわけアフリカ展示にかんしては、過去と現在のアフリカをよく伝えていることに留意した。

DASGUPTA, Abhijit [ダスグプタ、アビジット]——教授

任期：2013年6月3日～2013年10月24日

研究課題：グローバル化と国際移民：日本のインド人IT技術者の事例

【学歴】 カルカッタ大学プレジデンシー・カレッジ卒 (1972)、デリー大学社会学部経済学院修士課程修士号取得 (1975)、サセックス大学大学院後期博士課程博士号取得 (1981) 【職歴】 デリー大学社会学部助手 (1981)、デリー大学社会学部講師 (1986)、デリー大学社会学部助教授 (1994)、デリー大学社会学部教授 (2002) 【学位】 博士 (社会学) (サセックス大学大学院 1981)、修士 (社会学) (デリー大学大学院 1975) 【専攻・専門】 社会学 (南アジアの難民、移民、被差別民の研究)

【主要業績】

[単著]

Dasgupta A.

2012 *On the Margins: Tribes, Castes, and Other Social Categories*. New Delhi: SAGE.

1998 *Growth with Equity: New Technologies and Agrarian Change in Bengal*. New Delhi: Manohar.

[編著]

Dasgupta A., M. Togawa and A. Barkat (eds.)

2011 *Minorities and the State: Changing Social and Political Landscape of Bengal*. New Delhi: SAGE.

【2013年度の活動報告】

◎各研究

・研究課題

グローバル化と国際移民——日本のインド人IT技術者の事例

・研究の目的、内容

これまでインド東部のベンガル地方や南部のタミルナドゥ州などをフィールドとして、難民やこれらの地方

からの移民に関する社会学的研究を続け、多数の著作を発表してきた。本課題は、この研究を踏まえ、1990年代半ば以降顕著になっている専門的技能を有するインド人のグローバルな移民の生活実態やアイデンティティに関して社会学的な観点から実証的な研究を行うものである。とりわけ、日本へのIT技術者の移民に焦点をあて、現地調査も行って、インド発の従来の移民との比較研究を行う。

・成果

インド系IT技術者の移民に関しては京都および広島で日本人研究者と協力して聞き取り調査を行った。その成果は、帰国後に執筆中の論文に反映させる。

インド発の移民のグローバルなネットワークとインドの社会変動に関しては、受け入れ研究者である三尾 稔 国立民族学博物館准教授が主担当研究者となっている『現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成』が主催して2012年12月にインドで国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムの成果は英文論文集として出版する計画であり、三尾准教授と協力してその編集にあたった。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・「現代インド地域研究」推進事業プロジェクトに関連する国際セミナーでの研究発表

2013年7月10日 ‘Agrarian Studies at the Cross Roads: Sociology and Social Anthropology in India.’ 「現代インド地域研究」京都大学中心拠点国際セミナー、京都大学

2013年10月19日 ‘Affirmative Action and Identity Politics: The OBCs in Eastern India.’ 「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点国際セミナー、国立民族学博物館

HAHM, Hanhee (咸 翰姫) [ハム ハンヒ]——教授

任期：2013年12月5日～2014年2月28日

研究課題：植民地期の韓国文化史の再検討——韓国人の日常を中心に

【学歴】西江大学校史学科卒（1975）、コロンビア大学大学院人類学科修士課程修了（1984）、コロンビア大学大学院人類学科博士課程修了（1990）【職歴】西江大学校社会学科時間講師（1986）、コロンビア大学大学院人類学科研究助教（1988）、コロンビア大学韓国学研究所研究員（1989）、全北大学校考古人類学科専任講師（1990）、全北大学校考古人類学科副教授（1992）、コロンビア大学文化人類学研究教授（1997）、全北大学校考古文化人類学教授（2001）【学位】Ph.D.（人類学）（コロンビア大学大学院人類学科1990）、M.A.（人類学）（コロンビア大学大学院人類学科1984）【専攻・専門】文化人類学

【主要業績】

[編著]

咸 翰姫編

2013 『セマンゲム事業と漁民たち、未完の記録』江原道：アルケ（韓国語）。

2012 『無形文化遺産の理解——伝承、保存、そしてインベントリー』全羅北道：20世紀民衆生活史研究所／フルム（韓国語）。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地期の韓国文化史の再検討——韓国人の日常を中心に

・研究の目的、内容

植民地期に韓国社会は大きな変化を経験した。政治と経済部門はいうまでもなく社会と文化部門でも朝鮮時代の遺産が急激に退色した。この時期の韓国文化の変化を見る立場は大きく2つである。1つは植民主義論であり、もう1つは近代化論である。前者は韓国が植民地支配の下にあって強制的、受動的な文化変化がおこったことを強調する。後者は植民時期に近代文物が流入し近代社会へ移行したことを強調する立場である。韓国での植民地史研究はこのように相反する立場が張り合っている。そして、こうした理論的枠組みの形成は研究方法とも密接な関係がある。植民主義論では主に植民関連記録物—政策関連記録と生産関係に該当する文書—を中心に研究している。反面、近代化論では消費生活を描写したり、報道された新聞、雑誌記事を基礎資料として分析する。それぞれの理論的観点とそれを証明するための研究方法が緊密に関係しあっている。この2つの研究で忘れられているのが日常史的視覚と総体的な研究方法である。本人は当時の韓国人の日常史に注目し文

化的変化を分析しようとする。そのためには日本国内で起きていた近代化の動きを把握することも重要である。特に近代的教育改革は社会の各部門に相当な影響力を及ぼし、日常史を根こそぎ変えた。日本と韓国ともに類似したことが起こったが、この過程についてのより詳細な比較研究を始めようとする。教育政策や教育制度についての研究は少なくなく蓄積されているが、新しい教育制度がもたらした変化を総体的に検討することが、これまで未知の世界として残っている。例えば韓国の社会構造の変化—旧エリートである両班と新指導者の関係—、女性教育と家庭教育の変化、都市の発達、新たな価値観の形成など、重要な研究主題がある。韓国人の日常史がどのように変化してきたかを総体的に見ることが注目されれば、新しい文化史的記述になるであろう。そして、この時期の人々の具体的な生活を多角的に観察し、変化の意味を深層的に解釈することが要求されるのである。

・成果

- 1) 韓国の新教育の登場と影響についての文献考察（2013年1月～6月：韓国）。
本研究は日常史についての考察であるため主に全羅北道全州を中心にした群山、井邑、金堤などの都市および近隣農村を対象とする。関連文献は当時出版された全州府史、群山府史をはじめ日帝時代の資料が中心である。
- 2) 韓国の新教育の登場と影響についての現地調査（2013年7月～11月：韓国）
全州、群山、井邑および近隣農村で現地調査を遂行し、資料を収集した。以前に調査した地域であるためすでにラポールができており、本研究に該当する資料は補充調査に該当する。また各初等学校で所蔵している日帝期の文書を発掘し、個人所蔵の文書、写真、物証資料をさらに収集した。
- 3) 日本との比較分析および新たな歴史記述を進める（2013年12月～2014年2月：国立民族学博物館）。
すでに調査した資料を分析する過程で日本との比較研究を遂行した。あわせて新しい民族誌的な歴史記述を進めた。これらの研究を通して、我が国の韓国植民地期の文化研究への貢献とともに、本館「朝鮮半島の文化」展示の新構築へ反映させることができた。

KANJOU, Youssef [カンジョウ、ユーセフ] ————— 准教授

任期：2014年3月17日～2015年3月16日

研究課題：戦争と博物館——戦火のものと文化遺産の保護とコミュニティの再生

【学歴】 シリア国立ダマスカス大学理学部卒（1994）、メキシコ自治大学スペイン語デュプロマ課程修了（1997）、メキシコ自治大学人類学部修士課程修了（1999）、メキシコ自治大学人類学部博士課程修了（2002）【職歴】 シリア国立アレppo博物館先史学部門副キュレーター（2003）、シリア文化省考古総局アレppo支局発掘部長（2004）、シリア国立アレppo博物館館長（2010）【学位】 Ph.D. (人類学) (メキシコ自治大学 2002)、M.Sc. (人類学) (メキシコ自治大学 1999)、【専攻・専門】 人類学

【主要業績】

[論文]

Kanjou, Y.

2012 The Archeological Excavation Results in Necropol of Menbej City. *Civilization Cradle Magazine* (Ministry of Culture, Syria) 15-16: 123-133 (in Arabic).

Mazurowski, R. F. and Y. Kanjou

2011 Preliminary Report on the Eleventh Season of Excavations at Tell Qaramel (Spring 2009). *Chronique Archéologique en Syrie*, DGAM 5: 19-30.

Nishiaki, Y., Y. Kanjo, S. Muhesen and T. Akazawa

2011 Newly Discovered Late Epipalaeolithic Lithic Assemblages from Dederiyeh Cave, the Northern Levant. In E. Healey, S. Campbell and O. Maeda(eds.) *The State of the Stone Terminologies, Continuities and Contexts in Near Eastern Lithic* (Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence, and Environment 13) pp. 79-89. Berlin: ex oriente.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

戦争と博物館：戦火のもとの文化遺産の保護とコミュニティの再生

・研究の目的、内容

カンジョウは、アレppo国立博物館館長就任とともに新規プログラムを立ち上げ、一部はすでに実施してきた。その経験を生かし、本館の機関研究「マテリアリティの人類学」の一環であるプロジェクト「文化遺産の人類学」に関連して、以下のような活動に従事する。

1) 東日本大震災後の博物館復興支援プロジェクトへの参加

まずは震災時の日本における事例と、現在シリアの諸博物館が直面している問題の事例を比較研究する。その上で、文化遺産が紛争・自然災害のもとで直面する破損・消失・略奪等に対する防災と復元復興に有用な社会環境・技術・法律等に関する調査、研究をおこない提言する。

2) ワークショップ・シリーズの開催

1) で得られた知見をもとに、現在のシリアが直面している問題や、やはり内戦を経験したレバノン、JICA共催博物館学ワークショップにも参加者を派遣しているパレスチナの実例を比較し、戦災によるコミュニティの崩壊・再生と博物館の役割についてのワークショップ・シリーズを開催する。これにより、館内・館外の研究者との意見交換を活発におこない、機関研究の進展に貢献する。

・成果

本年度は以下の出版をおこなった。

◎出版物による業績

[論文]

Kanjou, Y.

2014 「ユーフラテス河の古代文化とシリア内戦化における文化財の現状 (Cultures of the Euphrates and its Current Situation in Light of the Present Conflict in Syria.)」『ORIENTE』(古代オリエント博物館情報誌) 48: 10-17 (日本語)。

Kanjou Y., I. Kuijt, Y. S. Erdal, and O. Kondo

2013 Early Human Decapitation, 11,700-10,700 cal BP, within the Pre-Pottery Neolithic Village of Tell Qaramel, North Syria. *International Journal of Osteoarchaeology* (DOI: 10.1002/oa.2341).

KHOSRONEJAD, Pedram [ホスローネジャード、ペドラム] ————— 准教授

任期：2013年9月13日～2013年6月20日

研究課題：イランにおける信仰とジェンダーの表象——映像資料に見るシーア派儀礼

【学歴】テヘラン芸術大学卒(1997)、テヘラン芸術大学修士課程修了(1999)、パリ社会科学高等研究院(EHESS)専門研究過程修了(2001)、パリ社会科学高等研究院(EHESS)博士課程修了(2007)【職歴】オックスフォード大学、東洋学研究所中近東学科研究員(2004)、オックスフォード大学、セント・アントニーズ・コレッジ中東センター若手研究員(2005)、セント・アンドリュース大学、社会人類学部特任研究員(2007)、セント・アンドリュース大学、社会人類学部専任研究員(2010-現在)、フランス国立科学センター(CNRS)「社会、宗教、世俗性」グループ客員(2010-2013)【学位】博士(社会人類学)(パリ社会科学高等研究院(EHESS)2007)、D. E. A.(美術史)(パリ社会科学高等研究院(EHESS)2001)、修士(美術史)(テヘラン芸術大学1999)【専攻・専門】映像人類学

【主要業績】

[編著]

Khosronejad, P. (ed.)

2012 *Saints and their Pilgrims in Iran and Neighboring Countries*. Herefordshire: Sean Kingston Publishing.

2012 *Unburied Memories: The Politics of Bodies, and the Material Culture of Sacred Defense Martyrs in Iran* (Special Issue of the *Journal of Visual Anthropology* 25(1)). Taylor & Francis, USA.

2011 *The Art and Material Culture of Iranian Shi'ism: Iconography and Religious Devotion in Shi'i Islam*. London: I. B. Tauris Publishers.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

イランにおける信仰とジェンダーの表象——映像資料に見るシーア派儀礼

・研究の目的、内容

ホスローネジャーは、イラン山岳遊牧民の宗教文化の研究者であると同時に、民族誌映画に関する国際的な学術行事をスイス、フランス、英国でオーガナイズするなど、欧州を拠点に活動してきた。自らもイランにおいて民族誌映像を制作しているが、映画やフッテージフィルムなども含めた映像資料を人類学においていかに活用するかという理論的な観点から、イラン関係の映像を多く収集してきた。このコレクションの中から、特にシーア派の宗教実践に係る映像をみんぱく内外の研究者と共有し、信者が儀礼の中で体験する神や聖者とのつながりや、儀礼の場における男女の位置づけの違いを、民族映像がどのように捉えているかということ明らかにする。

・成果

東京外国語大学で11月に開催された国際シンポジウム Mapping Safavid Iran など、幾つかの研究集会に参加し、国内のイラン・中央アジア研究者や映像人類学者と学術交流を行った。

民博研究懇談会（2014年2月26日）での発表以外に、中央ユーラシア研究会（2014年2月15日、東京大学）、および関西イラン研究会（2014年3月8日、大阪大学）で発表を行った。

また映像人類学に関する研究会にも積極的に参加した。川瀬 慈助教が代表をつとめる共同研究『映像民族誌のナラティブの革新』の第1回に参加し、メンバーと学術交流を行った。また同助教が主催する研究会 Anthropology Laboratory の第11回、12回、訪問に参加し、制作過程にある民族誌映画の編集に関しての建設的な議論に貢献した。

収集した民族誌映像を他の研究者が利用できるように、シーア派の宗教実践にまつわる映像アーカイブを招聘期間中に構築することを計画していたが、当初の招聘期間を短縮したため、具体化しなかった。しかし招聘期間中に、国内のイラン・中央アジア研究者、イスラーム研究者、映像人類学者などと精力的に学術交流を行い、宗教実践の記録映像の制作・分析・活用などについて議論した。

また、イランのイスブアハーンで開かれた聖者崇拝に関する国際ワークショップを企画し、民博の共同研究関係者も招いて成果発表を行った（2015年初旬に出版予定）。

MIYAZAKI, Hirokazu (宮崎広和) [ミヤザキ ヒロカズ]——准教授

任期：2013年7月1日～2013年8月15日

研究課題：日本の負債と信用（クレジット）——金融と贈与の接点

【学歴】上智大学外国語学部英語学科卒（1990）、東京都立大学大学院社会科学部研究科修士課程修了（1992）、オーストラリア国立大学太平洋アジア研究学部大学院博士課程修了（1998）【職歴】ノースウェスタン大学人類学科博士研究員（1997）、国際交流基金日米センター安倍フェロー東京大学東洋文化研究所外国人研究員（1999）、ノースウェスタン大学人類学科客員助教授（2000）、コーネル大学人類学科客員助教授（2001）、イェール大学東アジア評議会博士研究員（2001）、コーネル大学人類学科助教授（2002）、コーネル大学人類学科准教授（2007）、コーネル大学東アジアプログラム所長（2011）、コーネル大学人類学科教授（2013）【学位】Ph.D.（人類学）（オーストラリア国立大学太平洋アジア研究学部大学院 1998）【専攻・専門】文化人類学、経済人類学

【主要業績】

[単著]

Miyazaki, H.

2012 *Arbitraging Japan: Dreams of Capitalism at the End of Finance*. Berkeley: University of California Press.

宮崎広和

2009 『希望という方法』東京：以文社。

[論文]

Miyazaki, H.

2013 Hope in the Gift/Hope in Sleep. In A. L. Dalsgård, S. Lisberg, A. M. Pahuus and E. O. Pedersen (eds.)

Trust and Hope: Negotiating the Future: Dialogues between Anthropologists and Philosophers.
Oxford: Berghahn Books.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の負債と信用（クレジット）——金融と贈与の接点

・研究の目的、内容

1998年以来日本において証券・金融市場、とりわけデリバティブ取引に関わる金融技術の文化人類学的研究を進め、金融人類学の構築を目指してきた。

今回の滞在では、金融人類学という観点から、日本の負債と信用（クレジット）を取り上げる。モースの『贈与論』以来、負債と信用は文化人類学研究の中心課題のひとつであるが、アメリカのサブプライムローン市場に起因した2007年～2008年の世界的な金融危機以降、改めて文化人類学的な知見が見直されている。本研究は、日本における負債と信用をめぐるさまざまな取引を民族誌的な観点から実証的に研究し、負債と信用に関する文化人類学理論を再構築しようとするものである。特に、今回の滞在では、近年「市場（公募）化」が進む地方債に焦点をあて、主として中部・関西地域の地方債の発行に関わる関係者（総務省、地方公共団体、証券会社、地方銀行、都市銀行）への取材を通じて、日本の地方財政の現状について検討する。また、地方財政をより広角的な視点から検討するために、地域経済における地方公共団体、地方銀行、地域企業の役割にも焦点をあて、地域経済における金融的な融資関係と歴史的・社会的（贈与的）な人的関係を包摂する負債と信用の力学を分析する。

こうした視点から、長年オセアニア研究を中心に蓄積されてきた贈与交換論におけるさまざまな議論を踏まえつつ、日本の負債と信用の現状と歴史の変遷に広角の文化人類学的視点を提供すると同時に、現代金融における負債と信用の問題を含めたより包括的な贈与交換論の構築を目指す。本研究を進めるにあたって、オセアニアの経済人類学・贈与交換論に詳しい受入担当教員である丹羽典生准教授および一橋大学社会学部の春日直樹教授、日本の地方財政に詳しい立命館大学政策科学部の森 裕之教授、そして日本の地域金融に詳しい東京大学社会科学研究所の中村尚史教授の協力を得る。

・成果

7月14日に研究フォーラム「金融のなかの贈与——金融と人類学の交差点」を開催し、「アナリス・ライルズ（コーネル大学教授・同志社大学客員研究員）と共同発表を行った。この研究フォーラムには、中世史の桜井英治（東京大学教授）、外資系証券会社でストラテジストをつとめる神山直樹を報告者として、また、山本真鳥（法政大学教授）、深田淳太郎（一橋大学）、中村尚史（東京大学教授）をコメンテーターとして招聘し、学際的な討論を行った。学際的な討論を通して、今後新たな共同研究プロジェクトとして展開していくための基盤を確立することができた。

日本の負債と信用（クレジット）をめぐる取引について主として東京において市場関係者への聞き取り調査を行った。調査を通じて、それらの取引の日本の特質（その閉鎖性・保守主義）の輪郭をあきらかにすることができた。また、それらの取引にたざさわる金融プロフェッショナルたちが、そうした特質を新たな収益機会とみると同時に、欧米の市場とは違う倫理性の存在を感じ取っていることがわかった。

東京の証券図書館において負債と信用について文献調査を行った。また、上記の神山直樹との共同執筆論文である「株式という贈与」のための文献調査・資料収集を行った。

これまで進めてきた金融人類学をさらに前進させるための論文や著書の執筆を進めることができた。アナリス・ライルズ（コーネル大学教授・同志社大学客員研究員）と玄田有史（東京大学社会科学研究所教授）との共著書『リ・ツーリング』の英文・和文草稿を完成した。また、神山直樹との共同論文「株式という贈与」についても議論を重ねることができた。さらには、今年1月に英文で出版された著書 *Arbitraging Japan* の日本語版について出版社である岩波書店の編集者と打ち合わせをし、準備を開始することができた。

OSTAPIRAT, Weera [オスタピラト、ウィーラ] ————— 准教授

任期：2013年6月18日～2014年6月17日

研究課題：クラ・ダイ祖語の語彙再建とオーストロ・タイ（クラ・ダイとオーストロネシア）系民族の歴史

【学歴】ラムカムヘン大学卒（1987）、カリフォルニア大学バークレー校修士課程修了（1996）カリフォルニア大学

バークレー校博士課程修了(1999)【職歴】カリフォルニア大学バークレー校(シナ・チベット語源辞典・分類語彙プロジェクト) 研究員(1994)、国立民族学博物館外国人研究員(2000)、台湾中央研究院語言学研究所客員研究員(2002)、マヒドール大学アジア言語文化研究所(タイ) 准教授(2005)【学位】博士(言語学)(カリフォルニア大学バークレー校 1999)、修士(言語学)(カリフォルニア大学バークレー校 1996)【専攻・専門】言語学(タイおよび東南アジア諸言語、歴史比較言語学)、言語民族文化史

【主要業績】

[論文]

Ostapirat, W.

- 2013 Northern-Min glottalized onsets and the principles of tonal split and tonal merger. In Peng Gang and Shi Feng (eds.) *Eastward Flows the Great River (Festschrift in Honor of Professor William S-Y. Wang on his 80th Birthday)*. Hong Kong: City University of Hong Kong Press.
- 2013 The Rime System of Proto-Tai. *Bulletin of Chinese Linguistics* 7.1.
- 2009 Proto-Tai and Kra-Dai final *-l and *-c. *Journal of Language and Culture* 28.2: 41-56.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

クラ・ダイ祖語の語彙再建とオーストロ・タイ(クラ・ダイとオーストロネシア)系民族の歴史

・研究の目的、内容

これまで、クラ・ダイ祖語の数百に及ぶ共通語根を再建し、そこに反映された話者の歴史に関する研究をすすめてきた。今回の招聘期間中は、そのなかでも特に、オーストロネシア系民族との関係を解明することを目的とする。

クラ・ダイ祖語は、中国南部から東南アジアの地域にまたがる、タイ系およびラオ系の民族の属する重要な言語グループの祖語をさす。現在クラ・ダイ系民族は中国広東省からインド・アッサム地方、そして雲南省からマレー半島にかけて広範囲に居住している。再構された語彙は、社会的・文化的に意味を持つグループごとに分類することが可能と考えられ、それに基づき、クラ・ダイ系民族の先史における世界観、生活、社会の構図を浮かび上がらせること、さらには歴史を共有し、もしくは文化接触のあった他の民族の生活史をも明らかにできると考えられる。

・成果

クラ・ダイ語系の特定の18言語を選び包括的なデータベースを再建した。歴史言語学の比較研究法に基づきクラ・ダイとオーストロネシアの語彙比較を体系的に行った。予備研究と研究成果はさまざまな場、すなわち MINPAKU Linguistic Circle の研究会、国際シンポジウム「ヒト・穀物・言語の拡散」(国立国語研究所、立川)で発表・発信した。またその他の研究会、特に、国際シンポジウム「アジア・太平洋における生物文化多様性」(総合地球環境学研究所、京都)や、総研大国際シンポジウム「Modern Human Diversity on Genes and Culture」(総研大本部、葉山)では本研究について内外の研究者と討論や意見交換を行った。

◎出版物による業績

[論文]

Ostapirat, W.

- 2013 Northern-Min glottalized onsets and the principles of tonal split and tonal merger. In Peng Gang and Shi Feng (eds.) *Eastward Flows the Great River (Festschrift in Honor of Professor William S-Y. Wang on his 80th Birthday)*. Hong Kong: City University of Hong Kong Press.
- 2013 The Rime System of Proto-Tai. *Bulletin of Chinese Linguistics* 7(1).

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2013年7月19日 'Agriculture related terms in Kra-Dai and Austronesian,' Minpaku Linguistic Circle (MLC), 1st meeting, National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2013年5月29日~31日 'Austro-Tai revisited.' The 23rd Annual Conference of Southeast Asian Linguistics Society (Plenary Session 2: Going beyond history: re-assessing genetic grouping in

Southeast Asia), Chulalongkorn University, Bangkok.

2014年3月20日～21日 ‘Kra-Dai Agricultural History through Reconstructed Vocabulary.’ Symposium
“Dispersion of People, Crops, and Language,” National Institute for Japanese
Language and Linguistics, Tokyo.

SARENTERILE (薩仁格日勒) [サランゲレル] 教授

任期：2013年4月1日～2014年3月31日

研究課題：フルンブイル盟シニヘン・ブリヤートたちの逃避行——1940年～1951年

【学歴】中国西北民族大学卒（1982）、モンゴル国アカデミー文学院修士課程修了（1993）、中国社会科学院大学院博士課程修了（1998）【職歴】青海省海西州民族師範学校教員（1976）、西北民族大学民族研究所助手（1982）、西北民族大学講師（1987）、西北民族大学助教授（1998）、中央民族大学モンゴル言語語文学部教授（2001）【学位】文学博士（中国社会科学院大学院 1998）、文学修士（モンゴル国アカデミー文学院 1993）【専攻・専門】モンゴル口頭伝承・口述史研究

【主要業績】

[単著]

薩仁格日勒

2011 『蒙古民俗文化探源』北京：民族出版社。

2001 『蒙古史詩生成論』北京：中央民族大学出版社。

1992 『青海蒙古族風俗誌』呼和浩特：内蒙古人民出版社。

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

フルンブイル盟シニヘン・ブリヤートたちの逃避行——1940年～1951年

・研究の目的、内容

これまで主として口頭伝承に注目し、モンゴル民俗学の研究にたずさわり、多くの論文を執筆し、それらをまとめた著書も刊行している。2001年9月に来日した際には、青海省モンゴル族の通過儀礼に関して『青海省モンゴル族民俗文化における資料とその解釈』（Senri Ethnological Reports 30, 2002年, モンゴル語縦文字）にまとめた。

近年は、地球研総合環境学研究所のオアシスプロジェクト（2001～2007）において受入担当教員（小長谷有紀教授）とともに、中国内モンゴル自治区アラシャン盟エジネ旗で、口述史を収集し、モンゴル語たて文字（2007）、日本語（2007）、中国語（2008）、モンゴル語キリル文字（2009）ならびに英語（2011）で刊行した。20世紀の激動を一般の女性たちの語りから明らかにすることに成功し、中国ではモンゴル族に関する最初かつ手本とすべき口述史として位置づけられている。この手法をひきついで、フルンブイル地方で2010年から実施してきた語りをまとめる。当該地域は諸民族が異なる生業を活かして連携するアンダ（盟友）で有名であり、諸民族の相互関係をあきらかにすることができるとともに、とりわけ日本軍との密接な関係があったために翻弄されたブリヤート人の悲運をあきらかにすることができる。

・成果

サランゲレルは受入担当教員（小長谷有紀教授）と共同でこれまで中国内モンゴル自治区の各地で口述史の収集をおこなってきた。今回は、20世紀10年代から20年代にかけて、ロシアから移住したブリヤート人に焦点をあて、フルンブイル盟シニヘン地方に住む高齢者についての聞き取り調査を実施し、テキストを作成し、また解説を付した。なお、テキストの邦訳は受入担当教員が担当した。

この国際シンポジウムのほか、共同研究会「梅棹忠夫のモンゴル調査資料の学術的利用」、モンゴル学会春季大会および秋季大会など本館での諸研究集会に参加したほか、千葉大学言語文化学部でのモンゴル研究会にも参加し、日本におけるモンゴル研究者たちとの学術交流を果たした。

研究成果は以下のとおり。

小長谷有紀・サランゲレル・ソヨルマ編

2014 『20世紀におけるブリヤート人たち——中国内モンゴル自治区フルンブイルにおける口述史』（Senri

Ethnological Reports 119) 大阪：国立民族学博物館。

児玉香菜子・サランゲレル・アラタンツェツェグ編

2014 『極乾内モンゴル・ゴビ砂漠、黒河オアシスに生きる男たち23人の人生』（アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究叢書10）

SUBBIAH, Shanmugam Pillai [スッバイヤー、シャンムガン ピッライ]——教授

任期：2013年12月16日～2014年3月14日

研究課題：南インド社会の構造変動に関する研究

【学歴】 マドラス大学地理学科卒（1966）、マドラス大学大学院地理学科修士課程修了（1969）、ジャワハルラール・ネルー大学大学院地理学科修士課程修了（1976）、ジャワハルラール・ネルー大学大学院地理学科博士課程修了（1982）【職歴】 タミルナードゥ州立アーツ・カレッジ地理学科助手（1969）、ジャワハルラール・ネルー大学地理学科助手（1973）、マドラス大学地理学科講師（1978）、マドラス大学地理学科リーダー（1987）、マドラス大学地理学科教授（1991-2002）【学位】 Ph.D.（ジャワハルラール・ネルー大学大学院 1982）、M.Phil（ジャワハルラール・ネルー大学大学院 1976）、M.Sc（マドラス大学大学院 1969）【専攻・専門】 農業地理学

【主要業績】

[共編]

Karan, P. P. and S. P. Subbiah (eds.)

2011 *Indian Ocean Tsunami*. Lexington, Ky.: University Press of Kentucky.

Dutt, A. K., Noble, A. G., Venugopal, G. and Subbiah, S. (eds.)

2004 *Challenges to Asian Urbanization in the 21st Century* (GeoJournal Library, Vol. 75). Springer.

[共著]

Subbiah, S. P. et al.

2006 *Natural Hazards and Disasters: Essays on Impacts and Management*. Anantapur, India: Department of Geography, Sri Krishnadevaraya University.

【2013年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

南インド社会の構造変動に関する研究

・研究の目的、内容

スッバイヤーは地理学の分野でとくにGISを用いた農業地理学的研究を行うとともに、日本人研究者との共同村落調査研究を旺盛に実施してきた。期間中には、杉本良男教授と共同で進めている南インド、タミルナードゥ州中部の農村調査の成果を整理、分析し、1991年の経済自由化以後の南インドにおける社会の根本的な構造変動についてとりまとめの作業を行う計画である。本研究については、すでに2011年、2012年にタミルナードゥ州中部農村において杉本星子教授（京都文教大学）、サガヤラージ准教授（南山大学）を含めたメンバーで共同調査を実施して基本データを収集している。またこの村落は、1990年から1991年にかけて杉本良男教授が調査を実施しており、また関根康正教授（関西学院大学）が実施している都市研究とあわせて、経済自由化をはさむ20年間のインド農村の変化について調査資料をもとに分析を進め、さらにその成果を公刊する計画である。

・成果

スッバイヤーと杉本良男教授とは1990年以降共同調査・研究を継続的に行ってきた。地理学者であるスッバイヤーは、基本的な地図情報、土地所有台帳、作付台帳などの収集、デジタルデータ化、分析を担当し、また長年にわたって続けているGIS情報化とそれにもとづく分析作業を行った。すなわち、杉本良男教授が実施してきた定性的な人類学的調査を補完する定量的なデータ収集、分析を行う役割を担った。当該農村における基本的な資料は、すでに収集済みであるので、民博における研究活動はもっぱら資料整理と分析にあてられた。そして、期間中には、成果の公刊にむけた準備をほぼ終了した。なお本研究の研究成果は、Senri Ethnological Studiesによって英文で刊行する計画である。

